

# 奇譚クラブ

1958年 11月号

創作「涙は宇宙空間に輝く」浦田紀夫  
緊縛映画スナツプ・シリーズ「残菊の巻」牧高志



11月号

昭和三十三年十一月三十日印刷  
昭和三十三年十一月一日発行  
(第十二巻 十一月号)  
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十三年十一月号

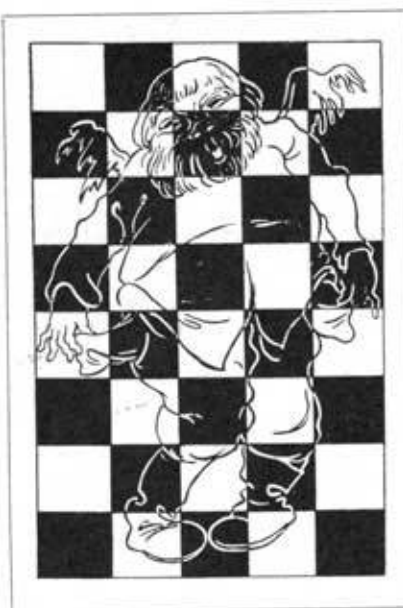
11

奇譚クラブ

昭和三十三年十一月三十日印刷  
昭和三十三年十一月一日発行  
(毎月一回一日発行)  
昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

THE KITAN CLUB  
Published Monthly By Tenseisya  
Osaka Japan



IBM. 2805

# 臨時増刊号 集号 限定版



限定版SADO特集号

売切れぬ中、直ぐお申込下さい！

秘蔵豪華口絵 (二十七点)

○四馬孝・画名場面集

○別れる女

○夜汽車で逢った美人 (木堂 一作)

○危 遇

○玩 具

○屠殺者

○変な奴

○或るスクリーン

○あの時の事

○地 蜘蛛

○滝 れい子・画名場面集

○移り香

○若妻と黒牛

○口説責

○華やかなる制裁

○蒼白き抵抗

○非情の部屋

○夜の舗道

▽皆様待望の貴画貴写真集△  
マニア垂涎の傑作満載  
遂に完成す。異色特集号

表紙 四馬孝・画 オフ色刷  
口絵 写真版印刷 二十四頁  
グラビヤ印刷 二十四頁  
本文 口絵説明解説 百十数頁

長らく要望されていたが果さなかった「サディズム特集号」が、ついに完成。皆様の前姿を現しました。斯界唯一の奇く編集陣が自信を持って皆様にお贈り出来る限定版特集号の第一弾であります。何卒一度手に取って、この愛すべき特集号をごらん下さい。必ずやお気に召すと確信いたします。

発売以来、圧倒的な絶賛を博しておりますが、限定版のため、数に制限がありますので、売切れにならない中、今すぐお申込み下さるようお勧めいたします。なにしろ印刷部数が僅少です。故、その意味からも貴重品としての稀少価値を近き将来に於て生ずることが

## 本誌百号突破記念

### 懸賞原稿募集

本誌の通刊百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします。故、何卒奮って御応募下さるようお願いいたします。尚、募集規定には、従来と違って大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。(この際は誌上で連絡いたします。)

#### ○賞金

(優作) 壹万円 若干篇  
(秀作) 五千元 若干篇  
(佳作) 三千元 若干篇

種目 小説、創作、告白、手記、体験、等  
本誌に適した題材を扱ったもの  
枚数 三十枚乃至五十枚程度(四百字詰)  
但し多少の増減は差支えありません。  
締切 当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿 「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表 入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以て報告します。誌上では入選作の掲載を以て発表にかえます。

用紙 二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便(百瓦につき八円)に御送付願います。

## 読者原稿募集

〔創作〕異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちします。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限ります。採用篇は本誌五カ月以上贈呈します。

〔体験告白手記〕読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

〔映画、雑誌〕通信 映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出題は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月乃至三カ月分贈呈します。

〔私のイメージ〕熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三カ月分贈呈します。

〔アイデア〕将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に、採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

〔レポート〕新聞記事(週刊誌を含む)の切り抜き或は見聞等、皆様の特に興味をお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二カ月分贈呈します。

〔読者通信〕編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思ひ出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

## ○本誌月極購読料○

一月分 一冊 (送料共) 二百円  
三月分 三冊 (送料共) 六百円  
半年分 六冊 (送料共) 千二百円  
一年分 十二冊 (送料共) 二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方は景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方は景品としてヤヤビネ型写真三枚を贈呈いたします。

## 奇譚クラブ

第十三巻第十三号  
毎月一回一日発行  
定価二百円

十一月号

昭和三十三年十月三十日印刷  
昭和三十三年十一月一日発行

編集印刷兼発行人 吉田 稔  
大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号  
発行所 天 星 社

電話 天下茶屋 三六〇七番  
最寄口 座大阪五〇〇四二番

御送金は振替、為替、現金書留、切手代用(八円切手にて一割増)等どんな方法でも結構です。送り先は必ず指書でつきりお書き願います。尚、振替用紙御入用の方は八円切手封入の上お申込下さい。お送りいたします。





◎ 絶対に、他では入手できない責絵と

# 奇譚グラス

## SADO 特

### 【 内 容 】

◎ 杉原虹児・画名場面集

○ 宿命の鞭

(住谷猪一郎作)

○ 女賊捕縛

(南 俊二解説)

◎ 南村俊平・画戯画傑作集

○ 大王様への貢物 水 槽

○ 戦友救出

いけにえ

○ うさぎの波乗りごっこ

鞭を提げる女 四馬 孝・画(表紙裏)

洋髪と日本髪 杉原虹児・画(目次裏)

### 秘作グラビア写真(八十一葉)

○ 緊縛艶姿十四態 田中 芳代嬢

(うつくしきいましめのかずかず)

○ 拷問・囚衣・懸崖 大塚 啓子嬢

○ 床間の花 花坂 道子嬢

○ 蠟 滴 愛川 悦子嬢

○ 白蝶の舞踊(連続写真)大塚 啓子嬢

○ 長襦袢 花坂 道子嬢

○ 野外ヌード・スケッチ帖

撮影・塚本 鉄三

必至であります。

一度入手された方は殆ど手離さないでしょうから一旦売切になりますと其の後の入手が非常に困難なことになります。

限定版「サド特集号」では、華麗な縛り絵集だけでも、十分に楽しませてくれます。それに加えて八十数葉に亘る緊縛写真の素晴らしさ、ヌードフォトの美しさ、全くマニア諸氏にとっては得難い贈物だといっても過言ではありません。本文中の口絵の解説文にしても、これだけ独立して読んでも十分読みごたえのある詳細な描写であります。

只今、発売中を機会にお逃しなく是非一冊お求め願います。

御注文次第、厳重包装の上急送申し上げます。

### 限定版特集号

定価 三百五十円(送共)

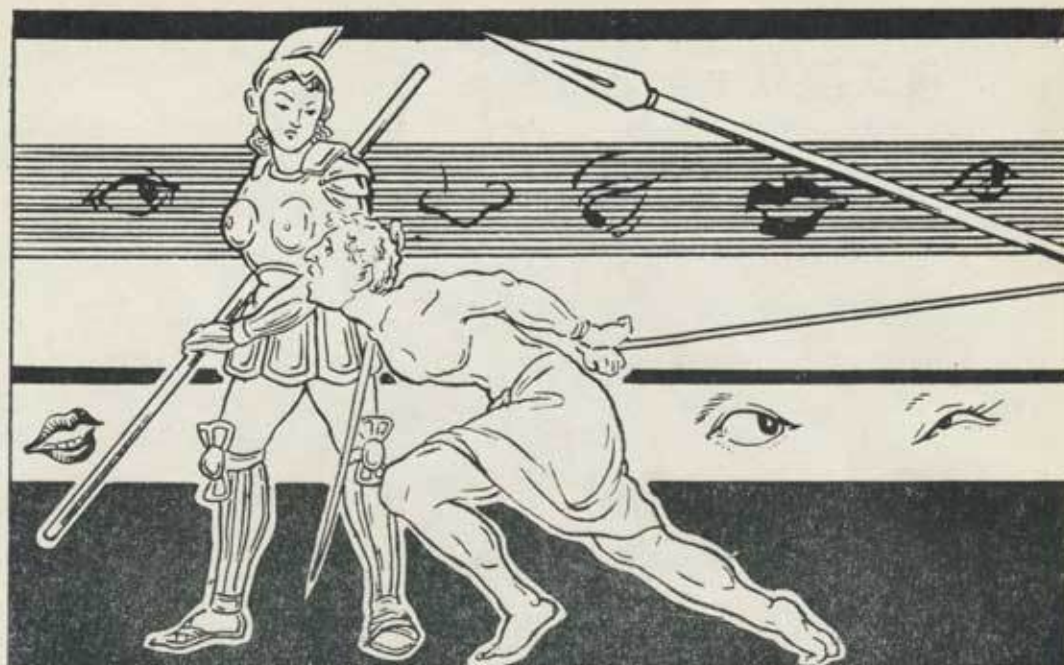
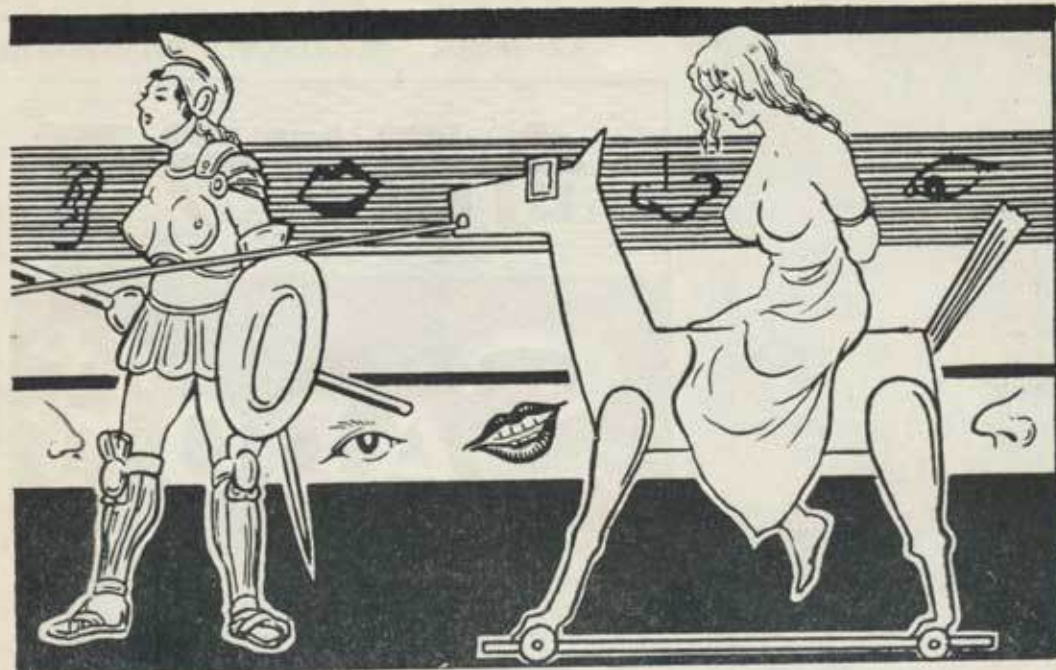
お申込は……

大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番





# 奇譚クラブ 復刊第三十四号 十一月号 目次

四馬孝傑作品集(7) 鼻吊り……………四馬 孝・画  
縛り絵 操り責め……………滝れい子・画  
責め画 稽 古 台……………杉原 虹児・画  
縛られた女優たち(緊縛映画の場面より)……………増田 義彦 提供

新映画作品「蜘蛛男」 河上 敬子  
新映画作品「人喰海女」 三原 葉子  
新映画作品「蜘蛛男」 宮城千賀子  
縛り写真特報

## 巻 頭 口 絵

喰い込むコード

愛川 悦子嬢

ニューガールの緊縛模様

絹川 文代嬢

複式操りマシンの考案

南村俊平・画

アブノーマル人物評

林 弓志雄 18

—小谷喜美さんについて—

創作 最良の仲人 (第二回)

若松 宏 24

現代マゾヒズム芸術時評

原 忠正 32

(再び黒田史郎氏に寄せる)

真夏の夜の幻想「漂流の乙女」

泉 かよ子 34

お臍漫録—私の切抜から—

須藤 律夫 45

月明りねずみ小僧

海野 築朗 48

マゾヒズムへのいざない (十四回)……………黒田 史朗 58

創作 乾 濕 (かんしつ)……………植村 奏 62

詩集 女剣断腸譜……………中康 弘通 70

マゾヒズム百景……………馬場 好男 72

「告白」 憧 輝 (少年時代の想出)……………管 良太 75

再び映画に見る男性責……………梶 孫一 76

切腹風土記—女が腹を切つた話—……………壬生 三郎 82

愛好者の記録 (マゾヒズムあれこれ)……………ごま・かつひこ 83

創作 涙は宇宙空間に輝く……………浦田 紀夫 88

腹切る女スパイ……………藤山 秀緒 100

緊縛映画スナツブシリーズ「残菊の巻」……………牧 高志 110

創作「竹夫人」(ちくふじん)……………三条 卓史 112

三吉と女奇術師……………藤見 郁 112

「映画通信」緊縛映画速報とその雑感……………藤木 仙次 114

魔教団 No.8 (その九)……………土路 草一 114

創作「賭」(かけ)……………佐々京之介 150

「告白」 羽村京子夫人へ……………佐田 春雄 181

読者通信……………183



## 複式操りマシンの考案

ある人がこんな機械を考案して特許を申請したところ、何に使うものと聞かれて返事に困ったそうです。多分医療器具の一種でしょうな。

# 鼻 吊 り

四馬孝傑作集 (7)

鼻の障子に開けられた穴に通された真鍮のくさりが、ジリジリと前に移動してゆく。ヨタヨタと不自由な足を小刻みに、哀れな捕われの美女がよろめく。



四馬孝・画



# 責　　り　　搦

夕暗の迫る山峻の窪地に引据られた若妻。

「おい、お前は俺に隠れて男と逢っていたろう？」嫉妬に狂った夫は、後手に縛った女に白状させようと執拗に責めたてるが、さすがに肌に傷のつくのを恐れて笹の葉先で搦り責めにしている。



滝  
れい  
子・画

# 稽古台

後手、高手小手の上、膝頭まで嚴重に縛しめられた女が腰車で激しく畳の上に投げつけられようとしている。抵抗を許されぬ縛られた稽古台の女。



杉原虹児・画



の場面より)

増田義彦 提供



新映画作品 「蜘蛛男」 河上敬子



新映画作品 「蜘蛛男」 宮城千賀子

縛られた女優たち

(緊縛縛画)



新東宝作品

「人喰海女」

三原葉子



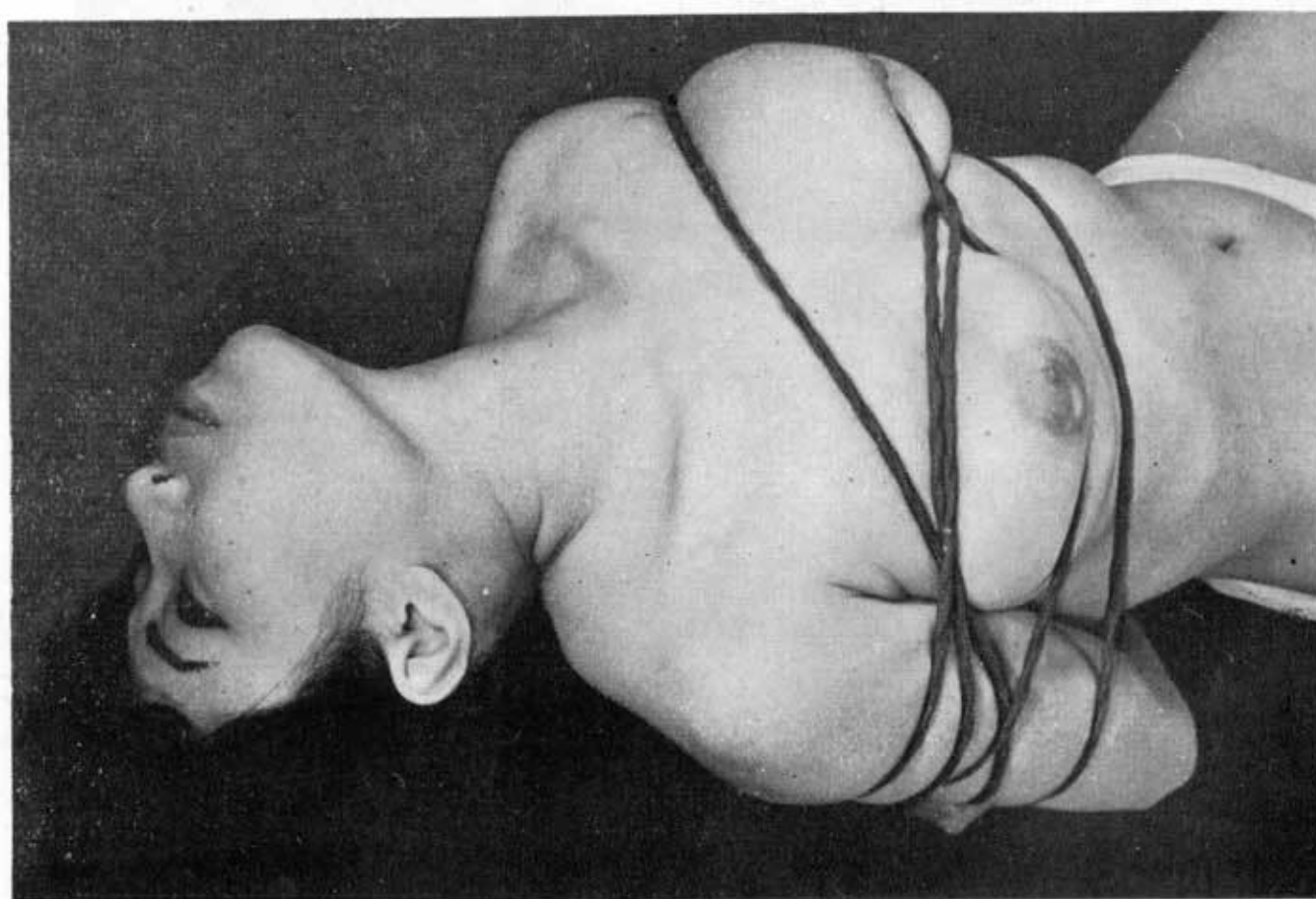
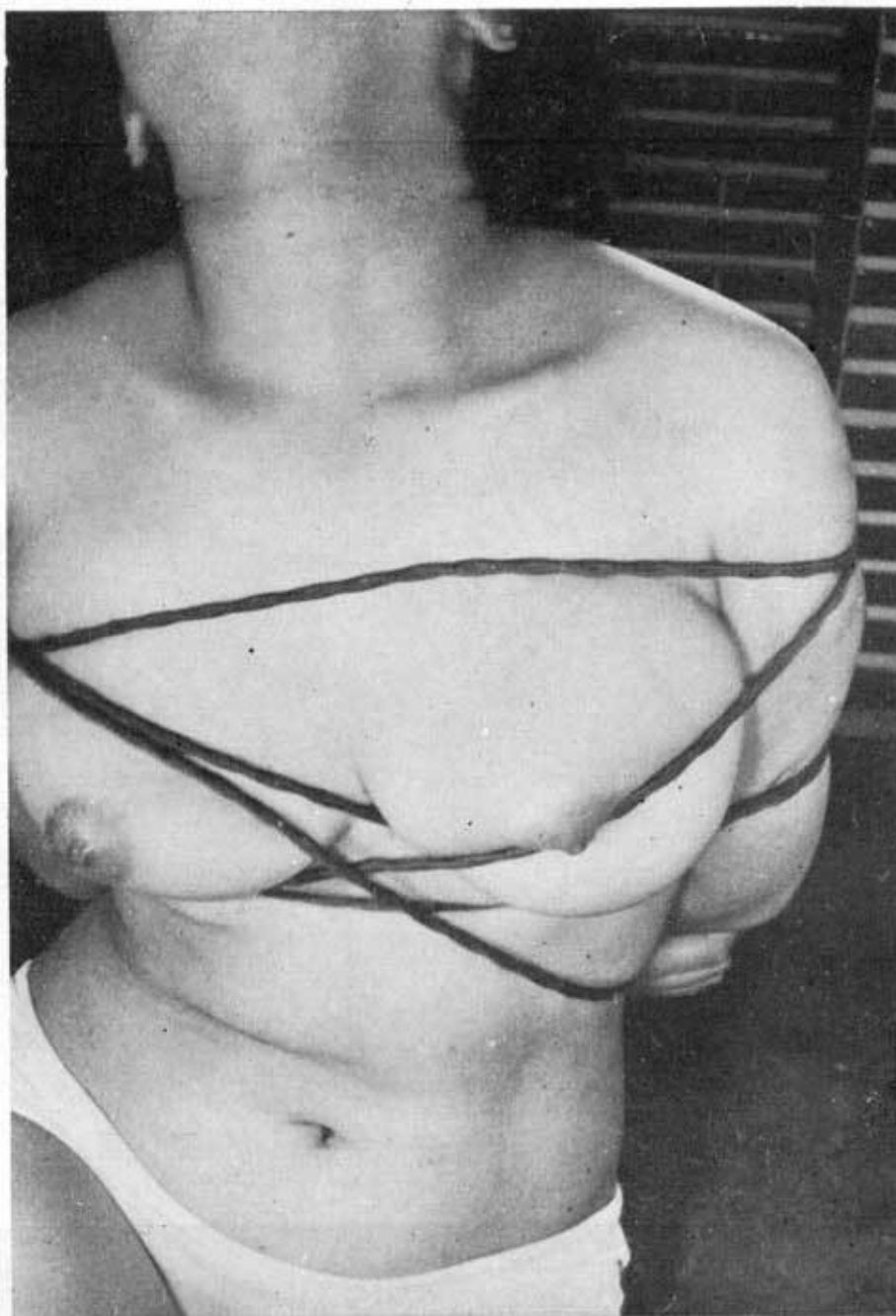
新映画作品

「蜘蛛男」

宮城千賀子

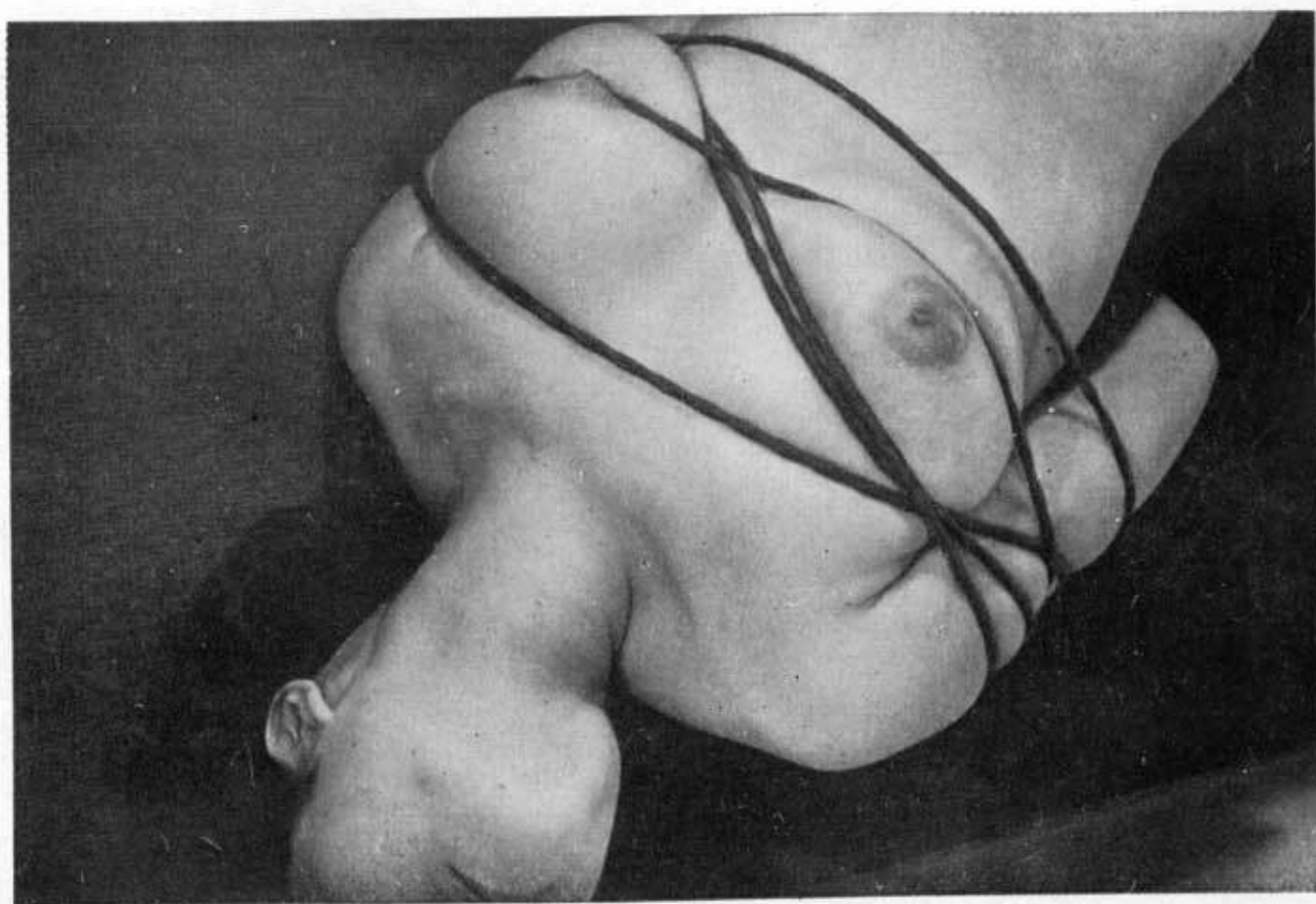
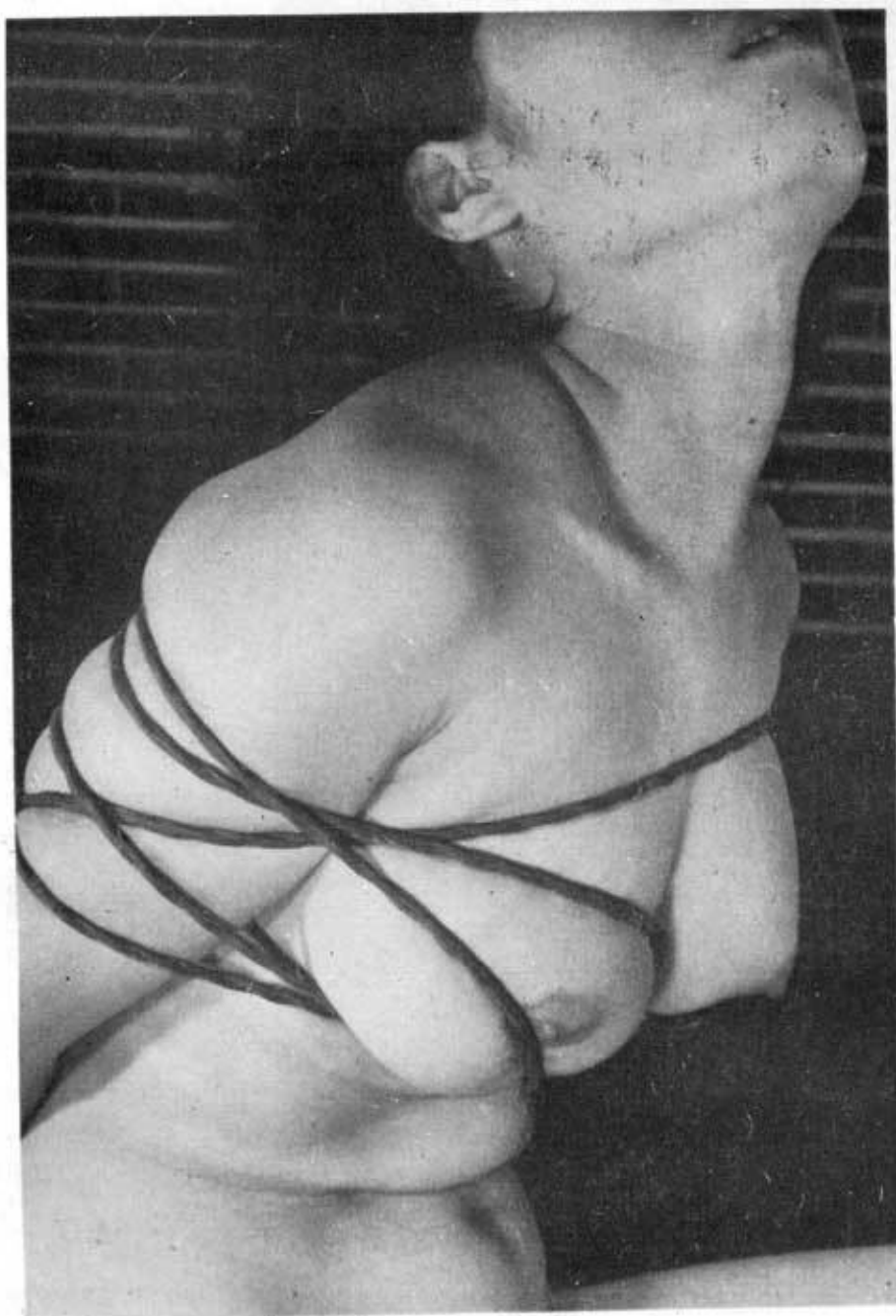


〔縛り写真「特報」〕  
“喰い込むコード”



モデル

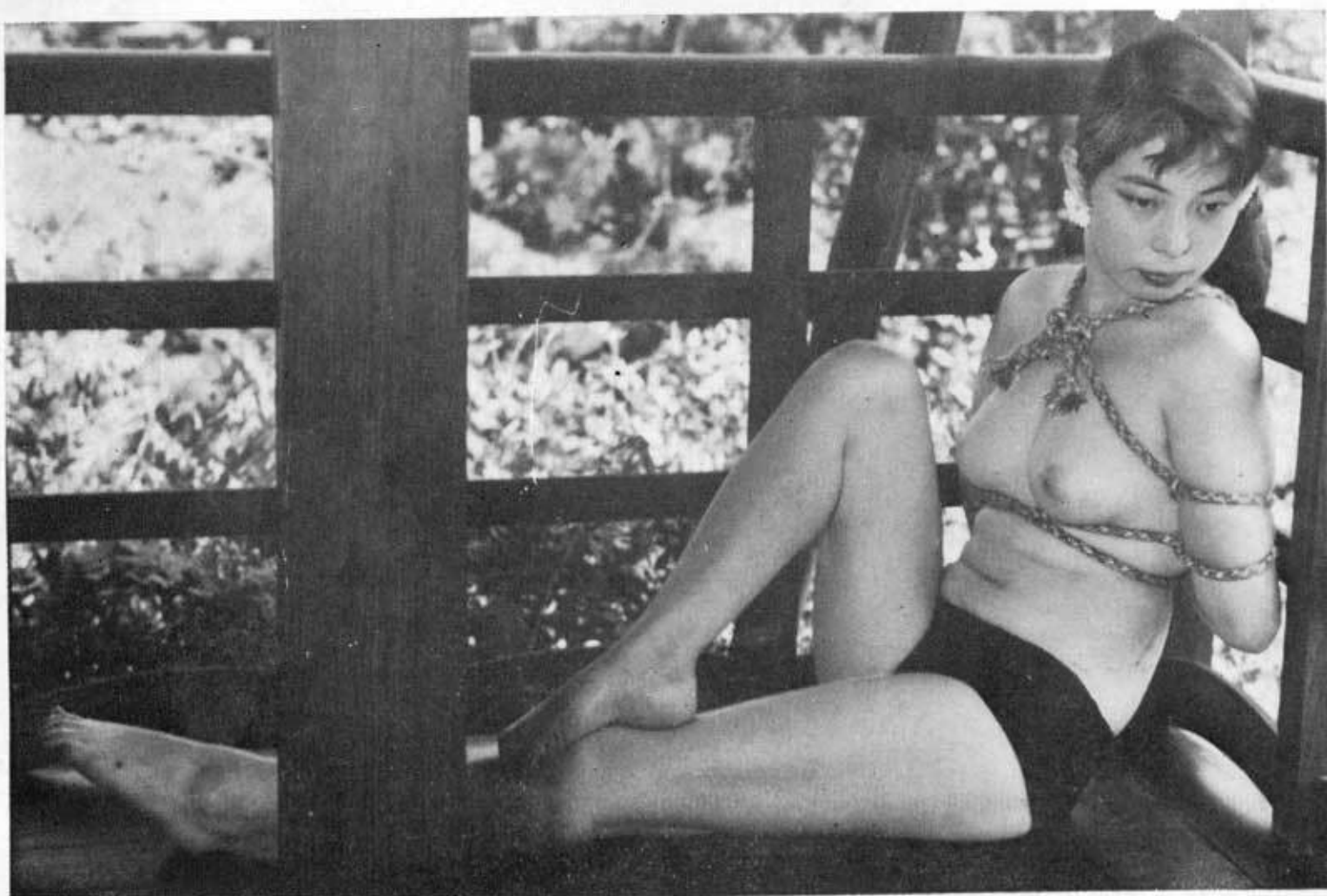
— 愛川悦子嬢 —





ニューガールの緊縛模様

《絹川文代嬢の巻》





新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1958年 11月号

(第十二卷 第十三号 通刊第百十四号)



# アブノーマル人物評

小谷喜美さんについて

林 弓 志 雄

(一)

大分以前のものが読売新聞発行の「人物診断」は、著者が京都工大教授、日本エッセイストクラブ事務局長の宮崎音彌氏だけに、興味的にも学術的にも価値のあるものだが、その篇中に、一時新聞雑誌を賑わした小谷喜美さんが出てくる。

小谷喜美さんは、全国に二百五十万の信徒をもつ霊友会の会長で、信者からは生仏さまと敬われる御仁であるから、その人の性格解剖は興味的だということ以外に、戦

後の新興宗教の驚異すべき膨張の要因を窺い知る意味からも関心のある事柄である。

私はしかし、そんな社会問題をここで考えているわけではない。小谷喜美さんのうちに潜んでいる、女性サディズムの正体には是非触れてみたいと思うだけである。

そこで、はじめに、小谷喜美さんは、はたしてサディストだろうかという問題だが、著者の宮崎氏は

「サディストに相違ない。性的のサディストつまり異性をいじめて法悦に浸っているという証拠は、現在のところないし、おそらく、

そんなことはないだろうが……」と幾分濁しておいて、次のような引例をあげている。

「これは会長の命令でなくて側近の忠義立てかも知れぬが……中略……こともあったがこれをみて小谷会長の表情は怒りから喜びに変わるのであった」——同書四七頁——

この引例と、性的のサディストではなからうけれども「と云う前文とは、何かちぐ



はぐな感がするが、おそらく小谷喜美さんの、教主という地位に対する遠慮からの、控え目の批評だろうと思われる。

がしかし、何も教主だからサディストであって悪いこともなからうと私は思う。元来、宗教的な没我——忘我——の恍惚境の、自慰的な法悦というものは、その根源が、性的なエネルギーの昇華によるものだといふのは、間違いない推理であるから、小谷喜美さんがサディストでも一向に不思議はない。

ただ、ちょっと妙なことは、小谷喜美さんが一日のうち四、五十分のお祈りの時間のほかは、自分の側近の女中方をいじめるのが生活のすべてであると云われるのには何かすこし深い理由がありそうである。

つまり、異性よりも同性を苛責することに執心するのはなぜであろうか、ということだが、その回答は相当複雑である。

そこには、全然別のケースが考えられはしないか、というのには、宗教上の罰に関する考え方である。

小谷喜美さんは、教団の主権者であり、同時に信仰の中心師表であって、仏教ではどう云うのか知らないが、お祖師さまに違いない。祖師を敬礼することは仏門の掟であって、師の命に反くような慢心増長は仏罰を蒙ることになっている。

つまり、小谷喜美さんは仏となって、慈悲の仏罰を心得違いをした弟子達に加えるといふのが、リンチの真相ではないだろうか。

そうならば、

「こんちきしよう、シリをまくりやがれ」

と、まるで馬方のような下司な言葉で罵りながら、女中方の尻をまくって、鞭でひっぱたく小谷喜美さんの荒々しい所業も、弟子達にとっては仏の悲願とも受けとれよう。

この場合——私は、女中方（つまり弟子たち）の心理が、宗教的マゾヒズムに甘露のような法悦を感じているのではないかと思うのである。

宗教的マゾは、苦行の喜びである。断食、水行、火行、さまざまの自虐によって、自分の業障と罪が清浄されると信じる、あの心理である。

もしそうなら、小谷喜美さんの所業は、人心救済をしていることになるし、それは一条の燃え上る宗教的な熱情から迸るサディズムで、女中方も、その鞭を大根の罪障懺悔のために進んで甘受しているのではなからうか。

さらば敢て——この機微は局外者の立入を許さぬ法界の妙境と云わばそれまでのことである。

## (二)

もっとも、多くの女中達の中には、宗教的

マゾになりきれぬ人もあって、霊友会のリンチ事件だ、と吹喋したのかも知れない。それが、数多いマゾ的な女中達の中の数人で、他の大勢の女中達は、今も小谷喜美さんの側近にあって、喜んで仏罰をお尻に受けながら、奉仕している事実を見逃してはならない。それと、さらに考えられることは、小谷喜美さんが、若い美しい女性に対する本能的嫉妬をもっているのではないかということである。

考えてみると、小谷喜美さんは神奈川県三浦郡南下浦町金田の貧農の子で、小学校も五年生までしか行っていない。上京して二十五才の時に下宿業をしていた小谷安吉の妻となり、二十九才で安吉が死んで後家になった。夫、安吉の弟の久保角太郎が策士肌で、今日の霊友会の組織をつくったのだが、以後、ずっと独身であった。——現在も独身である。

ある時、霊友会の幹部が打





ち連れて高野山(?)かどっかに行った時に、女中の高田トクが夫婦で供をしたのを怒って

「夫妻で新婚取りで来やがって、あたしは二十九から後家なんだよ。やけてしようがないや」

と放言した小谷喜美さんの心理も、いちおうは同情できるのである。そこには、宗教人となって自由な生活を束縛された喜美さんの、自分の青春を惜しむ心と、自分に較べて、自由で希望に満ちている若い女性が嫉妬されてならないと云う、感情のうごめきのあるのを否定することはできないではないか。

抑圧された欲望——そして不満と鬱憤、それが、若い側近の女中を「折檻」して悦ぶという風に走ったことは、心理学的にも領けることであろう。

嫉妬と云う感情は、何かの形で昇華するもので、これは人間の脊負っている業因であって、どうにもしようのないものだ。

いかに生仏さまでも、その煩惱を消除することはできない。女中達の尻をまくって鞭で叩きながら、相手の苦しむ様子をみて鬱情を紛らしているのが小谷喜美さんの本当の心なら、私は微笑しく共感を覚える。

## (三)

宮城氏は、小谷喜美の言動の粗野や——また宗教情操の低級な点をあげて、一介の物慾に執心したヒステリー女という風に解釈を下しておられるが……。

私は、小谷喜美さんの信仰が、高いのか低いのか知らない。また、そんなことは論外であって、それよりも小谷喜美さんの人間性に惹かれるのである。

生活が立派で高德であると云うことと、内面的な人間性は元々、別の代物である。それを混合して、内面的な人間性がこうだから、その人のもつ徳性もこうだと断定したりする人物評は頂けない。

釈迦でもイエスでも、内面の人間性は決して違わない凡愚さだし、或は著しいサド的傾向やマゾ的傾向があったに違いない。

しかし、それはイエスの、あるいは釈迦の偉大さを、些かも傷つけるものではないではないか。

否、むしろ超人的な徳望の人にも、内面的に——サドやマゾがある、という辛辣な発見こそ、私たちの安心であり、喜びであり、いっそうその人物の徳望に、人間的親近さをもつて傾倒することになるのだ。

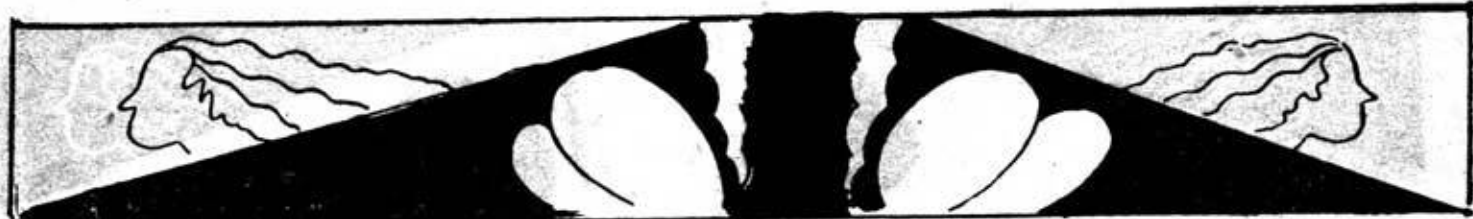
小谷喜美さんが、偽善的な言動——つまり宗教家としての臭みのある言動——を好まず卒直に小学五年卒業の無教育をむき出しにしたり、下司な言葉を吐きかけたり、腹が立つ

と唾をかけたり、同性の尻をまくって叩いたり、また、他の女中たちにリンチを命じたり、その一連の、いかにも一見非常識と思える行為は、恐らく何人の心の中にも潜んでいる人間の内面性であるからそれを剥き出しに見せられると……却って信者たちは、えも云えぬ親しさを覚えて、小谷喜美さんを拝みたくなるのである。

実際、それは遠い世界の人だと思っていたのが、自分らと同じ人間だったという安心なのだ。しかも、そのずっと雲の下の我々ですら、自分の偏執性を他に見せることを憚かるのに、臆面もなく、大胆にさらけ出せる人があったらずんと心が惹かれるのは当たり前だ。

小谷喜美さんが、宗教家の偽善に叛逆して、少しも自己を偶像の如く見せかけないところは、現代的な偉さだと私はつくづく思う。

ただし断っておくが——宗



教的な教養と徳について、小谷喜美さんがどの程度のクラスの人物か、それは私の預り知らぬところである。

ところで、小谷喜美さんの異性に対する行動はどんなものか。たいへん大切な問題であるが、これは御本人の告白に待つ以外には手がかりがない。

ほんの少し、私の想像を助けてくれる、二、三の事実について触れてみたい。

女が五十三ぐらいになると、精力の方はどうなるかと云うと、まだまだ十分だと云えよう。だから、小谷喜美さんが情夫をつくっても、強ち不思議ではない。それを性欲亢進症（ヒペルエスジア・セクスアリス）などと評するのは、あまりに興味本位に過ぎているだろう。

ある日、側近の女中が、何気なく小谷喜美さんの居室に行つて、喜美さんがM氏（宮城氏は匿名を使っている）と二人きりでいるところを隙間見てしまった。

そのとき、喜美さんは太股をあらわにM氏の前に出して、M氏から、注射をうけていたと云うのである。そのあとの情景は書いていないところをみると、女中はその一場面だけをみて、驚いてその場から身を退いたのだろう。

注射——この点に私は興味するのだ。普通、皮下でも筋肉でも、たいていは上膊に

するものである。めったに太股なんか注射することはない。

ではなぜ、太股に注射するのだろうか。それに——医者でもないM氏に何を注射させていたというのだろうか。

小谷喜美さんは或は、注射マニアではないのだろうか。私は推測する。刺痛の被虐を願望して、情夫であるM氏に、それをさせていたのではないか。せなければ、医療なら医者に頼む筈である。

この推理が私の独り合点だと思う人は、踏み込みの足りない常識的批評家だ、と私は思う。面白い——この問題は、謎ではあるが、いつかハッキリ分るだろう。とにかく、この生仏さまは医療を好むのは事実らしい。

注射だとか、歯医者さんのあのガリガリ機械だとか、そんなものが好きで、殆んど毎日というてよいほど、牀のどこかを医療的にいじくっている。（この場合、お医者は男性である）こうした事実は、私の推理をさらに飛躍的に唆るのである。つまり小谷喜美さんは異性に対してはマゾ的ではないのか、という気がしてならないのである。これだけの資料では少し心許ないが……。

喜美さんは最近、寿々木米若氏にぞっこんで、もっぱら同氏のために惜気なく金を使い随分、目に余るようであるが、宮城氏は、恋に浮れてのぼせ上った様子を、ヒステリー症だ

と診断し、その症状群の一つとして、芝居じみた態度を、寿々木米若氏との関係において指摘するが、そしてこれをサディズム傾向だとも断じておられる。

これについて、別に反論という程でないが、私は精神的サディズムが、必ずしも性的サディズムとは限らないということを提示したい。

小谷喜美さんが、ヒステリー性で精神的サディストだから、異性に対して性的サディストであるとは云えないということを主張したいのである。

むしろ、精神的サドの者には性的マゾが多く、精神的マゾには性的サドが多いと云う逆現象に注目されたいと思うのだ。

#### (四)

小谷喜美さんのヒステリー性については、ここでは大して興味がない。と云うのは、喜美さん程度のヒステリーは





実は御婦人なれば、たいていの場合もっているからである。

それよりも、喜美さんの金や物に対する執着の方が、喜美さんのアブノーマルな性格を知るためには大切な事柄だろう。

その前提の仮定として、物慾に貪婪であるということは——異性との交際にも貪婪だということに、いちおう決めてかかって、さして過りではない。

小谷喜美さんは、貧しい寡婦から、一躍——想像もつかない財宝に恵まれたのだからその欲びの状は分るのだが、最近では、財宝に対する執念の鬼になっているらしいのである。

例えば、側近の女中の語るところでは

『私は金庫の番を命ぜられた。金庫は麻布御殿の中央玄関に入り左側、応接間の隣の土蔵のうちにあった。……毎晩のように真夜中に教主は百匁ろうそくを片手にやってくる。そして、私の寝息をうかがいながら金庫の扉をそっとあけ、中にある金塊や金板をながめては満足そうにニタリと笑う、その顔が、とても薄気味悪くて眠れなかった』

と漏れている。ありそうなことだし、恐らく事実であろう。だが、金を真実——心から愛するなら、こうした所作は当然で、そこまでの、病的と思える愛し方をせずに

成金になった者はこの世には無い。

生活の表面では、無慾恬淡、いかにも執着のなさそうな振りをしてみせながら、札束を愛撫した経験は私にだってある。

実際は、文明人ほど慾望は貪婪なのだ。恐らく、水をのみ、ひじを枕とする、そんな生活の満足は、未開人しか持たないであろうし文明人の神経は、ズツと複雑、繊細、巧致になっている。

殊に物質文明を主流とする現代である。物慾については、昔の人の想像もできないほど旺盛であり深刻である。

さすれば、慾望の亢進は、文明人の特徴とも云える。サドやマゾや同性愛を、原始本能の一つだと思って、そうした感情が未開人にあると思うのは、飛んでもない錯覚だ。

むしろ、人間も動物である限り、原始感情をもつのは当然だが、サドやマゾや、同性愛が生活の中に、文化的に享樂されているという、この驚くべき事実は、未開人や一般動物には見出すことはできない。

余談になったが——小谷喜美さんの、金塊や金板に対する執着の強さは、それだけ、生活の強さを思わせる。

だが、そうだから、小谷喜美さんが、精力一点張りの、色きちがい、だろうというような観察は当らない。

# (五)

宮城氏は——

小谷喜美さんが銀のヤカンに黄金を入れ、これでお湯を呑んで満悦した。という話や「法華経はありがたい。一生懸命やれば金が集る」

と云ったという話を引例して女の虚栄心だと論じておられるが、それは単なる虚栄でなくて——現代人的な物慾に対する感情が、喜美さんのうちに流れているからではなからうか。

それはよいとして、宮城氏の「人物診断」の結論が「教育者や為政者、（これは木村元保安庁長官を指している）まで、この宗教に参与しているのは、やはり金の威力である。今日の日本を動かすものは、無知な前時代的精神と金であるが、霊友会事件はその一つの表現と云ってよからう」

とある。これでは冒頭の「生き神様の心理分析」は、



いささか龍頭蛇尾の恰好で、社会問題的な結論の方に流れてしまっていて、私を失望させたのであるが、私は、私なりの読後感から、ある結論を打ち出したい。

小谷喜美さんは、現代的な精神で宗教してる人で、それこそ、前時代的な、幽玄高尚な孤高的遁世宗教からは、どうやら完全に脱け出しているらしく思える。

実利的で、貪慾で、徹底して現世利益を追及し、その権化としてこの自分を顕揚しているようだ。

それでもよい、ただ、そうした生き方を實現するためには、サド的な生活表現を絶対に必要とするのである。つまり世に勝つための手段として、サド的感情を自由に振舞うことのできる、演出的才能が小谷喜美さんには確かにある。

私が演出的と云ったので、或は不審がられるかも知れないが、サド的とかマゾ的とか、そう云った一つの傾向にしか生きられない人もあるが、そして、それが大部分の人であるが、サドからマゾへ、マゾからサドへ、性格の変換する場合もあるし、中間型に移行する場合もある。そしてまた、変幻自在に自己をサドと見せたりマゾと見せたりする人も稀にはある。その稀なる一人として小谷喜美さんをみるのである。

だが、性格的に、小谷喜美さんがサディストであるとしても、また私の云う風に、自在なる性格変幻者であるとしても——彼女の性的な傾向は、マゾヒズムであろう。

それは前述した中にもあったように、彼女は、ひそかに注射の被虐を愉しむマニアであってみれば、女の心理的郷愁——マゾヒズムの切ない願望をもっているであろう。

こうしたサドな生活——男まさりな仕事をテキパキと片付け得る女性に限って、弱々しいマゾ的な男性を好まないものである。

自分の強気の傲慢さを征服してくれる男性——サド的生活の反動としての、徹底被虐の願望が、肉を通して溢れ出る粘液のように、女の心を浸すのである。

その裏付けとして、私は、寿々木米若氏はその顔貌、骨格からみて、決してマゾ的でないと思うし、概して浪曲家というものは、あの太々しい濁音の節廻しや、喉の逞しさが土佐犬のようなところから云っても、グロテスクな野性が匂うもので、そんなところに惚れた小谷喜美さんの心理がよく分るのである。

こうしたサド（精神的な）的傾向の、反対の女性、いつでも控え目で、優和で、なよなよしている人で、性的には、奔馬性のサディストが多いのである。

恐妻——良人を自分の枠に嵌めて、自由を

拘束し、異性に対して積極的に楽しむ貪婪さをもつ女は、たいてい、ざまんす族の、表面至って謙虚な人に多いのである。

反対に、口八丁手八丁と云われる部類の婦人で、何でもテキパキと物事を処理出来る能力の持主。家庭ではサゾヤと思える様なタイプの人に、貞淑にして従順、素直に夫の意に副い逐げ、人の眼を障らせる様な例は数多くあるであろう。

皮肉な逆現象で、私は、現代二百五十万信徒の上に君臨し、蓄財には相当悪辣の手段を弄し、木村（元保安庁長官）などの政府要路の人間まで翻弄し、麻薬事件すら揉み消す非凡さをもつ小谷喜美さんが、内面生活では被虐に飢えているマゾヒストだと思ふと……愉しい、ほのぼのとした希望を、人生に感じるのである。

（完）





# 最良の仲人

(第二回)

若 松 宏

## 六、悦虐男性

何時も、事業企画は菊江発案で出来る。

フサ子と菊江の親密度が益々深くなるに伴い、二人は新しい刺戟を求めることに一決した。男性社員十名の中、二名の低能は、用心棒専業の不労、随時出勤で優遇してあるマゾでない普通人だから、残る八名に個人面接した結果、二名を最適任者と認め左記誓約書に署名させた。

### 誓約書

第一条 私は、貴会に加入させて戴きます。就ては、貴会の本誓約書の条項及び之に付帯する一切の命令に服従します。

第二条 私は、貴会々長と事業部長の奴隷たることを認めます。但し、社務とは一切関係なく、且つ、貴会の定むる「加虐室」内に居る時間中のみ本誓約書は有効だとされる貴会の

御申し渡しを承認します。

第三条 苛め抜かれるのが私の唯一の報酬です。但し、貴会から与えられる金品は喜んで受領します。

第四条 万一、貴会メンバーの過失に依り精神的、肉体的損害を被っても一切補償を請求致しません。

但し、「加虐室」内で悦虐中「止めて呉れ」と言ったり、又は、中止請求の特定サインをした場合、貴会メンバーは直ちにプレイを中止される事、及び、この中止請求の頻度が貴会々員として不相当だと貴会に依て認められたときは、何時にても御除名に応じます。

第五条 御除名後、貴会の内容を第三者に漏らす事は絶対致しません。

万一、漏らした場合には其の責任は私に在り、これに依て生じる貴会の御損害は私が負担します。

第六条 本誓約書は正のみにして、貴会に御保存有方御願ひ致します。

す。

第七条 以上の各条項を承認した証拠として本誓約書の末尾に自署  
捺印します。

昭和二十八年一月三十一日

### 男性虐待会

会長 今坂 菊江殿

事業部長 鈴木フサ子殿

保安部長 日下部 勇殿

保安次長 磯部大三郎殿

七十糎の厚味のある鉄骨鉄筋コンクリートの床の下、五十坪の地下室には神戸市背、六甲山の奥で採取した、大粒でザラザラした風化花崗岩の綺麗な砂が一坪一屯の割合で敷き詰められ、防音、冷暖房、明暗調節自在の照明、色電灯、諸種の加虐装置と小道具、映画撮影と映写、録音、消毒、医療器具と薬品等の諸施設が完備し、片隅にはベッド三床と沐浴室、事務室がある。

今日、土曜日の午後一時半、虐待会オール・メンバー四名と悦虐男性第一号は、鱈腹喰べた昼食の後、この加虐室に繰り込んだ。

低能保安次長の磯部が壁のボタンを押すと、薄ボンヤリと照明された室の中央の砂がモクモク盛り上って、高さ五糎許りの縁のある四坪ばかりの鉄の円柱が二米余りせり上り、ボタンの手を放すと、ピタリと静止した。別のボタンの一押しで、円柱の頂上を形成している鉄の円板は一支点に依って百三十五度迄傾き、約四屯の砂を一気に撥ね落し音も無く又元の位置にピタリと喰っ付いてしまった。

裸になって加虐ブレイを待ちもうけて居る。節骨隆々たる二十四才になる若者の両手額は交叉されて、巾広のナイロン・テープで縛られ、天井の滑車から下っている鉄鎖の先の鉤に、テープの余った両端を結び合せて出来た輪をひっ掛け、足の爪先が、やっと鉄板を

何 某 ○

踏むことの出来る高さ迄、モーターで捲き上げられた。

円盤の一端には、撮影機がデンと据えてある。

二人の低能は、女王と王女に一礼して事務室に引き下った。

乗馬スタイルの菊江とフサ子は、テーブルを前にした鉄板上のベンチに並んで、瞬きもせず生ある像を観賞する。

第一号の腕は延び切り、五、六分間も経った頃、手先は暗紫色に変わり、猿轡を避けた口から低い呻き声が漏れ出し、大腿と脚部の薄い皮膚を通して諸筋が交々姿を隠見させ、踵から土踏まずまでが宙に浮いた部厚い蹠の先の頑丈な趾、十本の体重の大部分を受け止めているので、手頸と趾の痛みで交互に全身が上下の小刻みな縦のピストン運動を繰り返して、一種のトウ・ダンスを始め、引き締った腰は揺れ、胴体は伸び縮みし、腹壁が凹むと臀部が突出する。

高オクターブ用のピアノ線を和紙で巻いた漆仕上の細身の鞭を半円に撓ませ乍ら、つとベンチを離れたフサ子は、青年の背後に廻ると、

「これでもおあがんなさい」

と言いつつ、発止とばかりにモリモリと肥えた堅肉の彼の臀部を殴り付けた。二撃、四撃、六撃、忽ち起る耳を劈く悲鳴と共に、聴筋はそれ自体が独立した生物でもあるかのように張り切った皮膚の中で蠢動する。青年は息も途切れ勝ちに

「もう、下してください」

と処刑開始以来、初めて口を利いた。

事務室の低能達を呼び出し、ボタンを押させると、天井の鎖が延びて青年の軀は鉄板上に崩折れ、手頸の縛めを解くと、薄黒い紫色の塊りになっていた手先は急に真紅に染り、やがて段々と平常の色合に帰ってゆく。

「御苦労さん。最初にしては、よく頑張ったわ」

と、一万円（当時では百円札のみ）の札束を、菊江が投げ与え、



「帰りに一杯おやんなさい」  
 「有難う御座います、女王様、実は、もっと頑張りたいかったですけど、……思わず声を出しちゃって誠に申し訳ありません。こんなに沢山戴きましては……」  
 「そんな遠慮はいらないわ。次回には、もっと頑張る様にね、いいわね。」  
 と、フサ子が口を挿し挟む。



蚯蚓張れになった臀を撫で擦りつつ青年は、  
 「次には、もっともっと非道く苛めて下さい」と言い乍ら、ヨロヨロした足どりで立ち上った。  
 これで、第一回の演技は解散した。  
 大体、加虐のやり方は、フサ子が北満で見聞した人体加虐の方法からヒントを得、これに彼女の独創を加味した案が多数用意されていたが、次の土曜日には、**「復讐」**の意味もあって、菊江のプランが実施される事になった。

悦虐男性第二号は、色白、の総体に丸味を帯びた、満二十才になった許りの生な青年、彼は十名の社員の中一名の欠員補充で菊江が最近、加虐の好対象者と見て入社させた、K誌の愛読者だった。

小倉市目抜き商店街、魚町の老舗の三男坊で日頃から菊江もよく知っていた、育ちの良い純真な性格なので、用心棒の低能達を加虐室に入れる必要は無かった。悦虐願望で来ても、いざ脱衣と云う時など、何となく気恥かしい所作が仄見えたが、一寸頬をあからめただけで、わざとらしく元気にパンツ一つの姿になると、設けられた厚い木製の台の上に、命ぜられた通り仰向けに横たわった。

よく細かい事に気の付く性質と見えて、出掛けに入浴したらしく  
 臍までスベスベに磨かれている。

菊江とフサ子は力を合せて、素直に縛られる彼を、曾て、菊江が  
 長崎市背の山中で縛られた通りの恰好にしまった。

フサ子の、柔かい指に消毒された長い針が絹糸を垂らして光る。引  
 き締った若々しい青年の肌が摘ままれて、その針が気前よく、プッ  
 リプッリと貫通された。

針が這入る瞬間と、反対側から針先が押し出される時だけ、両眼  
 を閉じた青年の口元や頬が僅かに引きつり、足頸の外側で一緒に縛  
 り合された手頸の先の両側十本の手の指と十本の趾とがピクリと動  
 く。

摘みのぼしている脇腹の皮膚から針を抜くと極く少量の血がヌル  
 ヌルと滲み出し、滴り落ちる。

フサ子が、  
 「痛いのか？」  
 と訊く。

「少しも痛くありません。針を刺される時一寸痛いだけです」  
 と答える。

「余り長時間は、いけないわ、血管でも破裂しちや大変よ。もう止  
 めましょう」

と菊江が心配する。

肉深く縦に長い針を刺す、と主張するフサ子を、動脈の損傷は大  
 変な事になる旨を菊江が説得して、急いで縛ってあるテープを切り  
 放した。

心配気な青年の質問に、

「小動脈からの溢血だから、一週間も経てば此の内出血は組織に吸  
 収されて癒っちゃう」

と菊江が説明したので、青年は一万円のお小使を貰って、安心し

ての帰り際に、

「何て素晴らしい遊びでしょう。此の次はいつにして戴けますか」  
 といって、にこやかに引揚げていった。

菊江とフサ子の加虐計画は益々密を追い、アレコレとプランを練  
 り案を討議したため、実地の男性加虐会の開催は其後四週間も休止  
 した。

#### 五週間目の金曜日

「会長さん。前回の内出血は、其の後十日目には跡かたもなく、よ  
 くなりました。明日は土曜日ですが、どうでしょう？」  
 と、控え目の催促をする。

こうして第三回目の加虐会は、其の翌日例の通り、被虐願望第二  
 号を交えた三人の贅沢な昼食後、午後一時半から開催された。

今回のプランはフサ子の創案、悦虐者側の身体保安の必要上、綿  
 密な打合せを必要としたので、フサ子は予め青年に計画の詳細を説  
 き、注意事項を与えた後で、若者は台上に腹這いに横たえられた。

彼の手足もフサ子の手先も充分消毒され、これも又、消毒済みの  
 長さ七十糎のワイヤーを一本宛、手足に貫通する。手足共、第二、

第三の掌骨、臍骨の基部の肉質の部を注意深く、骨膜を傷付けない  
 ようにして掌と足趾から何れも甲に向って、プッリプッリと刺し貫  
 く。皮膚の両面が破れる度毎に、手足先がピリリ、ピクピク痙攣す  
 るが、大した痛みは感じない模様だ。

四本のワイヤーの両端は、夫々、ペンチで結び合わされた。天井  
 の鉄の小滑車からブラ下っている、極小ワイヤーを撚り合せた直径  
 二耗のワイヤ・ロープが、手足を貫いたまま輪になっているワイヤ  
 ーに連結され、同時に手足頸に真鍮製の環が嵌め込まれ、其の輪の  
 周囲外側の一点に突起した小穴の開いた環に、やはり天井の小滑車  
 から下って来ている、これは直径三耗のワイヤ・ロープが通され連  
 結された。此のワイヤ・ロープは、前者よりも極く僅かがテンショ



ンを弱め、手足を貫いた四本のワイヤーに全重量をかけ、八本のワイヤー・ロープは、同時に同一スピードで徐々に若者の四肢を巻き上げて行く。

菊江はベンチに腰掛けてこれを眺め、フサ子は青年の真横近くで中腰となって、色別けしたコード付きの小スイッチ二個宛を左右の手に握って、ワイヤーの貫通箇所を全神経を集中して凝視する。

万一、ワイヤーが肉を切り始めるような事態が発生すれば、関係スイッチの操作でこれを止め、手足頸関係スイッチを使って、これに連絡しているモーターをスピード・アップする用意をしているのだった。

先ず第一番に、膝頭が台上僅か四厘許り離れた頃、足の上昇は停止され、ついで方才恰好の両手々頸の位置が、台上五十厘許りになつてから、これもピタリと停止した。其の上、彼の胸から頸にかけて、大小三個の固目の枕が積み重ねられて、足部よりも余計に重量のかかる手掌の損傷が防護された。

青年は眼を閉じ、苦痛の表情よりも、寧ろ如何にも心地よさそうに此の拷問の真似事を享樂しているらしい。

足手のワイヤー貫通箇所からは、掌から少し出血しているだけで足からは少しも出ていない。

モーター停止から約十二・三分間経った頃、その時まで彫像のように静止していた、プリプリした肉付の臀部が、極めて僅かではあるが、少しづつ徐々に揺れ出した。枕につけた頸を中心にして、其の頭も又、右、左に、振れ出した。

この動作は、敏感な二人の女性の注意を引きつけた。

つと、立ち上った菊江は、フサ子の耳に口を寄せて何事かを囁いて席に戻ると、フサ子の左手の指が動き、手足を貫いたワイヤーを吊したワイヤー・ロープが緩み、同時に、これに伴って、手足頸の輪に連結したワイヤー・ロープが緊張し、四肢全体の位置が、ほんの僅

かずり下った。

腹部に向つて著しく彎曲した胴体の腰を中心にして、上体と臀部以下の生のよい肉体は上下の二部に分れ、斜め横に揺れを増し、一方の手足頸にのみ重量がかかると、其の反対側の手足頸のワイヤー・ロープのテンションは緩み、この運動を交互に繰り返す。

今や、青年の身の曲りは大巾に増し、顔面は紅潮し、頸や背筋には大粒の汗の玉が現れ、台の板を濡らし、拳を握り締めたり開いたり、端麗な足先は堅い皺の出来た足蹠に向つて曲り、甲の皮膚が緊張する。

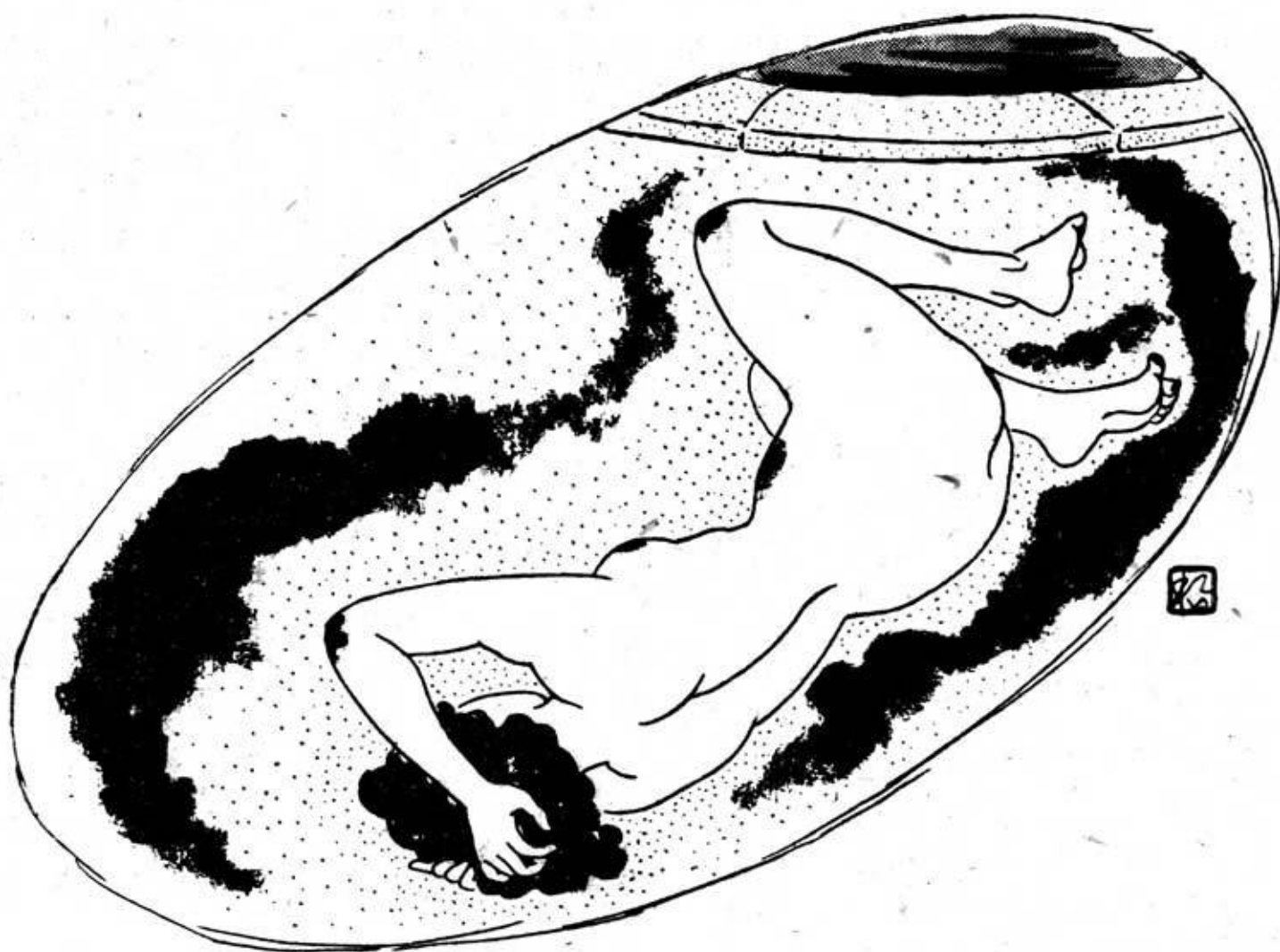
青年の吐く荒く短い若しげな喘ぎが、地上の騒音を完全にシャットアウトしたこの地下室のシーンとした静寂を一入深め、汗に濡れた板に密着した腹部の辺りが大きく波打つ。と見る間にブロンズの彫像のように固まった全身がブルブルと小刻みに顫え、ガックリと悶絶してしまつた。

此の状景を見まもる二人の女性も息をのんだ。

十数分間持続した此の凄烈な拷問に遂に失神し、グッタリとなつて半吊りとなつた青年の姿は、丁度、肉屋の大鉤にブラ下つた豚の半身を連想させる。

此の時、突然立ち上ったフサ子の右手には旧式の釘抜が握られ、ダラリしている若者の小指の爪先をそれで挟んで、ジンワリと圧し付けた。突然の激痛に、意識を呼び起された被虐者の唇からは、ウウーツ、ギヤーツと激しい悲鳴があがり、今までの静寂は一遍に吹き飛ばされてしまつた。

フサ子が、釘抜を投げ出し、一瞬不気味に歪んでいた口元が、元の可憐な花卉の原型を取り戻し、四つのスイッチを一度に押したので、青年の軀は静に台上に横えられ、今日の演技に終止符が打たれた。



## 七、最良の仲人

どんなに壮麗な異性の被虐図も、甘美な夢も、変転流通を好む精力的な活動家の菊江にとっては、次の新鮮な希求の止むことを知らない衝動の反芻に依て脆く忘却の深淵に投げ込まれる運命にある。

とどろに寄せては返す北西太平洋の荒波の咆哮を身に泌みて聴くことの出来る函館郊外湯ノ川温泉、浴槽も床も一面に薄黄色の硫黄華に覆われた家族風呂、そのザラつく床に艶やかに波打つパーマの髪をタオル載せ、ふくよかな長身を仰向けに横たえた今坂菊江の傍には、いつも影の形にそのような存在であった鈴木フサ子の姿が見当らぬ。入口のドアは施錠してある。

図らずも、今宵は十月の九日だ。丁度、十七年前の今夜、菊江事美佐子は、長崎の五社山々麓で男達の暴力で、打ちのめされた日に当る。

若い身空を泥土に塗れさせた男性に対する復讐は、心ゆくまで成し遂げた。両親と一人の兄は、想出の生家と共に原爆で粉砕された。今更、身分を隠して親類縁者に会う気持は起らぬ。三児の母となり末亡人となって生活に困窮している曾ての親友、内田葉子には六カ月毎に月額にして二万円になる送金を、男文字、差出人住所氏名不記載の手紙と共に続けている。

他面、不思議中の不思議、彼女自身のみが知る奇蹟とも言う可き秘密は、異性との恋を三十六才の今日に至る迄経験していない事だった。

彼女の、男性操縦術の一部だったコケティッシュな所作も、艶麗優雅な扮装も、大部分は復讐の為に用意された意識的な演技の一部に過ぎなかった。

他動的動機に依るとは言え、復讐に徹した過去の生活記録には「淋しい」などという生ぬるい情緒の入り込む余地などあろう筈は



絶えて無かったのだ。

半生を費した願望の達成と、交通事故に依る鈴木フサ子の急死は彼女の情念を空虚なものにしてしまった。

無限に湧き出で浴槽の縁を溢れ、涔々と流れ去る湯氣立ち籠もる浴室で唯独り、荒磯の波の音を聞くともなしに聴いている中に、菊江は生れて初めて、寂寥の感を骨の髄まで味わった。

ダイヤ煌めく豊麗な十本の指を、パーマの髪にいきなり突っ込んだ菊江は、頭皮が擦り剥けやしないかと思われるほど荒々しく、緑の黒髪を引っ掻き廻しつつ、グルリと横向になり、伊勢蝦のように背中を丸めて縮込み、棒のように一直線に伸び切って、硫黄華の粗面の床をゴロゴロ、ピチャリピチャリと右に左に転がり始めた。

彼女の円やかな肩、艶やかな肘、豊かな尻、象牙の膝小僧、玉なす踵など、全身の突起部は、荒砥よりも尚粗い、硫黄華の結晶に擦られ破れて、流れ出る血汐はパツと床の湯に拡散しては流れ去り、湯に侵されていない硫黄華は時ならぬ紅葉に覆われてゆく。

若し、第三者が、この有様を窃み見したとすれば、この血塗れの素晴らしい仇な年増は、発狂したに違いないと判定することだろう。

彼女は一言も発しない。途絶え勝ちな押えつけた、低い喘ぎと呻きが漏れて来る。

こうして、半時間余もノタ打ち廻って、ヘトヘトになり、俯向の大の字型にヘタバリ付き、肩は大きく息づき、圧し付けられて張り切った、乳房の基部の外側を覗かせた血塗れの裸身は、凄惨な髑髏殺しの犠牲者の断末魔とでも言うべき有様だった。

やがて弾力に満ちた彼女の体軀は、バネ仕掛の人形みたいに勢よく、スックと仁王立ちに跳起きた。拳を拵えた右手を勢一杯、高々と挙げ、無限の空の彼方をキツト見詰める鋭い眼差しで天井の一角を睨み付け、「ゼアスアウイル、ゼアスアウエイ」(精神一到

何事か成らざらん)と、清澄なソプラノで絶叫した。この発作的行為が終った後の彼女は、いつもの穏やかな菊江に立ちかえり、手桶をとって床面にコビリ付いた血を洗い流し、一度湯舟に飛び込んでサット出ると、蛭に喰い付かれた跡からダラリダラリと吹き出すような血を意にも介せぬかのようにすて、身体も拭わずタオル地のパジャマを引っかけ、敏捷に浴室から消え去った。

其の歳も暮れに近づいた十二月中旬、客足疎らな相州、湯川原温泉、対翠館の裏手、杉の太木に囲まれ、上下二段に分れた広大な露天の岩風呂は、一個の百ワット電灯で臙に照し出されている。

狭い上の段の湯はとても熱いが、下の段はウンと広くて丁度よい湯加減だ。

その下の段の左寄りに、十糎ばかり湯の表面から沈ませたある六七屯もあるうかと思われる、一坪余りの平坦な上面を持つ大石の縁に腰掛けた菊江は、肩を並べた同年輩程に見受けらるる美丈夫の厚ボツタイ、ポリウムのある大きな左手をグット握んで自分の項に廻し、右手で男の指を捉えて一本、一本、人指から小指まで、指の中程迄も口中に含んで、ジワリジワリと噛んでゆく。

男の腕は時々、ヒクヒクと痙攣し、童顔の口辺を歪め、眼を閉じ眉を顰めるが、灸を据えている人と同じく、一種の痛烈な刺戟を楽しんでいるらしい。

此の男は青森県、岩木山の、なだらかな東山麓、五所川原と弘前市の中間、西寄りに広大な林檎畑を経営する、斯界には名を知られた山中一雄だった。円味を帯びた恵比須顔、ホンノリ紅を差した頬っぺた、六尺近い白哲の体軀、善悪共に素直に受けとる寛容な性格。

彼の手頸、足頸には、未だ新しい紐の喰い込んだ跡が見えている。巨大な太股にも縄目の跡がついている。相客のない深夜の沐浴もこれと関係がありそうだ。

彼の指先を放した菊江は、両腕を彼の頸に廻し、ニッコリ笑を湛えた彼の床しい穏かな表情の顔をウットリ見つめ、小児をあやす母親の動作で、彼の顔を自分の方に引き寄せ、その血色のよい唇に自分の唇を、しっかりと強く押し付けた。

「あの晩、K誌をお買いなさった貴方の後をつけ、都電で貴方の隣に座り、貴方がマゾ関係の頁を喰い入るように読み始めたのを私が発見したのが、お互を結び付けるキッカケになったんだわ」

「ウン正に其の通り。しかし、クイーン様の押しの強さには僕も面喰らったよ」

「あれから十日目の晩の事件？」

菊江は、一目見た許りの此の男の住所を確かめ、身分、財産、性行等の調査を極秘裡に成し遂げるに九日間を要したのだ。

「そうだよ。僕が、あのレストランの廻転ドアを出ると、いきなり靴の上に重い荷物がドサリと落ちて来たんだもの」

「フフン。十二冊のK誌のバックナンバー？」

### 読者通信

僕は二十八才のソドミアでありM傾向のもので。大変恥かしがりやですから、K誌も直送してもらう事が出来ず、毎日市内の某本屋で買求めています。

読者通信も益々賑やかになり、とても嬉しく思います。殊にツドミアの方々の記事が載っているのに、とても我が意を得たりと喜んでいますが、K誌の記事に類の少ないのが残念です。もっともっと沢山載せて下さい。

「眉を顰める僕に、御免なさいとも言わずニッコリして拾い上げさすんだから、敵わんよ」

「ゼアス・ア・ウイル、ゼアス・ア・ウェイ、って言うテクニクだったわ」

「それからというものは、僕は完全にお前のP・W（捕虜）だよ」

「スレーブ（奴隷）だよ」

「悪かった、女王様。我々二人の奇縁を取り持ち、至上の幸福を齎らして呉れたのは、何とおうとK誌だったのだ」

「そうだよ。最良の仲人だったのよ」

二人の睦ましい囁きの聴手は、滾々と湧いては溢れ、流れては落ち行く出湯のさざめきと、その下を走る谷川のせせらぎだけだった。

対蹠的な偏向が、求める者と与える者の心をしっかりと結び合せ健康と財力と良識の堅実なバランスの基盤で、栄ある将来を約束された世にも比類なく、美わしい二個の人影は濛々たる湯気に包まれては顕われ、隠れては臈になってゆくのがあった。

（終り）

兵庫・凡生様、千葉・室莊介様、同・百生様、東京・山本五郎様、大阪・男子刺青生様始め同好の皆様よりの御便りを待っています。

兵庫・凡生様、僕もソドミアの座談会を開くことに賛成です。大いに期待していますから御尽力下さい。大阪男子刺青生様、S過剰の貴方様に一度いじめてもらいたいものです。その為には貴方様がヤクザ風に髪を切れといえそうです。刺青もして頂ければ結構です。でもこれは余程の決心

がいるものですから、絵具が何かで全身に刺青の様に絵を書いて下さる方がいいと思いますが如何ですか。この様な僕を、ソドミアとして、又Mとしていろいろのことをしてやろうと言う方がいましたら（玉野市築港至誠堂気付南裕二）宛、御連絡下さい。なるべくなら近県と県内の方がいいのです。どうぞよろしく願います。

（玉野 南裕二）



# 現代マゾヒズム芸術時評 (番外)

再び黒田史朗に寄せる

原 忠 正

私は、九月号上で心からの歓びを交えて貴稿に接しました。可成りの悪質な妨害にも拘らず、本誌がその刊行を継続し、私達に特殊な言論の場を提供してくれていることは、繰返し述べる必要はないと思いますが、併し乍ら、貴稿に接して再びその感慨を持ちました。貴稿によれば、私の意見と貴方の意見とが相互に中心を外れたものであること、そして貴方がイルゼ・コッホに就いて美醜を断定した事が、私に不満を与えたのであろうこと

更に根本的な問題として、私が一般女性の中のサディステインという種類に属する、特殊な女性を拾い上げていることは間違っており、一般女性の中に秘むサディステイクな傾向（貴方はそれが万人普遍のものと云われております）が偶然表現された時、その形状及びその質等を摘出することがまことの行き方であるといわれております。

私は、第一に貴方の「マゾヒズムへの誘い」の根本的な所説が間違っているとは申し

ておりません。私は、その所説が私の其れと違っている事を唯一の理由として他人の所説に反論する事は余り好みません。私が貴方に申上げた事の要点は、中性的女性がサディズムを含有しているという安易な考えが誤っているという貴意に賛同し乍ら、コッホに就いて事実上の誤りを指摘して貴文の画龍点睛を望んだのであり、又それに添付して日頃、私の主張の根本たるサディステインの定義を述べたものであります。従つて貴方の長文に渉る反論にも不拘、私は私の文中に些かも誤を発見し得ないのであります。イルゼ・コッホに就いての類推について貴下は、戦時中の我国での軍部高官達の情婦連を引合いに出されておりますが、此種の引例こそしばしば推論の為に特に考へついた例証と云うべきものであります。ナチス・ドイツの主張、ドイツ民族の特性、特に服装美醜に就いての甚だしい嗜好、当時のコッホの同僚達に就いての諸資料之等について、比較すべき因子が我国軍人達に一体存在したでしょうか。

私は大東亜共栄圏の思想が、何等思想的なものを含まず、その意図に於いて蒙古の西漸と何等異らないと考えます。其れに対して、ナチス要人達は思想的にアリアン純潔を叫び、ドイツはすべてナチズムに傾倒していたのであるといえましよう。今日に至って、ナチズムが全くの悪夢であったというのは誠に無責

任な言葉としか考えられませんか。その点について、の詳述は割愛すべきものと考えますが、要人連が我国軍人達の彼女達と同等の女性しか持たなかったとは考えられないのであります。

其点について、私はマルタ・エゴルトと、ツアラ・レアンデル、ミリツア・コルユスの三人の高名な美人の名を挙げて、貴方の注意を喚起して置くにとどめます。貴方は、往々にして、新聞紙上に何々犯人の写真を見られると思います。何処の国でも同様な事でありますが、警察関係の写真などというものは、その総体の印象に於いて、全く写真感のないものであります。コッホの一般に流布されている写真とは、実に法廷用の此種の人別写真でありますから、貴方の様に十年前のコッホをこの写真からのみ推測することは極めて危険なものと云わねばなりません。更に疑念が存するならば、エリザベト・マレシアルとドロテア・ピンツについての新聞写真と、法廷での人別写真とを比較されることをおすすめ致します。

次に、サディステインについては、私はサディステインを特殊な女性であると考えております。私は世の中の女性達がすべてサディステイクな因子を持ち云々という貴意には賛同し難いのであります。

マゾヒストを満足せしめる女性がすべてサディスムを含有し、そのサディスムの発現によってマゾヒストを刺激するものであると考え、ること自体が、大変な過ちであると考えられます。

マゾヒストとサディステインとがその様な緊密な相関関係を有すると思ふことが誤りの第一歩なのであります。人間の認識、存在の根本問題にまで言及することは余りに膨大な紙面を要する為、ここでは省略しますが、マゾヒストを刺激するのはサディスムを含有するしないに不拘、其人の特定のマゾヒズムの条件に合致した対象なのであります。

その対象物が神酒であると、犬であると、又馬であるとは問わるべきものでないのであります。一方、サディステインは、観念上の相手方たるマゾヒストが好むと好まざるに不拘、サディスムを含有するものであります。

此点は本誌の中に記述される多くの寄稿、特に多くのフィクションが殆んどいってよい位、犯している誤謬の基底であります。

マゾヒズムとサディスムは必ずしも対応するものではないのであります。従って貴方がマゾヒストとしての立場から見ると、そのマゾヒズムを満足させる、又は満足せしむべき対象（それが女性自体であるか、女性の行為、服装等であるかは勿論其の時によって

異なるのでありますが）の一つとしての女性が女性一般であるという点はまさしく、沼氏の手帖や私の時評とその軌を一にするものであり、反論の余地はないのであります。私の時評が所謂古典的なサディステインのみを対象としているものでないことはお判りであろうと思ひます。

然し乍ら「サディステイン」を定義するときに、貴意に従うならば、その斬新な解釈によって「サディステイン」は「女性」と同義語と化してしまうのではないかと危惧されるのであります。女性がすべて、サディスムを包懐し、それが時に応じて偶発することは疑う余地のない点であります。それらをすべてサディステインと称することは如何かと思われまふ。マゾヒストを満足させる状態を抽出することを私達が誠実につづける事が必要であると同様に、「サディステイン」という減多に存在しない種類の女性を明確に区別する必要がありますことは云うまでもないことと思ひます。十分意を尽しておらぬ点もあります。が、貴稿に対しての所感を申し上げました。

(以上)

× × × × ×



## 真夏の夜の幻想

## 漂流の乙女

泉 かよ子

先月の例会で、これまでの禁をやぶってミス紅とミス緑の緊縛写真を撮影し、その作品のコンクールが行われたことを報告いたしました。その作品を見せよという御要求を沢山いただきましたが、残念なことに一枚もありません。このときの写真はあらかじめの決定に従いまして、ネガは薬液に漬けて漂白してしまいました。印画紙は十二本のビールの空壇に二枚宛——ミス緑とミス紅と一枚宛——挿入して密栓を施しまして鎌倉の海に投入されました。

壇はいつまでも、ゆらりゆらりと月光にきらめく波間を漂っていました。やがてひと

つまたふたつと見えなくなりました。かたく密栓してありますので容易に沈むようなことはないと思います。小坪、逗子のあたりに流れつきますか、三崎から房州に流れてゆきますか、もしかしたら黒潮に乗って太平洋を横断してアメリカまで漂流するかも知れません。青い眼の異人さんが拾いあげた漂流物の中から二人の日本娘——手足を無残に縛られ或は猿轡まで喰まされている、とらわれ人の姿を発見したときどんな顔をするのでしょうか。

いろいろ想像をめぐらしますと、写真ではなくて本当に縛られて流されてゆくような気

持がして、キューンと胸を締めつけられるようです。若し奇蹟的にも漂流する乙女達を救いあげた方は、こっそりとあなたの御部屋の戸棚の奥にかくまって下さい。

○

寝苦しい暑い夜がつづいたあとの一夜、運命の漂流者は異国船に救いあげられました。真昼をあざむくような満月でなかったら、そして異国船が運転を停止して海上に探し物をしていて最中でなかったら、恐らく漂流者は発見されることもなく、従って救いあげられることもなかったでしょう。すべては大いなる偶然でありました。

○ 私がふと気がついたとき、船室のベッドに横たわっていました。しびれるような手足の痛み——これは緊縛から解放されたときのいつもの快い痛みです。我にかえって起上りますと海水着をつけただけの姿で、ベッドの下にはハイヒールとひとかたまりの鎖、手錠が捨てたようにおかれてあります。二帖程の狭い室で、暗い灯がひとつついてる殺風景な室です。

ミス紅はどうしたかしら？ ハイヒールをはくと扉の把手を引きましたが、扉口はかく閉ざれて開きません。急にこわくなつて扉を叩いていますと突然、扉が開きました。

三人の異国人が入ってきました。狭い船室は一パイになりました。

「オジョサン キガツキマシタ アナタタ スケラレマシタカ、シンパイアリマセン。」

一番背の高い驚鼻の老人が申しました。あとの二人は、船長らしい制服の太っちよの白人と背の低い黒人のボーイで、この二人は何もいません。

「あ、う、紅は？」

「クレナイ？ オウ、ミスクレナイ、アナタ トモダチ、ゲンキ シンパイナナイ」

「紅にあわせて下さい」

「OK ソレヨリモアナタキクコトアリマス ネヒトタスケタキソクデスワカリマス」

「か？」

「はい、わかります」

「ウエル アナタ ナマエナニデスカ」

「青葉みどり」

「イクツデスカ」

「二十一」

「一九三七年？」

「イエス」

「オウ 既婚？」

「ノー」

「婚約？」

「ノー」

「恋人？」

「ノー」

「オウ、キノドク」

老人は船長と顔を見合せて、外国語で何か語りあいました。そして互にニヤリとほほえみしました。私は思わず無気味なものを感じて、両手で露わな肩のあたりを覆いました。それから一時間、根堀り葉堀り一身上のこと家庭のことをきかれました。途中で黒人のボーイが飲み物をくれなかったら倒れたかも知れません。

○ ひと通りたずねおわると出てゆこうとします。私にはあわてて老人の袖をひきました。「アノ、この船はどこかの港へつくだですか、どこの国の船ですか、ミス紅はどこにいますか？」

「か？」

老人は船長と顔を見合わせました。

「コノフネ、ニユーギニア ユキマス 鉱物

ツミマス ヨコハマユキマス アナタホーム

カエリマス シンパイナイ ミスミドリ、グ

ッナイ」

「あ 待って！」

三人の姿は消え、扉は再び鎖されました。

○

外に向いた船窓は固く閉ざれているので、暗い電灯の下で夜か昼かわかりません。鈍いエンジン響きとゆるやかなローリング・ピッチング、船はニユーギニア目指して遙々航海をつづけているようです。段々日本を遠ざかってゆくのです。なぜ紅に会わせてくれな

いのかしら？ この船はもしかしたら密輸船か何かしら？

ベッドに伏してそんなことを案じているうちに、また深いねむりに陥りました。

眼がさめたとき、枕もとに黒人ボーイが突立っているのを見て、驚いて飛びおきました。

ボーイはズボンのついたパジャマを二着さし出して、手真似で着ようと教えます。それから盆に盛ったパンとミルクと林檎を枕もとにおくと、無表情な顔で扉を閉めます。矢張り扉は開きません。

○

いつまでも海水着の姿でもいられませんの



で、パジャマに着かえました。白地に赤い線の入った上質の綿生地で、上衣の胸に白布が縫いつけてあって、16と番号が記してあります。

○

食事をたべおわると少し元気が出ました。食器を下げにきた黒人ボーイに

「船長にあわせてくれ」

と、しつこく頼みますと、最後に根まけた形で出ていき、暫くして船長と例の老人をつれて来ました。

「何用？」

「紅にあわせて下さい。この室から出してお願い」

泣かんばかりに訴える私の言葉を、身じろぎもせず聞き流していた老人は、最後に無表情に

「アナタ 日本警察、囚人」

コノ船室デル

イケマセン コノ船日本ツク アナタ日本警察ワタス ソノホカデキマセン」

「わたし、警察囚人ではありません」

老人はニヤリと笑い身をかめると、ベッドの側から手錠をとりあげました。手錠を私につきつけると

「囚人」

、と言いつて、船長、ボーイを促して去りました。また閉された扉。

○

ああ、私と緑は手錠で縛められていたので囚人と間違えられたのでしようか？ 私達のG・Eクラブのことを何と説明したらよいのでしよう。それから数日間、檻のように狭い船室に閉じこめられて色々案じつつ暮しました。朝は洗面器一パイの湯をくれるのでわかります。尾籠なことですが、便器がベッドの下におかれていて、時々ボーイが取換えてくれます。話にきいた独房とは、こんなところでしょう。寝台の一隅に、おきすてられた手錠、鎖に触れる気持もわかず、ボンヤリとエンジンの音に耳を傾けて過しました。

○

何日目かの朝食の際、黒人ボーイが盆の上のパンを指さしてじつと私をみつめると出てゆきました。気になるままにパンをとりあげてよくみますと、フランスパンの腹が破ったようにみえます。パンを開きますと小さく折畳んだ紙片が、まぎれもない紅の筆跡です。

○

緑サン

無事？ 私の部屋狭く暗い独房、パジャマを着ています。黒人ボーイが食事運びます私 無事です 元気で生きましょう。

紅

○

鉛筆の走り字が涙でボーと霞みます。

「紅！」

思わず紙片を握りしめて泣きました。

○

返事をしようと思いましたが、書くものがありません。黒人ボーイに手真似で頼みますと、昼食のとき短い三程の鉛筆をパンの中に忍ばせてくれました。

紅の手紙の余白を裂いて、返事をかきました。

○

「紅 無事うれしい 緑無事 私達脱走囚人と誤解されている。日本に着くまで勇気と健康を 緑」

○

航路は南へゆくに従って暑さを増し、船室は蒸釜のようになりました。船室に氷柱を立てたり、ビタミン注射を打ったり、果ては夕方、陽が落ちると甲板を散歩させたりして暑さに倒れないようにしてくれましたが所詮、とらわれ人の生活でありますから、もう少しづづいたら本当に倒れたでしょう。

甲板散歩のときは、あたりが暗くなってから例のパジャマ姿で腰を鎖で縛られ、その先端を黒人ボーイ——ボビー——が自分の腰にくくりつけて、いわば縄つきの散歩でした。ボビーは絶えず私の挙動に目を配り、海中に身投げせぬかと気づかう様子でした。

ある夜、甲板で私と同じような姿の娘とす

れ違いました。

「紅ちゃん」

思わず声をかけますと、相手は立止まりましたが、よくみると全然違う人です。でも、私と同じような姿で腰を繋がれてこの船にのせられているのは何者でしょう。疑問に思う暇もなく、ボビイは私を引きたてて無理矢理



に元の船室に押しこめました。この事で船長から叱られるもののようにボビイはあわてていました。

私と紅の外に、まだ同様の女がとじこめられているとしたら、この船は一体何でしょうか？ 本当に日本に戻るのでしょうか？ この疑問を解く終点の港に漸く入港したので

す。

一日以上も碇泊した後、夜になって私達は下船させられました。

○ 服装は例のパジャマ姿ですが、例の老人の指揮で数人の異国人に取抑えられて猿轡を喰まされました。これまで遊戯で猿轡は度々喰まされました、クラブには私の専用の猿轡もある位ですが、こうして実際に異国人の荒くれ者から情容謝なく喰まされますと、恐ろしさに涙がこぼれました。両手首を後に揃えて柔い革紐で縛られました。両足首も揃えて縛られました。そして大きな袋の中に入れられました。

○ 袋のまま担がれてタラップを下りたこと、馬車に積まれたこと、私の側にも同じように積まれているらしい人のいること、馬車が動き出したこと、石畳道をガラガラ揺られていったこと等、真暗な袋の中で感じました。

それから数日間は、暑苦しい船室に比べて御殿のような暮しでした。美しいホテルのような洋室に冷房も効いており、入浴、美容――白人の老女が全身マッサージ、美髪、御化粧をしてくれました。

私の髪は、短かく刈ってセシルカットにされ、香りのよい香料が四肢に塗りつけられました。組し、常に監視つきで紅の消息をたし



かめる術もありませんでしたが、浴場で私の前に入浴させられている若い女、化粧室で私と入れ違いに入ってきた人等、あきらかに数人乃至十数人の若い女が搬入され、ここで御化粧されているようです。

何のための化粧？

此処はどこ？

雑誌でよんだアラビア半島に今なお、残っているという白色奴隷市場でしょうか？私達は、競売にされ高値に売られるために化粧されているのでしょうか？

ずっと後でわかったことですが、最初、私達が捕えられたのは、積荷の一人の女性が投身したので停船して探していたときでした。投身した不幸な女性はずにみつかりませんでした。したが、その代り私と紅と二人の獲物を得て船長は大喜びだったそうです。

○ この恐しい船で運ばれてきた若い女は全部で十三人、一括してサルタン・アグネムの後宮に納められ、代償として後宮の妃六人、白色女奴隷十二人、駱駝十頭、牛二十頭が驚鼻の人さらに授けられました。

○ 献納、払下の儀式は、まことにお祭騒ぎで私達十三人の女は美しく化粧し、アラビア風の衣裳をつけ、豪華な輿に一人づつのせられ

ました。逃亡を企てないように足は絹の紐で輿に縛ってあります。女というものは奇妙なもので、みすみす後宮に納められる途中にあつても、美しく粧うことに喜びを感じるものでしょうか。

これに反して、払下げられる妃以下の女奴隷達は泣きながら王室奴隷の銅の腕輪を外され、代りに民間奴隷の鉄の腕輪をはめられました。

○ 後宮での私達は、近代施設の整った房をあてがわれ、男女二人宛、計四人の黒人奴隷が身のまわり一切をしてくれます。勿論、後宮の石壁の外に出ることは勿論、他の房にゆくことも衛兵の監視があつて許されません。二百坪程の一面が自分の天地であります。逃亡を企てるにも術がなく、暫く運命に従いました。

サルタンの祖神で人間の憤怒を象徴したアガンダ・ゼンマの像の前には、神聖な火と神聖な犠牲を絶やさぬことになっています。神聖な火はガンダ人の奴隷が奉仕して焚きつけます。神聖な犠牲は後宮の女の奉仕でありまして、像の前の犠牲架に二時間交替で緊縛されます。一日二十四時間を三人で奉仕するのでありますから一人で昼二回、夜二回のつとめであります。

犠牲は独特の衣裳で飾られます。髪には宝

石入りの金環を巻き、首には金の首飾り、耳には金色の耳環を吊るため私達は全部耳に穴をあけられました。その手術の痛かったこと……。

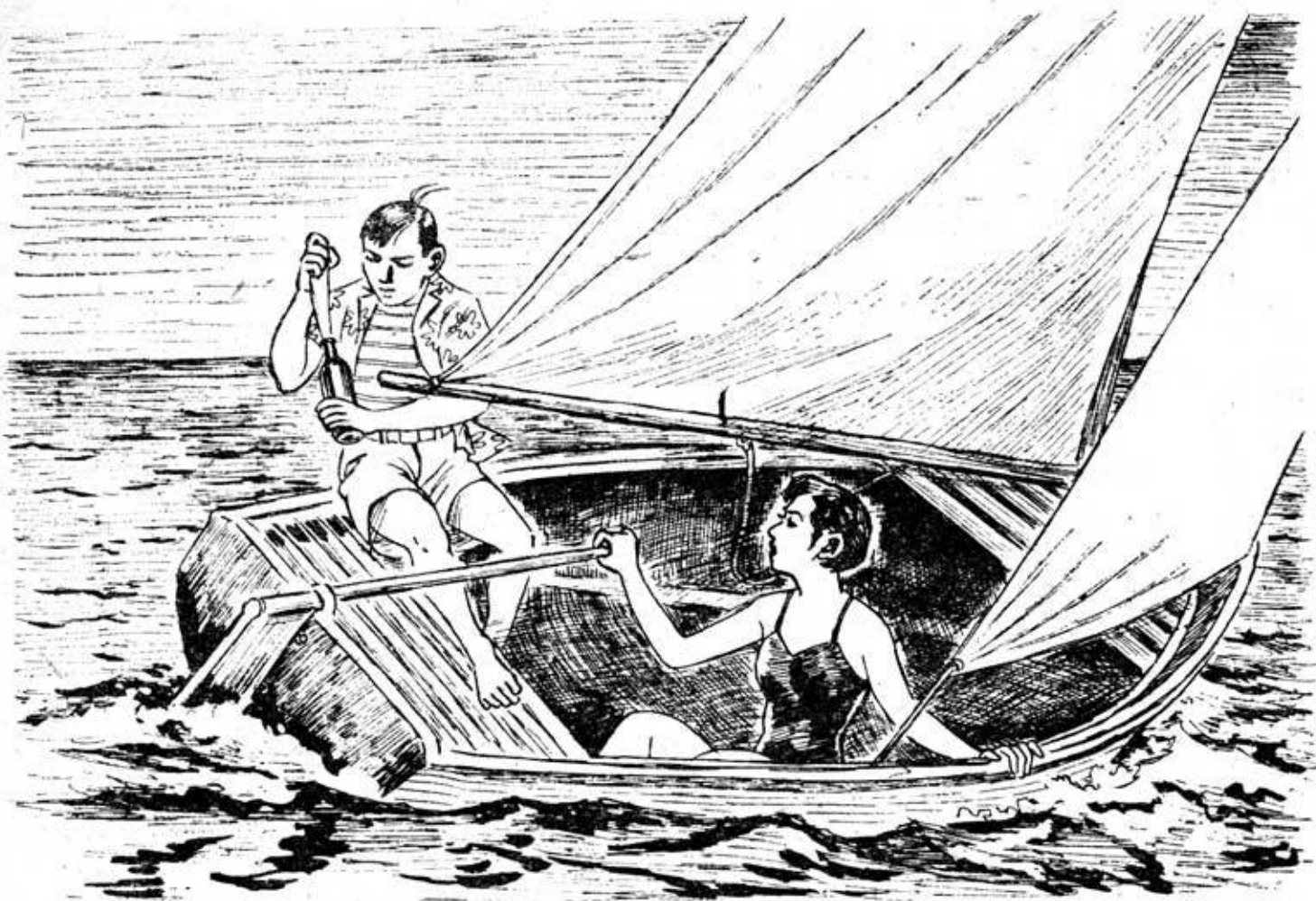
金色の乳当、腰には金色のブリーフ、足に穿くサンダル靴も金色です。手首にも金環を嵌められます。

○ 御化粧だけは不思議に近代的洋風の御化粧で、白人の年とった女がしてくれました。仕度がととのいますと、金色の輿にのり白い沙のベールを被り、黒人奴隷に担がれて神前に据られるのであります。

司祭の老人が呪文を唱え、そのときの神聖な火の炎の形によって犠牲をどのような形に縛るか判定するのであります。

○ 緊縛架は鉄製の格子で、これに私達はあるいは大の字姿に、あるいは一文字に、あるいはY字に、X字に、およそ想像し得るあらゆる姿勢にハリツケにされるのであります。緊縛具は、なめし革で、その上に形式的に鉄鎖がまきつけられます。一度緊縛されますと、二時間は絶対に解放してもらえませんが、もしその間、生理的現象でも催さうものなら死の苦しみであります。

万一、そのような失敗がありますと、清めの瀆罪のために神聖の火でそのまま焚殺され



る掟であります。私達は奉仕日、前日から飲み物を断つて準備します。

定め時間がきて解放する前に司祭は、哀れな犠牲が失敗していないかどうか金色のブリーフに触れて検査するのであります。

○ 既に幾人幾十人の哀れな犠牲者を焚殺した緊縛架は屍臭がこもっており、私達の肌につけた香料、焚きしめる香といりまじって、何ともいえない辛い業であります。月のものの時は勿論、除外されますので、それを言いたてて少しでも逃れようと試みる人もありますが、若し故意にいつわたことがわかれると、ひどい仕置きを受けて下等奴隷におとされます。その仕置は説明するにしのびません。

○ サルタン・アグネムは百二十八人の妃をもった大王でしたが、寄る年波で最早

夜の妃は不要であります。その代りに奇妙な趣味を増長させまして、アガンダ・ゼンマの犠牲を眺めて愉しむようになりました、サルタンは頻繁にアガンダ・ゼンマに詣でるのみか、像の前で長時間観賞？ するようになって、司祭もハリキって色々突飛な姿勢を考案するようになりました。奉仕のない日は後宮の中で自由に暮しますが、美容体操のようなことを強制的にさせられます。

その日は、私と紅とフランス人のジュリアの三人がつとめる日でありました。一番のつとめを無事すまして正午ごろに二番のつとめに神前に出ますと、ジュリアは、まだ緊縛架につながれており泣いております。手足を思切り左右に開いた大の字姿で、両手首、二の腕、肩、腰、太股、足首を後の鉄棚にしっかりと縛りつけられた真白い肢体は、金色の飾り物に映えて眩しいようです。

大王サルタンが、枯木のような身体を椅子によせて、それを眺めています。

無気味な沈黙、聞えるのはジュリアの泣声ばかり。

私の乗った輿は、サルタンの椅子の脇に据えられたまま、担い手の黒人達もふるえています。

「ジュリア」思わず叫ぶと、私も泣き出ししました。神前で物を言うことは禁ぜられているのも忘れて、



王がムンズと腕をのぼして、私の二の腕をとらえました。年はとっても強い力!

王が身振りをすると、黒人奴隷が大急ぎで立去りましたが、やがてかかえて来たのは金色の鎖でありました。

私の両手は後にねじあげられました。手首にギリギリと鎖を巻きつけられます。手首を縛りおわると、二の腕から乳当にかけて金色の鎖は肌に喰いこみます。そうしてサルタンの椅子の下に座らされて、これから始まる恐ろしい仕置を見せつけられるのです。

サルタンは震えている私の姿に興味を感じたのか、さらに命じて紅をもこの場に引出させました。紅が私と同じ姿に縛られるのは暇がかかりませんでした。縛られるハズミに乳当の止金が外れて、金色の乳当が鎖の下でズレています。紅は、はじめて祭壇に気がつく、縛られたまま卒倒しました。

不定期貨物船ジュリア号の驚鼻水夫長のロツカーの扉の内側に、紅と緑の写真に貼りつけられて、彼の航海中の無聊をなぐさめることとしよう。

— ○ —

「あなた、なあに、それ」

「うむ、この壘の中にかか入っている」

「いや、ちよっとまってくれ。君、ちよっと舵をもっていてくれ」

「……そろそろ戻りましょうか」

「そうだね、戻ろう。ヨットの上面では壘の蓋があかない。堅く封じてある」

「何か危険なものじゃないの。あなた、捨てたら?」

「いや、おまち。たしかにこれは何か紙を封じて流したものだ」

「海賊島の宝の地図? フフフン、あなたは空想家ね」

「僕の空想はね、必ず実現するのさ。例えば白百合のような女性を夢みているとユリコと結婚できたらう」

「あなた、本当に私のこと空想していたの?」

「そうさ、僕は君を」

「あら、あなた、あぶない」

「バカヤロ、キヲツケロ!」

「……」

「いやな奴ね、でも危くぶつかるところだったわね。さ、早くかえりましょう」

「舵をかわろう。君はこの壘をもっていておくれ」

○

「危いわ、壘を割ったりして。あなただけがをしなかった?」

「大丈夫さ。ほら、矢張り紙が入っている。わざと封じたものさ……」

「あなた、何の紙?」

「うむ」

「どうしたの。なあに?」

「うむ、これはユリコには見せられない」

「まあ、どうして。意地悪」

「そういうわけじゃないがね。ユリコのような、うぶな花嫁には毒だからね」

「あら、私、そんなに子供じゃなくてよ。猛君が純情可憐が好きだというから、そうしているだけよ。本当はユリツペ、すごいんだから」

「ハハハ、じゃあ、まあ、そうしておこう。だけどね、この写真はここでは見せない。別荘に帰ってから。それまでおあづけ」

「まあ、意地悪ね。じゃあ、見たくないわ。写真なんか」

「そうおこるんじゃないよ。ああ、腹がへった」

「知らない」

○

「さあ、あなた、よく冷えてるわよ」

「うむ、君も」

「一杯だけよ」

「乾杯。ああうまい」

「おいしそうね。そんなにおいしい?」

「うむ、うまいな。これは?」

「婆やの手料理よ。上手ね」

「うむ、ちよいとしたものだね。台所にいる」

のかい」

「ううん、もう帰ったわ。私達のお夕食が始まるとさっさと帰るのよ。あのね、暑いんですって。フフフ」

「気がきいていいじゃないか」

「そんなに気をまわされると、こっちが困るわ」

「そうでもないさ。結構だよ。君、ちよっと手をだして御覧」

「なあに」

「それ」

「あら、昼間の写真ね。私、見ない」

「まだ、おこっているのかい。矢張り海賊の宝の写真だ。ユリコとふたりで探検にゆこう」

「うそ、あんなことをいって担ぐんでしよう」

「本当だよ。この写真は僕等に秘密の宝を発見させてくれるものだよ」

「なんだか、あやしいわね」

「……」

「あら、昼間の写真ね。私、見ない」

「まだ、おこっているのかい。矢張り海賊の宝の写真だ。ユリコとふたりで探検にゆこう」

「うそ、あんなことをいって担ぐんでしよう」

「本当だよ。この写真は僕等に秘密の宝を発見させてくれたんだよ」

「なんだか、あやしいわね」

「……」

○

「あなた、まあ、これなあに？」

「海賊にとらえられた娘達さ」

「かわいそうに縛られているわ」

「そうだね」

「こんなに鎖でいくつも縛られたら痛いでしょうね。あなた、胸のところは鎖が肌に喰いこんでいるわ」

「足を縛った鎖には錠がついているね」

「ひどいのね。この顔についているのがあの猿轡とゆうもののなの？」

「よく知っているね」

「これを嵌められると全然、声が出せないの」

「うむ、そうらしい」

「どうしてでしょう」

「そういうしかけになっているんだろう」

「綺麗な人ね。猿轡を嵌められてからドレスをぬがされたのかしら？」

「どうして？」

「だって、こんなにブラジャーとコルセットとパンティだけの裸じやありませんか。ストッキングははいているけど、すんなりと形のいい足ね」

「いや、足の形はユリコさ」

「知らない。人をからかって」

「からかってなんかないよ。こっちの写真はどうだね」

「両手をひろげて縛られて……この人のはスリーインワンね。ウエストがしまって美しい身体ね。どうして目隠しされているのでしょうか」

「さあね、ユリコどう思う」

「わからないわ。この人も鎖に錠をかけてあるのね。かわいそうね」

「足もとに、ハイモールの爪先に落ちているのが錠の鍵だよ」

「そうね、でもどうしてこんな美しい若い女の人が鎖でひどく縛られているんでしょうね」

「悪者にとらえられたのかしら？」

「そういうことも考えられるね。例えば、身代金を強請するために誘拐した女性の可哀そうな姿を写真にとって送ることもあるうね。あるいはギャング映画のスナツプ写真かも知れない」

「こんな女優さん、誰かしら。こちらは目隠し、こちらは猿轡で、顔がよくわからないわね。でも、どちらも顔も姿も綺麗な人ね」

「そうかなあ。ユリコの方がずっといいぜ」

「あら、そうかしら……でも、この人達は暴力で縛られたのではなくて、おとなしく言いなりになって縛られたのね」

「どうしてそんなことがいえる？」

「ごらんさない。髪がちよつとも乱れてないでしょう。ブラジャーでもストッキングでもピッチリと肌について皺一つないでしょう」

「そうだね。抵抗したら、ブラジャーの吊紐がちぎれたり、ストッキングが破けたりするだろうね。これは写真撮影のためにポーズをつけたものだね。……君は、どちらのポーズ



「がいい？」

「どちらって？この後手に胸まで縛られているのと、両手を拡げて縛られているのと？」

「ユリコ、どちらがいい？」

「私いやだわ。それにこんな下着姿で恥しいわ」

「若し、僕がユリコに要求したら？」

「まあ、猛、わたしを縛るといふの？私、何も悪いことしないわよ」

「いや、悪いことなんかないさ。要するにグラマースタイルのポーズの一種さ。縛られた手首から肩までの美しい線、こちらの足首を揃えて縛った足の線も美しいし、こちらのすべてをあきらめたような可憐な姿もいいじゃないか」

「それじゃ、男の人達は女を縛ってたのしむの？」

「そういうグループが、あちらこちらにあるらしい」

「まあ、猛、あなたもそのグループにはいつているの？」

「ノーノー、とんでもない。でもね、時々映画でみるだろう。……お姫様が悪者に縛られたり、奴隷に売られて繋がれたりしている姿をみていると、様々の美しい線がでて本当に女の形のよさがあらわれるよ。男にはサジスチックなものがあり、女はまたそれをたのしんで受入れるのじやないかな。ユリコはそう

「この画面のお姫様に自分をなぞらえて考えたことないかね」

「ないわ。でもね、ずっと以前、学生時代にね、仲良しグループと遊んでいるときに、ユ



「リコお友達に拷問にかけられたことあるわ」

「拷問？」

「本当じゃないのよ、真似事よ。ユリコは海水着姿で後手に縛られてね、お友達が太勢で竹の鞭でユリコを打つ真似をするの。いつまでも縛ったままで解いてくれないから、しまいにユリコ本当に泣いたわ。」

「いくつのとき？」

「十八だったかしら。みんながわざと、早く白状しろとか、こんな可愛らしい顔をしていて強情だとか、いろ／＼言いながら鞭で打つ真似をするのよ」

「何を白状するの？」

「白状することなんか何もないの。ただ、そうゆう遊びよ」

「楽しかった？」

「知らない！」

「今夜、それをして遊ばないか」

「……」

「ねえ、ちよっとだけ、いやかい？」

「……海水着はまだ乾いていないわ」

「海水着よりも、こっちの方がいいさ」

「まあこんな姿？」

「うむ、ブラジャー、コルセット、パンティストッキング、ハイヒール、これだけを身体につけて、あとはいらない」

「まあ、あなたは暴君ね。いやだといったら？」

「力づくさ」

「まあ、ひどい……あなた戸締りして、私お仕度するわ」

「おう、ブラボオ！」

○

「早くおいで」

「窓、全部締めてある？」

「大丈夫さ、早くおいで」

「あっちを向いていて」

「こうかい」

「ええ、いいわ」

「うむ、素敵だ」

「恥かしいわ、こんな姿」

「両手を後へまわして……そう、じっとしておいで……」

「あつ、なあに、何を嵌めたの？」

「あててごらん」

「冷い金属の輪ね、手錠みたい」

「手錠だよ」

「まあ、あなた。いつこんなものを用意してらしたの？」

「ふふふ、今度は目隠しをするよ」

「あつ、あなた、こわい」

「何でもないさ。そうして黒い布で目隠しすると顔が白く冴えるね。美しい唇をしているね」

「知らない、意地悪。早く外して」

「まだこれからさ。どうだい、これ」

「あ、つめたい！あなた鎖じゃないの。いつの間にかそんなものまで用意して、ひどい方ねもういやよ」

「もうとまらないよ、どう、こうして痛い？」

「ううん、痛くない」

「鎖で縛られるのは好い気持だろう」

「知らない」

「さ、歩いて」

「だって目隠されていて、ハイヒールをはいているんですもの。こわくて歩けないわ」

「黙って歩くのだ。お前は革命軍に捕えられた王女さ、刑場に曳かれてゆく姿だ。城壁の石畳の上を引立てられてゆくとさ。さ、歩け」

「……」

「ここは刑場さ、こちらを向いて、王女は城壁の鉄環に鎖でいましめられる。狂った群衆が、この美しい可憐なけにえを舌なめずりして、とりまいてる」

「……」

「ああ、素晴らしいな」

「あなた、ロマンチストね」

「うむ」

「ユリコの姿どう？」

「可憐そのものさ」

「あの写真とくらべてどう？」

「もちろん、ユリコさ。絶対だ」

「そう、嬉しいわ」

「もう解いてあげようか？」



「いいのよ、もつとこのままでおいても」  
「解こうか？」

「あなたがおすきなだけ、こうしていいのよ」

「……」

「……」

「ユリコ、きみは僕と趣味が同じだね。万才！」

「そんなことないわ、あなたが要求するからよ。そんなことゆうなら早く解いて」

「いや解かない。僕と同趣味だと告白し給え、そうすれば解いてあげる」

「いや、そんなこと言えない」

「それじゃ、今夜中、解かない」

「早く解いて、ユリコ泣くわ」

「泣いてごらん。縛られて泣いているところは一段と見物だろうよ。」

「ひどい！」

「痛くないかい」

「ううん、でも鎖のあとがついたわ。ほら、あとが消えるまで海岸へゆけないわ」

「そんなものすぐ消えるさ」

「でも、こんな手錠や鎖、東京を出発するときに用意していたの？」

「そうさ。チャンスをねらっていたのさ」

「あの壘をひろったのも予定の行動？」

「そうじゃない、あれは全くの偶然さ。でもあの写真を発見したときはギョツとしたよ。」

「それじゃ、この別荘へゆこうと誘ったとき私を縛ることを考えていたの？」

「そうだよ」

「この鎖や手錠は、どこでお買いになったの？」

「麻雀の賞品さ」

「こんなものを賞品にするの」

「七色パンティやいろいろの物があつたよ。この手錠や錠は西銀座の洋品店で売っているそうさ。この外に鞭だの狼轡だの遊びの道具が色々あるそうさ」

「あなた、そんなものも持っているの？」

「いや、これだけさ」

「本当？」

「あれば、さつきつかうさ」

「……ねえ」

「え？」

「あの写真をもとの海へ流して。ユリコあなたのために何でもするから、他の女の人の写真なんかいやよ」

「よし、じゃあ、やぶろう」

「いけない破いちや。もとのようにして流して」

「じゃあ、今夜のビールの壘につめようか」

「これから流しにゆかない？」

「そうだね。じゃあ、これにつめよう」

「私、お仕度しますからね」

「そのままでいいじゃないか。夜だもの」

「馬鹿ね、いくら夜だってこんな姿で歩けま

すか。猛のお馬鹿さん」

○

「流れないわね」

「いや、少しづつ流れているさ」

「静かな海ね」

「ごらん、あの星を」

「綺麗ね、いったい何万あるのでしょうか」

「天の河はみんな星だからね」

「神秘的ね」

「ごらん、壘が流れてゆくよ」

「あら流れてゆくわね。かわいそうな、お二人さん。今度はどこへ流れつくでしょう。」

「きつとまた、僕達みたいな若夫婦にひろわれるさ。」

「その人達も、私達みたいにして遊ぶかしら？」

「そうだよ。これは近代人の趣味だもの」

「あんなこといって、ズルイ、猛」

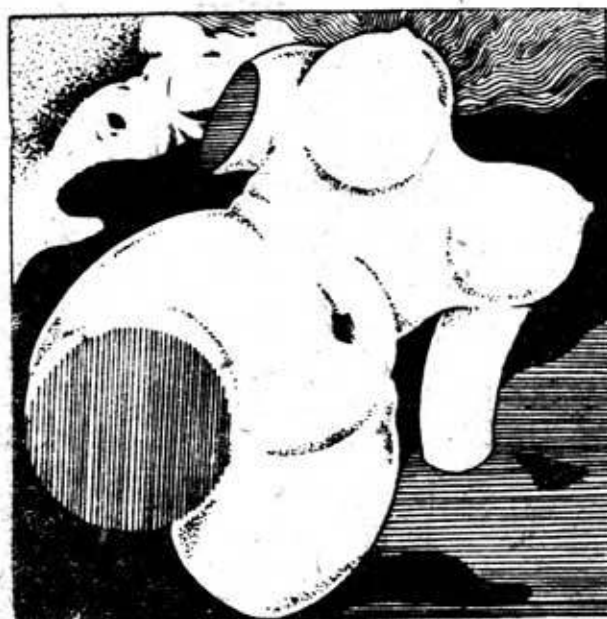
「かえろうか？」

「ええ、かわいそうなお二人さん。今日はありがと。さようなら。」

○

幸福な二人に星はまたたき、壘は夜の海に消えて行ったことでしょう。それを現実裏に裏付ける様に、私の目の届く限りには、流したビール壘は見えなくなつて居りました。

では編集長様、またお便りします。さようなら  
(おしまい)



# お 臍 漫 録

—私の切り抜きから—

須 藤 律 夫

涼み台臍を出してるコップ酒——。

夏ともなると、海水浴は言わずもがな、兎角お臍にお目にかかる機会が非常に多い。そんな時、何時も私は凸臍術の事など想い泛べ乍ら仔細に観察を続けるのであるが、今日は私のスクラップの中から、お臍にまつわる幾つかの話を抄録して見たいと思う。

## ◎お臍の穴も商品

踊り子は体を大切にする。最大限に肉体を露出するだけに体のすみずみまでが商品である。『この頃レモンが安くなつて大助いだわ』と言って喜ぶ踊り子もいる。半分に切ったレモンで体をぬぐうのである。そして臍

の穴まで丁寧に掃除をする。黒いゴマがあるなんてみっともないからだ。飲みすぎ、食いすぎ、情熱を燃やしすぎる事、これもいけない。それでいて百%のお色気を出さなければいけないという。(毎夕新聞)

## ◎お臍の造型

人間でお臍のないものはない。臍はお腹の真中を示すボタンであり、人間の裏表をきめる標識でもある。医者にとって臍は内臓の位置をきめる、これは大切な目標である。

産婦人科では妊娠した子宮の大きさを臍を中心にして計算する。例えば妊娠五カ月は臍骨縫合と臍のなかほどの大きさと、妊娠六

カ月は臍の高さまでと言うように、臍に手を当てて撫でるだけで便利に妊娠月を計算する事が出来る。けれど臍は誰でも同じ順位にある訳ではなく、個人によっては随分異なる場合がある。臍骨の一部からの長さを計って妊娠月を割出す方法もある。

婦人科の開腹術は子宮を目標にするため、大抵の場合、先ず臍と臍骨を結ぶ線をザックリと切開する場合が多い。なくもがなの臍だが、これは或る女の子で、強度のヘルニヤで困った親が治療を頼みに来た。そこで手術をして腸をつめてヘルニヤを治したのであるがうまく行った手術の傷跡もすっかり癒えたと



その両親はあわてて仕舞った。娘のお臍も無くなってしまったからである。『嫁に行つて臍が無いとなつては困る』と両親に泣きつかれて実に綺麗になつてのつべりとした娘のお腹に再びメスを当てて、お臍を作り上げた事があつた。(週刊タイムス)

### ◎臍の緒神社

岐阜県、岐阜公園内に「母の塔」(又の名を臍の緒の塔)が出来上つた。何処の家でも始末に困る臍の緒を納めて、母の恩を知ろうと言う狙いで、『全国に臍の緒神社を普及し度い』と言う、ユーモア・クラブ本部の長崎抜天氏の着想で、岐阜に第一号をつくつたもの。但し神社と言うと都市公園法に触れるので、高さ八尺のセメント製母子像を製作し、台座に『母は強し』と一筆揮つた。そして像の前にセメント製の天地根元造りの模型を置いて、神社のおもかげを残したあたりは、流石はヘソ曲りの面々と専らの評判。(週刊漫画)

### ◎お臍はワイセツか

アトランティック市には現在五百余りのキヤバレーがあるが、そのキヤバレーが今廃業か転向かでもめている。原因と言うのが同市でシヨードンサーのナンバーワンと言われたミッチーボールマンが、ワイセツだと言う事で捕まつた事に端を発している。『お臍を出

す事が何がワイセツだ』と言うのが業者側の言分だが、警察側は『絶対駄目』とテコでも動きそうにない。然しキヤバレーにシヨードンが無くなつたらお客が来る筈がないと言うのでいっそ廃業しようかと言うのである。それを聞いて慌てたのが市当局で、財源の半分をこの種業者の税金でまかなつてゐるだけに、今盛んに警察側に猛運動中とか、扱、どうなる事でしよう。(日本観光新聞)

### ◎小金治お臍の厄日

バタヤ部落を扱つた喜劇もの、松竹の『オンボロ人生』では、バタヤ桂小金治とその女房清川虹子の間に部落きつての乞食グラマー泉京子が介在して、珍キテレツな三角関係が演じられる。(中略)怒りに怒つた清川が子供と一緒に、小金治のお臍の上に「浮気封じのお灸」をすえようと言うのだ。まず、暴れ廻る小金治を清川が怪力で押え込み、何時ものデンと心得ている二木てるみが、いそいそと山のようなもぐさを運んで来る。そこで真青になつた小金治が『熱いよう、お母ちゃんもうしませんよう』とやると、かみなりのような声で清川が『だめだめ、いくらやっても聞きわけがないんだから……』で、八ツ手のような手にモグサが握られ、小金治のお臍の上に三カ所うず高く、恰でピラミッド型に盛り上げる。ところで、このお灸は、本番の

時は本物を使わなければ効果がないとあつて、この日のもぐさは総て本物。だから火がつけられるや、小金治の慌てた事、慌てた事。終つてやれやれと言つた表情の小金治、未だ熱いのか、お臍のあたりを撫でながら『昨日は天国だったが、今日は仏滅とサンリオンボウが重なつたような日だよ。全く役者になんぞなるもんじやない』(娯楽よみうり)

### ◎バルドオのお臍

『素直な悪女』で、シートでちよつとかくしただけで抱きあつてゐるベッド・シーンがあつたのだが、流石のお色気の国フランスでさえも気がとがめたのか、カットされて仕舞つた。このシーンのスチールを見ると、バルドオのお臍は普通ではない。出臍で写つてゐる不思議な事に彼女の水着姿を見てもちやんとしてゐて、出臍にお目にかつたのは今迄にこれ一枚だけ。特別サービスのつもりで出したのではないだろうから多分、実物は飛び出しているのではなからうか。誰かきつとバルドオの裸が売物にされたために苦労している人物がいるに違いない。(内外タイムス、筆者註、これと同じ意見は他の記事にも見られた)

### ◎浅草寺に臍の緒神社

臍と、お宮と、流行歌、と言うと三題噺めくが、徳川夢声氏を会長とする『ゆう、もあく

らぶ』が世相を明るくする運動の一つとして『臍の緒神社』の建立を企画し、近くそのレコードがマーキュリーから発売される事になった。夏目三郎と、浅草紅香が歌っているが先ず歌詞から紹介しよう。

へ出臍、福臍、笑い臍

横向き、上向き、臍曲り

例え器量が悪くても

臍と名がつきやみな可愛い(囃子)

ソレソレ臍には先祖の血が通う

その緒祭ってアハハのハ アハハのハ

この歌の出来たいきさつはこうだ。ゆう、

もあくらぶ(中央区銀座西六ノ五)は各界名士、一般人二万名の会員を擁し、全国各地で世相を明るくする運動をしているが、この度その運動の一環として『臍の緒神社』の建立を企画した。『臍の緒神社』と言うのは、家庭に保存してある「臍の緒」を納め、丁寧に祭りし、善意明朗生活の守り神としようと言うもの。完成の晩には、臍の緒格納筐を完成し、産婦人科医、助産婦を通じて出産家庭に錦の袋を配付、臍の緒を納めて戴く。猶各界名士の中、臍の緒を失った人からは、臍に墨を塗り、和紙に写した「へそ拓」をとり奉納して貰う事になる。(中略)ゆう、もあくらぶ常任理事佐藤信太郎氏の話。

『へそはおふくろと最後までつながっていた

ところだし、腹のアクセサリですからね。これを忘れちゃいけませんよ。百年位経って後世の歴史学者などが「ははあ、昭和三十三年の日本の総理大臣のへそはこういうのだったのか」なんてね、歴史の対象になったりする。ちよつと愉快じゃありませんか。(週刊シンニチ、筆者註、臍の緒神社は浅草寺の境内を何回か探したが見当らなかった。レコードはその折買い求めたが、その後発禁になった由である。)

### ◎お臍はきれいに

男でも女でも出臍でない限り必ずお臍にゴミがある。私は子供のころよくお臍のゴミをとったものである。黒いゴマのようなゴミを手のひらにのせてころがしたり、吹きとばして遊ぶのが楽しかった。冬のお臍のゴミはからからに乾いていて、匂いをかいでも別にくさくはないが、然し夏のゴミは汗や毎日何回となくかぶるシャワーの為に、いつもねとねと軟かくなつて匂う。その匂いはチーズのゴーゴンゾラを連想させるから、かきなれば人によって好きになれる匂いだ。この頃は年をとってだんだん肥り、下腹が出て来たのでお臍の穴が非常に深くなり、ゴミをとるのに苦労する。昔のように指で簡単にとれないのでマツチの棒を利用するが、これは折れる事があるので危い。そこで耳鼻科で使う綿棒

に綿を巻きつけて掻き出す事にしている。日本人がきれいい好きで、よく風呂に入る事は世界的に有名だが、風呂に何回も入り、石鹸で体をごしごし洗うくせに、お臍の穴の中を掃除する人を見かけた事がない。その証拠に私は時々トルコ温泉でミス・トルコに、『お臍のゴミをとってくれ』と言うと、

『お臍のゴミをとるとお腹が痛くなりますから駄目です』

と断られてしまう。そんな馬鹿な事があるかと私は言うが、本当にお腹が痛くなるものと彼女達は信じている。

大人になって何十年振りにゴミをとるとゴミの下皮が白っぽく薄い皮になっていて、無理にはがすと赤くただれ、傷口から風邪をひいたり、バイキンが入ったり、失敗をする結果になるので『お臍のゴミとるべからず』と言う金言が出来たのだろう。こんな事を考えるときれいい好きの日本人が、どうしてお臍にゴミをためておくのか不思議でならない。(文芸春秋四月号)

船酔もゴマもはぎとる臍の梅――

(この項終り)



月明り

# ねずみ小僧

海野 繁 朗  
木暮 雪 湖 画

禎の湯船の香が、プンと匂う。

「笑ったりしちや、嫌よ……」

お鈴は、湯気を透して、お雪の白い顔をチラと見流して云った。

「わたし、男って嫌い」

今迄、男の事など口にもしない深窓のお嬢さんだとばかり思っていたお鈴が、突然、こんな事を云い出したのでおかしくなった。

「ほら、笑った、嫌よ、嫌……」

お鈴は甘える様に、真白い体をくねらせた。湯気で、外からは見えぬが小さな湯飛沫が上った。

「何の話……それ？」

それからお鈴がぼつりぼつり語ったのは、お鈴の父が何人も妾を

囲っていて、三人も一緒に家へ呼び寄せるといふ話であった。

「……まるで獣よ」

お鈴は吐き捨てる様に云って

「だから、わたしは、男が嫌いな<sup>けが</sup>の穢<sup>けが</sup>らわしいわ」

「……そうね」

お雪は、自分も三十余も年上の夫に侍<sup>かしづ</sup>かされた事を思い出していた。

その記憶は——数年前迄は江戸南北奉行所五百余人の岡っ引の中でも、敏腕の聞え高い指折りの御用聞、浅草並木町の仁兵衛を父に持っていたお雪だった。その仁兵衛が、大病を患った時、やれ朝鮮人夢の、やれ何の薬のと、金目を厭わず面倒をみてくれたのが、夫の島田屋清蔵だった。勿論、お雪目当ての下心もあったのだが、ボツクリ女房が死んでからは、之幸いと後妻の口を持掛けて、遂にお

雪の清純な体をままと、脂ぎった年寄りの慰みものにして仕舞った。病父の為とは言え、泣いて嫁いだお雪にとって、想い出すだけでも虫ずの走る幾春秋であった。

「……お鈴ちゃん。お鈴ちゃんの云うとおりよ」

お雪は、優しくお鈴の手をとった。

「お姉さん。わたし……」

お鈴は、小さく口走るとお雪の手を強く握りしめた。

「お鈴ちゃん……」

お雪も、意味なく相手の名を口走っていた。

突然、表の路に、あわただしい人の足音と、捕方の吹く呼笛が響いて来た。

（また、今夜もお父さんは……）

ふっと、お雪は負けん気の病氣上りの仁兵衛の姿を思い浮べた。

## 二

「お嬢様、大変で御座います。賊がお屋敷へ逃げ込んだそうで御座います……」

湯殿の外から、慌だしい女中の声に、二人はハッとして顔を見合せ腰を浮かせた。

パンヤン！

と湯飛沫を立てて、すのこに上ると、体の湯玉を拭くのも、もどかしく二人は長襦袢を肩にかけた。「賊って、何なの？」

「鼠小僧で御座いますよ」

「まあ！」

お鈴は蕾の様な唇をあけた――。

鼠小僧次郎吉。

文政から天保へかけて「義賊」と呼ばれ、大名屋敷を荒すこと前後百三十余度、金高にして六千両あまりを盗み奪った此の男は、江

戸市民から英雄的崇拜の的になっていた。

当時は「化政度」と云われた道德の頹廢期で、武家や富豪はその金力と権力に任せて奢侈遊蕩に耽り、一方貧しい庶民はその日の糊口にも窮するという有様であった。――そういう時に、風の如く現われて権力者たる武家屋敷を襲い、神出鬼没にこれらを翻弄したのだから一般庶民達が理非の考えもなく、次郎吉を英雄視したのは無理のないことであった。然し、その崇拜は次第に度を越して

「鼠小僧は俺たちの味方だ」

「次郎吉様は貧乏人の守り神だ」

と、そういう声が町から町へ伝わった。事実、次郎吉は盗んだ金の幾許かを庶民に恵んで歩いた。

やがて、それは御用聞仲間が次郎吉を捕えようとしているのを知ると、力を合せてその邪魔をする様にさえた。

御用聞達にして見れば、鼠小僧一人を捕える事ばかりが役目ではない。否、もっと重大な急を要する事件が、次から次と出てくる。

そして、それは時として庶民の力を借りなくては、解決出来ない事が多い。……とすれば、一般庶民達の反感を買う事は損である。

御用聞達は、この打算から、手を控え始め、次郎吉に関する限りその追縛はお座なりな、形ばかりのものになっていった。

中には、公然と次郎吉に好意ある言動をとる岡っ引もいた。

こうした情勢の中で只一人、断乎、鼠小僧捕縛にすべてを投出して、とっ組んだ岡っ引がいた。

お雪の父、並木の仁兵衛である。

「並木の仁兵衛はお上から十手捕縄をあずかる御用聞だ。盗ッ人や強盗を捉えるのが役目だ。鼠小僧はその盗ッ人じゃねえか。俺あ、たった独りでもきつと、お縄にして見せる」

と云って捜査に掛った。

他の岡ッ引達が、こそ泥や、すりなどを挙げて、一両、二両の報



償金に得々としている時、仁兵衛は、そんなものは歯牙にもかけず自分の息のかかった者、二三十人を集めて、毎夜、大名屋敷を警戒したが、悪盛んなる時は天に勝ち、その都度出し抜かれ、その神出鬼没傍若無人振りに、仁兵衛はいたずらに同業仲間の嘲笑を買っただけだった。

子分達も、世間の不評が集るのに耐え兼ねてか二人、三人と離れ去って……その結果、過労の為に、床に書いて仕舞った仁兵衛だった。

「それ見ろ、罰が当たった」

「余計な所へ出しやばるからだ」

「いい態だ」

「守り神様を狙った罰だ」

と世評は惨酷であった。

——今夜も、お鈴の口から洩れた声の中には、多分に鼠小僧に同情する、出来る事なら、この家でかくまってやり度いと云う響きが籠っていたのだ。

「で、お役人は？」

「は、はい……」

女中が、云いしぶっているのを見て、お雪は鼠小僧を追い込んだのは、父の仁兵衛に違いないと見てとった。

「そう……」

お雪は独り合点すると、再び湯殿の中へ入った。

湧き通る様な湯に、ザブンと弁天の様な裸身を沈めると、廊下のお鈴に

お鈴に

「お鈴ちゃん、今夜泊って、明日帰るわ」

「まあ、本当？」

お鈴が、はしやいだ顔を出した。派手な長襦袢の襟から、しっこりとした乳房が見える。

「鼠小僧と聞いたら夜道は、何だか怖くなったわ……」

「まあ、罰が当たってよ」

お鈴が真顔で云った時、湯殿の天井の羽目板が、つつつと動いて光った目が下をのぞ込んだのを二人は知らなかった。

### 三

それから七日程経った夕方に、伽羅の香を封じた手紙が黒門町の木綿問屋島田屋に届いた。

「お内儀さん、之からお出掛けで？」

「ああ、お鈴ちゃんの所迄。今夜も泊ってくるからね。供はいらないよ」

と、浮き立つ様に出かけてから、町はずれ

(矢張り、供を連れてくるんだ……)

そう思い乍ら、夜の帷が、しっとり降りた街道を、お雪は小走りに駆けていた。

びたびた、びた、今夜は何となく自分の足音さえ怖しく思った。

(——なに、大丈夫さね。一刻やそこらの道のりだもの……)

と、軽い気持で出て来たのが後悔されて、紫紺の空にかかった黄金色の月さえ、仰いで見るゆとりがなかった。

——やっと町の灯が見えて、お雪は吻とした。と、その一瞬を待っていた様に、黒い影が音もなくお雪を抱きしめた。

「あれ！」

ぎくツとして、思わず金切声が出た。

が、次には、素早く小布れが口の中につめられて仕舞った。

「騒ぐな、おめえも小娘じやあるめえ……」

低いが、渋のある男の声がした。

「うう、うう……」

お雪は藻掻いた。



だが、口を封じられて言葉にならず、手首は背中へ捻じ上げられていた。

「こっちへくるんだ」

そのまま後から抱えられる様に街道を外れた草原を歩かされた。

「おい、しっかり歩け！」

後の男は膝を曲げて、お雪のむっちりとした尻をこ突いた。

思わず膝の関節が、がくんとゆるんだ。そのまま、よるよると草を踏んでつんのめると、捻じ上げられた腕が、ぎいと鳴った。

「痛う……」

悲鳴<sup>ひな</sup>つたはずみに、口からボンと小布れが出た。

「痛い、助けて……」

お雪は、力一ぱい体を左右に振って暴れた。

「騒ぐなよ、お神さん」

男は、お雪の手を離すと、かがみこんで小布れを拾った。

（この男、あたしをどうする気だろう——）

恐ろしさに、身もすくんだ。

と、又、口に小布れをつめ様とする。

「嫌！ よして！」

「おっと、よせねえよ」

「あたし、死んでも嫌だ！」

「死ぬ事はねえ——」

「嫌だったら！」

お雪は必死に抵抗したが、とうとう、口にまた小布れがつめられた。男は、その上から今度は手拭で掩う積りだ。

（そんなことしたら、いきが……）

だが男は容赦なく、鼻孔迄塞いで、きゅっ——と括り上げた。

一瞬、お雪は男の手から逃がれた。

猿轡のまま、逃げるお雪の後から、男の足が、お雪の着物の裾を



踏んまえた。

「う！」

お雪は緋の長襦袢から太腿もあらわに、どうと前に倒れた。

男も、そのはずみを食って、重なる様にお雪の体に倒れこんだ。

(あ、なにを……)

帯に男の手がかかった。

「もがくなよ。おぼこでもあるめえしよ」

(あ、離して！)

猿轡の下で息が喘いだ。

苦しさに胸がふくらみ、自然に足がばたついた。

帯を解くと、男はお雪の着物をはいだ。

月明りに、長襦袢が真紅の牡丹が、草原に咲いた様に見えた。

お雪はまだ足掻いた。

「しぶといぜ、お神さん——」

がっしりと、四つ手綱を張った様に、お雪を上から圧えつけてい

た男は、お雪の首に右手を差し入れると、ぐっと、お雪の上体を起した。

長襦袢の襟が肩からはずれて、夜目に白い桃の様な半球があらわになった。

こんどは器用に伊達巻を解き始めた。

「う！」

羞恥の呻きを猿轡から洩らして、身をのぞけらしたお雪の体は、白いむき玉子の様に緋縮緬から、すっぽりはがれた。

乱れた肌襦袢と柔い腰巻一枚。

「うーむー」

うなっただのは男だ。

後家とは言え、まだ男を知らない様な、ひきしまった清潔そうな肌は白くて餅肌。大柄でそれに相応しいほどの太り肉。それが青い

月光の下に艶冶なうねりを漂わして、芳醇な香りが肌から匂うばかりである。真紅な腰のもののすら、やわらかに流れて……

今迄、情容赦なく動いていた男の腕が、指先が、しばし、とろけて、たるんだ様に動かなかった。

一瞬、お雪の白い腕が宙に上って、顔の手拭をずりおろすと、口から小布れをつかみ出した。

「助けて！」

最後の機会を、此の一声にかけた響きだった。風もなく、そよともせぬ草原の上を声は遠く流れて、やがて黒い闇に吸い込まれた。

「阿魔！」

ふいを打たれて男は狼狽した。

すっかり観念した姐上の鯉と思いきや……男は、まず掌でお雪の唇をがばつとふさいだ。然しそれも、お雪の齒に咬まれて、猿轡の用をなさなかった。

「痛え、は、はなせ！」

小指が、千切れる程だった。

バシッ！

と肉を打つ音がした。

此度は離れた。

然しお雪は、まだ口惜そうに唇を咬んで男を睨み据えていた。

男はぶるぶると指をふって血を切ると、そっと傷口を見た。

指先は紫色になっていた。

「お神さん、仕返しをしてやるぜ」

男はニンマリと笑った。

その顔は、眼元のきりっとした、色が浅黒く苦味走っていた。

「あっ、は、離して、これだけは、あっ！」

「おっと、離せるけえ……」

こんな言葉が、はずんで交わされて、恐怖と昏迷におのくお雪

の姿が、月明りの中で藻掻いた。

男の手が、傍に落ちてゐる扱帯をとり上げた。それは、露にしつとりと濡れた桃色の絹であつた。

「あつ、よして、何を……」

お雪の両手首は背中に合わせてせられると、その絹が、素早くまきついて、更に胸に一卷き、きゆうと乳房にまで食い込んだ。

「ああ……」

背に手首が固着されると、反動的に、がっくりと上体が前に倒れて、松葉の簪が、するりと髪をすべって、白い腿の上に落ちた。

「顔を上げるんだ」

男の手が邪慳に、お雪の髪を掴む。

「あ、ああ——」

お雪の声は、いつか哀調を帯びていた。

ビリビリと絹の裂ける音がした。

男は、お雪の長襦袢を手頃に裂くと、それを手拭の上に重ねてのせた。

「あ、もう許して」

「ふん、まだ何もしてねえよ」

男は、お雪に猿轡を嵌め様とする。

「許して、それは、苦しくて……」

お雪は必死にかぶりをふった。

だが、長襦袢と手拭は、しつようにお雪の口と鼻孔を狙った。

「くっ……」

前よりも更にむごい猿轡が、お雪の美しい顔の半ばを掩った。

ぐんなりと倒れて、かすかに喘ぐお雪の廻りに、赤や青の色彩がふわっと散って、その上を女の体臭が漂んでいた。

「お神さん——今夜は、うんと苛めてやるぜ——」

うわづった男の声と共に、ビシヤッ、ビシヤッとお雪の頬が音を

たて、黒髪が左右に大きく揺れた。

「う、う、う——」

と女の紅の呻きが、猿轡の下から洩れた。

#### 四

お雪は、まるで魂の抜けた様に、ふらふらと歩いていた。あれから一刻程後だった——。

（ああ、あの男——）

お雪は口惜しげに唇を噛んだ。

だが、いつかその口惜しさが、すーと解ける——お雪は自分自分の気持が判らなくなって来た。

町へ入ると、人通りもある。

お雪は、つくろった積りでも衣紋や髪が気になった。

そして、或る黒板塀の裏木戸を押して中庭に入った。まるで自分の家でもある様に、中庭をつつきると、縁に上り、ぼーと灯のついている奥座敷の障子を、すーと開けた。

友禅の夜具から

「……お姉さん？遅いわよ。もう来ないかと思ったわ——」

うらむ様な甘い声で身を起したのはお鈴だ。

「ごめんなさい。お鈴ちゃん……」

お鈴は今年十八。お雪より五ツ下で、お雪に劣らぬ美人であり、島田屋の分店、近江屋の一人娘である。

島田屋のお雪は後家である。

○

○

「島田屋の後家は、滅法な美人だが、ほんとうに男嫌いかなあ？」

「そうともよ。あのいい体で、よくまあ、後家が続くもんだ！」

「いまだき、勿体ねえ話だぜ——」

「おっと、涎を垂らしなさんな」



これは町内の、男たちが二人寄ると必ずと云ってよい程出る話であつた。

「誰か隠し男でもあるのと違うか？」

余計な男たちの心配だ。

男たちにこんな心配をさせる若後家お雪には、島田屋という江戸切つての木綿問屋の暖簾の身代もあつた。

○  
遠山がすみの朱骨の行燈の灯が、ちろちろと這つた部屋には、お鈴の愛用している伽羅の香りが漂っている。

「ね、お姉さん」

お鈴は、何を思い出したのか、急に鼻声を出した。

「ね、お姉さん……」

お鈴の手が、何時もとは様子の違ふお雪の膝を強くゆすつた。

お雪は、全くほかのことを考えていた。

「ね、ね、お姉さん」

お鈴は、凝と動かぬお雪をゆすつて、不審の瞳を注ぎかけた。

だが、今夜のお雪は、どうしても物思いから脱け出せなかつた。

「——男って、あの男って？……」

一時、殺してやりたい程憎かつたあの男が、あんな目に遭わされて、苛められ責め抜かれた、あの男が……あの男のした事が……

（あたしとした事が、あんな事に……）

一度は、そう心で云つて打ち消してはみたものの、不思議につきまとう得に知れぬ快楽。

それはあの男に縛られ、猿轡をされ、そして、さいなまれた事より起つた、甘美で残忍な味を帯びた煩惱なのだ。

心の底にある井戸より、こんこんと湧き上る様な、うずく様な此の陶醉——。

「ああ……」

お雪は、やる瀬ない吐息を吐いた。

「お姉さん……、どうしたの？……」

お鈴は、ついに不満の声を出した。

「えっ……」

お雪は、何故かどきんとしたが、お鈴が知る訳がないと気付くと「なんでもないの。今夜は一寸、別の事をして遊ぶ事を考えてたの……」

お雪は、こう云つてお鈴の小指をきゅッと握つた。

「別の事って？……」

お鈴の、あどけない眼は、未知の快楽を求めて燃えている様であつた。

「い、苛めっこするのよ……」

お雪は、一寸躊躇（ためらい）かけたが思い切つて言うと、お鈴の顔色をうかがつた。

「苛めっこ？」

「そうよ。ほら、草雙紙によくあるでしょう。旗本の若侍が、お鈴ちゃんの様なきれいな子を拐かして苛めているのが……」

「ええ……」

「さあ、最初は、わたしが若侍になるからさ、着ているものをお脱ぎ、裸におなりよ——」

「ええ」

あたりに激んでいた空気が、香ぐわしい流れを起すと、二人の女が着物を脱ぐ。しゆる、しゆるという衣ずれの音がしばらく続いた

お雪は、脱ぎすてられた衣類から、扱帯と細紐だけを選び分けてお鈴に近ずいた。

「さあ、お鈴ちゃん。その手を後に廻すのよ」

「こう？……」

柔い手首に細紐が絡んだ。

「痛いわ、少し……」

お鈴が鼻声を出した。

「がまんするのよ」

つなぎ合された二本の扱帯がお鈴の

胸をぐるぐると廻って、腰から透ける

様な太腿迄縛った。

「此度は猿轡よ」

「さるぐつわ？」

「お鈴ちゃん、知らないの……」

お雪は手拭を三つ折にして

「声を出せない様に、こうするのよ……」

……」

とお雪は、お鈴の口を縛りながら胸がうずいた。

# 五

「お内儀さん……」

障子の外で番頭の声。

「何だねえ、あたしは具合が悪くて寝てるんじゃないか」

お雪の言葉は突剣食だった。

あのことがあって以来、お雪はずっと家の者に対して機嫌が悪い。

それ迄は男勝りで、家の商売には自分から先に立って働いていた

のだが、近ごろでは店の事は番頭に預けっぱなしで、奥座敷に引き

籠っている事が多かった。

「それが、あのお手紙と品物が届いておりますので……」

「そお、そこへ入れておくれ」

どうせ手紙はお鈴からだと思って、横になったまま起きようとも

雪



しなかった。

「——いまは、お鈴ちゃんどころじゃないんだよ……」

お雪は溜息をついた。

あれから一月。

お雪は、お鈴の所へも行かなかった。この間に、お鈴から手紙が三度も来ている。いま四度目の手紙らしい。

（——手紙は分ってるけど、品物って？）

お雪はなにか気になった。



懶るそうに手をのばして、油紙に包んだものを引き寄せた。

(おや、これは?——)

出て来たものは、男持ちの豆しぼりの手拭だった。

それも新しいものではなく、ふんと男の臭いさえする手垢のついたものであった。

(まあ、汚い!)

お雪は眉を顰めると、手拭をほうり出した。と、中から松葉形の簪が出て、行燈の灯を受けてピカリとした。

(おや、あたしのだ……)

お雪は、潰し島田に手をやった。

太いべっこの中差と松葉の簪を、前髪に二本、後に二本差しているのだが、そのうちの一本に違いなかった。

(どうして、これが?……)

と、その時ひよっと頭に閃いた事があった。

月夜の草原。

(そういえば、この手拭の臭い……)

お雪は、一度放り出した手拭を再び引き寄せて、そっと手拭に鼻を近づけた。

たしかに覚えがある。草原で猿轡をされた、あの男の手拭だ。

あの時の息苦しさが、縛られた時の胸苦しさが、叩かれた時の痛さがまざまざと思い出され、何か懐しいものの様に、胸が躍る様な感じがあった。

遠くで九ツ(零時)の鐘がなって、番太郎の打つ拍子木が、静まりかえった夜更けの町内に響いている様だ。

九ツでござい——

その声が拍子木と一緒に、島田屋の前を通り過ぎていった。

お雪は、ふうっと深い溜息をついた。

と、廊下に人の気配——。

「だ、誰だい?……」

何か期待に、声もふるえた。

障子が、すうーと開いて這入って来たのは、鼠しぼりの手拭で盗人被りをした、あの草原の男であった。

「——あ、あんたは……」

お雪は叫んだ。

「お神さん。この前は月が明るかったね」

男の声は落ちついていった。

「どうして? ここへ……」

「惚れたら千里の道もなんとか……というぜ」

男は独りで頷いて、お雪に近寄った。

「……あたし……」

お雪は、体をかたくした。

「分ってるよ。俺も会いたかったぜ」

男は、お雪の手をとった。その男の右手の小指に、繻帯が巻かれていた。

お雪は羞しそうに顔を伏せた。

こちらの気持を心憎い程見抜いている男が、怖ろしくも、また嬉しくもあった。

——しばらくして、お雪は男の足元に転っていた——。

「う、う、う……」

お雪は、からだをくねった。

大きくはだけた胸元から白い肌がのぞき、後手高手小手に縛られて、くの字に折った両足も、大股から足首迄襦袢の裾に包んだまま一つに括り合されている。

ピタッ、ピタッ。

と、にぶい肉をうつ音と、押し殺してはいるが、耐痛の呻きが一刻あまり続いた。

## 六

九ツの鐘が鳴るのを聞き乍ら、仁兵衛は浜町の松平宮内少輔の屋敷の前を歩いていたら、高塀から転げる様に、仁兵衛の足許に落ちた盗人被りの男があった。

仁兵衛は静かに足を止めた。

「これっぽちの塀から、すべる様じゃ、年期が入ってねえぜ」  
仁兵衛は鼻で笑った。

「見逃してやる、行きな」

と、そのまま歩み去ろうとした。

「親分——」

呼びとめた男の声に沈痛な響きがあった。

「あつしは、鼠小僧次郎吉です」

「何だ？……」

「こんな不態をふむ様じゃ、あつしも年貢の納め時だ。親分のお縄を戴きましよう」

男は、尋常に手を組んで前へ差し出した。

その時、男の右手の小指が第一関節からくさった様に切れて地に落ちた。

北町奉行榊原主計頭の取調べで、この男は異名鼠小僧、無宿入墨の次郎吉に相違ないと判った。

天保二年八月十九日、品川にて獄門にされる前、引廻しがあつた。

次郎吉は、裸馬に乗せられて江戸目抜きの中を引廻されたが、薄化粧をした顔に、終始、不敵な微笑を漂えていた。

並木町を通った時、次郎吉は島田屋の後家お雪の焼けつく様な凝視に、軽く会釈を返した。

お雪のもとに、再びあの男は忍んでこなかった。

お雪とお鈴は其後、全く見ず知らずの人になってしまったとか

お鈴は、やがて嫁入をし、お雪も婿をとったという——。

(完)

# 臨時増刊号「責小説特集号」大好評！

(表紙色刷、本文中質紙使用)

定価一部二百円

☆ニセ物まで出現した傑作集です☆

残部僅少に付、早くお申込下さい。

## 巻頭口絵

### 拷問

滝れい子画

吸血女流画家

岡田 咲子

### 吸血女流画家

北原純子画

ある奇術師の恋

吉丘 垣根

### ある奇術師の恋

滝れい子画

惨虐戦慄の徴用女工

片矢 薫

### 鬼兵衛刺青異譚

滝れい子画

囚衣

古川 裕子

### 遊女葦水の最期

北原純子画

奴隷妻

片矢 薫

### 縛られた妻

滝れい子画

悪魔と口紅

桂 牧次郎

### 巫女屋敷の責絵巻

滝れい子画

悪女

岡田 咲子

### 読切傑作責小説

片矢 薫

縛られた妻

早川新二郎

### 拷問

片矢 薫

廊の灯影

片矢 薫

### 賭博

二俣志津子

MとS

岡田 咲子

### 巫女屋敷の責絵巻

岡田 咲子

責苦

竹谷 十三

### 老いらくの恋異聞

榛ノ木参一

記録係

岡田 咲子

### 復讐のドラマ

片矢 薫

赤に憑かれた男

上村秀久雄

### 鬼兵衛刺青異譚

二俣志津子





## マゾヒズムへのいざない (十四回)

☆ 告 白 ① ☆

黒 田 史 郎

もうとつくに廃刊になった「文芸」が、かつて学生小説コンクールという企画をおこなっていた。当選者の作品は誌上に発表され、かなり大きな写真がその劈頭をかざる、真面目で有益な企画だったことはたしかだ。

私は中野の本屋で彼女の写真を見た。にこやかな顔、うれしさをむき出しに出来ず困っている顔、どんなふうに言ったらよいか、とにかく羨望に価する表情をしていた。×××大学国文科二年○○○子と記してあり、簡潔な受賞の言葉が、(勿論当人の)述べられていた。私が真剣にその行為をくわだてたのは、それから一月後、同じ文芸誌上の五号活字を見てからである。曰く、前月号発表の当選者○子氏の住所、問合わせの電話が頻繁に

付き、誌上を借り、一かつお知らせしておきます。新宿区××町××番地、○○方、まずは、御丁寧な告知である。こんな行届いた編集者の配慮は、まず稀なことだと思われた。私の、あの写真を見たときのあの衝動が鮮かによみがえり、もういてもたってもいられなくなつた。私は彼女をドミナに選定したのである。日頃私が持論としていたところの、そのまゝの状態のサジストはいない、という課題のとおりに、彼女をサジスチンとして見たただけではなかった。しかし、彼女のその立場からして、彼女の誇りたかき背景を私は見のがさなかった。彼女は私立系でも一流の大学の学生である。その上、同じ大学の男子学生が、佳作とか、あるいは選外とかで、とに

かくかなりの数が、コンクールには応募していた。東大の学生も多数いたようだった。その明細は、はっきりと誌上に発表されていたので、これは私の勝手な推測ではない。ところが、選ばれたのは彼女である。多数の男子学生との競争に打勝って当選したのだ。審査員の一人、青野季吉氏など特に彼女の作品を称揚していた。彼女はそういう立場に立たされた有為の学生であったのだ。彼女のなかの誇りたかき意識と自負心は、一体どのように他の学生を見下していることか。私は、そこにひとつの途をつなげよう。又つなげるだけの要因の存在を確信した。

私は早速に手紙を書いた。たどたどしい字でそれをつづった。智能のズンとおくれた青

年が、必死のおもいで書きつづる手紙なのである。もう五年も前の話なので、どのような文面だったかは忘れてしまった。趣旨は次の如きものであったことを覚えている。

私は小さいとき病気をして、馬鹿なんです。先生みたいに偉くなれずとも、しかし、みんなからかろんぜられたくはない。ひまひまに勉強したい。英語や算数や、その外のことなど、どうか、教えて下さい、先生。

といったようなものだった。本文はもっとたどたどしく、字も金釘流であった。〇〇〇〇子先生、と宛名にも書いたのだが、その喜びは格別であった。たしか、五ツ、七ツ、年下の女性である筈だ。相手から見れば、こちらはずっと年上の男性である。年上の男性に先生と呼ばれることなど、おそらくはじめての経験であるにちがいないのだ。彼女のくすぐったいような当惑ぶりが、私にはそのときはっきりと感じとれたのだ。年下の女子学生に、先生と呼びかけることの微妙な喜びは特異なものであり、このような感情を生み出す母胎こそがマゾヒズムであらねばならない。相手の当惑ぶり（先生と呼ばれることは始めてである）、しかし彼女はそれを拒否しない。相手はずっと遅鈍な男で、自分は選ばれた女だという意識の設定が、それを保証する。まさに感激に値するケースだと、私はそのとき一人で無中になっていた。

さて、手紙を投函しおわってから、急に以前の確信が消え、心細くなってしまつて気が滅入った。

私の感激はさながら一人芝居の如くに思われだしたのだ。あのようなトテツもない手紙に返事をくれよう筈もなかった。すべては私の妄想から出発したもので、妄想でおわるしかないとおもった。

十日くらいたったある日、外出先から帰つた私は、机の上の手紙におどろいた。彼女からののである。ありうるべからざる事態がおきたのだ。私のあのキテレツな手紙は間違いない彼女の許に届き、私の幾多の危険と自嘲とにもかかわらず、何等かの関心を彼女の心に惹きおこしたことはたしかなのであった。私の手許に当時の彼女の手紙が保管してある。原文のまま、そのままを紹介しよう。

お手紙拝見いたしました。非常にお気の毒に思います。あなたの立場もよく分るような気がします。猶直接お会いした上でいろいろとおうかがいしたいと存じますが、とにかく私のような者でもあなたの御勉強の御手伝が出来たら嬉しく思います。私自身不勉強ですのに、どれだけ御満足のゆくことが出来るか心もとない次第ですが、一応いらしてみたいと思います。御一緒に勉強いたしましう。今度の日曜にでもいらして下さい。

お待ちしています。道順は次のとおりです。では又お目もじの折に。

重ねて強調しておくが、これは原文のままだ。（私の方からの手紙の原文がないのがいささか残念だが仕方がない。）

ごらんの如く、この文面からいって、彼女はいわゆるサディスチンではない。奴隷に對しての女王のお申しこしといった見てくれの文面ではない。ありふれた。如何にも女性らしいへり下った手紙なのである。これが本当だ。まだよく素性の分らぬ男性に對して、如何に相手が馬鹿か白痴であろうと、女性はこのういう手紙しか書かぬ。これが普通の常識というものだろう。

私は末尾の余白に書かれてある地図を見ながら、そして今度の日曜までにはまだ三、四日の日数があることなどを思いながら、言いたいこともない興奮に身をこがしたのである。私はこの文面に、彼女の誇りたかき自尊心をかんじ、その前にひれふす全く無知蒙昧な自己を感じたのである。彼女は私をずっと年上の男性、つまり年令的に立派な大人であることを承知している筈だ。その大人をつかまえてとにかくティーンエージャーの少女が、私のような者でも御勉強のお手伝が出来たらば、と申しこしてきたのである。御一緒に勉強いたしましう、と言ってきたのである。私の彼女への手紙には、先生という称号を附



し奉ってあった筈だ。彼女は先生になることを諒承してくれた。先生と呼び奉ることをも實際上了解してしてくれるのだ。こういう喜びを同志諸兄の幾何かは、きっと共鳴なさって下さるだろう。

その前夜、いよいよ明日なんだと思いがら、その明日が永久に来ることのない遠い日のように感じながら、私は寝んだ。

当日、気もそぞろに家を出るには出たが、一面そらおそろしい不安の念もおきるのであった。彼女は宛名の住所にはいないんじゃないかという不安もあった。

二階屋のその戸を思いきってあけたとき、意外に大きいベルがなりひびいて、後じさりしようとした私をすかさずその場に釘付けにした。無愛想な女が出てきて取次ぎに奥へ去った。彼女は此の家の一部屋を借り受けて住んでいるのである。待つ間の楽しい戦慄の情を御推察下さい。とにかく彼女は出てきた。黒田さんですね、と念を押されたとき、私はすっかりアガッてしまつて、頭でうなずくのが、ガクガクと大きな身ぶるいみたいな恰好になった。

彼女の部屋は表通りに面した板塀のすぐ内側の四畳半だった。殺風景な部屋で鏡台一つなかった。ただ古いラジオが床の間まがいの板の上に置いてあるのだけが目についた。

(ありのままの実景です)

彼女自身も背が低く、なにか不健康な様子で色が黒かった。私は彼女の作品のあのみずみずしい情緒と、彼女自身の魅惑的な写真とに誇大な幻想をいだいたことに気がついた。しかし、私はそれでも完全に失望しなかった。彼女の応待の物腰が、いとも慇懃であり、町重であつたからだ。なにしろ二人はまさしく初対面なのである。私は幼児のように舌足らずな言葉ではなすのである。

「今、なにをしてらっしゃいますの？」

「アノ、ボク、ネ、ソコノオウチノ、……」

エエツト、ソウネオソウジャ、オセンタクヤウン、ナンデモシユルノ、ボク、オクツミガキモジョウズヨ」

どんなに教養があり、しとやかなお嬢さんでも、こういう低脳児に対しては、自然に言葉づかいもそれに適応させて、坊やお利口ね、式の物言いになるものだ。ずっと年下のお嬢さんに、そういう物言いで応待されてみるとどんな気がするか。私だけの感じ方なんだろう。私は先生から、為になるお話を、書きとりや、算数などをおそわることになった。

「ボク、先生ノゴ用、ナンデモシタイノ、オセンタクモ、オクツミガキモ」

「そう。ありがたいけど、ここはよそのうちで、何もやってももらえないわね」

「ウン、ボクヤル、オクツミガカセテ、」

「先生のおくつ、とつてもきたないんだから、」

「ダカラ、ボク、キレイニスル、トツテモジョウズヨ」

「じゃ、一つだけでいいわね。」

彼女は押入れから靴をとり出した。私はそれを丹念に磨きあげておいて、それから、もう一押し、彼女に注文するのだった。

「コレ、ハイテテ、ハイテテモダワナイト、光ラナイノ、」

「そうお、」

彼女は私の差出す靴に足を差し入れてはみたが、適当な台がなかった。畳の上に新聞紙を拡げておくにはおいていたが、それでは左右と平面で、布切を両方からあててのブラッシュが出来ない。

とつさに私は自分の膝を差出し、この上にと促したのである。彼女はあまりためらわずに私の膝の上に土足を下した。女は、相手が馬鹿である、という了解の上にたてば、ためらわないものである。理論ではなく、体験のかずかずをふりかえってみてそれが言える。

私はその外に、ハンケチを二枚、むりにたのんで洗わせてもらった。パンティとまではその日すぐのことではあり、うまくゆかないにしても、シユミーズぐらいのことだったら若しそのような汚れものがその時彼女の許にあつたら、当然洗う役は私であつた筈だ。正

真正銘、その時、汚れものといつてはハンカチしかなかったのである。それと、不便なことに、洗濯場は他室の人達との共用使用であるため、私はハンカチのためにバケツを畳の上において、部屋内で洗濯したのである。これでは、本式の洗濯はとも出来そうになかったし、やらせてもらえそうにも思えなかった。

私の初日は、かくして相応の収獲を得ることが出来たのである。

さて、最初私が予定していた紙数を既にこしてしまったので、その後の状況の詳述はさける。とにかく、要点だけをピッアップして皆様への御報告代りしよう。

週に一度の訪問日、それが二月でしばらく中断した。(春休みで、彼女が関西へ帰郷したのだ)

一月半にわたる期間に、彼女から二度手紙をもらった。こまごまとした勉強の為の注意であった。彼女は、全く私を子供同様に扱ってくれるのである。又私を薄馬鹿なりと信じていた。だからあのような行為も出来たのだろう。

二度目か、三度目の訪問の時だった。私がだまって縁先の方から室内を覗きこむと、彼女は気がねなく私を叱るのである。だまって人の部屋をのぞくんじやありません。(たしかに彼女自身にも、かなりヒステリックな要素

## 本誌百号突破記念

### 懸賞原稿募集

#### について

本誌通刊第百号突破記念の懸賞募集原稿は、その後引続いて続々と到着しております。すでに七月号誌上で「お町の最期」を発表以来、八月号では「身悶える妖精」更に九月号では沖龍彦氏の「草双紙に於ける責場の研究」を、十月号に「女水兵哀史」(女奴隷愛好家の遍歴より)△市田健次郎Vを掲載致しましたが、応募作品多数の為整理の都合上、本月号の締切

に間に合わず、入選候補作品数篇あり乍ら掲載出来ませんでした。あしからず御諒恕の上次号を御期待下さい。優秀作品は今後次々と誌上を飾ってゆくつもりであります。入選該当作品多数の節は、懸賞入選作品ばかりの特別号を臨時に増刊いたします故、何卒奮って御応募下さるよう御待ちいたします。

△編集部V

があったようだった。

私は女性の前で、雑巾をもてあそぶことが好きである。自分が馬鹿になり、女性が尊大にふるまえる、そのためには思い切って彼女の前で雑巾をもてあそぶことだ。それで顔をふく。その端をくわえてみせる。会話の合間合間に私は何度も雑巾のはしを口にくわえてひっぱたりした。これが几張面な彼女にしてみれば、多分に目障りなるらしかった。きかないじゃないの、そんなもの口にしないでよく先生のお話ききなさい。

三度目か四度目だったろう。私が又しても雑巾のはしを口にもってゆこうとしたとき、彼女は非常にきつい調子で私をなじった。言うことがないとホントにぶつわよ。彼女の強い視線に射すくめられて、私は後じさった。ぶたれるのを避けるように、手で顔をか

くしながら、怯えきった様子をしてみせる。それにつられるのだ。彼女は私の手から雑巾をとりあげると、それで私の顔をはいた。私が泣きそうな顔して及び腰になると、今度は平手が飛んできた。

ことわっておくが、彼女はサディスチンな特殊な女性でなく、あくまで普通の、すこし健気なところのあるお嬢さんである。

金で買った女か、あるいは強いて頼んでひっぱたいてもらうときの気持など、およそ比較にならぬ興奮をそのときかんじたのである。(未完)

(註) 彼女の足指をなめるところまで、話をすすめるつもりでしたが、そのことに及ばなかったこと、お詫びします。猶、彼女の小説は一度映画化されたことあり、全部実在、実際の状況であったことを保証します。



## 創作

乾

湿

(かんしつ)

榎村 奏  
青木 審画

連隊長の大房大佐は、入って来た週番司令の戸田大尉を見ると、組んでいた腕をといて穏かに微笑した。

戸田大尉は、まだ三十になったばかりなのに、短い口髭をたてている。それが、浅黒い彼の貌を一層精悍に見せていた。

「戸田大尉。実は、お前をみこんで頼みがあるのだが——」

「はア——」

「お前、件を知っていたかな?——」

「はア、お見かけしたことはありません」

「その、数馬のことなんだが、あいつはどうも柔弱で困る。絵を描いたり、本を読んではかりおって、全く不肖な倅だ——」

「……」

「そこで、ひとつ、お前に鍛えて貰ったらと考えてな。どうだ。ときどきうちへ来て相手をしてやってくれんか?」

「はい。私でできますことなら、なんなりと——」

戸田大尉は、一度だけ見かけたことのある蒼みがかった滑らかな肌の少年を思い出していた。少年は紺サージの半ズボンから長い脛を出して、いかにも敏捷そうに見えた。

今はもう中学の上級になっている筈だが、驕慢な冷い貌は、変っていようとも思われなかった。

女中に案内されて、数馬の室の前に来たとき、戸田大尉は、急に自分の鼓動が高くなったような気がして、わざと軍服の肩を怒らせ

扉を開けると、数馬は椅子にかけたままの姿勢で、無感動な視線を向けた。

室の隅で、上衣に腕を通していた背の高い男は、洋服を着終ると、

「じゃ、僕は帰るからネ——」

と云つて扉のほうへ歩みかけたが、瞬間、戸田を見た瞳には微かに敵意が光っていた。

戸田大尉は、大股に数馬の前へ進むと、

「戸田です。私のことはお父様からお聞きおよびと思いますが——」

それには答えず、数馬はフイと立つと、イゼルにかけてある四十号程の未完成のキャンパスのそばへいった。

それは、青を基調にした男の裸体画で、灰色に塗られた肉体は、かなりデフォルメされていながらも、妙に迫る現実感を持っていた。

「さっきの男がモデルですか？」

「そう——」

「どういう男です——？」

「気になる？——」

「いいえ。そう意味じゃア——」

「オレの学校の教師さ。あいつ、イヤにオレにつきまとうから、モデルに使ってやったんだ。嬉しいがっやがる。バカな奴さ」

「私は絵のことはよく判らないんですが、モデルになるには、相当いい軀でないと駄目ですよな」

「うん、まあね——そう云えば、大尉サン。

あんた、仲々いい軀らしいね」

「イヤ、私なんか——でも、鍛えてはあります」

「陸士出のバリバリだからナ。それに相当硬

派なんだから。オヤジが寄越すくらいだから——」

「さア……」

数馬は、悪戯っぽい眼付きでじつと大尉の顔を睥睨したが、大尉が戸惑ったように視線を逸らすと、面白そうに笑いながら、弾みをつけてソファへ寝転がった。

「大尉サン。オレ、あんたに興味が出てきたヨ。裸になって見せてくれる？」

「モデルになるんですか——？」

「気に入ったらね。今、フツと面白い画題がうかんだんだ」

「そうですか。では、裸になります」

「ああ」

戸田大尉は、軍刀を脱して壁に立てかけると、上衣の釦に手をかける。

大尉の上半身がむきだされると、数馬はソファから身を起した。

胸毛こそないが、厚い胸板は、見事に筋肉が隆起して、鋼鉄のように張っている。

袴下を脱ると、固く締った強靱な脚が現れ、そのつかねを、真ッ白な六尺褌が区切っていた。

「真ッ裸になるんでしょ？」

戸田は、教師がモデルだという裸体画が全裸なので、当然のことのように云った。

「うん。でも、一寸、そのままいてくれな

そう云われて、戸田大尉は、褌を解こうと  
していた手をやめた。

「それ六尺褌っていうんだろ？」

「そうです」

「軍人って、みんなそんなのやってるの？」

「イヤ、大抵は越中褌ですね」

「そうだね。ウチのオヤジだってそうだ」

数馬は、珍らしいものでも見るように、しげしげと大尉の褌を眺めていたが、

「そうだ。その褌でいこう——」

「え？——」

「画題サ」

「ああ……」

「真ッ白な六尺褌で、右手に抜刀をさげる。

——そうだ、略帽だけかぶるかナ。題は「軍刀」とつけよう。サア、すぐデッサンだ」

次の日。何時もの時間にやって来た青陵中学の国語教師尾高は、数馬の室へ入るとサツサと服を脱いだ。瘦身だが、筋肉は発達している。蒼白い皮膚が薄黒く見えるくらい毛深い。せいもあって、全身が濃密な陰影に隈どられ、殊に胸から腹へかけての漆黒の流れは、何か動物的な生々しさを感じさせた。

「数馬君。どうしたんだ——？」

絵具箱を開けようとしもない数馬をみて、尾高は眉をひそめた。

「今日は何だか気が乗らないんですよ」



「しかし、もうすぐ完成なんだろう。僕もこうして準備したんだし、少しでも描かないか」

「ええ、でも……」

数馬は、面倒臭そうに、尾高の軀を見ただけである。

「数馬君。君、何かあったんじゃないか？昨日の将校は何者なんだ？……」

「先生には関係のない人ですよ。オヤジの下で、オヤジが呼んだんです」

「お父さんが、君の為に呼んだのか？」

「おそろくね」

「で、君はどうなんだ？」

「え？何がです？」

「あの将校が好きなのか？」

「好きも嫌いな、昨日会ったばかりですよ」

「しかし、君が僕を見る眼は、今日は違っている！……」

「そんな、邪推ですよ。先生の——」

「君。そのキャンバスは何だ？」

尾高は、裏を返してある新しいキャンバスを見付けると、手をかけようとした。

「ああ、それは——」

「見せられないのか？——」

「いいえ。どうぞ」

尾高は、八十号のキャンバスの上に、ハッキリとライバルの姿を見た。

「君は、やっぱり……！」

顫える声で云って、尾高が数馬に詰め寄る

うとしたとき、扉が高くノックされた。

入って来たのは戸田大尉である。

大尉は、尾高を一瞥すると、真直に数馬の前へ進んだ。

「今日はどうなさいますか？」

「ああ、続きをやるよ」

「では——」

大尉は、静かに軍刀を脱す。

尾高は、敗北感にうちのめされながら、無言で衣服を着けた。

「数馬君。では、もう僕は来なくていいんだね」

「先生の絵は未完成ですからね。又気が向いたら来ていただきますよ」

「そう、いつでも呼んでくれたまえ」

平静をよそおってそう云うだけが精一杯だった。尾高は室を出ると、「アラ、もうお帰り——？」と声をかける女中に顔をそむけながら、そそくさと靴をはいた。

戸外の初夏の陽射しが、尾高の気持を一層みじめにした。

## 二

海水浴に海へ一泊の予定でいくからと、数馬からの通知を受けとったとき、尾高ははじめて躊躇していた。戸田大尉も一緒に来ないと思うと、誰がいくものかと、怒鳴りたくなる。といって、二人だけでいかせることは、

到底忍びえない。結局、尾高は、誘いに応じるよりほかなかったのである。

略装ながら、軍服の戸田を混えた、男ばかりの一行は、何がなし人眼をひいていた。途中で自動車をすてた数馬は、

「ここから歩いていこう」と云って先にたった。

「ここから近いのかね？——」

尾高が不審そうに訊く。

「ええ、まあ——少しは歩かなくっちゃ面白くありませんよ」

数馬はそう答えたが、その意味はまもなく明白になった。

三人の前に、巾十米程の河が現れたのである。流れは緩やかだし、深さもさほどではないらしい。橋のある処までは百米ばかり堤を歩かねばならなかった。

「橋までいくのは面倒臭いな——」

数馬は立ち止って河を眺め、それから二人の顔を見た。

「よろしい。私にはお委せなさい」

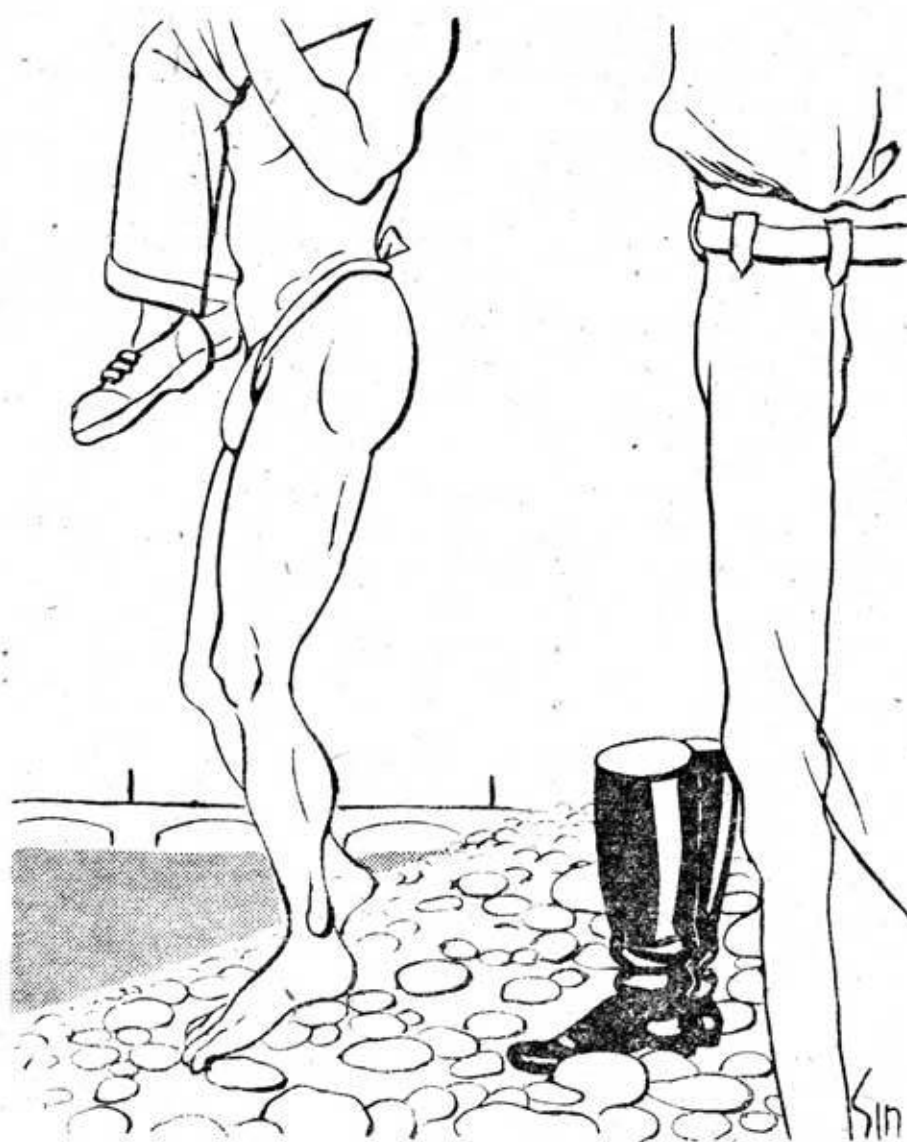
そう云うと、戸田大尉はもう服を脱ぎ始めていた。そうして、忽ち褌一本になると、

「サア、私の肩へお乗りなさい」

「わア、こいつア凄いや！まるで昔の川越人足だ——」

小供のように喜ぶ数馬にひきかえ、尾高はしぶい顔で、でくのぼうのように突立ってい

る。  
「先生はどうしますか？」  
大尉の肩に跨がりながら、数馬は揶揄する  
ような調子で云う。  
「僕は橋を回るよ。それよりしようがないだ  
ろう」  
「そうですか。じゃア、大尉の脱いだもの、  
ついでに持ってってくださいよ。いいでしょ  
う」  
「すまんすな」



しまうことも、大人気ないようで、尾高には  
できなかった。抱えている大尉の衣類を、其  
場に叩きつたい衝動をやっと抑えた。  
橋を渡りながら、見まいとしても、尾高は  
河のほうを見てしまう。  
遅い肩に数馬を乗せて、悠々と流れを突  
切っていく大尉は、河の中程をもう過ぎてい  
て、水面からときどき輝が覗いている。  
それを見付けた通行人が二、三人、立ち止  
って眺めていた。

戸田大尉は、拘  
りのない声で云っ  
て、白い齒を見せ  
る。

大尉の衣類から  
長靴まで抱えて堤  
を歩きながら、尾  
高はしきりに後悔  
していた。

（やっぱり来るん  
じやアなかった。  
これじやまるで二  
人に翻られに、ワ  
ザワザ出て来たよ  
うなもんじやない  
か。畜生……）

しかし、その場  
から勝手に帰って

橋を迂回した尾高が来たとき、いつか河を  
渡り終えた二人は、堤の草に腰を下して談笑  
していた。

濡れた褌は、そばの立木に干されて、大尉  
の腰には、数馬のものらしい派手な柄のタオ  
ルが巻かれている。

そんなことにも、尾高は、やりきれない嫉  
妬を感じた。

旅館へ着くと、三人はすぐに支度をして浜  
に出た。戸田は六尺褌、数馬は紺色、尾高は  
黒の、各々海水パンツだった。

「大尉サンは、泳ぎは自信あるんだろ？」

数馬が訊くと、

「遠泳なら負けませんよ」

戸田大尉は、両腕を体操のように曲げたり  
伸したりしながら、快活に答える。

「先生だって負けませんよね」

数馬が尾高を見ると、

「イヤイヤ、とてもとても、戸田さんには、  
かなわないだろうよ」

尾高も、努めて明るい調子で云ったが、大  
して泳げもしないのを知っているながら、そん  
なことを云う数馬が、内心では憎かった。

五十米も泳いだかと思われる頃、数馬の様  
子が急に変わったのに、最初に気付いたのは尾  
高だった。しかし、戸田のほうはるかに敏  
捷だった。



戸田大尉が、グツタリとした数馬の軀を砂に横たえとき、尾高は、蒼い顔をしてやっと水から上って来た。

大尉は、水を吐かせようとして、俯伏せにした数馬の上腹部に膝を入れた。

すると、数馬は急にパツチリと眼を開けて「もういいんだよ。大尉サン——」

と意外に元気な声で云い、続いて、さも愉快そうに笑いだした。

「坊っちゃん……！」

「怒るなよ。大尉サン。そりや悪戯したのはオレが悪かったけど——でも、オレ、あんたが益々好きになったよ」

「怒りやしません。ですが、びっくりしましたよ。坊っちゃんにもしものことがあったら私は生きては帰えれませんからね」

「じゃ、オレが死んだら、大尉サンは切腹でもするの——？」

「そりや、しなければならぬかもしれせん」

「へエ、凄いな。オレ、大尉の切腹するところ見たくなっちゃった」

「冗談おっしゃるものじゃありません」

尾高は、いたたまれなくなったように、二人のそばを離れると、ザブザブと水へ入っていった。

「先生、又泳ぐつもりかな」

「坊っちゃんはまだ泳がないんですか？」

「オレはここで申羅干してるよ。大尉サンも泳いでくるといいや」

「じゃ一泳ぎしてきます。坊っちゃんはここを動かないでくださいよ」

「大丈夫だよ。もう悪戯はしないから」

大尉の揮が波の間に隠れると、数馬は仰向けになって臉を閉じた。太陽の直射に焼かれて、軀の中までがボウツと熱くなってくる。

「数馬君——」

不意に男の声が降ってきた。

「何だ——先生は泳いでたんじやないんですか——？」

尾高は濡れた軀をピタリと数馬に寄せた。胸毛のはりついた胸が、激しく喘いでいる。

「数馬君。君は何の為に、僕を呼んだんだ——？」

「そりや大勢のほう面白いと思ったからさ——」

「なるほど、君は面白いだろうよ」

「先生——」

「まあいい。そんなことより、君に頼みがある。きいてくれるだろう？」

「——何ですか……？」

「今夜、大尉が眠ったら、松林で僕と逢ってくれ。話があるんだ」

「話ならここで——」

「君。君は、僕の云うことはきけないと云うのか——！」

「判りました。いきますよ。いけばいいんでしょうから」

尾高は、血走った眼で、睨むように数馬を見ていたが、スタスタと旅館のある方角へ歩きたした。

「先生。もう泳がないんですか——？」

「僕は宿へ帰ってる。君は大尉と楽しんでたまえ」

尾高の姿が脱衣所の蔭に消えると、数馬は「チエツ」と舌打ちをして、又ゴロリと仰向けに転がった。

三つ並べて敷かれた布団の、真中へ数馬がその左右に戸田と尾高が寝た。

まもなく、健康そうな戸田大尉の寝息が聞えてくると、尾高は、数馬の肩をソツと叩いて起き上った。尾高が蚊帳を出た後で、数馬はゆっくりと上体を起こすと、一寸大尉の様子をうかがってから、音のしないように廊下を踏んだ。

尾高は、松林へ通じる道の中程で、立ち止って煙草に火を点けていた。

「先生。早くしてくださいよ。大尉が眼を覚ますといけないから——」

「フン。大尉のことが、そんなに気にかかるのか」

「大尉はオヤジの命令で僕に従いて来たんです。つまらないことで心配させちや気の毒で

すよ」

尾高は、何か云おうとしてやめると、足早に歩きだした。

数馬も、しかたなく歩いていったが、戸田のことがやはり気にかかった。

「先生。どこまでいくんですか？もうここは松林ですよ」

尾高は、すいさしを捨てると、不意に振り返った。

「数馬君！……」

数馬は、殆ど反射的に身をかわした。

尾高は、砂に膝をつくと、狂気のように数馬の脚へしがみついていた。

「数馬君！俺はもう駄目だ！君なしでは、一日だっていられない！この俺が、教師の誇りを捨てて頼むんだ。俺を愛してくれ！俺は君の為なら何でもする。君の命令なら何でもきくよ……」

尾高を見下していた数馬の顔に、そのとき冷たい笑いが走ったが、暗いので尾高には見えなかった。

「先生。本当に何でもきくんですね？」

そう念を押されて、尾高は一瞬不安を覚えたが、戸田の存在がもう既に彼の理性を粉碎していた。

「死ねと云うなら、死んだっていい……」

「じゃア、ここで寝巻をおとりなさい」

「寝巻を……？」

「何でもないでしょう。ただ寝巻を脱ぐだけですよ」

「いいとも、脱ぐよ」

訝りつつも、尾高は微かな期待を抱いて寝巻を脱いだ。

「脱いだら、紐をおよこしなさい」

「紐？ああ、これ、ハイ——」

尾高が腰に締めていた紐をさしだすと、受けとるが早いか、数馬は、尾高の手を後手にとって縛ろうとする。

「ナ、何をするんだ！——」

「静かになさい。僕のいうとおりになる約束だったでしょう」

「ソ、それは、しかし——」

「嫌ですか？嫌なら嫌でいいんですよ」

「いい。いいよ。君の好きなようにしてくれ」  
そうして、尾高は、易々と松の木に縛りつけられてしまった。

数馬は、何かを物色するようにガサガサやっていたが、そのうち、だんだんその場から遠ざかっていく。

「キ、君。数馬君。どこへいくんだ？まさか僕をこのままにして、いってしまうんじゃないだろうね——？」

尾高は思わず大きな声をだした。  
数馬はすぐに戻って来たが、ホッとするまもなく、尾高は「アッ！」と叫びをあげなければならなかった。

「パシッ！」と鋭い音がして、尾高は肩先に激痛を感じたのだ。

数馬の右手には、木の枝か何かの鞭が握られていたらしい。

「数馬君。君は、僕をどうする気だ——？」

「訊かなくても判るでしょう」

そう云うと、数馬は続けざまに鞭を振るった。

「痛いッ。あッ。キ、君。ああッ！やめてくれッ！痛い。助けてくれ！あッ。カ数馬君。つッ。あッ……」

尾高は、足をバタつかせ、身をもがきながら、ところ嫌わず飛んでくる鞭に悲鳴をあげた。数馬は、ようやく鞭を休めると、

「どうやら先生は資格がないようですね。僕にはこういう趣味があるんですからね。マゾヒストでなければ相手は勤まらないんですよ」  
「でも君、いきなり、こんなことをするなんて、ヒドイじゃないか……」

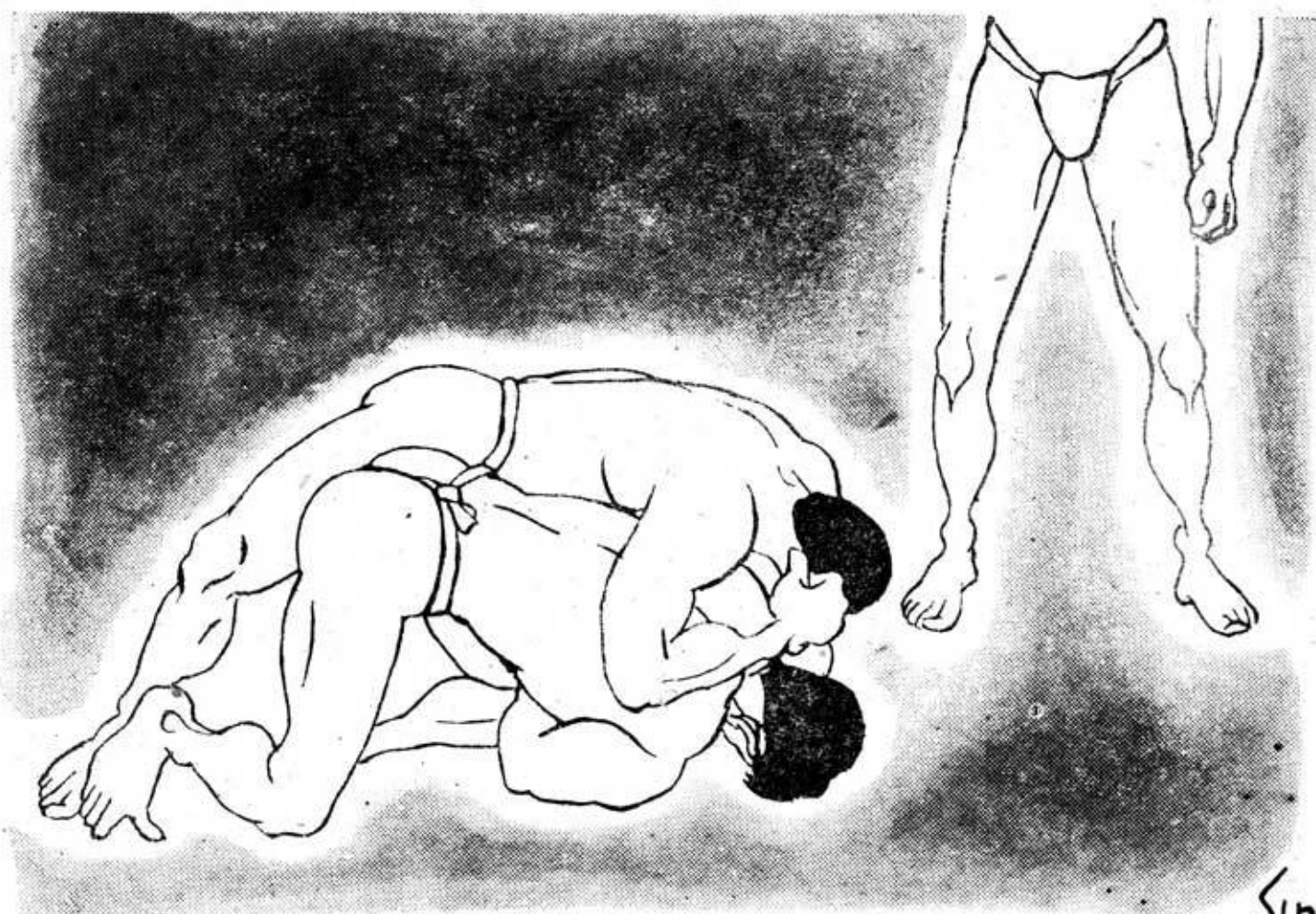
尾高は喘ぎ喘ぎ云う。

「もうお判りになったでしょう。では、繩を」といってあげます。やっぱり、お諦めになった

ほうがいいということですよ」

「イヤ、いいんだ。君がそうしたいんなら、打ってくれ！俺は、成程、君が望むようなマゾヒストではないかもしれない。しかし、君の為なら、耐えてみせるよ！打ってくれ。サア、もっと打ってくれ……」





「そんなにおっしやるなら  
お望みどうり打ってあげま  
しょう。でも、今度は手加  
減をしませんよ。いいです  
ね？」

二再鞭の乱打が始まった  
今度は、尾高も「助けてく  
れ」とは云わなかったが、  
どんなに泳えようとしても  
悲鳴は洩れた。痛みで軀中  
が火のようになり、ともす  
ると気が遠くなりそうだっ  
た。

「坊っちゃん！」

太い声がして、戸田大尉  
が大股に近づいて来た。

「何をなさってるんです？  
こんな処で——」

「大尉サン。あんた起きて  
たの——？」

「いえ、坊っちゃんが出て  
いかれたことは知りません  
でした。フト眼を覚ますと  
お姿がないんで驚きまし  
た。しかし先生も御一緒ら  
しいので安心はしていまし  
たが、いつまでもお帰りが  
ないから探しに来たんです

——先生は、どこにおられるんです？」

「先生はそこサ」

「え？ああ、先生！——坊っちゃん。何事な  
んです？これは——又、何か悪戯をされたん  
ですね」

「違うよ。先生が頼むから、打ってあげたん  
だ」

「打つって——じゃ今の音はそれですね。坊  
っちゃん。かりにも先生を縛って打つなんて  
よくありません。打ちたければ、私をお打ち  
なさい。私なら、少しぐらい打たれたって平  
気すよ」

それを聞くと、それまで顔をそむけるよう  
にしていた尾高は、カッとして、

「よけいなことだ！戸田さん。あんた、うま  
いことを云って、数馬にとり入ろうとしてる  
んだな。邪魔をしないでくれ！いくら軍人だ  
って、少しは氣を利かすもんだ」

と毒づいた。戸田大尉は、当惑したように  
数馬の顔を見る。

「いいんだよ、大尉サン。心配しなくったつ  
て——先生今夜は氣がたつてんだ」

「私が来て悪かったんでしようか——？」

「いいんだってば。サ、帰ろう」

「しかし、先生——」

「そうか。縄だけはといいていかなくち  
やナ」

「縄を持ってたんですか？」

「縄ったて寝巻の紐サ」

数馬が紐をときにかかると、大尉は二人の方を見ないようにしながら、蚊でも刺したのか、毛脛をヤケに大きな音をさせて叩いた。

### 三

堀の外から、数馬の室に灯の点いているのがよく判る。尾高は、先刻から、野良犬のようにその辺をウロウロしていたが、数馬らしい笑声が聞こえると、ピタリと堀にはりないて耳をすませた。笑声に混って、低い男の聲がするような気がする。尾高の顔が醜く歪んだ。

「さア、いいですか。ゆっくりやりますから私のするとおりにやってごらんさい」

戸田大尉は、新しく断った晒を数馬に渡すと、自分の褌をはずした。

「ソウソウ、そこでグッと締めるんです。駄目々々、もっと力を入れて——緩くっちゃ、褌の価値がありませんからね」

「うん。面倒臭いもんだな——これでいいのかい？」

「そう、大体いいようすな。まだまだ締まりますが、最初だからそれでいいでしょう」  
「わア、何だか軀が軽くなつたみたいだ。暴れてみたくなっちゃった。大尉サン。相撲とろうか？」

「ヨシ、とりましょう」

芝生に下りたつ数馬の後から、庭へ下りた大尉は、繁みに蹲る人影を目覚め見つけた。

「誰だ！」

鋭い誰何に、ギクリと一瞬身を固くした尾高は、しかし、すぐに、ふてくされたように立ち上った。

「ああ、これは——先生でしたか。失礼しました」

「君達があんまり睦じそうだったからね。遠慮してたんだ」

尾高は庭先に忍び込んでいた行為の浅まさをみすかれはしないかと、戸田の顔色を伺いながら、落着こうとして煙草をとりだした。

戸田大尉の肩越しに、薄笑いを浮かべて尾高を見ていた数馬は、

「先生。丁度いいところへ来られましたよ。先生も褌締めてみませんか？」

「褌？ そんな——！」

「さアさア——大尉サン。まだ晒あったらう？」

「ええ」

「ここへ持ってきて——オレ、先生を裸にしちやうから」

「オイオイ、無茶するなよ。数馬君——」  
嫌とは云わせませんよ。サア、脱いで脱いで——

「かなわんなア。君には。脱ぐよ脱ぐよ。しかし、僕は褌なんか締めたことないんだよ」

「大丈夫。大尉に教わればいいんだから」

こうして、尾高は、無理矢理に六尺褌を締めさせられるはめになってしまった。

しかし、それだけで数馬の計画が終ったわけではない。数馬は、又々突飛なことを云いだしたのである。

「ねえ、ここで先生と大尉サンと勝負してない？」

「勝負——？」

尾高と戸田は、思わず顔を見合せた。

「相撲でも、レスリングでもいい。つまりどんなだをつかってでもいいんだ。とにかく、一方が完全にのびてしまふまで斗うんだよ。勝ったほうには、賞金のかわりとして、欲しいものは何でもやる。欲しいものといったって品物とは限らないんだよ」

「数馬君。その言葉に嘘はあるまいな？」

尾高の眼が、異様な光を帯びた。

「ありませんとも。像だって男ですからね。絶対に二言はありませんよ」

「よし、じややろう！」

「大尉サン。あんたは——？」

「私は欲しいものはありません。しかし坊っちゃんやれと云うならやります」

滑稽にも（しかし、多分に凄惨な）男二人の死斗が開始された。

尾高は腕力に自信があったわけではない。まして戸田が相手では、勝目はおぼつかない。





切腹研究夜話を中絶して久しくなりますが、未だに読者の方々が忘れなくて資料や写真などお寄せ下さるのを、ありがたく思っています。その内、健康が全く恢復すればまた筆を執れると存じますが、此のころは壬生三郎氏が深い御蘊蓄を傾けての玉稿にて、とても小生如きの出る幕ではない様です。ただ、拙い腰折れを幾つか作ったのがありますのでお目にかけます。創作ながら終戦時日本女性の心意気を偲んで詠じたものです。

## 女 剣

## 断 腸 譜

中 康 弘 通

### 落 城 の 歌

城陥つる際とし知りて十六の  
 姫はしづかに腹切らむとす  
 身に重き鎧は脱ぎて胸ひらく  
 姫の屠腹を妨ぐるなし  
 わが屠腹つつしみ見よと云い放ち  
 姫は白刃を腹に差し当つ  
 呼吸とどめ左手に力こめしゆえ  
 白刃は清き腹ふかく立つ

かった。只数馬の一言が、彼の脳を狂気のようにしてしまっただけである。

戸田は、単なる茶番だと思っていたし、適当なところで自分が負けければ、それで済むという気持だった。

尾高の氣勢が意外に凄まじく、殺気さえ孕んでいるのに気づくと、大尉は狼狽した。

くんづほぐれつしながら、二人はいつか芝生を離れて、今朝方の雨でできた水溜りの泥水をはね返した。相方共、真ッ白だった襦は泥に塗れ、軀の処々には血がにじんでいた。

それまで只防衛的にしか動いていなかった戸田は、この無益な斗争に終止符を打つべく猛然と攻勢に変った。そうして、またたく間に勝負はケリがついたのである。

「仕方がありませんでした。こうでもしなければ、仕末がつかなかったんでん」

戸田大尉は、肩で荒い息をしながら、数馬に向って云い、下半身を水溜りに浸けて失神している尾高に近寄ると、静かに抱き起して活を入れた。

汚れた軀をろくに拭いもしないで、忽々に服を着けた尾高は、蹠蹠として数馬の前に進み。

「数馬君。君は、僕が負けるのを知っていてあんなことを云ったんだね——いや、もう何も云うまい。僕は帰るよ——そうして、もう

脇差の中ほど握り引き廻す

姫の屠腹の潔し真哀し

豊かなる腹ひとすぢに掻き切れば

須叟わきいづる処女の血汐

一城の主なりせば思ひ決め

腹切りゆきぬ女と云へど

よどなく腹をひとすぢ切りしち

刃光ただちに乳下に触る

思ふまま腹切り了へし姫をつつみ

天守の炎音立て熾る

鎧脱ぐいとまなければ侍女は

草摺たたみ太腹を剖く

### 女 劍 断 腸

後の世に語りつぐべし見守るも

腹切りゆくも花の処女と

微笑うかべ白衣をまとふ真処女の

一と生は遂に清く終らむ

厳しかりし修業もただに此のためと

屠腹の刻を待つ間語らふ

怯まじと稚き瞳みはり云ふ妹の顔

しばし姉は目守らふ

新だたみ巻ける白絹やがてして

真赤く染まむ潔き血汐に

道場のま中に今し腹切らむ

白衣の処女神さびて在り

むかいあふ姉も妹も据えられし

三宝みつめ悪びれもせず

あとさきを暫し互に譲りしが

共に切らむと姉の云い出づ

聴ゆるは衣ずれのみの道場に

姉も妹も肌脱ぎにけり

二九二八花のさかりの姉妹ゆえ

さすが稚し潔し乳房

つつしみて腹切刀いただける

姉に倣へり妹もまた

われとが腹しづやかに撫でおろす

処女の右手の九寸五分はも

柔肌に刃先触るると見ぬし間に

姉も妹も腹刺しむたり

よどみなく臍の真下を切りゆくに

居並ぶ娘らは泣かじと怵ふ

押し当てし刃先は鳩尾に刺さりゆき

見えずなりたり白刃の光

わが腹をわれと断ちつつ呻かねば

介錯の娘も涙をこぼす

臍わきを切り下げしとき崩れねど

血しぶく右手の流石に震ふ

さきの世にためし無かりき姉妹

十字に腹を掻切りて果つ

二度と君の前には姿を現すまい——さようなら……」

と云うと、影のように闇の中へ消えていった。

「フーン——でも、面白かったね。大尉サン、やっぱり凄いや」

数馬の声に、戸田はニッコリしたが、室へ戻りながら、ソツと後を振り返った。

尾高が学校を辞めると殆ど同時に、戸田大尉には転属命令が下った。

戸田は、生れてはじめて自嘲に似た笑いを洩らした。

「坊っちゃん。お別れに参りました。お元気で。戸田は、たとえ戦地へいくようなことがあっても、決して坊っちゃんのこととは忘れませんよ」

それが、戸田大尉の最期の言葉になった。学校の帰りに交番へ寄って、顔色の悪い、しかし、眼の鋭い巡査に、明日の非番に遊びに来るよう強引に承知させて家へ戻った数馬は戸田大尉の戦死を聞いて、「へエ……」と云っただけだった。

(完)

× × × × ×



## 第十一景 続・街に見たマゾ

あれこれ

去る六月十五日日本テレビで午後七時三十分から「我が家も楽し」第三話のテレビドラマをやったが、これは一寸面白かった。題名は「ポーナスは誰のもの」と云うごくありふれた家庭劇だが、ポーナスをへソくる主人とそれを廻る妻との話で、家庭の切実な生活と夫婦愛に、へソくったポーナスを子供の自転車にと出してしまう夫の話だが、此のドラマの中の一シーンが面白かった。それは或る家庭の主人が（妻は小田切みきが演じている）一寸した寝ちがえから片手が動かなくなり、



## マゾヒズム百景

## 馬場好男

近所の人にすすめられて、女指圧師に療治をして貰う。その女療治師がまさか馬乗りになるまではやらないが其の恰好よろしく、手の指をボキボキ鳴らして、馬乗らんばかりの、恰好で腰をもみ始める。ぎゅうぎゅうもみ始める度に主人は「うツうツうツ」と悲鳴を、うつぶせになったままあげるが、その姿態が背中からぎゅうぎゅう押し潰され、又、押し潰しているものとみても違わないと云っているもので、上からもみあげる女の姿、悲鳴をあげて、畳に頬をつけている男の姿のクロージアップは、背中に跨った女性の姿を映し出したと同じものであった。果は「今度は荒療治ですよ」と云って、足袋を脱ぎ、えい！と

ばかり主人たる男の腰の上に飛び乗って足で踏みつけるシーンが続いたが、ハラハラしながら主人を、父を見守る妻と子供の表情が出ていて、自分を信頼する妻と子供の前で、他の女性から背の上を（腰の上だが）踏みにじられて、ウツウツウツと悲鳴をあげる男の姿は如何にもマゾ向きのシーンであった。

自分の愛し、且つ信頼する夫が、別の女性によって治療とはいえ、自分の眼の前で馬のられ、且つ足で踏みしかれている姿は、それを妻の前で自分が苛まれていると悟っている男性の場合からいえば、これ以上のマゾ的快感はあるまい。

「貴女の主人なんか此の通りよ、私のお尻の

下に踏み敷かれてよろこんでいるのよ」

とばかり、妻の前で或る女性から顔の上に馬乗りになされたらと思うと、現実には大変な事だが空想ではマゾヒストの描く処である。

私は此のテレビドラマを見ていて、ひそかにそんな事を考え乍らじっと見守っていた。

そして小田切みきの表情が何とも云えない感情でいつまでも眼の前にちらつくのである。

私はよく映画館でふっとマゾ的快感を味う事がある。それは現在の映画館の席が殆んどと云っていい程、席と席の間が狭くつくられているが、お客を沢山入れるためもあるのか知らないが、余り楽な姿勢で見れないのが日本の映画館の席である。満員の館内で映画を見た処まで来ると客が立って出てゆく。

すると入れ代って、あわてる様にして次の客が席を取りあう。その際真中頃の席にこのうとして、若い女性が急いで自分の前を、狭いために「失礼します」と云い乍ら横向になつて、脚で、手さぐりならぬ脚さぐりの恰好で通りすぎる瞬間が、我々マゾ者の心をかきたてるのである。

狭いために先の脚を前の席の背にすりつけ乍ら先に出して、それも私の座っている膝を無遠慮におしのけ乍らである。更に次の脚を入れようとする瞬間はちょうど私の両足の上に乗る恰好になる、私の方は素知らぬ顔で両

膝、或は片膝を、ぐっと前につき出すと完全に彼女のお尻は私の膝の上に馬乗るのだ。

僅かの時間だが、その瞬間が価千金の時間でもある。私達はマゾヒストなるが故にいろいろの空想にふける。然し殆んどそれは現実化されないもので、それを満たすためのあわれな空想である。その僅かの現実化の時間を味う心理は、考えると、全く憐れそのものである。

お金や威力の前に女性をしてサジ化せしめるより、その目に見えない僅かの間の女性のサジ的姿態が我々の心を妖しくかき乱すのは確かである。M+Wとか、ブラザーガールと云つても、一寸した目に見えぬ女性のサジズム的姿態がマゾ男性の心を、いわゆる流行語で「ぐっ」といやすのは、決められたものに反抗するより、そっと苛められたいと云うもので、女性に苛められる事をよるこぶのが、我々人間界ではまだまだヘンタイと見做される所以のものであるからだろう。

男性が女性を苛めるもの、と云う通念から女性が男性を常に苛めるものと世相が変れば案外マゾヒストはなくなるものであるまいか。と下手な結論を出してみたりするのである。

最後に、此の景にこんな事を書き出してはどうかと思うが、沼正三氏にお願いしたいのは、現在の文壇にはマゾヒストは余り居ない

様で、かつての耽美派、谷崎氏のあとをついで、女性崇拜、男性のマゾの第一線を張って「マゾヒズムの小説」を是非世の中に出していただきたい、と思うものである。中央公論社発行の谷崎潤一郎全集を見ても、中篇だが「富美子の足」などが世相に迎合しないと云う理由からかどうか知らないが、削除されている現在、是非、我々の欲望、希望に依ってマゾヒズム礼讃のヒット作を出してもらって世相を瞠目せしめていただけたらどうかと思うのである。「或るマゾヒストの手帖から」とか「家畜人ヤプー」の構想の雄大さを自由に描き出させた氏の筆力から云つても此の期待に依って戴けると信ずるのだが――

## 第十二景 男女同権

### 第一場 戦後の東京の街の或る片隅

ビルの焼け跡の暗い片隅、もう十二時を過ぎている真夜中トキ子がショートスカートの姿でタバコをふかしている。よれよれの兵隊服の男が力なく通る。「兄さん遊ばない？」トキ子が声をかけるが見向きもしない、力なくトボトボと立去る。「チエッ！」プツとタバコの煙を吐きつけて、スカートをまくる。又、兵隊服の男が来る、トキ子の眼とその男の眼と視線があう。

「遊ぶ？」「よかるう。」と眼で通じるその態



度、二人は互に手を取りあう。

「俺はあんまりゼニがねえんだ、いいのかい？」

「おマンマが食べられればいいんだよ、そこらでね」

二人は寄り添いあって焼け崩れたビルの陰に入る。

暗転して

## 第二場 同じ場所

トキ子とその男が、崩れたビルの壁の間から出てくる。

「あんたのヒゲは痛いね、まだヒリヒリするよ」とトキ子が顔を撫ぜ撫ぜ、スカートを片手であげて出てくる、黙ってついてくる男、

「どう？私にはそんなに悪くないだろう？」

「ウム」

「当り前だよ、此の辺にやア私の名を聞けば誰だって一目おく位の姐さんなんだよ、名前も身体もね、シケていたからこそ、あんたみたいな風情の男でも誘ったんだよ。さア、ちようだい」

と手を出す。男はフンとそっぽをむいて

「何だよ、その手は？」

「あらッ、変な事をお云いでないよ、お金だよ。私を買った代金をお払いよ」

「ふん、何を云ってやがる。ねぼけるんじやねえよ、てめえが是非って云うから、俺が付合ってたまでのことよ、サービス料を貰

いてえのは此方だぜ。ふざけるないッ！」

「何だ？此の野郎ッ！お前ロハで遊ぼうってのかい。そうはいかないよ、おいッ、オ

トコッ！いいのかい？そんな大きな口を聞いてサ、ええッ、あたいがね、一寸大声を出せばホラ、あの辺にウロウロしているだろう、

あの連中はみんなあたいの仲間だよ、あいつらを呼んで半殺しの目にあわせていいのかよ逃げようたって駄目だよ、あそこにも、こちらにも、ホラ、一人、二人、三人、四人、五人、六人、いくらでもいるんだよ、オイ兄さん！大声を出すよ、今の世の中はね、人間なんか一人でも少い方がお国のためなんだよ、てめえなんか殺してしまふのはカンタンなんだ。ふざけやがってっ、覚えてろ、みんなを呼ぶから」

とトキ子は口に手をあてて、みんなを呼ぶ仕草をする。

「ね、ねえさん、すまない、待って、待ってくれ、お、おれが悪かった。俺、もう一文もなくなっただうにもなくなっただんだ、死ぬ気にもなった。泥棒をやる気にもなった。でも出来ないんだ、フラフラ歩いていたらねえさんと此処で逢って、俺は姐さんをみてもうがマンが出来なくなっ……許してくれ。許して下さい。俺は先刻までは死んでもいいと思っていた。それが今は駄目なんだ、今は今はもう生きたくて生きたくてたまらねえ、

助けてくれ、俺は姐さんのドレイにでも何でもなる、お願いだ、助けてくれ、此の通りだ」

男はトキ子の前へ土下座し両手をついて頭をたれる。

「チエッ！どこの馬の骨だか知らないが、ふざけてやがるねえ、でもいいや、そうして女の前に両手をつくからはよくよく後悔しての事だろうからね、だけどあたいは許さないよ、貸しはちやんとてめえの身体からとるのが此のおトキの信条なんだ、おトキの名前が男の泣き言でぐらついたんじや、此の道で姐さんと云われたあたいの顔にかかわるからね。さあ馬におなり、そこへ四つ這いに這うんだよ、早く馬にならないかよ、男を五、六人呼んでもいいのかよ」

トキ子の勢に、男は半ベソをかき乍ら土の上に四つ這う。トキ子はスカートをひるがえして男の背に跨る。

「女とロハで遊ぼうとした罰だよ、あそこの電柱の処まで這って歩きな、ホラ、ハイドウハイドウ」

男はヨタヨタし乍らトキ子を背中に乗せて這い歩く。

「ゆ、ゆるしてくれ、人が見るよ。」

「何云ってんだい、女の恐さを思いしらせてやる。云う事を聞かないと仲間を呼んで半殺しだよ、いや本当におダブツにしようよ

歩け歩けハイシッハイシッ」

暗転して

### 第三場 暗い路上

男がトキ子をのせたまま這ってくる。  
肩で息をし乍らフラフラだ。つぶれそうになり乍らヨタヨタしていたが、とうとう路上につぶれて腹這う。トキ子は男の背に馬のり

に跨ったままで、はだけたスカートから白い脛を出して男の胴を締めつける。

「お願いです、許して下さい、もうこんな悪い事はしませんから許して下さい」

男は泣き声をあげて路上にうつぶせている  
「ふん、思い知ったかよ、だが、あたいはま

だまだ許さないよ。さあどうだ、これでもかこれでもか。これからね、男女同権の世の中なんだよ、女だと思つて甘くみるんじゃないよ。どうだ、これでもか、これでもか。」  
ぎゅうぎゅうと男を馬のりにしておさえつけるトキ子の姿、まさに文字通りの男女同権。

## 〔告白〕

憧

禪

菅

—少年時代の想い出—

良太

中学に入った頃、私は剣道の教師が好きになった。野瀬という範士で、浅黒いハダのよく引締った躰に、黒づくめの剣道衣は実に男性的で魅力に満ちていた。稽古で汗ばんだ躰をよくシャワーで洗っていたが、垣間見ただけで胸がときめいたのを覚えている。いつも真白な六尺禪をキリリと締め上げて隆々たる躰を拭いながら、よく上級生と話していたが下級生の私はそれが羨しくてならなかった。範士は二年程で辞めて行ったが、その時の私の淋しさは云い様の無いもので、久しく憂鬱であった。がそれからしばらく後に、野上中

尉という青年将校が、私の中学に配属教官として現れてからは、私は見る間に活気を取り戻した。野上中尉は眉目秀麗な上に堂々たる体軀の持主で、非常に厳格な軍人であった。私は何とかしてこの将校に注目されようと、教練や射撃に夢中になったものである。

中尉は口癖のように、「緊禪一番」とか、「もっと禪をしっかり緊める」とか云う言葉を遠慮会釈もなく怒鳴った。生徒達は中尉に「緊禪先生」という、ニックネームを呈上した。私は中尉の下宿を見たくてたまらず、下宿屋の辺りをウロウロしたことが何回かあっ

たが、一度だけ中尉の部屋とおぼしき辺りに越中禪が干されてあるのを見たことがあった。中尉の逞しい躰と越中禪、活気に溢れる動作と越中禪、帝国軍人と越中禪……私はその組合せに何かしら裏切られた様な物足りなさを感じて、この越中が何かの間違いであつてくれる様に、と真剣になつて希つたことを今でも忘れない。逞しい男性は必ず六尺禪をキッチリ締め込んでいるものだ、と当時の私は、自分一人で勝手に定めていたのかも知れない。そうあつて欲しいという無意識の願望が嵩じた結果かも知れない。とにかく落胆に似た気持ちで、越中を打消そうと必死になつたことは間違いないことだった。だがその確証を得られないままに、中尉も亦学校を去つて行った。戦地に征つたのである。最後の日、全校生を見渡せる壇上に、りりしい軍服姿の中尉が立って真白い手袋で敬礼し、全員に別れを告げた時、私は心の中で、戦地では六尺を締めして下さい」と叫んでいた。目に一杯涙を溜めながら……。





## 再び

# 映画に見る男性責

梶

孫

一

前回に於ける「映画に現われた男性責」が望外の御好評を戴き斯くの如き拙作がマニア諸氏の御満足を得た事を無上の幸甚とお礼申上げます。諸再び男性責であります、今回は二、三の外国映画を除き専ら日本映画について語りたいと思います。何しろ古い事なので資料集めにチョッピリ苦心しました。一閑話休題―古いものゝ中で、大正十四年頃に公開された。前田曙山原作の、日活映画「落花の舞」がある。この映画は期せずして、日活と東亜キネマの競作となり（映画界の競作はこれを以て嚆矢となす）興行的にも大当りした。賣場は日活の方にあり、一世を風靡した尾上松之助の主演で彼が俠客清水次郎長に扮し

て、敵方に捕われた乾分小政（尾上桃華）を単身救助に向う所がある。今は故人となった尾上桃華と云う俳優は、小柄だが渋い二枚目で、演技力も美事で私の好きな俳優の一人であった。彼が縁の柱に荒縄でがんに搦めに縛られ殆んど裸体に近い恰好で髪はサンバラ眉間を切られ、はだけた腹部から純白の褌が現れている。乾分の一人が太い割竹を持ってビシビシと五体を打ちのめす。何しろ小政と云えば威勢が好いので無茶苦茶に暴れる。果ては縛られた彼の背中と柱の間へ割竹を指し込んで、ぐいぐい捻じあげる。マニアにとって垂涎の好場面、そこへ次郎長が現われ「小政を殺すなら俺を先に殺しやがれ」と汚い尻

をまくって、大の字に倒れ大見得を切る。何しろ余りにも古いのでこの場面以外は全然覚えていない。次に昭和三、四年頃公開になった千恵蔵の「続・万花地獄」がある。これは彼が、マキノプロに活躍当時、第三篇迄発表され、その後、独立プロを起して創立第一回作品がこの「続・万花地獄」であって前、中、後の三篇に亘って製作された。責場面は第二篇にあり、これは千恵蔵が責められるのでは無く一見、高原駿雄に似た傍役の扮した仲間が両手吊りの責めを受ける場面がある。若い小ぶりの男で、短い黒地に白い横縞の法被の儘吊され、胸ははだけて裾が大きく開き六尺禪のタレ部分が雪の様に白くまぶしく印象に残った。逞しい太股が露出している。今尚、老役で活躍している若かりし頃の瀬川路三郎が責め方に廻り庭の立木の枝に吊された彼の胸や腹の辺りを弓の折れでピシピシと打ちのめすのだ。万花多宝塔に隠された秘宝の在所を吐かせる為の拷問である。仲間は苦しさの余り両足をバタつかせて暴れるが遂に拷問に負けて白状してしまう。自白してしまえば無用だと許り瀬川が抜刀してえいッと斬りつける途端に綱が切れて、仲間は転落し、露出した両足をバタつかせ乍ら息が絶える。時間的に割合と永く続き夢中にさせられたものだった。

又これは、本格的な責め映画では無いが、

今尚、大映にあって専ら老役で活躍している宮島健一が大正の末期、東亜キネマの二枚目として尊重されていた頃がある。元来この俳優は現代劇畑の人で時代劇には殆んど出た事がないが数少ないその中でたった一本「男一匹」と云う時代劇に、浪人者に扮して出た事がある。劇中、鮮かな立廻りがあって大いに奮戦するが多勢に無勢で、遂に捕えられてしまう。そして庭先の縁の柱に両手を後に柱を背負った様な姿で縛られる。この縛りシーンが仲々好く殆ど半裸体の恰好で、白く逞しい胸板がむき出され、衣類の裾が思ひ切りはだけて、太い股が白禪のタレと共に鮮かに印象に残っている。もう三十年にもな



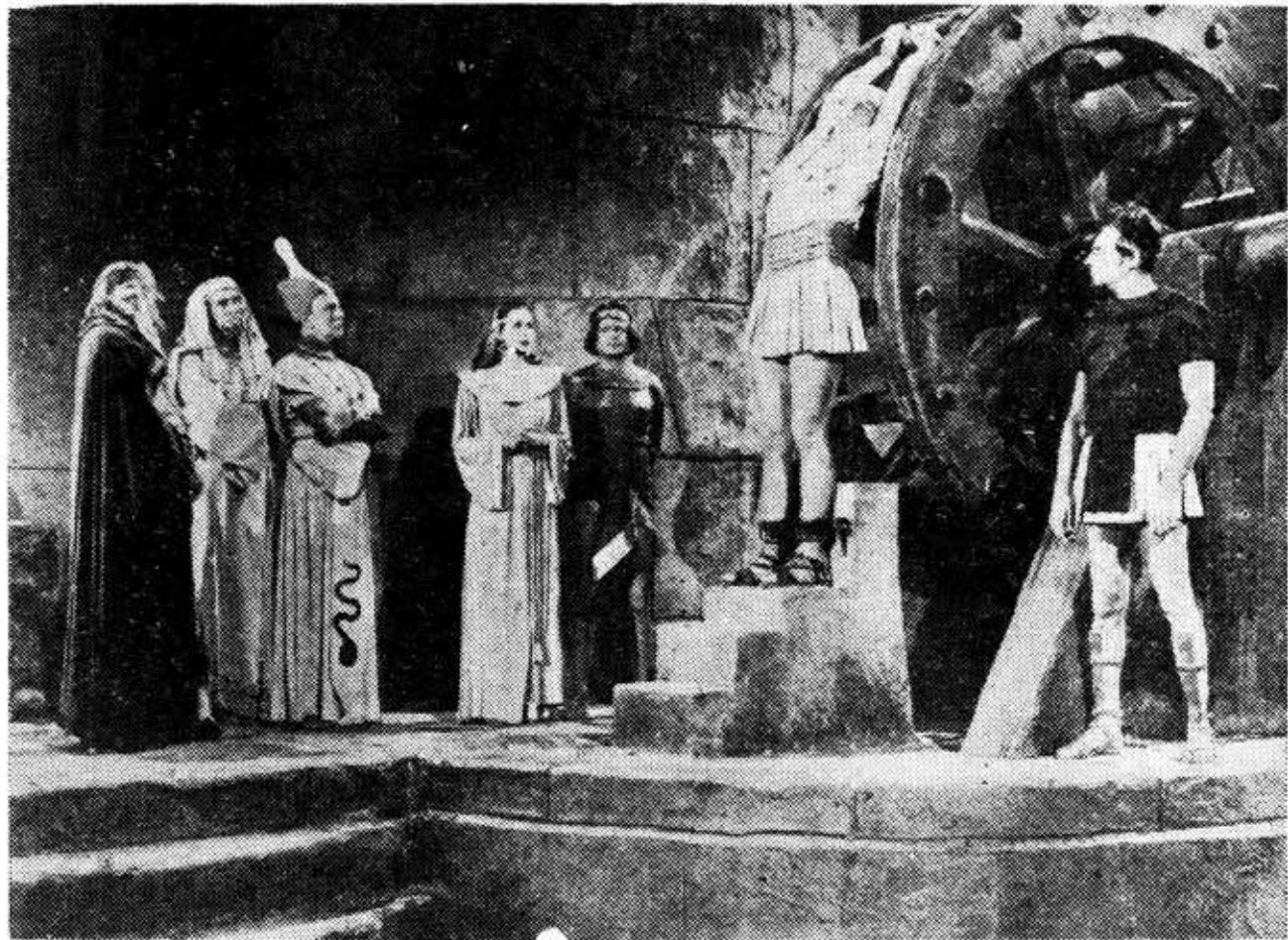
東映作品 毒 牙

市川 右太衛門  
喜多川 千鶴

ろうか。この場面はよく覚えていた。次は昭和の始めに東京の一角、巢に産ぶ声をあげた河合映画（大都映画の前身）について二、三、語りたいと思う。当時河合映画には他社では芽の出ない、もしくは人の落ちかかった二、三流所の俳優が続々と入社して主演クラスとして活躍したものだ。その環歌子、森野五郎主演で「火の車お万」がある。この森野五郎と云う俳優は松竹蒲田か



## スーダンの砦

マリヤ・モンテス  
ジョン・ホール

ら転じてきた人で恰幅のある美事な体軀でマスクも仲々良く私の好みの一人であった。簡単なストーリーを申上げると、環の扮した女俠客お万が、女乍らも滅法強く常に目障りと思ってお万を亡きものにせんとチャンスを狙っている。そこで風来坊のやくざ、森野五郎を使ってけしかけるが、彼は仲々承知しない。ボスは怒って五郎を捕えてヤキを入れる。このシーンが割合いと良く未だに記憶に残っている。先ず五郎が荒縄で後手に高々と縛りあげられ庭先に放り出される。裾は乱れて白禪が見える。浅黒い太股がむき出しにされカメラは下部の方から写している為、この白禪がハッキリと見える。用心棒の浪人が青竹の割れで所嫌わず打据える。縛られた軀を身悶えさせて苦痛から逃れ様とするかと思うにまかせない。揚句の果ては土足で彼の横面を踏みまえてぐりぐりとこづく。露出した両足をバタつかせ乍ら「畜生いやなものだ。サイレント映画なので、弁士が適当に説明し、時折タイトル出な

いに文句迄飛び出し演出効果を高めている。「もういいだろう。その位にしておけ」ボスの命令でやっと許される。鮎の様に投げ出された儘暫くこの状態でおかれる。このシーンは仲々楽しめたものである。後に不意乍らお万の寝込を襲ったが逆に説諭され改心しお万の味方となってボスを倒するのだが、この映画では彼が徹頭徹尾、純白の禪を随所に現わし乍ら活躍したのは心地好い感じがした。

次いで東亜キネマから転じたハヤブサヒデオがある。彼は日活、東亜と渡り歩き、さっぱり人気が出ないので大都に転じた途端アクシオンオンリーで大成功を収めた。大都（この頃は大都映画と改称されていた）の水が彼の性に合ったのだろう。小柄だが精悍な風貌ガッチリした逞しい軀、当時私の最良スターの一人であった。然も彼はヌードマニア？とも云いたい程、殆どどの映画にその裸身を晒し益々人気を高めた。寒風吹き荒ぶ二月に製作された「俺の鉄拳制裁」は何んと巻頭からグレイの海水パンツ一枚で現われ度肝をぬいた。いつも落第続きの浪人大学生に扮し或る夜、泥棒に衣服をゴッソリ盗まれてしまい、やむを得ず裸で活躍すると云うストーリーだった。又彼のヌードオンリーで忘れられぬ映画がある。「日本人はここにいる」御存知の方もあると思われるが、昭和の初期、当

時の三面記事を賑わした所謂際物映画である。満洲の匪賊に捕えられた数名の日本人が、奥地へ拉致される中にヒデトがいて、何かの動機でパンツ一枚の裸にされ後手に縛られている。荒れ果てた廃屋に連れ込まれ、日本軍の行動を云えと鞭で拷問される。逞しい裸身をのたうち乍ら仲々白状しない、果ては土足で彼の裸を踏みにする。暴れるとサポーターがチラリと見えて極めて印象的。縄尻を掴んでズルズル引ずり廻す、盛んに鞭が飛ぶ、そこで場面が変わって再び日本人達が更に奥地へ向って連れ去られてゆく。彼だけが相変わらず鞭痕も生々しい裸身で後手縛りのままだ。だが土砂降りとなり膝を没する泥濘の中を、牛馬の如く追い立てられる。彼の逞しい裸身も泥だらけだ。時々匪賊の鞭が飛びこの場面は迫力もあって仲々秀逸。突如日本軍の偵察兵が数名近寄って来る、匪賊達は発見されるのを防ぐ為茂った草木の蔭へ姿を隠し、捕虜達を一まとめにし「声を出すと殺すぞ！」と銃をつきつける。偵察兵達は「日本人は居ないか、日本人はどこにいる！」と口々に叫び乍ら、此所彼処と探し廻るが不幸にして発見出来ない。諦めて立去ろうとするこの時、ヒデトが死を覚悟して裸の儘び出し「日本人はここに居る！」と偵察兵に向かって絶叫するが匪賊の銃弾を浴びて泥濘の中へぶっ倒

れる。演出も隙だらけで迎も真面目に見られる様なものではなかったが、この縛りシーン丈は一寸したものだ。

偕トキー時代に入って昭和の始めに「成吉思汗の仮面」に先立つ事数ヶ月前パラマウントの「暴君ネロ」に一寸した拷問場面がある。チャールススロートン扮するネロが、キリスト教徒弾圧のため彼等の巢窟を奇襲せんとし、その在所を知る一人の少年を捕えて拷問する。責められる方が少年（十七、八歳）のためか正攻方でやらず専ら音響とか呻声で効果を現わしている。地下の拷問室へ通ずる階段の途中で、ネロが幕僚と共に引伸し器にかけられる少年の苦悶を悠然と見下している。ギギと鎖のふれ合う音、少年の呻き、続いて裸の背中に鉛の熱湯をそそぎこまれる。少年は言語に絶する苦痛の為遂に白状してしまふ。その儘悶絶する。拷問はこれで終るが、後の場面ではこの少年が生氣を取戻し、生々しい背中の傷痕をアップで見せ乍ら懊悩するシーンがある。

トキー最盛期に入って日本映画に目を移すと松竹京都作品の時代劇「女次郎長」がある大曾根辰夫の初期の監督で珍らしく川崎弘子の時代劇で、川浪良太郎を相手役にして派手なチャンバラを見せてくれた。川浪は一介のやくざで小政と云う役、弘子扮するお蝶の

子供が、お決りの悪ボスに殺される。これを小政が単身乗り込んで行き、子供を取返そうとするが惜しくも捕われて庭の井戸へ高々と吊されてしまう。この俳優はマスクも一寸した二枚目で、軀も素晴らしく逞しい。それが上半身裸で太いロープで後手に吊され、ブリーフを思わせる短い半股引をはいた足が片側だけ完全に露出し、筋肉隆起が素晴らしく目にまぶしかった。鞭打ちシーンは無かったが、この吊し上げが割合永く続き、特に印象に残った。（このプロマイド上半身のみ保存（後にお蝶が来て救助され、凄惨なチャンバラが展開されて大団円となる。）

偕戦後になって二、三年は、進駐軍の命令に依り時代劇の製作は極度に制限され、仇討や殺人を扱ったもの、所謂チャンバラ映画は絶対禁止の状態にあった。刀は差していても恰好だけでそれを抜いて振り廻す事は出来ない。今から考えれば嘘の様な話であった。千恵蔵、右太衛門、阪妻、長谷川、嵐寛等當時を代表する剣豪スターは陸に上った河童同然で、やむを得ず無理な現代劇に出演したが、ミスキャストも甚しいもので、いたづらにその醜い姿を晒すのみであった。その中で千恵蔵は多羅尾伴内シリーズ、或いは金田一耕助物で新境地を拓き、興行成績も仲々好く、現在でもこのシリーズ物は時折製作されてい



## 日活映画 裸身の聖女

長 筑  
波 久  
弘 子

る。右太衛門も現代劇に時々顔を見せていたがどれも詰らないもの、その中で「毒牙」と云う初期の東映作品がある。春原政久の監督で喜多川千鶴・山村聡が共演、今ならば失笑を買う程度のギャング映画らしきものであった。ラスト近く右太衛門が山村のボスに私刑される場面がある、スチールや、キヤビネを見ると、(スチール写真参照)右太衛門が階段の支え柱に上半身裸にされ両手首を左右に捻げられ、革紐によって固定されたまま、その逞しい胸に一、二ヶ所鞭痕が印され喜多川が彼の首筋にぶら下り、二人共悲壮なマスクをして如何にも思わせぶりのシーンがあるが、映画を見るとこんな場面は全然無く、何んと一パイ喰わされたかと思っても後のまつり、宣伝部は往々にし

て、このような手を使って宣伝効果を高めるが、何んともケチなやり方である。映画では右太衛門が裸にはされるが、縛られず狂気の如き山村の鞭が盛んに彼の背中へ飛び。その音響と山村の卓抜した演技が一寸した見もので、右太衛門が苦痛から逃れようと床を這いつくばって身悶えするシーンが、僅かなショックングを与えた。

洋画ではセントラルが一括配給していた当時の、コロムビア映画「ジャングルの宝庫」がある。お馴染みのジャングルジムシリーズの一つで、かつてのターザン俳優、T・ワイズミューラーのジムが、悪船長に捕われ倉庫の柱に吊される。そしてザームと云う平和境にある宝物の在所を云えと拷問を受ける。吊された腹や、胸、或いはあごに凄いパンチを数回受けて唇の端が切れて出血する。それでも容赦なく殴打は続くジムの苦悶をこらえる顔のグロウズアップ、着衣の儘であったが一寸した迫力のある責めシーンであった。次に映配提供の「フアビオラ」この映画はキリスト教徒迫害映画であるが、オリヂナル版は全二十数巻と云う長尺物であったが、本邦で公開された時は、都合で十二、三巻位に短縮させられ上映された。興味深い拷問シーンが幾つかあった事と思われるのに非常に惜しい事であったけれど、拷問ではないが捨て難い刑罰場面があったので一応お伝えしておく。マッ



シモジロッティの扮する正義派の代官が、教徒を逃がしたと云うので死刑に処せられる。黒いパンツ一枚にされて、野外の立木の枝に両腕をT字型に縛られ弓矢を以て射たれるのだが、この俳優の逞しい裸身は実に美事なものであった。素晴らしい胸板にそよぐ黒い胸毛深い太股を射抜いた無情な矢、苦悶の表情、既に読者の中にも観覧済みの方もあると思われるが、現在でも時折ナイトシヨウ等で上映されている。次は日本に輸入されず未公開の儘終ってしまったが、昭和二十二年三月頃アメリカで初公開され、我国では当時横浜にあったヤンキー専門のオクタゴン劇場で上映された、二十世紀フォックスの「マドレース街十三番地」がある。ヘンリーハサウェイの監督で一種のアクションもので、ジェームス・キャグニイの主演であった。キャグニイ扮するアメリカ諜報部員が独乙のゲスタポに捕えられ、マドレース街にある本部へ連行され凄惨拷問の数々を受ける。諜報部長のウオルター・エイベルは彼の捕えられた事を知り、人間の肉体がどの位の苛責に耐えられるかを知っていたので、涙をのんで爆撃隊にマドレース街十三番地を爆撃させる。キャグニイはゲシュタポの連中と共に粉砕される、と云う極めてスリリングなストーリーで、劇中拷問場面はどんなにか素晴しかった事と思われる。当時劇場前で偶然にもこの映画のスチールを一



日活映画 裸身の聖女 青山恭二、小沢昭一、長弘

見たが、裸体にされたキャグニイの凄惨な顔のアップや電線とか、トーチランプ、ペンチ、ニッパらしきものとか、科学的な用具で拷問されるらしい場面があった。ロッセリーニの「オープンシティ」もかくやと思われる程惨酷場面があった事と推察される、この映画が未輸入に終わったのはかえすがえすも残念な事であった。次に欧米映画提供の「スーダンの砦」がある。ジョン・ホールが巨大な引伸し器に縛られ拷問される所、これは着衣の儘なので興味半減。ユニヴァーサルスの「鉄路の弾痕」に於けるスチーヴンマックナリーの囚人が、上半身裸で両手を縛られたまま水槽に入れられ、何杯も水をぶっかけられる場面、ワイズミュラーのターザン映画で題名は失念してしましたが、一度に、二、三十人余の若い男達が、古代ローマを思わせるコスチュームプレイの儘逆吊りにされるシーン。これは実に「あっ」と驚く様な壮観極まる場面であった。

邦画では松竹のアクション物「地獄の花束」大木実が鎖で両手を縛られ、ウインチで吊し上げられワイシャツの背中を破られて太い棒で殴られる。但しこの棒はイミテーションシヨウで打つ度にヘナヘナに曲って失笑をかった。二十世紀フォックスのシネスコ第一回作品「聖衣」では、ヴィクター・マチ



ユアの奴隷がボロ衣裳のまま台の上に両手両足を拡げて鎖につながれる、上から鉄板（これもビニール製）が下りてきて腹や胸を締めつける。これは何んと云う拷問か始めて見る変った責め場面であった。パラマウントの「流血の大陸」ジョン・フロウの監督でアラッドの主演、彼はこの前に「最後の地獄船」

でも鞭打たれたが、この映画でもジェームス・メイソン扮する悪船長にさんざんに痛めつけられる。俳優も又辛き哉である。中でも船長独特の刑罰で太いロープで両手を吊られ、全身をぐるぐる巻きにされ海中へズリ降り、更にその儘船底を潜って、再び水上へ引上げられると云う凄じい刑罰、この刑罰にアラッドが

## 切腹風土記 (四)

女が腹を切った話 壬生三郎

淡海の神という女神が腹を切った。これが日本の切腹のはじまりだ。時代は何時か

何しろ神様のことだからわからない。その

次が足利八代將軍義政の愛妾今参局で長祿三年一月十九日、寺務方諸廻請に記録。

上杉景勝の妾十六歳は男衾して腹一文字

にかき切り、上杉禪秀の妻左衛門は応永二十四年二月甲州で腹十文字。その後数例あるも飛ばして江戸時代の文政三年十月二十六日には加賀浪人の妻が鎌腹を切ったと撰陽奇観は伝える。あわれなのは弘化年間奥州で無実の罪から薄命の身をなげいて切腹し、臓腑をつかみ出して死んだお八重（烈女阿八重伝）

明治からは明治七年四月二十七日新潟で

銘酒屋の細君が姦通を恥じて切腹したのを手はじめに、現在まで百余例がある。

昭和九年五月二十九日神奈川県下の温泉

「夢の宿」で両方とも二十歳の若い娘が同性心中をはかったが、時事新聞には、

「正午に至るも起きて来ないので女中が

室内をのぞいて見ると、二人とも催眠剤をのんだ上、刃渡り九寸五分（国民新聞には

三寸五分余）の短刀でお互いに咽喉と腹を刺し違えて昏睡状態にあるので……云々と報道している。

その時の創は前頸に長さ二センチ、深さ

三センチの切創と、腹部に於ては臍上約三センチの高さで長さ一・五センチ深さ二センチの切創であった。

前後二回に亘って掛られる。船底の突起物に全身を刺され、血だらけになって足の方から逆さの儘引上げられる。船員達の同情の眼を冷く無視して、メイソンは再び繰り返す事を命令する、今度は逆さの儘引き降され一回転して反対側へ引上げられる。アラッドは既に気絶してしまっている。これで許されるのだが仲々迫力のある刑罰シーンであった。

諸、最後には最近公開された日本映画を簡単に御紹介して、この拙い筆を置く事にする。本年度の七月に上映された日活映画「裸身の聖女」野口博志の監督で、筑波久子のハダカを売り物にした二級作品ではあるが中で一寸した男性責が現われる。最初に長弘扮するポン引の辰公が、水あげを誤魔化した罰として地下室へ吊される場面、上半身裸で軀にドーランをぬって演出効果をねらっているが穴戸錠のボスに二つ三つピンタを喰う所が好い。最後は青山恭二と共に二人で吊され、小沢昭一扮する小頭ボスに鞭打たれる。カメラは真上から写し二人の裸身がくるくると回転する、辰公の胸に烈しく鞭が飛び間もなくガックリと気絶する。一寸刺激される場面であった。（スチール参照）野口博志監督は元来肉体活劇オンリーの人で、この種のもので今後共どこし発表してもらいたいものである。

## (63) 夢遊病

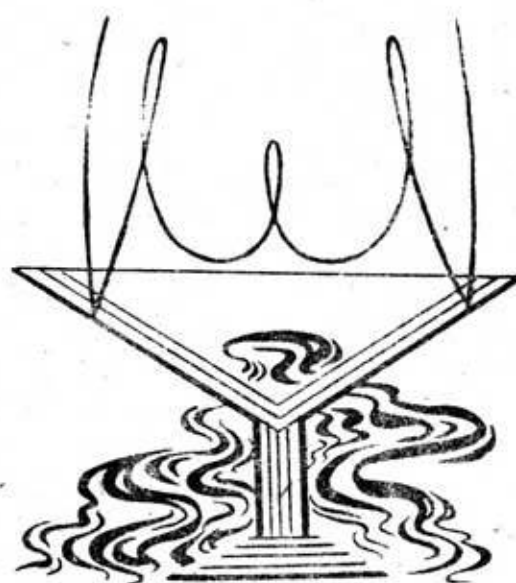
友人のNが面白い話を聞かせてくれた。

Nのまた知人の話だが、その知人の細君に妙なクセ（とNは言う）がある。

そのクセとは夢遊病。月に一、二回その奥さんは、大抵真夜中に夢遊病の発作をおこすという。

発作がおきると、ムククリ起上り、室のタミの上でトイレに入ったときと同じ動作をする。

ドアもないのにドアをあけ、じっさいに用を足し平然とドアをあけて出てゆくとこるな



## マニアックな愛好家の記録

マゾヒズム あれこれ

とやま・かづひこ

どやるといふ。

たまたまNが、その知人宅で夜おそくまで話し込み、ついに電車のなくなる時間となつたので泊り込んだ、その夜例の発作が起り、それをはじめから終りまで見させてもらったというのである。

「それがね、実際に用を足すんだよ。イヤ、くさいのなんのって……」

Nはマユをひそめる。

御主人は、さすがにNの手前、その『シェータイ』をかくそうと奥さんを止めようとすののだが、すごい力で全然、手におえないのだ、どうしようもない。

しかも、その奥さん仲々の美人で、まだ年も若く、その量も相当だという。

うらやましい話だ！

かづひこは、そつとため息をもらす。

御本人は、ねむり乍がらの粗そうだから、おこるわけにもゆかず、後始末をだまってるのだそうだ。

御本人は無意識なのだから、恥づかしいも何もない。

モノがモノだけに、入手には骨を折るかづひこは、この話を聞いてうらやましくて仕方がなかった。

室一ぱいにひろがる臭いの生々しさ！



夢うつつに用を足す美しい女性！

それを始末する男性。

この奥さんのお世話をしたいものだ！こ  
うかづひは考えるのだった。

### (64) のこり香

場所 東京日本橋茅場町公園トイレ。

とき 七月十二日(土) 昼さがり

つとめを終えたかづひは、これからボリ  
シヨイサーカスでも見にゆこうかと思ひなが  
ら、何の気なしに、このトイレに入つた。  
用を終えて出かかる戸口で、入れちがいに  
トイレに入ろうとする女性にすれちがう。

近所のオフィスにつとめる女性でもあろう  
か、年令は一寸とりすぎ気味の三〇才位、白  
のツウピース。ポツと上気した美しい横顔、  
その女性は小走りに紙をもみながら、ドアの  
中へ姿を消した。

そこで、かづひはドキンとした。

こうなれば、サーカスなど問題ではない。  
そのトイレのドアが真正面に見えるベンチに  
かけて、さも人待ち顔に。スポーツ誌をひろ  
げる。三分。五分。ドアがあく。彼女は軽く  
手を洗うとむこうへ消える。

入れかわりに、かづひはドアの中へ入る  
鼻をつく香料のにおい。

(勿体ない！)

心のなかでつぶやく。

いくらあこがれのものでも、最早手の届か  
ぬところにすてられたそのもの。

もしも、あの人が、かづひこの手のひら  
か、顔の上か、胸の上かへ賜ったら、かづひ  
こはありったけの金を捧げたであろう。

ひとの気も知らないで、どうせいらぬもの  
なら、かづひこに下されば、どんなに感謝を  
するものを。

知らないとは云え、残念きわまりない話。

金で買えない、あこがれのものを眼前に見  
るもどかしさ。これも又、白昼のフアンタジ  
ア！

### (65) 犬のクサリ

何処からか、流れて来て住みついた一匹の  
野良犬。

それが案外かわいいというので、女子社員  
一同が決議して会社で飼うことにした。

飼うとなれば、名前もいるし登録もいる。

放し飼いは禁物とあって、クサリを買って来  
る。タロウ、それが犬の名。

女子社員が出し合って、頑丈なクサリと皮  
の首輪をデパートから買って来た。

昼休み、女の子たちは宿直室へ集まって珍  
らしそうに首輪やクサリをいぢくり廻してい  
た。

中の一人、かづひこの眼からは、サジエス  
チエの気味あるけい子が、いたずらっぽく目

を光らせて。

『ねえ、あなた。この首輪してみない？』

かづひこに言うのである。

『……』

かづひこは、否とも良しともつかぬ表情で  
いる。

『あんた、きっと以合うわよ。首輪とクサリ  
つけてみたら、あたしが飼ったげる』

こう言ったものだ。

『何サ、男らしくしなさいよ。ほんとに、首  
輪でしめられたいクセに』

断定するようにこう言うと、いきなりクサ  
リを取上げ、

『両手を出しなさい』

命令を下し、おもわず差出したかづひこの  
両手をグルグルとクサリでしめ上げ、グイと  
引っばったのである。

痛かった。その場に居合せた十三、四人の  
女子社員、あわれんだような、さげすみの  
声を浴びせられて、一としおの苦痛を感じた  
が、同時に、わがあこがれのけい子さんが、  
自分を犬にしてくれた。クサリで責めてくれ  
た。しかも大ぜいの女の子に囲まれて、と感  
じると、背すじをゾクッと快感が走るのだっ  
た。

『立て』

『座れ』

『チンチン』

次々に下される命令を、さながら犬に生れ変わった心境で、渋々をよそおって、ノロノロと実行してみた。

その楽しさ、嬉しさ!、これも又、かづひこの言う、ロマンティック・マゾヒズムの一つであろうか。

## (66) 馬ボーイ

トルコ風呂が、身体の疲労回復によいと聞いて、この頃妙に肩のこりを感じるかづひこは、しばらく行かなかった銀座の東京温泉に出掛けた。

番に当たったトルコ嬢は、富子さんと云う十六貫はたっぷりある力の強そうな女性で、思い切ってはずんだチップの手前か、物すごい怪力で、身体をもんでくれる。

富子さん自身、玉の汗を流し、ハッハッと呼吸も荒々しく力をこめて、リズムカルなマッサージをしてもらっている内に、こちらが馬で、今御主人を乗せて馬場を一周しているような気分になってきた。

ハッと息を出しながら、両手に満身の力をこめて、背筋をギュッと押しつける。

痛いまでのその刺戟、そのしゅん間は、文字通りに、馬乗りという状態だ。

『痛いでしょうか?』

小声でささやく。

『いやいや、肩がひどくこっているんでね。』

力一杯やってくれ給え』

—どうか御主人様、もつと手荒く馬奴を扱って下さいませ。

という心をこめて、モット強く、モット強く、その刺戟を求めた。富子さんの力と体臭に、酔い痴れた。七月十五日の午後の楽しいひととき。

## (67) 理髪店にて

ある理髪店の経営雑誌の質問欄に、

(問) 女の店員が、お客様の顔にかなりひどい傷をつけ、血が流れて止まらず、化膿して三週間医師に通ったからと、治療費を請求されました。理容師は、こうした時どの程度の責任がありますか?

×  
というのがあった。

法律問題は別として、過失にせよ、美しく若き理容師から、カミソリで顔を切られた時、あなたがMだったら、どう感ずるだろうか。

かづひこの好みの女性だったら、顔を少々切られるくらい。むしろ快いので、損害賠償を取るどころではない。お礼を出してもよいとおもう。

かづひこの行きつけの理髪店で、美しい女店主がトイレに入り、出て来るなり手を洗いもせず、いきなりカミソリを取って、かづひ

この口のまわりをそったことがあった。くちびるをつまむその手は、トイレに入って出たままの流さない手。

かづひこは眼をつぶり、気づかぬフリはしているものの、思わず胸を高鳴らせたことがある。

おそらく、かづひこのくちびるをつまんだその指先は、そのものにはふれなかったにせよ、トイレへ入ったそのままを、かづひこのくちびるに運んだ——ことに結果としてなるのである。

ピカピカのカミソリが眼や鼻や、のどの先でキラキラ光る。一寸手許が狂えば、顔やのどが切り刻まれる。

相手が美しいドミナなればこそ、このスリルはすてがたく楽しい。スパッと鼻を切り落とし、眼玉をえぐり耳をそぎ、最後にはのどぶえをサツと切ってくれたら、どんなに楽しいことか。

百五十円の出費で一時間以上も、うつらうつらと、こんな幻想にふけっていられるのだもの、世の中は楽しい。

## (68) お供の奉仕

オフィスで、昼食のあとの一休みに、同僚が顔を合わせて、よもやまの話にふけるのは楽しいものである。

偶然にも、今日の話題は、かづひこ好みの



ものなので、そっと録音してみよう。  
赤インクを或る量呑んだら、通じが赤く染まって出て来るか？

これが議題。

経理のKが、話題の提供者らしく、彼は、

『あたり前さ、赤いウンコが出るよ』

と断定するし、宣伝部のTさんは、

『いちがいにそうはいえない。呑んだ分量にもよるが、おれは赤くはならないと思う』

五、六人の仲間は顔を集め、染まる説と染まらぬ説に分れて、ケンケンゴウゴウ。

『なら、実験してみようじゃないか。何ならカケしてもいいぜ』

と発言者のKが提案する。

『どうだい、美人のウンコなら、キタナクないっていう位のもんだ。社長秘書のNちゃんに、たのんで呑んでもらおうじゃねえか』

ひょうきんな配達係のHが、ズバリ言う。

N嬢とは、美しいがために社長秘書にバツテキされたと蔭で云われるくらいの麗人で、小柄ながら社内一の美女。

カケをする以上、双方が実際に排泄された便をつぶさに見なければ意味ない。

だが、ヤロウのウンコなんかきたなくて見るのはイヤだ、という意見が多く、けっきょく白羽の矢がNさんに立って、Nさんにたのんで試験台になってもらい、少量の便を、みんなできわしく検分しようというわけだ。

こんなたのみをNさんが、オイソレと聞いてくれる筈もなく、みんなとしては単なる座興として議論しているのである。

『でもねえ、このあいだうなぎのきもを沢山食べたから、あくる日まつ赤なお通じが出たわよ』

とつぜん、横合いから仕入のS嬢が口を出す。

『わあ、おめえさん、色まで眺めながら、たれるのかよお』

誰かが、ひょうきんな調子で言う。

『うん、Nさんなんかたのまなくたってあたしが、いつでもして見せて上げる、どお、トイレまでついて来たら……私のうんち、拌む勇氣のある男の子いること？』

Sさんの止めの一言で、昼のうんこ会議はザ・エンド。

だが、ここがかづひこは考える。

トイレまでお供して、直接、出るところを拌み、そのにおい、色、ときによれば、そのお味までためさせて載ければ、これに勝るよろこびはあるまい。

むかし、ある人は、三年間学費を出して頂きたい。万一、落第して世に出られないようなことがあれば、お詫びに一生、御主人の御用便のお供をつとめ、尻拭き係をつとめて奉仕すると、広告し、物ずきな貴婦人に学費の面倒を見てもらうことに成功した人がある

と文献で読んだことがある。

貴婦人の御用便のお供をするというテーマはマゾヒストの夢であり、そこからはいろいろと楽しい幻想が生れてくると思う。

## (69) カラーグラフ

七月二十七日創刊の『週刊明星』六頁

『ヒップ・ナンバー』

という口絵、太ももをムキ出しの豊かなヒップの女性が、さっそうとオートバイの同乗シートに馬のりの写真は、色つきで妙に情感をさそう。

じっと見つめていると、シートが、かづひこの顔に見え、何か御主人さまをお乗せして自分が懸命に走っているような心地にさせる。からだの折り曲げ具合、ヒップのポリウムいじめてほしい線の所有者だ。一見をすすめる。

## (70) 紙によせて

朝の通勤電車は、快適なスピードでつっぱしっていた。

中野から、新宿へヒタ走る、そのリズムカルな振動に、快よく身を任せて、軽くとじた目を何気なくソッと開いたかづひこは、ナナメ向うの女性に、ふと注意の目を向けた。オフィスへゆくのであろう、若く美しい女性、流行のサックドレスがよく身に合う。

ハンドバックから、二枚のチリ紙を取り出した彼女は、ソレをたたんで顔のあちこちを拭き出した。

ヒタイから眼のまわり、小バナ、口のまわりくちびる、かわいいのどもと、クルクルと一とかたまりの紙を、面白いようにもてあそぶのだ。

それで終りと思うたら、まだまだ作業はつづく。こんどは、バラ色の胸もと、両わきの下の汗と、上半身をまんべなく撫でさすりそれを更に、固く丸めて、口のもとへ近づけツバキでしめし、ハンドバッグのシミまで拭う様子。

今までかづひこは、車内でチリ紙を使う女性が多ぜいみているが、こんなに、大げさに見える、手拭かタオルを使うほどの振舞いをみたことはなかった。

いつの間にか電車は、新宿をすぎた。

彼女はヤツと『作業』を終った。

問題の紙の玉は、やわらかそうな彼女の掌にソツと包まれている。

次の駅はお茶の水。

と彼女は、ソツと紙の丸めたのを、自分の腰のうしろにまわす。窓の外を眺めているかづひこは、こうなると、その紙玉が、気にな

って仕方がない。  
電車はお茶の水に入り、彼女は下りて行った。

すかさず、かづひこは、彼女のあとに座り直し、ソロソロ人目に知れぬように、そのプレゼントを握りしめる。

わがもちものとなった紙玉は、ややしめりをおび、口ベニのあともある。何やら、きいろい、食べカスとも見られるモノは、彼女の口の端の、ツバキのあとか、心なしか、よい香りだ。

鼻汁をかんだ、紙玉とは又異った、すばらしい残り香。但し、ハナ汁とちがって、塩っぱさの余りないのは残念だが、コレはコレで又良い。

かづひこは、会社への道々、その紙丸をムシヤムシヤ食べていた。

この思いがけない、朝のおくりものは、その日、一日中、かづひこを幸福感に包んでくれたのだった。

## (71) ヘソのフアンへ

芥川賞作家の開高健が編集する雑誌『洋酒天国』26号の、ピンアップグラフは、新東宝の万里昌代のセミヌード。

ところが、彼女のヘソが、すみからすみまで写し出され、それも天然色だけに、ナマナマしいポリウムがあつて、さすがのかづひこも、しばし、うっとり眺めやった。

ヌードも数多くみているが、これほど生々と、中の、ヒダまでくわしく描いたのは珍らしい。

ヘソフエチの諸兄には必見をすすめたい。

尚同誌は、千共30エン、東京都中央区日長橋茅場町二ノ一〇、洋酒天国社あて、代金は切手代用で申込み送ってくれる。

同誌の宣伝をするのは本意でないが、同好の諸兄にはぜひすすめたい。(つづく)

## ◆代理部分譲品総目録◆

### お申込次第急送

女性緊縛フォトの部として新版十七組、最新版『縛り』写真五組、新人モデル新作姿態六組、女性「責」写真集二十組、花坂

嬢優美姿態緊縛集四組、女性緊縛フォト、

オンパレードR組百花撰百組、等、マゾヒズム資料の部として二種、女性切腹フォトの部として六組、女性浣腸写真の部として

二組、女性禪美写真二組外、分譲品を満載してあります。八円の切手封入の上お申込下さい。急送申し上げます。

大阪市阿倍野局私書函第十四号

天星社代理部



# 涙は宇宙空間に輝く

—— 悲運に悶える緊縛の令嬢天文学者 ——

浦 田 紀 夫

## (一) ロッキーに捕われた白人令嬢

一九五八年五月

山また山、奇岩怪石の聳え立つロッキー山脈の奥深く、谷間の岩蔭伝いに行く一群の人影があった。

何れも逞しい男、長靴に身を固めた五人の男に囲まれて——あッ、見よ！ 縛られている女！ 白人の若い女が酷たらしい緊縛の姿で、よろよると曳き立てられて行く。

それも——普通の女ではない。相当の上流家庭に育ったと見られる貴婦人だった。鳥の羽根のボンネット。大きなカラーとベルトのついた袖の短いグレイのジャケットに、同じ色のギヤザースカー。六十六ゲージのフルファッション靴下に、高く細い踵のグレイ

のパンプス。ほっそりした両手に純白の長手套。指に嵌めたルビイの指環が薄い白手套を透して輝き、胸元に真珠のネックレス、いぶし銀のイヤリング、長めに柔く波打つ金髪——その服装の一つ一つが特別上質の豪華な身なりだった。

その貴婦人が——そのか細い両手には冷く光る鋼鉄の手錠、細い鉄鎖。腕も胸もくびれた胴にも深く噛み入る。七条、八条の鉄鎖。腿にすら、ギヤザースカートの上から膝頭少し上に二条の鉄鎖。すらりと長い脚の両足首には、鎖で連結された足鎖が、それぞれ嵌められ、やっと一步に十センチも辛うじて歩める位だった。顔は——白い面が更に血の気を失って蠟人形のように蒼ざめた額の下から、黒い眼帯が革ベルトでボンネットの下へと締めつけて眼隠しをし、高い鼻の下を革の箆口具が容赦なく締めつけて、猿ぐつわを噛

ませてしまっていた。

女は、こうして五人の男に囲まれて曳き立てられる。眼隠し猿ぐつわの顔を伏せ、力無く縛られた足を交互に動かして――。

岩角に躓いてはよろめき、顔をのけぞらせて喘ぐ。「う、う」「く、くつ」と呻きが漏れる。泣いているのか？ 否、涙はすでに泣き尽して涸れてしまっているようだった。

男達は声高に笑い、女を後から小突く。罵る。だが女は、耳にも填耳栓をされてしまって、何も聞えないのだった。

女の胸――ギッシリ縛られて膨らんだ乳房が、ジャケットに包まれたまま大きく波打っている。青白いこめかみが苦しげにひきつる。くずれ落ちそうになりながら、女は必死で自分を取り直そうとしているのだ。

一分間、一メートル五十の速度、よろめき倒れそうになり、岩の上に縛られたまま男達に押し上げられては歩みを移し、谷間の崖下を廻って――三百メートルは優にあらうと思われる断崖の下へ出た。

「やっと来たな」

「午前十時から午後五時まで何と七時間、昼食したから六時間半か。たった五百メートル、小娘も身にしみたるうが、俺達の方こそ参ったよ」

「さあ、到着だ。荷造りをキチンとしろよ」

女は、くずれるようにその場に引き倒された。細っそりとした足首に足錠が嵌めかえられる。両足はピッタリ揃えてつながれた。鎖がその上をギリギリ縛る。

ギヤザースカートの上から鎖が腰下、太腿膝頭と十条ほど絡みついていた。膝下に、そして脹脛に深く噛み入る縛しめ。

「この細っそりした脚で、よくこれまで我慢したな」

一人の男が、ストッキングの上から脚をつまんで笑った。

「お嬢さんだものな。途中で死んじまいはしないかと随分心配したよ」

「大丈夫。こんな細い体をしているが、テニスとドライブで、かなりスポーツはやっているんだ」

崖の上から、スルスルと長い太いロープが降りて来た。その先に頑丈な鉄のフックがついている。憐れな捕われの貴婦人は、縛しめをフックに掛けられた。

合図――ロープはギリギリと引揚げられる。

「う、うッ、う」

死んだように身動き一つせず、一切の自由を奪われた貴婦人の口から呻きが漏れた。だがロープは、そのまま三百メートルの崖上へ女を宙吊りにしたまま捲き上げられて行く。

## (二) K・K・K団の恐怖

不運な貴婦人の今後を記す前に、彼女のこれまでの運命の跡を辿って見よう。

ボストンの郊外のあるアパートへ、最新の高級車が音もなく乗りつけた。軽やかに降り立った若い令嬢――エレベーターで四階へ、一室のボタンを押す。待ちかねたように扉が開く。女――日本人だ。「ハロウ、ミス・カオル、出かけましょうよ。時間は遅れなかったわね」

白人の貴婦人と日本人の令嬢は、連れだって貴婦人の運転するオープンカーに乗り込んだ。二人は土曜日の午後を郊外ヘドライブを楽しむ約束だったのだ。

春風――

「ねえ、ミス・スカレット。近頃の南部の騒ぎって本当にひどいわね。貴女も大変でしょう」

「ええ、そうよ。ミス・カオル、黒人だって同じアメリカ市民よ。」



差別虐待なんていけないわ。でも私達、こうして黒人平等の運動を  
すると、K・K・K団（南部を中心に一部白人で作られている黒人  
差別、排撃のための秘密結社。カー・クラックス・クラン）がボス  
トンだって、かなり妨害するのよ」  
「そうらしいわね。リンチだってあるんだってね。でも、ミス・ス  
カーレット。貴女も気をつけなければいけないわ。貴女のような—  
と云っちゃ変だけど、大富豪のお嬢さんが運動するのは随分目立  
ってよ。それに科学者としても有名なんだから」

「有難う。でも、お互に貴女だって私だって、ヒューマニストであ  
り、自然科学者でしょ。科学者は真理に忠実でなければならぬわ。  
わ。だけど貴女のように私を理解して下さる人、実は少いのね。貴  
婦人の道楽だなんて云われることもあるのよ。だけど私、今のよう  
なこと許せないわ。アメリカ民主主義の誇りのためにも——」

二人の会話から解るように、白人の貴婦人はスカーレット・ハワ  
ード嬢。ユニオン太平洋鉄道会社の令嬢で今年二十二才、天

体物理学の研究者として学界から囑望され  
ていた。その上、彼女の美貌と整った容姿  
は、全米一の美人と折紙つきだった。日本  
人の女性には、同じく天体物理学専攻の留学  
生、カオル・チノ・千野薫さんだった。日  
本で豊かな上流家庭に育ち、東大を卒業し  
たこの令嬢は、両親の反対を押切って單身  
渡米し、苦学までして研究している。やは  
り二十三才の妙齡の美人だった。

だがカオルの心配は、余りにも早く事実  
となって現われた。二人の乗った車が河畔  
に差しかけた時、後方から物凄いスピー  
ドで追いつがった車から銃声がして、タイ  
ヤを射抜かれて停車した。その後は一々、  
書くまでもない。

二人の胸元に突きつけられるピストル、  
あたりに他の人影はない。米国貴婦人と日  
本婦人の留学生は、忽ち両手両脚を麻縄で  
縛り上げられ、口に猿ぐつわを嵌められて  
しまった。



そして男達——K・K・K団員等は、手早くスカレット嬢の車のタイヤを取りかえると、スカレット嬢を後部ボックスに、カオル嬢は自分等の車の後部ボックスに、それぞれ手足を縛ったままの体を折り曲げて押し込めた。ボタンと蓋がしまる。二人は、あつという間もなく誘拐されたのだ。

### (三) 第一種縛装

「スカレットを連れて来ました」

貴婦人は猿ぐつわに縊れるほど締めつけられた顔をくやしげにあげた。両手は無惨に後手に縛られている。鳥の羽根のボンネットが髪からずり落ちそうだ。ストッキングが歪み皺になっている。

「まあ、帽子だけキチンとしてやれ、御令嬢だからな。ストッキングも直してやれよ。噂にたがわぬ美人だなあ。ハリウッドにも、こんな美人がいなくていいのは成程本当だったね」

スカレット嬢は、余りの侮辱と羞恥に身悶えした。男達が、令嬢のストッキングをのぼし、ガーターをかけ直す。

猿ぐつわが外された。後手の捕われの姿でデスクの前に立たされる。

眼の鋭い中年の紳士風の男。

「名前は」

「スカレット・ハワードです」

「間違いないね。処で今日、貴女に来て頂いたのは、もうお解りと思うが、今後黒人問題から手を引いて欲しいのだ。もし手を引いてくれると約束すれば、五十万ドルと引換えにお宅へお送り致します。しかし承知してくれぬ場合は、貴女の体も命も、どんなことになるか解りませんよ」

「……………」

「いいですか、貴女のような科学者の知恵でも想像もつかないよう

な辱めと苦痛が与えられますよ。貴女は永久に監禁される事でしよう。そして拷問されるでしょう。その上、もっとも想像もつかない辱めを全アメリカ人の目の前で晒すことになるでしょう。そして最後には、科学者の貴女にふさわしい最大の恐怖の後に、死に就かなければなりませんよ」

スカレット嬢の蒼白な顔は、苦悶に歪んでいる。タラタラと、こめかみのほつれ毛を脂汗が伝う。しかし歯を喰いしばって首を横に振った。

「宜しい。貴女のような人が、そうハッキリ仰言れば、もう二度と云いますまい」

男は

「この女を第一種縛装、直ぐ包装して本部へ空中輸送。A級拷問と地下百メートルに重監禁！」

と命令した。スカレット嬢は忽ちその場に捻じ伏せられ、先に書いた通りの緊縛を受けたのだ。一切の自由は奪い去られてしまった。

「おしまいだわ。いじめられ、なぶり殺しにされるのよ。でも私——あつ、ミス・カオル、カオルは？」

緊縛貴婦人の体を折り曲げて詰め込み、ワイヤーベルトで封をした箱は、ボストン市のビルの屋上からヘリコプターで飛行場へ。そしてジェット機に積み込まれて、その夜どこかへ連れ去られていった。

余りの驚き、恐怖、絶望、苦痛、屈辱、疲労——貴婦人の喉はカラカラに渴き、体がバラバラにちぎられ引き裂かれるような縛装の痛み、失神し発狂せんばかりの心のあがき。身動き一つ出来ぬまま

貴婦人も人間である。尿意が迫ってくる。辱めに呻き泣きむせび



悶えても、密封された箱の中ではどうしようもなかった。苦しみ続け、悶え疲れて遂に自制を失うスカレット嬢。

こうしてその翌日未明に、この憐な捕われの令嬢はソルトレーキシティの飛行場についた。そこからヘリコプターに積み替られて、六百キロをへだてたワイオミング州の山中へと運ばれる。

「来た、来た」

谷間の草地で焚火の煙が上る。ヘリコプターは、待ち受ける四人の男達の間に着陸する。箱が下され、封を切って引きずり出される女囚スカレットは、死んだようにグッタリと横たわる。

「捕えたか、お手柄、お手柄」

「なるほど相当な別嬪だな」

「じゃ、連れて行くか」

「どの位あるんだ。本部まで」

ヘリコプターから出た一人の男は、四人と行を共にし、今一人の操縦士はヘリコプターを再び空高く離陸させた。

貴婦人誘拐の経過は、このようなものであった。

日本女子留学生、カオル・チノはどうなったか。その前にもう少しスカレット嬢の運命を見よう。

#### (四) 地下百メートルに監禁 七日間

スカレット嬢は崖上に引き揚げられて横たわった。

(苦しい——何時になったら、この苦しみから許されるのだろうか。まだ、これから拷問されるのだろうか。ここは何処だろうか？ ひどいわ、本当に……拷問されて殺される？ ああ、悲しい……) 体を起され、抱き上げられた。

(また、どうかされるんだわ……)

何か固い動くものの上に、背を下に仰向けに、体を弓なりにのけぞらせて縛りつけられた。

馬の鞍の後だ——とは、かの女は知る由もない。

鞍に跨った男——ヘリコプターで女囚を護送して来た——が、ピシリと鞭を入れた。

「ウウッ、ウアッ。ヒ、ヒイッ。ウ、ウェッ。ク、クイッ」

(ああ、苦しいッ。たすけてエーッ。体がちぎれる……)

おそろしい泣き声、呻きに目もくれず、馬は一気に三百メートル先の本部へかけつけた。わずかに二、三十秒、しかしその間の苦痛といたら……。

捕われの貴婦人は、出て来た男達に引渡されて本部へ運び込まれた。本部と云っても、一見、小さな山小屋程度に過ぎない。だが一度、壁の隠しボタンを押せば地下への階段が口を開き、その中には真昼のようにあかあかと照明された夥しい部屋、廊下が並んでいる。それも一階だけではないのだ。

緊縛の女体は、一室の大きな台の上に仰向けに横たえられた。

「御苦労だった」

デブプリ肥った、眼の細い四十前後の紳士がその男に犒いの言葉をかけた。

「副団長、無電の命令でもう御存知と思いますが、一応ボストンで団長直接の指示をお伝えします。女囚スカレット・ハワードは当分、この第一種縛装のまま監禁、定期的に拷問を加えること。一週間後、再訊問すること。但し処置の決まるまでは、傷めぬよう注意すること。以後の処置については、追って指示する」とのことです。なお、同時に捕縛しました一名の婦人については、追って連絡します」

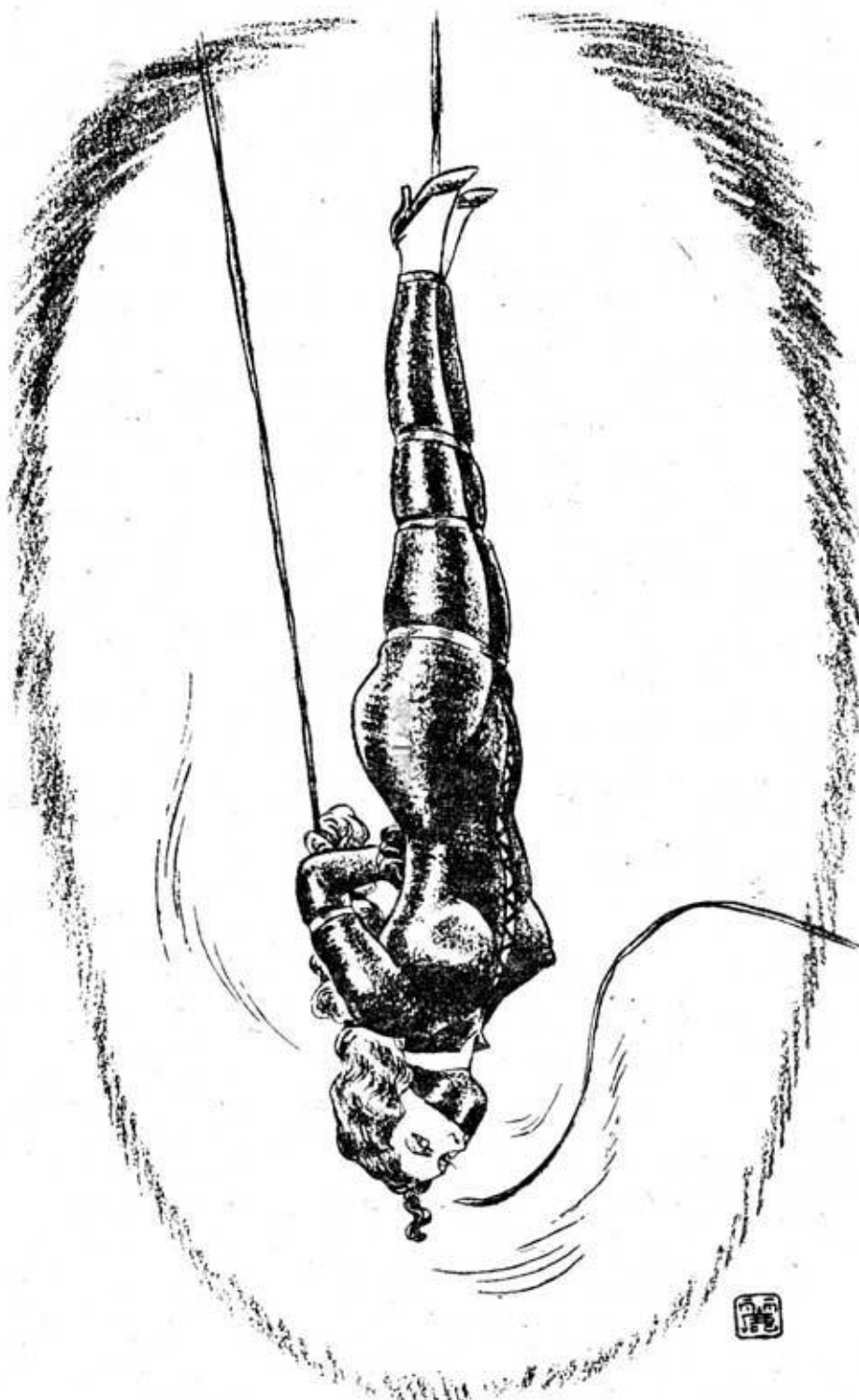
スカレットを押し込めた鉄箱は、エレベーターで地下五階へ運ばれた。そしてそこから更に——一室の揚蓋が開かれると、一メートル四方の穴がポツカリと真暗な口を開けている。

鉄箱はロープでスルスルと、その底へ下されて行く。深い、実に深い。

蓋が閉され、すべては暗黒の底に沈んだ。

地底には時間と云うものはなかった。

(ああ、もう駄目、何もかも駄目。苦しい……もう永久にこのままなんだ。こうして責め殺されるのよ。そう……縛られて一切を外界から遮断される前のあの男の言葉——「この女を第一種縛装、すぐ包装して本部へ空中輸送、A級拷問と地下百メートルに重監禁！」) 　　そうよ、箱詰めになされて、たしかにヘリコプターに乗せられた



わ。そして、あれはたしかにジェット機。そして、ヘリコプター。それから何時間も小突かれ虐められて歩かされ、宙吊りにされて今、地下百メートルに埋められてしまったのよ。どうなるのかしら、もうこれっきり？ そうだわ、あの男、まだ云ってた、監禁、拷問、そしてもっともっと大きな辱しめをアメリカ人の目の前に晒すんだって？ まだ虐められるのよ。でも……ああ、もう何日経ったのかしら。苦しいわ、身動き一つ出来ないなんて。ああ、何も見えない聞えない……こんなことなら、もっと虐められた方がましな位よ。苦しい、悲しい。みんな……お父さんもお母さんも、友達も……みんな私がこんなになってるなんて勿論、夢にも知らないのね。ああ、ミス・カオル、貴女どうなったの？ やっぱりこんな目に逢ってるの？)

手足を酷たらしく縛られ、体を折り曲げストックキングを穿いた丸い剥き出しの膝頭に顔をピタリ伏せたまま、頸すじまで縄をかけられて箱の中に坐らされているスカーレット。

幾度か失神し、意識はぼんやりしては回復し、夢幻と苦痛の間をさまよって——実に百六十八時間が過ぎた。

## (五) 異国の女囚 日本女子留学生

日本婦人留学生、カオル・チノはどうしたか。  
ボストンの例のビルの一室。縛られた女は恐怖に目を大きくうつ



ろに見開き、細っそりした体をわなわな慄わせていた。

「どうしますか？」

「もともと、こいつには用はないし、どこかへ売ってしまいますか？ それとも、いっそ殺してしまいませんか？ しかし、これだけの美人じゃ惜しいが……」

「スカレットの友人で天体物理学の研究をしているといったな。

よし、じゃ、これも本部へ送れ。使い方は後で指示する。すぐ一種縛装！」

こうして、スカレット嬢より一日遅れて千野薫さんも、あの谷間を喘ぎ呻きつつ曳き立てられる身となった。

オレンジ色のスーツ、スカートに、同じ色のハイヒール、濃色のストッキング、黒の網の目の手套、白絹のタイを襟元で結び、黒いロングヘアを後でまとめてソフトな巻き髪にし、茶のボンネットの日本女性、眼かくしだけ外されて女囚の歩みを移す。

遠い異郷の空に攫われて、黒い瞳は涙で一杯だった。

## （六） 革の拘束服

地下から引揚げられたスカレット嬢は、今度は谷川へ水漬けにされた。

谷川の中に立てられた鉄柱に、緊縛の姿のまま胸と胴をギリギリ縛りつけられたのだ。

冷い！ そして強い流れは忽ち縛られた両脚を浚って、どっと押し流そうとする。だが上半身は柱に縛りつけられている。

ウウツ、ククツ、ヒイ、ヒイ、ヒイ……

五月の谷川、水中に没した体は骨まで冷え切り凍りついてしまっただった。

やっと縛しめは解かれた。マッサージされ眼かくしを急にとって失神せぬよう徐々に光を回復する。

グシヨ濡れの衣服もストッキングも、すべて脱がされた。半ば失神している上、十日近くも縛られ続けた手足は、直ぐには自由にはならなかった。

僅か一坪の監房に横たわる令嬢。

「スカレット嬢、如何です。これなら黒人問題から手を引かれませんか？」

副団長が笑って云った。

「……………」

「お嬢さんには少し薬が効き過ぎたようですね。われわれも大袈裟なことは好みませんので、この程度にして置きたいのですが……」

恐怖の十日間が、スカレット嬢を全く打ち砕いていた。暖いお嬢さんの家庭——ピアノとコーヒー、高級車と柔いベッド、そして好きな研究。ああ、それがもう一度……。しかし何という残酷、しかも私は正しいのだ。それなのに——。スカレット嬢は首を振った。

「宜しい。この女を第二種縛装、三号監房に監禁！」

「アアッ……」余りの恐しさに、スカレット嬢は自分でも訳のわからぬ叫びを上げた。

見よ、そこへ持ち出されて来たのは……。

スカレット嬢の体は、先ず細い革ベルトでビッシリ締め上げられた。その上を、爪先から首すじ、指先まで縫いぐるみになっている革製の拘束服を着せられ、その合わせ目についた革紐でギューツと搾り上げられた。そして両手両足が、更に革バンドでギリギリ縛られた。口の中には金属珠が詰められ、革マスクの嵌口具（ギヤツグ）が嵌められてしまった。

呼吸も出来ない。締め上げられた体の痛み、眼を真赤に泣き腫してグッタリと横たわる女、ヒイヒイという泣声が空しく壁に響く。そればかりではない、こうして息絶え絶えの令嬢に更に加えられ

る拷問。

革の拘束服のまま逆吊りにされる。

首環が嵌められ、軽く腰をかかめる程度に足首と首環が革紐でグイッと連結される。しかも金髪は、紐でからげて天井へ吊り上げられている。スカレット嬢は、しやがむことも腰を伸すことも出来ない。しかも縛めのまま鞭がなる。

## (七) ジャップの娘

一方、薫令嬢はどうしたろう。

この日本女性には、屈服を拒み続けるスカレット嬢に代って、手紙をスカレットの家庭、ハワード家に出すよう強要されていた。二人が南部へ旅行したように書けと云うのだ。K・K・Kは、それによって二人の失踪を隠そうとしたのだ。

だが、アメリカ女性であるスカレット、しかも深窓に育ったこの令嬢が持っている人間愛を思うとき、カオルにどうしてそうした手紙が書けよう。日本女性の誇りにかけても……。

「よし、こんな女は思う存分傷めつけろ！」

カオル・チノは、スーツもスカートもペティコートもスリッパもすべて引き剥かれた。ブラジャーとコルセット・ガーター、濃色のストッキングとハイヒール、網の目の黒手袋だけにされたカオル令嬢。

手足は縛られ、先ず後手のままハイヒールの爪先が辛うじて床につく程度に宙吊りにされた。

鞭。ヒイッという悲鳴。

「面白そうね。私達にもさせてよ」

女だ。K・K・Kの女達が数人、ドヤドヤと出て来た。

「ジャップの娘よ。生意気ね」

一旦、解かれた日本婦人留学生は、天井から鎖で吊されたパイプ

に両脚を開いて、足錠をかけられて逆吊にされた。両手も、もう一方のパイプに手錠から鎖でつながれる。

そして床近くのパイプがギリギリ引揚げられる。女は逆四つ手に吊り上げられた。

笑い声。カオルの悲鳴、呻き、涙、鞭——破れる美しい肌、血。

(お母さま——お父さま——東京のお友達のみなさん……薫は……異国の空に……ああ、もう駄目よ……恋しい、恋しいわ……)

## (八) 山中縛歩

一方、貴婦人の科学者は連日、二時間づつ責め続けられた。夜は漸くベッドだけあてがわれたが、ストッキングとハイヒール、白の長手袋、イヤリングとネックレス以外は、身につけるものは何一つ許されなかった。

そして夜も手錠、足錠、口に金属パイプを嵌め込んだ猿ぐつわ姿で眠るのである。

明ければ——先ず後手に縛られて山中に連れ出される。

あちらこちらと曳き立てられ凌辱され、断崖から吊り下げられ……時にはストッキングとハイヒールを、山道を歩き易いように白ソックスとロウヒールに置き替せられる時もあったが、そう云う時は一層ひどい扱いを受けるのだった。

そして眼隠しされて本部へ戻れば、水漬け逆吊り、吊り、椅子縛り、髪を纏んで引きずり廻され、股間縛り、水責めの拷問、拘束服拘束具の拷問、電気責めがこれに加わった。木の台に手足を縛りつけられたまま、顔、乳房の先、指先、手のひら、唇、足、到る処へ電気器具を押しつけられ感電させられる。

「ウーッ、ヒイッ、ウエーッ」

恐しい叫びをあげて、その度にスカレット嬢は、のたうち廻るのだった。



## (九) テレビの凌辱

三カ月が過ぎた。

全米のラジオは、真夏のある土曜日の夜、得体の知れない放送をキヤッチした。

全米の皆さん、こちらはSET放送であります。臨時ニュースを申しあげます。――

先にボストンで失踪を伝えられていた婦人科学者、大富豪ハーワード家の令嬢、スカーレットさんは、シカゴの女性誘拐団に捕われていることが判明しました。この令嬢の近況を来週の土曜日、八月二十七日夜七時よりテレビで放送致します。

全米は大騒ぎとなった。すでにハーワード令嬢と日本婦人、カオル・チノの失踪は、あらゆる憶測を含めて大評判となり、迷宮入りのまま忘れられかけていた折も折なのだ。

怪放送はデトロイト附近から出されたものと推定された。

その日、八月二十七日が来た。

「スカーレット嬢、団長がお呼びだ」

後手に縛られた捕われの貴婦人は、よろよろと惨めな姿で曳かれて行く。

「スカーレット嬢、君がどうしても肯かないから、こういうことになるんだ」

団長、副団長が揃っている。かれらは、室の一方にあるテレビを指さした。

「う、う……」

スカーレット嬢は、驚きと屈辱感で一杯になってよろめいた。これよりスカーレット・ハーワード令嬢の近況をお伝えします。テレビは、ありありと映し出した。

いつの間に撮影したものか！

縛られているスカーレット嬢

拷問されるスカーレット嬢

その身悶え、泣き顔、呻き声まで

テレビは用心深く、室内以外の状況は映さず、しかも拷問者の顔は一切除いて、泣き叫びのたうち廻るスカーレットを次々に映し出すのだ。

全アメリカ人の前に大きな辱しめをさらすというのは、これだったのか――。スカーレット嬢は、その場に気を失ってくずれおれた。「まだ早い」

注射で直ぐ蘇生させられたスカーレット嬢の目に映るのは――ああ、あれきり引き離されてしまったカオル・チノの拷問される酷らしい姿。

そして千野薫さんも、その時、別な室で同じテレビを柱に縛りつけられたまま否応なしに見させられ、余りに惨めな二人の姿に、固く眼をつぶっていた。――これが全米の聴視者の目に晒されていることに気づいたとき、かの女は気を失った。

全米は湧き立った。カオルの故国、日本も大騒ぎとなった。

歴史始って以来の怪事件である。

連邦警察は色めき立った。しかし、手掛りは更にはない。わずかに、今度のテレビの発信地がセントルイス附近であり、おそらく航空機上から発信されたものと思われることが解った程度である。

## (十) 令嬢待遇

二人の令嬢に対する拷問は、この日からやや緩かになった。それがどういふ魂胆からか、それは二人は知らない。取扱いも暫くすると変わった。二人は始めて猿ぐつわを嵌めたままだが引合わされて、

隣同志の監房に監禁された。勿論、厚い壁が二人を隔ている。

舌を噛み切って自殺できぬよう、猿ぐつわだけは一度も外すことは許されなかったが、最新のモード、美しいドレスが与えられ、読書も許されるようになった。それが、スカレット嬢のイヤリングを証拠に令嬢の無事と引換えに、ハワード家を脅して秘密に一万ドルを奪ってのこととは、勿論二人は知らない。

こんな環境で、どうして読書など出来よう。だが、やはり二人は科学者だった。天文学の専門書は二人の運命を忘れさせてしまった。

だが、こうしたことが実は何のためだったか。二人は勿論、知る由も無かったのである。

四カ月、近くが過ぎた。そしてクリスマス・イヴの夜、こともあらうに、またも二人の令嬢拷問の怪テレビが全米をゆるがした。

それも、今度は豪華なイヴニング・ドレスの二人が、黒人に緊縛拷問されるのだ。黒人種差別排撃のため真心こめて尽した令嬢が、黒人の誘拐団に辱しめられる。勿論、それは黒人ではなくK・K・K団員の変装ではあったが、テレビの一瞬では、それは判別できるものではない。

依然として手掛りは掴めなかった。



## (十一) スケートターの縛しめ

こうした中で、ワイオミング山中では一騒ぎが起きた。

冬――

雪が山々を閉じた。

取扱いが変わったにしても、二人の令嬢が毎日二時間は必ず後手に縛られて「運動」に連れ出されることは、この半年間は変りはなかった。

そしてK・K・K団員の気の向き加減一つで、やはり山中で拷



問、凌辱を受けることもしばしばあったのである。

雪が深くなっても二人は、それぞれスキーの服装で連れ出された。毛皮のボンネット、マフラーに頭を包み、セーター、毛のスラックスにソックス、スキー靴、そして後手に縛られて――。

オーヴァコートにブーツで連れ出されることもあった。そしてその時には、その姿で短時間とはいえ、吹雪の谷にワイヤーで吊されるという拷問をも受けなければならなかった。

処が或る日――一九五九年もすでに二月のことである。

二人は本部から一キロ程、隔たった湖水へスケートの服装で連れ出された。セーターにごく短いスカート、腰までのストッキング姿で……。

(今だわ)

湖水の畔でスケートをつけさせられた千野薫さんは、希望をとり戻した。

(かれらは知らないのだ。この私が故国、日本にいた時は、フィギュアでも全日本で指折りのスケート選手だったことを……。逃げよう。スカーレットさん、私だけでも逃げて助けに来てあげるわ。ええ、両手ぐらい縛られてたって大丈夫よ)

今まで打ち挫かれていたかの女に勇気が蘇った。縄尻を取られたまま、おずおず滑るように湖の中に進み出た時、かの女は思うさま片脚で氷を蹴った。

スーッと、小さな日本女性の体は矢のように流れた。

「アッ」縄尻を持ったK・K・K団員の体は氷の上へもんどりを打って倒れる。手が離れる。

縛られたまま、薫さんの体は湖水を真直ぐに突きって行く。

ダン、ダ、ダン！ピストル。薫令嬢は猿ぐつわの下で歯を喰いしばりながら滑る。

だが、やはりかの女は不運だった。向岸に着いた時には、早くも

急を聞いて本部からジープで駆けつけた四・五人の荒くれ男が飛びかかって来たのだ。

二人の婦人科学者は、スケーターの服装のまま湖畔の太木に逆吊りにされて苛まれる。ストッキングをピタリ穿いた肉づきのよい太腿に、ギリギリ喰い入る縄の痛々しさ。寒さと苦痛に、二人のからは紫色になっていた。

### (三) 婦人天文学者の処刑

遂に恐しい終末がやって来た。

五月のある日、二人は自分の一番好きな服装で連れ出された。

スカーレット・ハワード嬢は、白い袖口を大きく折り返し、ブラウスの丸襟をのぞかせたコバルトのワンピース・ドレス、ストッキング、ハイヒール、白手套に金髪にリボンをつけた若々しい姿。

カオル・チノ令嬢も、ピンクのブラウスに紺のタイトのショーツ・スカート、白手套、白いベレー、白ソックスに白短靴という日本の女子学生らしい姿。

二人とも何物かを感じとっていた。そして思い切り若さを強調したかった。一度奪い去られれば、再び返らぬ若さを――。

不幸にも予感的中していた。

両手を縛された二人に、団長は重々しく宣告した。

#### 宣 告

女囚 スカーレット・ハワード 二十四才 ××大学天体物理学

助教

女囚 カオル・チノ 二十四才 ××大学日本留学生

右二名を死刑に処す。

スカーレット・ハワードは、黒人平等の邪論を以て社会を惑わした罪。

カオル・チノは、これに同調し監禁中も逃亡を図った罪。

但し死刑の方法は、兩名とも天文学者である故に、特別の恩情を以て、人工衛星上の死を選ばしめる。

三日以内に人工衛星に搭載、高度二五〇〇キロメートルの大気圏外に発射する

K・K・K団

よろめく二人、猿ぐつわを嵌められ、両手を縛られたまま蒼白な顔、恐怖に大きく見開かれた眼を見合わせる。体をピタリ寄せ合ひ、頬を思わずすり寄せ合う。

……（お別れね……）アメリカ貴婦人と日本人令嬢は、ジツとつづらな眼と眼を見合せた。ドツとこみ上げる悲しさに大粒の涙がポロポロと溢れ、そして滝のように二人の白い頬を濡した。

### （十三） 緊縛美女の星影

ケープ・カナベルの人工衛星ロケット発射基地では、新衛星十一号、十二号の秒読みが始まっていた。

しかし、どこをどう潜り抜けたものか、衛星内部に乗せられた二匹のチンパンジーが、K・K・K団の手によってそれぞれ二人の美人科学者にすり替えられてしまっていることには、科学者達は誰一人として気づかないらしかった。

（お母さま……お父さま……懐しい故国のお友達の皆さん……お別れよ……ああ、悲しいッ……誰も知らずに……いや、いやよッ、殺されるのは……たれか、たれか気づいてよッたすけて、助けてエッ、ああッ、もう駄目、駄目よ、お母さまアッ）

最後の服装のまま、両手両脚を手錠、足錠、鉄鎖に嚴重に縛しめられ、猿ぐつわに口を塞がれながら、いまは自制も見栄もなく泣き叫び呻き悶える二人の令嬢。あと一分すればロケットは天空遙か飛び去って、美少女の科学者達は二人とも永遠に地球を廻る冷い星と化してしまうのだ。

宇宙空間に印す人類史上の第一歩——だがそれは、ああ、何とない悲しい残酷な第一歩であろう。天文学者の遂げる最期としても、それは何一つ見ることも人に語ることも出来ないままに、宇宙線によってか、毒物の強制吸入によっての死しかないのだ。実験用の猿の心臓の作用を伝えるグラフには、すでに令嬢の鼓動が大きく波打って記されて行く。

その異常な変化——。

二十秒、十五秒、十二秒、十一秒、十秒

……ああ。

飛び行く光を空に仰いでも、誰がそれを緊縛の美女の変り果てた姿と知ってくれるであろうか。

（終）

## ◎臨時増刊号◎ 発行予告！ 十月上旬発売

### 長篇サジズム小説

## 弓沢俊二郎作 『青い癡院』

定価 二百円

表紙装釘、口絵、並に挿絵 四馬 孝

【内容小見出し】 (一) 三人の男 (二) 地の底にあるもの (三) 美貌の人 (四) 劇場にいた二人の男 (五) 忠告 (六) 美女誘拐 (七) 苦悶する美貌 (八) 屈辱の責め (九) 踊り責め (十) 探索行 (十一) 癡院の中 (十二) モデル責め (十三) 手練りの網 (十四) 救出 (十五) 勝者の心  
豪華な口絵と挿絵、絢爛たる内容、表紙四馬孝氏装釘の色刷。新秋に贈るマニアへのプレゼント。



## ◎ 創作

## 腹切る女スパイ

藤 山 秀 緒

## 雨中の駈足

「御趣旨はよくわかりました。外相の御紹介でもあり、ことに混血児であるあなたが、祖国のためにスパイを志願されるお心は敬服の至りです。ただ、御承知の通り、特殊機関の仕事は並大抵の修練では続かないものです。途中で職務を捨てることも勿論出来ません。お心がけには敬服するが、これは思いとまられた方がよいと思います。」

椅子に腰をかけて角谷大佐は煙草をすすめます。乗り出すように聴き入っている女性。彼女の名は佐原たか子。父を日本人、母を英国人に持つ混血児として生まれ母は離婚。父ひとりを頼りに育てられて来たのでした。彼女は、自分の顔が、美しくなつて来れば来る

ほど、周囲の人々の妬みが、ひしひしと身に感じられ、合の子、合の子と蔭口をきかれるつらさにたえかねていました。

父は祖国を愛していましたし、その血をうけた彼女も、人一倍日本を愛しています。蔭口をきかれる心外さは、どんなでありましよう。彼女は、祖国のために女ながらも命を捨てて働こうと決心し、父を説いて外相から紹介状を書いて貰い、こうして東京のある特殊学校を訪れたのでした。

「私は御覧の通りの混血児でございます。採用さえしていただければ、敵地へ潜入するにも都合だと思えますし、それまでの、どのような苦勞も決していいはしないつもりで参りました。採用していただければ、この場で自決する覚悟さえ持つてをります。どう

ぞ、入隊をおゆるし下さいませ……」

「そうですか。ではともかく許可します。しかし、当分は本校での訓練期間ですから、つらければ、その間にやめてよろしい。本採用になつてから、やめる事は一命にかかわると御承知下さい。――從卒！ 白川少佐を。」

角谷大佐は、白川少佐を呼んで彼女に紹介し、最低六カ月間の基礎訓練をするよう命じます。白川は、じろりと彼女を見て、

「では本官が、あなたの訓練を担当する。只今からは、敬称その他一切を改めて、佐原練習生と呼ぶ。いいな。」

「はい……」

「はいではない！ はッ！ と云うのだ」

「は？」

「今からは訓練生となつたのだ。女でも男で

も容赦はせん。軍人らしく、はっきりとするのだ。」

即日入隊と決った彼女は、特に将校の待遇を与えられ、粗末な小部屋に起居することになりました。

「ここがお前の室だ。女物の軍服はないが、軍装の場合は将校の軍服を着ける。訓練中は軍服に類似の服なら利用してよろしい。今日はこれから駈足の訓練をする。」

「え。駈足……」

窓の外には秋雨が降りつづいています。

「そうだ。その将校の軍服を着て乗馬靴に拍車をつけたやつをはく。早くせい！」

彼女は慌しくスーツを脱ぎ、カーキ色の乗馬ズボンをはき、上衣を着て、長靴、拍車、と用意をととのえます。

「よし。そして雨外套を着る！——よし頭巾をかぶれ。アゴの尾錠をかける。軍刀を吊れ！……よし、これなら門外へ出ても女とは見えん。本官について走るのだ。佐原練習生、来い！」

白川少佐は、同じくレインコートに身を固めると、戸外へ出て、自転車に飛乗ります。カーキ色の軍服、金ボタン、足に光る黒革の長靴と銀の拍車。先刻のスーツスタイルとは打って変った女将校姿のたか子は、自転車の後を追って走り出しました。

どツどツどツ……。重い乗馬靴が、ぬかる

みを踏んで進めば、すっぽりとフードに包まれた彼女の美貌が次第々々に、どす黒くよどんで、脂汗がにじんで来ます。

レインコートの裾が、雨水をふくんでガバガバと足にまつわりつき、腰の軍刀が、進もうとする彼女の足を払って妨げます。

百米、二百米、三百米……

「アアッ……うむう……。く、くるし……」

白川はゆうゆうと自転車のペダルをふみながら、たか子のそばを滑って行きます。

「弱いぞ。なんだその位。がんばれ！」

「うむう、うむう、うむう……。アアッ……。く、くるし……。も、もう……。もう……」

五百、六百、八百……。白川は悠然と彼女の苦しむのを見ながら走る。

「う、う、う、ウッ、ウッ……。も、もう、もう……。これ、以上は！……これ以上は……。アア、い、息が、とまりそう……。く、く、く、く、く、く、くッ！」

フードに包んだ口もとから涎が一筋。

涙、汗、鼻汁、フードは雨水と、これらの分泌物のためにぐちゃぐちゃになってしまいました。

前のめりに、のたうつように彼女は自転車を追います。初志を貫くための涙ぐましい努力がつづきます。

「可愛想に……」

「軍人さんはつらいのね……」

往来を通りすぎる奥さん達も、がばがばと軍装を雨に打たせて喘ぎ喘ぎ走る将校の後姿を気の毒そうに見送っています。

「ああッ、や、やめて！……く、苦しい、く、くるし……。ウ、ウッ！」

「あと一息だ。がんばれ！」

「うむうッ！」

「がんばれッ」「むうッ」「がんばれ！」

「むむッ！」

「よし、止め。止るのだ！」

彼女は、そのままよろよろと白川の前を走りぬけ、前のめりのままバツタリと倒れてしまいました。うつぶせに倒れた彼女は、泥濘の中もかまわず、腰をしごき、身をふるわせて悶えています。

「よし。よくがんばった。顔を見られてはまづいから、この訓練は雨天の時に行う。今日は小手しらべだ。二時間の休憩！」

白川は、たか子を抱き起こすこともせず、さっさと引上げてしまいました。

「ああ、ひ、ひどい……ひどいことを……。ううっ、なんの。こんなことで、く、くじけようか、ああ、む、むねが……。むねが！……ウッ！」

ウッ、ウッ、ウッ……と吐きつづけるたか子。二時間がたち、たか子は再び不動の姿勢。

「用意は出来たか。次は鉄棒。逆上り！……はじめ。」



たか子は、軍服、乗馬ズボン、乗馬靴に身を固めたまま、鉄棒にとりついていきます。

どさッ！

足をはねて鉄棒へ足をかけると、乗馬靴の拍車を手を引っかけて思わず手をはなしてしまふのです。体操は深窓に育った彼女にとっては苦手の学課でした。しかも長靴姿の逆上りとは……

力つきてうづくまる佐原たか子。小気味よげな白川少佐。

## 女 囚

こうして来る日も来る日も、白川は彼女をいじめつけました。

混血児などに何が出来ると、白川は、英国の血をうけたたか子をうとましく思っているのです。

「作業用」のレインコートや乗馬ズボンはすでに泥まみれになっています。たか子の手は固くこわばり、美貌はどす黒く淀んで行くのでした。

でも、たか子はくじけません。呻いても、悶えても、歯をくいしばって訓練にはげみました。

ある日。

「佐原練習生、来週から別の訓練に移るが、肌を傷つけたりしてはいけないから、作業服を用意せい。上下つづきのな。」

「ハッ。」

敬礼も板について、男装によく馴染んで来た彼女は、はきはきと返事をして、早速自宅へ連絡。表向きは乗馬の練習用に、ということで、出入の洋服屋に、しっかりした作業服を作らせることにしました。

――出来上って来たのは、カーキ色の、厚地のギヤバで、腰のふくらみや、胸もとの隆起まで悩ましげに波打たせた乗馬用のオーバーオールでした。編上げの長靴まで添えて。

「ほほう、立派すぎるぞ。まあいいや。前え！」

白川は彼女の作業服スタイルに満足の態で廊下を先に立ちます。

彼女は、導かれた一室を眺め回して、とっさには何の部屋なのか分りかねています。

「この板の上へ坐れ。」

「あの、長靴が痛くて坐れません。」

「馬鹿ッ！ 痛いのはわかつとる。敵地へ行って捕虜の辱しめをうけた時、秘密をしやべするような特殊機関に奉職する資格はない。今日からは拷問に耐える訓練をする。いいか。坐るのだ。」

「はッ……」

仕方なく、彼女は、凸凹のはげしい板の上へ正坐しました。

「手を後へ回せ！」

「はッ。」

キリキリと後手に喰い込む縄目。

「それ、これをしのべ！」

正坐した太モモの上へ、平べったい石が一枚。

「イ、痛いッ」

「黙れ。二枚！三枚……」

美貌は苦痛にゆがみ、脂汗がつぶつぶと額にかかひはじめます。

厚手のオーバーオールなればこそ、負傷しないですんでいるのです。

「ううっ。ウーッ……」

「それ。」

「ウムーッ！」

めりめりと足が音を立て、長靴がきしんでいます。

「よし。これからが凄いだぞ。」

白川は、石を取りのぞいて彼女を立てせ、制裁柱にしばりつけます。

ピシリッ

白川の手に、いつのまに握られたか、鋭い革鞭。たか子の体めがけて処嫌わず打ちおろす凄じさ。

ピシリッ！

「アーッ！」

ピシリッ

「アアーッ！」

ピシリッ

「うむうッ！」

ピシリッ！  
「ウームッ！」  
体の線をぴったりと  
出した責め衣の悩まし  
さ。

「やあッ」

ピシリッ！

「あーッ」

「えーいッ！」

「ウーッ！」

「やあッ！」

「ウーッ！」

「えーいッ！」

「ア、アッ！」

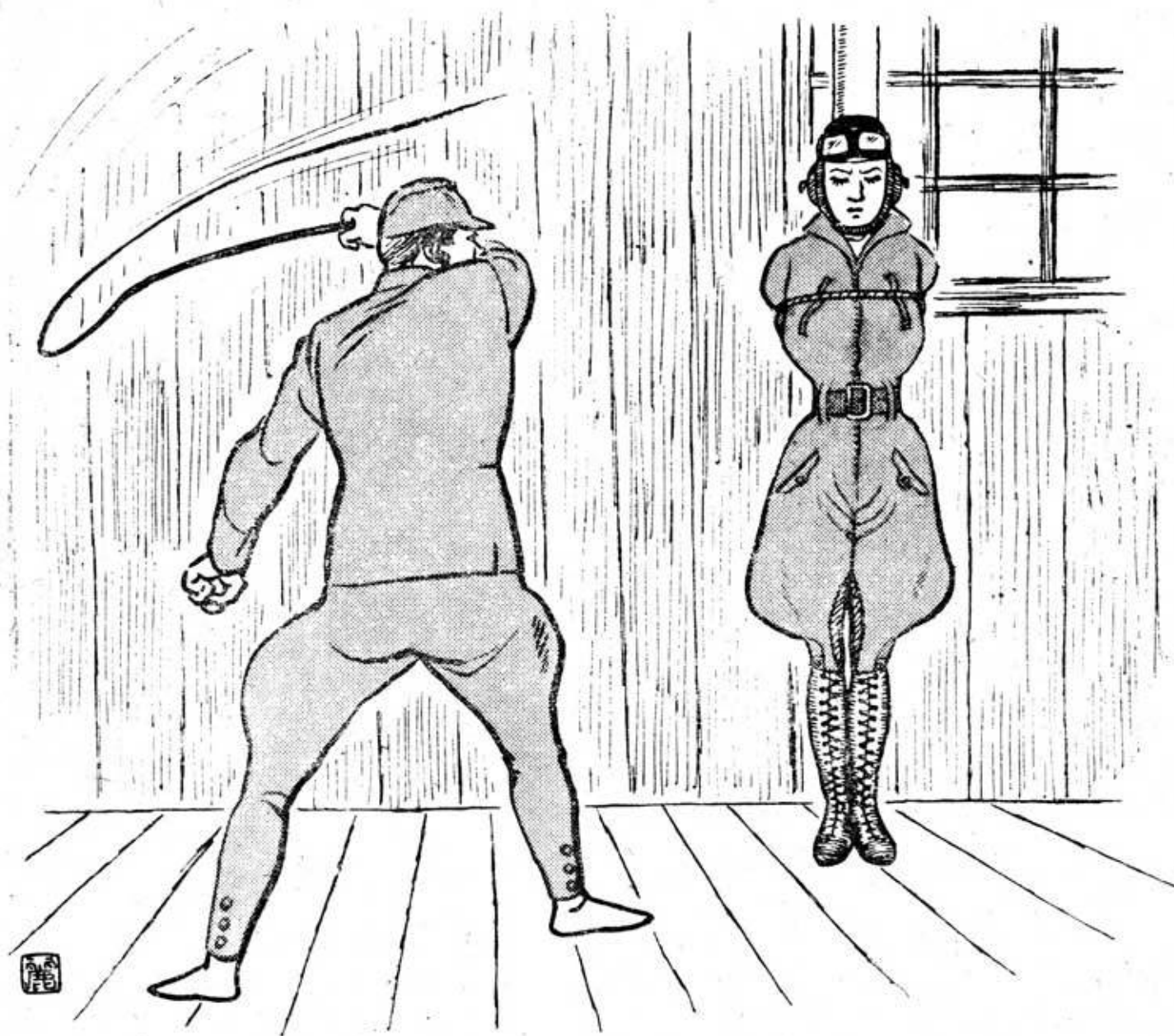
ピシリッ！

「うっ、うっ、うっ、  
うーっ……」

のけぞり、のたうち  
歯をくいしばる苦悶の  
たか子。

「降参か！」

「い、いえ……いいえ！  
な、なんの……。こ、こ  
れしきに……。さ、佐原は  
……ひ、卑怯……者と……い  
はれたくない……。も、  
もっと……せめて！」  
「ようし！行くぞ」



ピシッ！

「ウウッ……」ピシッ！ ピシッ！

「ウウッ！」

「エーイッ！」

「ムムム、うむうウッ」

流石のたか子も、たえかねて失神  
した。

白川は、用意の水を、バケツごと  
彼女の汗にまみれた上半身へ。

ザブッ！

「む、むうっ……」

「佐原！佐原！降参か。」

……あたまからずぶぬれとなった  
彼女。

「う、うむう……。ま、まけません

！こ、降参いたしません！」

「これでもか！」

ざぶり……

「ううっ……。少、少佐殿。さ、佐  
原は、佐原は……たとえ……死、死  
んでも！ 佐原は……死、死んでも  
！」

上半身は飛行服、下半身は乗馬ズ  
ボンのように、ぴったりと仕立てた  
オーバーオール of 責め衣が、みじめ  
に水を吸って、短かめにカットした  
彼女の髪が乱れ、眼を据えて少佐を  
にらむ必死の形想です。



啞然として見つめる白川少佐……

オートバイ

ある晴れた朝。

「今日はオートバイの乗り方を教える。」

彼女は、飛行帽に塵除けの眼鏡をかけて顔をかくし、いつもの「責め衣」に身を固めて少佐の後に従います。

少佐は意地悪くも、ごく要点だけしか教えず、彼女にオートバイを走らせるようにいつけるのです。

自転車に乗れるので、バランスをとることは出何ましたが、重い車体と、物凄い排気音は彼女を当惑させ、オートバイに跨ったままスタートできないのです。

「何しとる！ 出発！」

「ハ、ハイッ」

ダダダッ！

ほんの十米位も行った処で、よろよろと車体がよろめき、ざあッ！という砂をかむ音と共に、たか子は横転。

気丈なたか子は、齒をくいしばって立上り再びオートバイに跨ります。

落ちては跨り、跨っては横転する健気さ。

「な、なんの！ オ、オートバイひとつ乗りこなせないで……よいものか！」

うめくように、つぶやくように彼女は自分に云いきかせています。責め衣は汗と砂はこ

りで見えるもあわれな汚れ方です。泥にまみれた彼女の顔。めがねの中で妖しく輝く瞳。

そして何日かが過ぎて行く。

今日は遠乗り。多摩御陵までの往復だという。彼女は、勇ましいオートスタイルで、ようやくなじんだハンドルを握りました。

前のめりに試動させる姿の悩ましき……やがて走り出した二台のオートバイは、多摩御陵さして砂けむりを上げるのでした。

そして、ここにも試練が待っていた。——ズボンを通してつき上げて来るオートバイの振動。打ちつづく悪路。——腰を浮かせ、唇を噛んで苦闘するたか子。

### 飛行服の屈辱

「いいか、なるべく下へ行ってから落下傘をひらくのだ。そうしないと降下に手間取って不覚を取るからな。」

「はい。少佐殿」

たか子は飛行服に身を固めています。落下傘を負って、いま機上の人となる処です。

今日は落下傘降下訓練。

それも人目をさけて、海上への降下です。飛行服の上に救命胴衣、おいものように太った彼女は、きつと唇をかねて白川に敬礼します。

機は、たか子をのせて海上へ飛んで行きます。きりりとした飛行服姿をのせて。

「降下用意」

「用意出来ました！」

「降下！」

目をとちて空中に泳ぎ出るたか子。

まだ早い！ まだ早い！

心に云いきかせながら落下傘の引き金をぐツと握りしめているたか子。

「これまで！」

引き金を引いたと見る間に、背中が空中に線を描いて、やがて花のようなパラシュートが空に浮かびました。

ググッ！

物凄い力でベルトが喰込む。

「ア、アア……」

空中に身を投げかけた時の不思議な陶醉。そして、がくんと引き止められた時の妖しい緊縛感……誰もきいてはいない、誰にもきこえはしない。空の上だもの。しかも海の上だったもの……

「ああ、すばらしい……。ああ、たまらない！ たまらない！ 英子！ 英子！ わたしは、いいえ、お、おれは。どうしたらいいんだ！ 教えてくれ、教えてくれ、英子、英子……」

ああ彼女は同性愛だった。英子……。はしくも無我の境にはとばしたたか子の告白。

彼女は、烈しい情感に悩みながら、次第々々に海上へ舞い降りて来ました。

遂に彼女の長靴が、ズボンが、そして上体

までが、がばがばと波間に吞まれて行きます。ずぶずぶと飛行服が海水を吸って、晩秋のつめたい水が、たか子の肌へ喰入ります。

「ああッ、ふう……」

海水をふくんでほっと一息。

……しかし待っても待っても救いの船は来ない。……寒さが身をさいなみはじめます。

(う、うう……。つ、つらい。せつない……)」

身悶えするたか子。待ち遠しい。まだか。救命衣と、防寒具のおかげか、ぬめぬめとまつわりつく冷たい着衣も、やっこのことで凍死から彼女を護っています。

ああ、救命艇は遂に来ました。へさきには白川少佐が立っています。直ちに縄梯子がおろされます。

「大丈夫かーッつかまれ。」

気丈なたか子は、疲れ果てた体に鞭打って、海中に不動の姿勢をとり、拳手の礼をします。やがて、弱り果てた体を、縄梯子にもたせかけ、幾度か浪にさらわれかけながら、這うように艇にすべり込んだのでした。

どさり……

「大丈夫ですか。」

「御苦労様。見事でした。」

救命艇の人々は口々に彼女の勇敢な働きをたたえますが、なぜか白川少佐だけは、口をつぐんでいます。

「佐原練習生。降下を終わりました……」

うねりに動揺する船の上、手すりにつかまってようやく立上った彼女は、白川の前に報告します。

「佐原。お前は戦死だ。」

「えっ？」

「お前は、本官の注意を守らず、高空で落下傘をひらいた。だから風に流されて、こんな処へ降下したのだ。これが戦争なら敵地へ落ち込んで戦死するところだぞ。今日の降下は落第だ！」

ああなんという残忍な上官でしょう。お国のために働きたい一心だからこそ、どんなつらい思いにも堪えている彼女なのに……

彼女は濡れた飛行服をぬぐくことも許されず、じっと唇を噛んでうつむいています。

それっきり、白川は彼女の方へ見向きもせず、元来た方へ船を急がせて行きます。

「少佐殿、着換えを……」

たまりかねた艇長の言葉。

「艇長。かまわんで下さい。佐原は慢心しとります。女の身で、これほどの事をするのは日本中にも自分一人だ、という慢心があります。今日の降下が失敗である以上、懲罰は当然のことです。この位に堪えられねば特殊勤務はつとまらんです。」

「でも……」

「まかせて下さい。佐原については本官が全責任を負って居る。口出しはお断りする。」

艇長も気の毒そうに船尾へ退きます。

「少佐殿……。寒いのです……。ここえそうなのです……着換えを……」

たか子も、たえかねてか白川に哀願しますが、白川は頑として許しません。敵中へ忍び込んだ時、寒いといって着換えられる筈はない。上官の命令に背くか！一言のもとにはねつけるのでした。

波を蹴っていつまでも進む艇。長い時間が過ぎて行きます。

彼女は生理の欲求にたえかねて来ました。

「少佐殿……」

「ならん！」

便所は？と問うつもり言葉も、着換えを求める声としかきこえぬ少佐。「便所」という句さえ気恥しい彼女が、烈しくはねつけられては何で先の言葉がつけましよう。

再び押しだまった数刻

「ああ！少佐殿！」

「ならん！」

「いいえ、あのう……」

「何？」

「あのう……」

「ならんというのに！」

ああ彼女の我慢は限界にきたようでも。

そそうをしてはと必死にたえる悲壮な息づかい。……そして。

そして。……



紙のように蒼ざめた顔に、赤味がさしたと見る間に、彼女は、ぐっと体をかがめます。

手すりにすがって泣かんばかり。

そして……。そして……。

「ア、アアッ！」

がばがばと意外に烈しい音が……。恥しい。

恥しい！——身を揉んで悶えるたか子。降下の失敗につづいて、かくもみじみな辱しめをうけようとは。

「どうした……」

白川は、何もかも承知という顔でのぞき込む。顔もあげられぬたか子。

「死にたい！」

彼女は此の時はじめて「死」を求めたのでした。

——しかしその時期は意外に早くやって来たのです。

### たか子の決意

「佐原練習生殿。おおよびです。」

久々に角谷大佐からの呼出し。たか子は、

例の作業服姿で角谷大佐の前へ。

「佐原練習生。君の訓練中の態度は、まことに真剣そのもので、他の教官たちも全く敬服しとる。……しかし、実はこういう事態がおきたのだ。君は外務大臣の御紹介で本官としても拒むわけに行かんの、君を訓練させたが、結局、混血児の君は敵国の血をうけてい

るために軍機にあづかる資格がないという結論になった。遺憾であるが退所を命ずる。」

「ええッ？」

張りつめた心も折れて、呆然と立ちすくむたか子。

ひどいわ！ ひどいわ！ こんなに責めさ

いなんだ上にクビだなんて！

復讐してやるわ……。きつと。

固く決心した彼女は、口惜し涙を泳えて自室に戻りました。

一人の人間を、こんなに苦しめた上に、異国の血がある、というだけで、愛国心や誠心を認めようとはしない上官たち。

死ぬのだ。物の見事に死んでみせるのだ。

そうだ。腹を切ろう。血だらけになってのたうち回ってやる！



たか子は寂しく笑って、死の復讐を心に誓うのでした。

―そして幾日か、いよいよ彼女は、明日すべての手続きを終って退所することになりました。彼女は、すでに英子に手紙を送っていましたが、厳重な検閲の目をくぐって綴られたその手紙は、恋人英子の幸せをいのり、散り行く吾が身の潔い死を誇示したものであります。

そして英子の面会。どんな約束が取りかわされたものか、たか子は、夜のとばりに包まれた一室で英子を待っている様子です。

外は雨。

女性ということ、別棟に個室を与えられているたか子にとっては、英子がしるで来るのに都合がよいばかりでなく、どのような事が行われても、外に洩れないという便利がありました。

ドアをノックする音。「責め衣」に身を固めたたか子は、そっと扉を開きました。

そこには、レインコートのフードもまぶかに、滴り落ちる雨のしづくを払いながら、将校服姿の英子が立っていました。

「エイコ、素敵！ うまく通れた？」

「ええ、お姉様の身分証明書があるでしょ。それにフードかぶっていましたもの。挙手の礼で通したわ。」

「そう。エイコ、君の軍服姿、すばらしい

よ。いとしいエイコ……」

「お姉様。準備は？」

「出来ているの。私はこの作業服。エイコは？」

「そう。私、恥しいけど、お姉様の汗がにじんでいるこの軍服……」

「エイコ！」

「お姉様！」

ひしと抱合う二人。

情痴の果てと思われてもいい。責め、さいなみ、そして言い寄った、あのいやらしい白川少佐に、たか子の一筋の恋を見せてやるのだ。英子も姉様と死ぬことしか幸せはないといった。血まみれの死体になって、抱合つてこのけがらわしい営門を出てやるのだ。

無言のまま、固く手を取り合つて眼と眼を見交す男装の二人。冬の夜は、みぞれを交えて次第にふけわたるのでした。

## 血の饗宴

白布をしいた床に、長靴の不自由な足を折って端座している二人。

自害の復讐感に酔った二人の顔は、死を前にして歓喜におののいているかのよう。

「いいこと。腸をつかみ出したら、どちらでも気丈な方がのしかかってとどめをさし返す刀で自分も死ぬの。わかったわね。」

「はい、お姉様……」

「エイコ、さあ、一足先に……」

「見て。見て。エイコ、こうして！」

英子は軍服のボタンを外し、乗馬ズボンを押しさげるや、軍刀を逆手にとって、グッ！ と脇腹へ突立てます。

「ああッ……ウム、ウム！、見て！見て！ウムッ、ウムム！」

一分、二分と軍刀が右へいざり、そのあとから紅の花を散らしたように血汐がこぼれて行きます。きり、きり、きり……

「うっ……」

臓腑へ切り込んだのでしょうか。

「く、くくくくッ！」

行儀正しく左ヒザを立て、前のめりになりながらも、作法通りの切腹。

「英子！ 見事。僕も、僕も行く！」

たか子は英子の健気な切腹に励まされて、思い出の責め衣の前をひらき、守り刀に白布を巻く手もどかしげに、

「うっ……」

同じく脇腹ふかく突立てました。

「お、ねえ、さま……。英子、英子は……どうすれば……いいの。」

「う、うう、ぬ、抜け、そ、そして、た、たてに、み、みぞおちから、ひ、ひき回せ！うむ、ううむ、お、おちつけ！」

「は、はい……。むう！」

英子は軍刀を引きぬき、鳩尾にあてがいま



す。

「あ、ああ、気おくれる。どうしよう……どうしよう……。ううっ、うう、お、姉、さま……。つき立てかねて四苦八苦の英子。何度も何度もついて見るのに、心弱くも失敗するのです。」

「英、英子……。こうするのよ。こうするのよ。い、い、いま、いま……うむッ……（短刀を抜き取って両手に持ち直し）エ英子……いま、いま……ウーッ！」

ざくッ！と烈しい音。鳩尾に切り込む短刀の物凄さ。

「お、おねえ様、こ、こうね、こうね……アアッ……ウーッ。」

すさまじい光景がくりひろげられています。大和撫子ならでは思いもよらぬ壮烈な自殺のクライマックスが、今ここにくりひろげられて居るのです！

「ウーッ！」

「ああ、く、くるしい。……くるしい……お、おなか……ああ……」

「ええ、み、未練な英子！こ、この期になつて、く、くじけるまい！タ、縦に！縦に切り下げる！ち、ち、刀のかぎり……さあ、い、いさぎよく！こ、こうしてッ」

アアッ！と烈しく胴ぶるいして、たか子はグッと短刀を切り下げました。

「ウーッ……」

流石のたか子も、泳えかねた呻きに体を硬直させ、天井をにらんで必死に取乱すまいとしている様子。

「お、おねえ様！え、英子も、英子も……アアッひいーッ！き、き、き……。ウウッ！ウーッ……」

ああ、英子も苦悶しています。眼を見ひらき口もとからは泡がほとばしって、「姉」におくれじとする「妹」の健気な奮闘がつづきます。たか子は、ざくッ、ざくッと腰をしごきつつ短刀を切り下げ、一文字の傷口と合します。……そして、一きわ烈しく、

「ウムーッ！」

と呻いて一気に下腹まで切りおろすのでした。

「お、おねえ様！アアッ、ひいーッひいーッ！も、もう駄目……。こ、殺して、殺してッ！」

「おお、え、英子……。よ、よく切った……うむう、く、くちづけ……。くちづけを！」にじり寄る英子を抱きしめ、烈しく口づけするたか子。

「そ、そうだ……お、女ながらも武人の心……うらみ死には……臓、臓腑を裂いて……。え、英子！さ、最期の、ううむ、最期の、は、晴れ業を、い、一緒に……一緒に！」

感動を禁じえない壮烈な自決！  
「あうッ！ゲエーッ！ク、ク、ク……うううッ

### 三条春彦・画

### 未製本 時代物責絵巻

八枚一組 百五十八円（送共）

【内容】一、山法師と静御前、二、女スリと岡引き、三、淀君と千姫、四、犬公方と侍女、五、八百屋お七の最期、六、新選組と芸妓、七、十郎左エ門と腰元、八、小紫と悪旗本、以上八場面。

ううッウウーッ！」

「え、英子も……。ああッ、ひえーッ、ひいッウウウッ、ウウーッ！」

どさり。英子は力つきて、腸をつかみ出したまま棒を倒すように俯伏せになりました。たか子は、血の気の失せた美貌をひきつらせ、バリバリと歯がみしながら、同じく腸を引きづり出し、英子の上にのしかかってゆきます。

だらりとはみ出した内臓が、血汐をほとばしらせながら英子の軍服の上へ這って行きます。

「え、英子！」

頸を抱え、ぐっとしめつけて、馬乗りのたか子はうっとり眼をとちました。

英子は、もう力つきて、せまり来る断末魔の痛さ苦しさに、笛のような呻きをあげて悶えています。

本誌は復刊以来、すでに三十三号を数えましたが、現在既刊の中左記の通り在庫しておられますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽  
復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽  
復刊第3号 (昭和31年4月号) △売切▽  
復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円

「こ、こ、これで：お、思い残すことは：ない。い、い、い」といひ英子！ ゆ、ゆるして、ゆるしてッ！」

短刀をとり直したたか子は、英子の体をひねって、軍服のかげに燃えつくす左の乳房へガバとばかりに突立てました。

「ア—ッ、う、うれしい…。ウ—ッ！」英子は勇ましく体をのけぞらせ、いとし姉の刃をうけた満足さにおののきます。

ググッ！と決りたるたか子。

「ウ、ウ、むうッ！」  
「え、英子！わ、わたしも、わたしも！」  
返す刃は、我と我が左の乳房へ。  
「ううっ。うっ、うっうっ……ウーッ」馬のり  
になって上体を屈伸させながら、力のかぎり  
決り立てる若き乳房。

て行くのです。

急報に駆け付けた上官たちの驚き。わけても白川のうけたシヨックはいかばかりでありましよう。

たか子の心は、同性愛に生きる女の喜びでふるえ、集った人々を嘲るように、笑顔をかべて倒れ伏します。

「英子、行こうね。私たちは勝ったのだ。」

(終)

復刊第5号	(昭和31年6月号)	定価二百円
復刊第6号	(昭和31年7月号)	△売切▽
復刊第7号	(昭和31年8月号)	△売切▽
復刊第8号	(昭和31年9月号)	定価二百円
復刊第9号	(昭和31年10月号)	定価二百円
復刊第10号	(昭和31年12月号)	定価二百円
復刊第11号	(昭和32年1月号)	定価二百円
復刊第12号	(昭和32年2月号)	定価二百円
復刊第13号	(昭和32年3月号)	定価二百円
復刊第14号	(昭和32年4月号)	定価二百円
復刊第15号	(昭和32年5月号)	定価二百円

[illegible]

〔代理部だより〕

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします。故、誌代のみお送り下さい。六冊以上一箱にお求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一箱してお求めの方にはキヤネ版写真三枚贈呈いたします。○休刊前の本誌は全部売切れてしまいました。今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。





緊縛映画スナツプシリーズ  
残菊の巻

清水の佐太郎

資料提供  
橋成 牧高志

牧 で——結局、どうだったの？

山一（一杯屋の主人、生来のひょうきんさを以て鳴る好漢親爺）それがね、どうもいけませんや。すっかり舐められちゃって……、いえ、

初めのうちはまあ、よかったんですが、それがだんだんに……、どうも、ヘッヘッヘ……。

牧 こう云うものはすべて紳士的にやらないと始末がよくない。それもその動機からして少々泥臭かったね。同なじ泥の花でも色よく、ほんのりと雌花を咲かせようとするには辛抱が肝心だ。

山一 そうなんです。あつしも一っぱし短気なもんですから、どうせ先方さまだって水商売だ（彼



氏の彼女、バアー・コロンバンのお富さんと称す、ゲイボーイならず本当の女性だ（そう、どこのつまり、奴さんの顔が伊吹って新人スターに似ているって云うのを……あつしちやないんですよ、他人さまが云いふらすのをつい頭から信用しちやって鼻の下をのぺ





ッと長くした途端、どたん場で見事、しっぺ返してさあ——、いや早やわれながら、あいそがつきてどうも……。

牧 だけど、兎も角九分通り目的を達成したと云うから大した度胸だよ。噂通りだとすると天下広しと雖ど正に一石二鳥の大当りも

のさ、感腹した。

山一 手放して感心されちや困りますよ、ホラ、何んとか女性ホルモン剤をたらふく喰って、若返りしようと思って下痢したようなもんで……。

牧 いや、いきさつを一切御披露した方がよさそうだ、丁度頃合の女性が一人来客中だし、供養の意味にもなるから……。

山一 初鼻から恥をかかせないで下さいよ。困っちゃったなあ。そう段取りが出来ていちや……いや、どうも、これは初めまして、山一と云うけちな野郎で御座んす、何あんだ、奥さんまで出てこれれちや……。

牧 家内のあとが佐藤妙子さんって、あんたには初めてだがレギュラー女性群のピカー、今後ともにどうぞ宜敷しく……。

山一 どうも……、いよいよ以て切腹物ですな秋口の夜が長いのは男のふんどし、いい恥さらしみていなもんで——ちや、一つ皆さんの前で思い切って大汗をかかせて貰いますかな。ことのいきさつと云うのはそもそも松見町の伝吉がいけなかったんです、シネ、寿館の支配人をやっている……御存知でしょ。男前な、あっしの店のお得意さん、その



先生が近日、『清水の佐太郎』って映画がかかるから、観に来ないか、ただ観るのは面白くない。女を誘って一緒に来いって云う訳、そのまた女と云うのが三味線の音を聴いて育ったと云う富公、一寸小粋な女なんです、それを伝吉氏がわざわざ御名指ししたんです



から、もういけませんや、また……女の方も素直に招待と云う餌につられて着飾って行った……。

牧 どうせ観客の少い日なんだろう、……でないと困るからねえ……

山一 そうなんですよ。大体あの界限は料



亭や待合の多い処だから、昼間から芸妓を連れて歩こうとパン助と腕を組もうと一向に平気なんですが館の入口で伝吉氏から小さな風呂敷包を渡されたのには驚いた、お土産付にしちや中の造作が変ってまさあ……。まあそれはちよいあとで申

上げますけど、兎も角、二階正面席に納った。正面席と云っても正式の客席じゃなくて、映写室のすぐ下にある空間に座団を二つ置いたと云う特別席、だから二階には誰もいないんです。

牧 あんたの事だから一杯やりながら彼女とホンワカ、ホンワカ観賞したって訳だろう？ 羨しい話だ。

山一 御冗談仰言っちゃ困りますよ、一杯やる処か例の小包みを解くと酒のつまみじゃなくなって麻紐が出て来た御丁寧に豆絞りの手拭いまで添えてある。これだから泥の中の花を咲かそうにも、念が入ってましよう。つまりどうとも御随意に……謎なんです。で——まあ田舎の芝居小屋見たいに、香水の匂いのする白足袋のお富さんを右側に座らせて、どっこいしよとあぐらをかくと映画が始まった……映画の筋はもう御存知でしょうけど、矢場の



女見てえなお照（福田公子）が水色縮緬の蹴出しを出して街道筋の茶屋で佐太郎の浩吉とからみついてる処からお定まりのやくざ同志の喧嘩がおっ始まって、清水一家の御曹子長二郎を浩吉が教練する……と云つちやおかしいが一宿一飯の御礼代りに長ドスを抜く、



とまあ、少々仁義くさい話の中に新徴組の悪役連中が密書を待った美寿弥（伊吹友木子）を追いかけて廻すんだから、いくらそばの富公が伊吹に似てると云うても、初めから福田のお照が新徴組に何してやられるとばかり思っていました。あとでよくよく考えてみる



とお照さんは全くの脇役なんで、芸は下手でも伊吹の旅芸人、美寿弥が、こんな処でお話するにや、主人公と見ていいんでがしようなあ。――

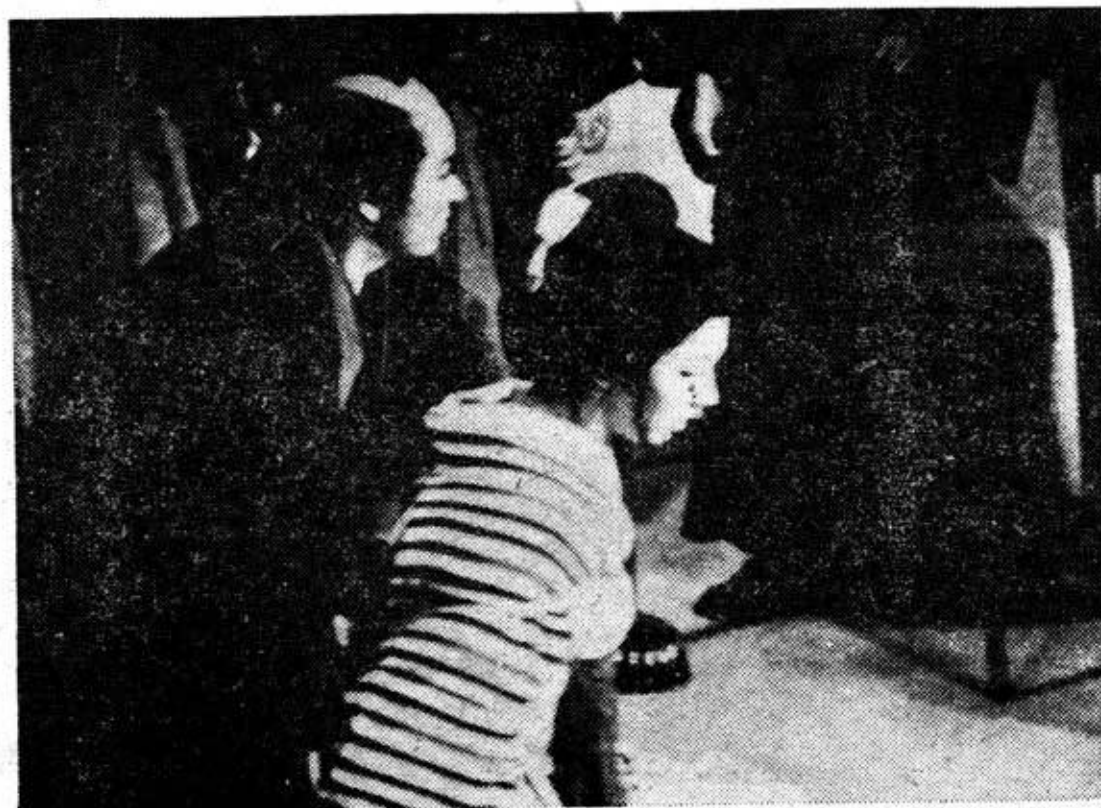
奥さん、色付で伊吹の踊った娘道成寺はよござんしたよ、近頃は歌舞伎座まで行かなくとも百円位で舞台一面そっくりなもの近所で観られるんですから結構な世の中でさあ……。

牧 道成寺はいいとして近江の琵琶湖みたいな処で佐太郎が伊吹を識りその足で子供だましに春日八郎と茶摘み音頭で唄って踊るのはもう止めた方が大松竹映画のためにもよさそうだ。

少々ふざけても『遠州森の石松』の錦ちゃん位な処が好感を受けるからな。

で――美寿弥が新徴組にくさいと捕ったと、それから……。

山一 捕ったか拐されたかお屋敷みたいな屯所で例の場面が始まる前に北上弥太郎の長二郎が乗り込んで行く処があったでしょう、こりや何か起るぞ……と思ったもんですから、そばで観ている富公の手をそっと握ってみると離さない、ぐっと握ると反応がある。こいつはメメたと思う途端に、鞭でたたかれる



伊吹の姿が写ったんですよ。長く曳いた裾を乱して、両手を縛られ、円るまつちい、ポチヤポチャツとした顔をひんまげて、ちよい痛々しそうな……。

へさあ、女、密書は何処に在るんだッ  
出せ、出さぬか！



出せ、出せってそう簡単に手足を出せるものですか棚の上の達磨じやあるまいし……。  
もっとも、女を責めつけるにや密書だの、宝



物の在り処だなんぞがいいがかりで昔のお武士さんは威張ってたんだから、いい気なものでさあ、いや、大いによかったですなあ、今

思うと……。いや、こりや全くの余談ですが——で。

へ出さぬとあらば、それッ……

と満座の中で百匁ローソクを顔に突きつける。これですよ。なかなかよく撮れてますね、こりや惨酷だと思ふ途端に力が入ってお富女史の両の手を後に廻わして手首を重ねた、そして正面映画の通りに二巻きにして女を縛ったんです。何しろ、あんな処で、暗いからいいようなものの声でも立てられると大事ですけどそこは女の方が協力したんでがしような、素直に着物の前まで捲くつて長襦袢をほんのりと見せて呉れましたから……。

牧 暗くてお気毒みたいだったろうが、正にスリル満点だ。冷房がきかないと汗をかく処だね。またよく一気にやったものだ。

山一 どうも女の責めは……このローソク責めでも、もう一寸長くやったらと思うのにどういふ訳か知らねえがアツと云う間に済んじゃうから惜しいですなあ、で……縛った女

は映画の方と一緒に観ながら手首の縄尻の処を持って、ちよくちよく後に曳張ったり、思い切り固く縛った肩の処でゆすぶってみたり



していたんですが、そのうちに備前屋の松五郎がへ女を責めるにや責める方法がありましよう、こうして……何処に隠してあるか、っ

て襟口や襦袢の中、帯の下まで手を挿込んで探す一種の淫ら責めをおやりになる。どうもまた連れ合いのお富さんを出しちや口はばっ



たい物の云いようですが、この人は時折、例の紹介者伝吉氏が酒の席で……勿論座興でしように後手か何んかして遊んだ経験を持つ



ているらしい——と睨んだんですが、そうでないと映画館内ですよ、そんな処で少々識ってるからと云って易々と女の手は縛られませ

んよ、ねえ、奥さん……。そうでしょうか知らって、本当の話なんですよ。

牧 まあ、前代未聞な縛りを実行してみた

たが如何んせん、階下には見られて困る見物客がいるって云う訳だね。おまけに場処も狭い、幸い暗いから……。

山一 佐藤さん、そう笑わないで下さいよ。丸で旦那に操つられてるようで……その誘導訪問通り、幸い暗いんで裾の処はどのようにも乱れさせる。黒っぽいけど赤がひどく身に泌みたって云う訳ですよ。

処で松五郎の淫ら責めももうちょい長いといいなと思ううちに終っちゃう、これも考えてみると撮影所のセットの中で監督さんや大勢人のいる前で

へ密書がなければ帯を解いて素裸にして見ろッ……となっちや当の女優さんも堪りませんからねえ。――

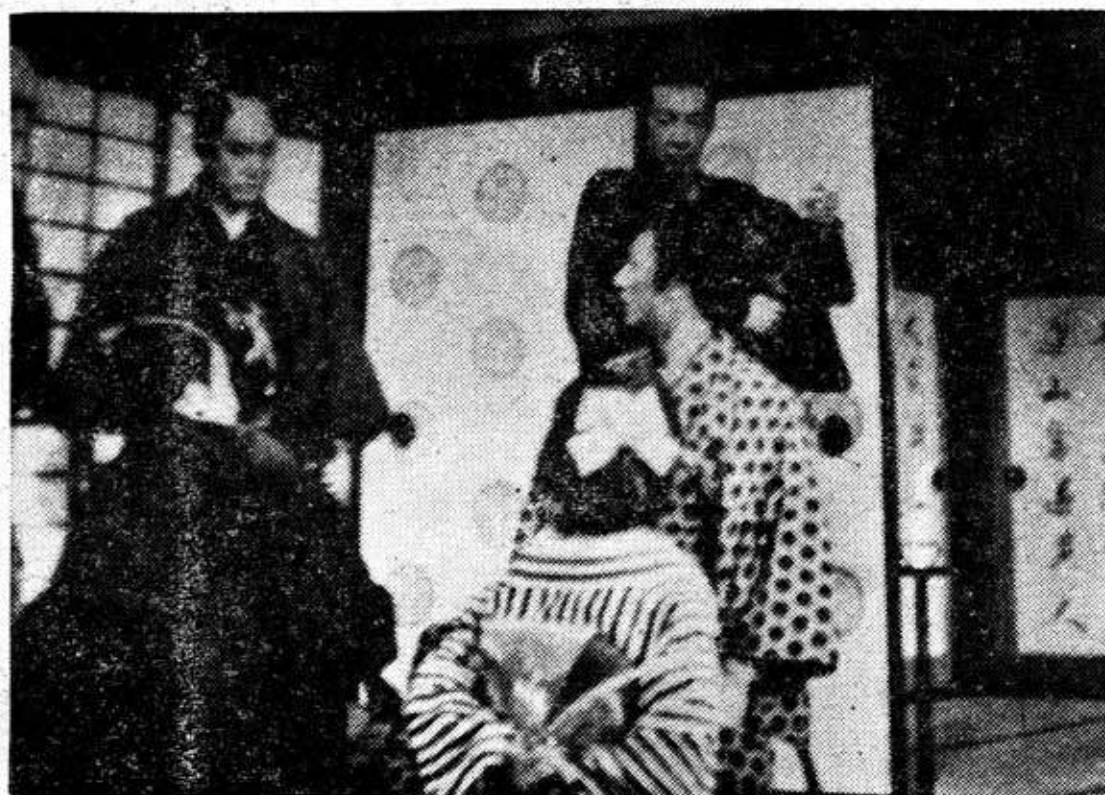
ただ、あつしが事もあらうに縛った富さんの麻縄と違ってスクリーンの伊吹の方は第一極細の細引だし、多少緩るんでいる処はどう見ても芝居でがしような、だから今度はそばのお富さんよりは伊吹先生の後手の方が気にかかったやつて……。

牧 この水島君寄贈のスナツプによると、大丈夫、本当に両手首が縛ってあるらしい。度度云うんだがどうかすると帯の下で縄を握



っているのが多い、カットでも後背が写った時には本縛りでなくっちや興冷めだ。ねえ、佐藤さん……。





この映画の縛りシーンは珍らしく長いんでつい、どうも……。

牧 一寸途中で物云いをするんだけどあんたの彼女の方ね、ずっとおとなしく縛られて観ていたの？

山一 おとなしい処か体をすり寄せて来て唇まで出すんですよ、喘ぎながら……。よくアベックの御兩人が濃厚場面をそのまま地で行っちゃうのと全く同じでがすよ。不思議な事に当日スクリーンの女と同じ柄のきものを着て、伊吹が立つたままあちこち歩き廻る度にチラチラする緋縮緬までそっくりなのも妙な巡り合せ。何んの事もない、一事が万事伝吉支配人の指金なんでさあ——。

いや早やどうも……。牧 処で話は一応その通りなんだろうが、さっきのお富さんを後手になすったあたりは、ちと事情がこみ入ってるんじゃないか……と思うんだが——。

佐藤 そうで御座いまししょうね『清水の佐太郎』はあいにく風邪で臥っていたものですから見損なっちゃいましたけど、そのうちに拝見させて戴きます。お話を承りながらスナツプ写真を予告篇として、ホホホ……。山一 で何処まで行きましたかな、何しろ

山一 どうも、ズバリ刺されるんで、痛みもので恐れ入りました。そうなんですよ。……いきなり女と同伴して、スクリーンの女が縛られたからと云って諒解なしにそばの彼女は縛られませんね、だから『いいだろう



？この手をいたずらさせて貰うよ、一寸だけ……ね』位は云ったろうと自分でも思うんですが事実探り探り彼女の腕を後ろに廻わして袖の下で縛るまでには、スクリーンの伊吹の動作には追いつけなかったことを白状申上げますかな、兎にも角にも和服姿の彼女を曲り





ながらも後手に縛ったことは本当なんですから……。信用して下さいよ。

牧 それで安心した、そうこうするうちに首を斬られ損なった長二郎が、思い直おして伊吹のおる部屋へ飛び込んで来る、何んとかんとか云って伊吹をかばおうとする。

山一 その前に伊吹の後姿で両手首が本縛りにされとる処がちよっぴり写りましたね、御愛嬌にもピクピク動かせながら……垂れ帯の上でしたよ。この時あしのお富さんは足がしびれたものか乱れた裾のまま右膝をパツと立てたんです。

牧 忙しいねえ……。この責められる伊吹をしつかと抱いた長二郎の方はどうでもいいが、伊吹の表情は素晴しく生きてたね、眼がいい、この女優に将来性があると思ったのはこの時だった。

山一 ですがもうこうなりや何も暗着のままいつまでおるより一つその事、緋縮緬の長襦袢で縛られて活躍して貰いたかった——と、皆さんお思いになりませんか。肩の処からチョッピリ覗かせるなんて罪作り物ですよ。

牧 そこが悲しいかな公開のフィルムなんだよ。一方ぐっとお富さんの肩の処をあんたの事だから抜いたんぢやないのかい？誰も見てないんだから……。

山一 凶星！またやられましたな、本当にやっちゃったんですよ、ヘッヘッヘッ……。幾分嫌や嫌やと云う処を映画とは右左反対になっちやいましたたが襟の所



を剥いで長襦袢を出させ、備前屋松五郎に立遅れること二、三分その時噛まれたのがこの傷なんです。アラ嫌だ、ホホホ……なんて、奥さんも人の悪い、まさか……いやそんな悪ふざけはしませんよ、天井裏みたいな特別席で赤黒い蹴出しを捲くったってどうにもなり





ませんや、ねえ、そうじや御座んせんか……  
牧 成程、しっぺ返しの第一発は手きびし  
かった、謹んで御同情するとして、まだあと  
があるんだろうがその時に一こと、時代劇の  
映画に何故女だけが後手にされて折檻されな  
ければならないのかと……つくづく思うね。

特に、魅力的要素とは一体何んだらうっ  
て何も『清水の佐太郎』に限らず、どの  
映画でも感んじるんだけど、その点、佐  
藤さんなんか、どう考えます？

佐藤 結局興行価値からなんではない  
でしょうが、縄を反駁する男性の身体よ  
り縄の喰い込む女性の存在が——し  
っぺ返しをしちや困りますが——観  
客をいい意味で刺激するとでも申し  
ましようか、ましてカラーで色彩の  
度の強い着物ですと、視覚の点から  
でも雄の孔雀のようにスクリーンに  
釘付けする、嫌でも焦点を向けさせ  
るものが一面に漂ようているように  
思います、このスナツプを拝見して  
も唯一人の女性だったと云う処に全  
体の筋の良否は別として、成功して  
いるんではないでしょうか。

山一 変な事を申上げるようです  
が同じ女性でも乞食や婆さんばかり  
縛ったって何んの事はない。やっぱ  
り若くて美しい一目惚れするような  
女でなくっちゃ……木戸銭が承知しませ  
んや、ねえ、そうでがしよう。

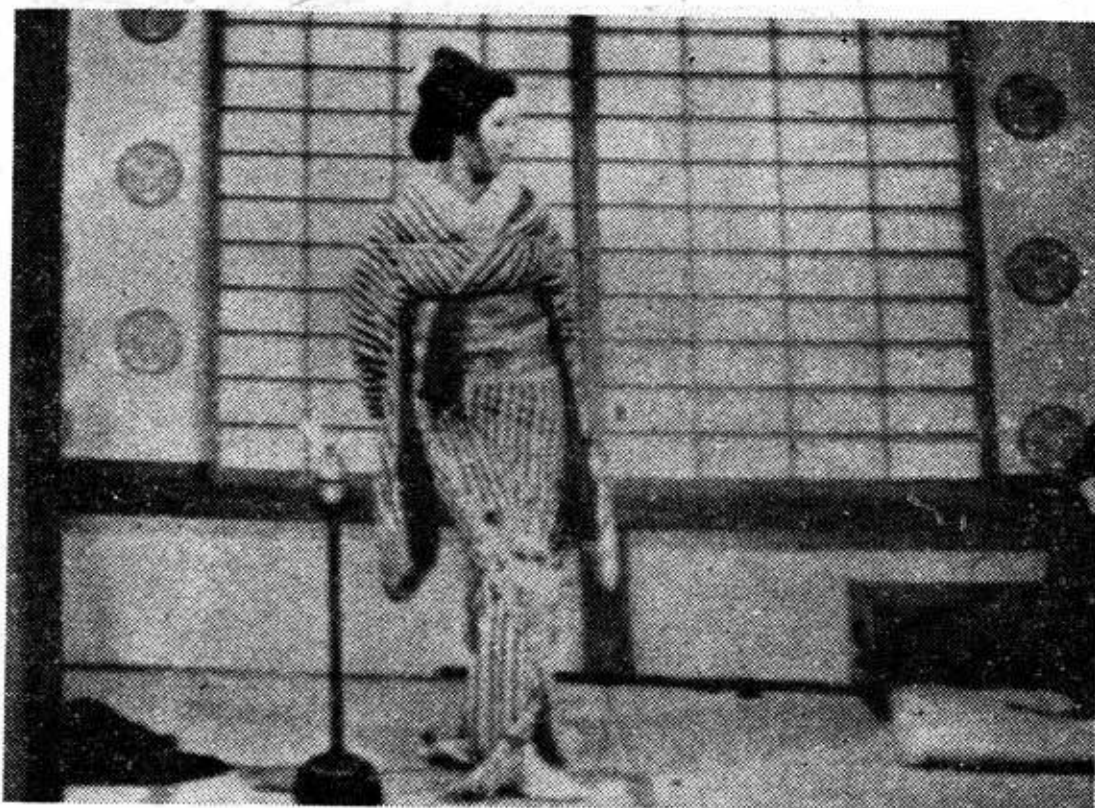
牧 いや、どうも……それでは木戸銭  
の承知する処で、あわやと云う瀬戸際に  
佐太郎の偽上使がいつものんびり颯爽と  
乗込んで来た。普通だとこの先生達が直



ちに刀を抜いて斬合つた挙句、女を救い出す  
処を御丁寧に芝居がかりで白紙の勧進帳を  
読むんだから縛られ放しの伊吹はただウロウ  
ロして呉れるからマニアは喜ぶと云う寸法に  
なるんだがこちら持参のカメラアイを透すと  
御覧の通り本番スタジオ撮影が結構深夜に及



んだと見えて伊吹の縄が、いつの間にか一本となり、しかも右肩の処に紐の結び目が見える、余っ程、くたびれた助監があと先考えずに慌てたものと見える。見える序でにカメラレンズの眼力まで胡魔かそうたって、そうは問屋が卸ろさない……。



山一 成程、驚きましたねえ、だけど縄目の一本や二本は負けといたらどうです？、でないと、あっしの富公の方はずっと縛られ放しなんですから暗目にも頭を振って苦しいって云い初めたのを一体どうして呉れますかいな？

牧 そいつは大変だ、『佐太郎』の方を急がせなくっちゃ……もう一寸の御辛抱だ、

で、白紙の勸進帳を手渡す否や、間髪を入れず伊吹の美寿弥を八っちやんと一緒に連れ出す、このあたり松竹コニカラーの色調は美しかったね佐藤さんの前だが伊吹の蹴出す緋縮緬の色の鮮やかなこと……富士カラーだところは行かない。

何んだか縛り場面<sup>サ・エン</sup>に限り『終』の字幕が出そうで気が気でないがパタパタ……と屯所を出て追手の来ないうちに縛ったままの伊吹を広場正面左上りの石段に昇らせるまでの気ぜわしいこと……シャッターが間に合わなかったと水島君はこぼしていたよ、残念ながら伊吹嬢の最後の後手縛りが一秒の何分の一かの間に遠のいて了ったと云う——山一さんの得意のセリフじゃないが、いや早やどうも全く口惜しいお話で御座んした。



それから山の上の森の中で今は全く解放された伊吹の美寿弥嬢をお尻からスナップして大団円になるんだが、山一さん、大事なお富君の方はどうしましたっけ……？

山一 どうにもこうにも、耳は噛みつかれる、蹴出しの膝小僧で突つかれると飛んだ飼



犬に喰いつかれて、いや早や惨々な大団円、その時擦りむいたのがこの傷なんで……。

牧 処がこの映画にはもう一つの添物が盛ってあるから恐れ入ったね。本当は私に取っちや山が二つ残ってることになるんだが……その一つは縛りこそないが例の好色漢松五郎



がお照を何しようとする連続場面と今一つは女中タイプの小娘を白手拭いで前縛りに両の手を縛って嫌やがる小娘に盃を当て、悪ふざけだらうとは思いますが、手籠めに近い仕業をす

るカットシーンの二つ。

第一の福田公子のお照が畳の上へ仰向けに水色縮緬?の長襦袢の裾を乱して倒れたり廊下での一合戦はそれはそれなりにまとめて次の機会にお話することにしてタイトルには出たろうが無名に近いこ

の小娘嬢襲撃の場は御愛嬌もの。ただ赤色カラーのきく松竹映画は真一文字に開かれた小紋模様の女の下着を鮮かに描いて眼をさめさせてくれたのは有難い。

処で山一さん、さつきの豆絞りの手拭を早う使わなくっちゃーもう場面が終つちまいますぜ

山一 合点だツと大急ぎでお富女史の後手を解いて今度は斜め横に向かせての前手縛り……をやったとお思いになるでしょう。――

処が事実は左に非らずでさあ、反対にあっしが猿轡を噛まされた。ヘッヘッヘッ……。本当にとんな話。

牧 九分通り成功して一分が逆襲と来なすっちゃ『清水の佐太郎』さんに済まなかった訳ですな……アハ

ハハッ

佐藤 ホッホホ……、ほんとに面白いお方ですこと、それで?次週もその女の方と御一緒なさるお約束でも……



山一 え、ええ、そりやもう貴女、あつしが言い出す迄に富公の方から、こう、しおらしく横目であつしを流しみて、ねえ山さん、今度はどこかでゆっくりと、吊し上げたり、鞭で叩いたりして欲しいわ」と恥しそうに……

牧 おいおい本当かい？

山一 ……と言ってくれりやあいいと思つてる内に、サヨナラとも言わんとお消え遊ばしたんで……。

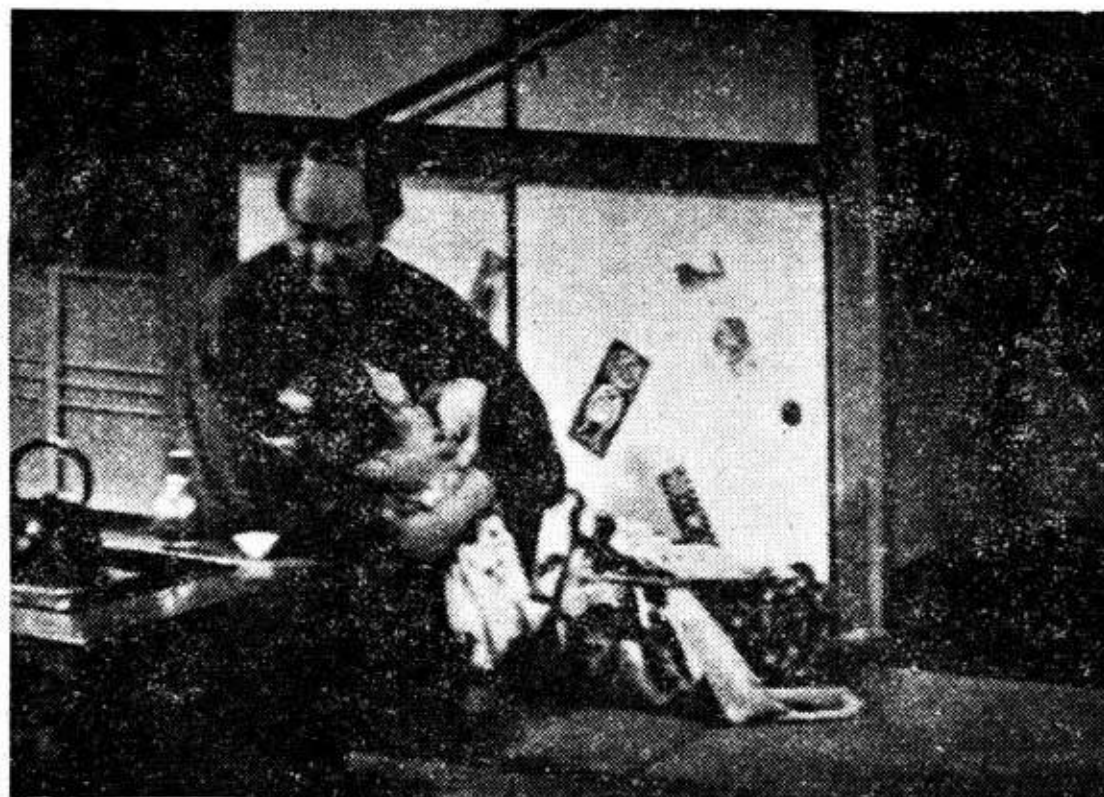
佐藤 アラッ、オッホホホ……。



牧 ハッハハ：見事なウツチャリですな。いやお陰様で今晩は大変面白かった、次週は、おっと間違えた、次月号は一つ何を打出すかな、当てにならぬ予告篇スナツプの一片を掲げて満天下の読者各位に敢えて次の如く一言。

御期待を乞う！

但シ二番煎茶につき、呑み味の



悪い処に御容赦の程を……と。

(第2回作品・終)

### 【次号予告】

次号は、北沢典子の巻と致しまして  
新東宝作品

『危し伊達六十二万石』

を予定して居ります。何とぞ御期待御声援下さいますよう御願ひ致します。





# 竹夫人



——咳余叢考という中に「竹を編みて筒と為す。其の中は空しくして外は竅なり。暑時牀席の間に置き以て手足を憩はす可く其の輕涼を取る也。俗に之を竹夫人と謂ふ」とあり、大槻博士の言海には「暑中に衾中に入れて涼を取る具。だきかご」と説明してある。この一篇は、その竹夫人に想を藉

りて纏めたものである——。

——ロウ、ロウ、ルロ、リロ——

玉を転がすようなカナリヤの声に、それまで深々と羽根蒲団の中で軽い鼾を立てて、まどろんでいた芳枝は、ふッと眼を覚した。夏の夜は既に明けはなれて、唐草の棒を嵌めた窓の硝子に、庭木の梢の影が映って、そより

## 三 條 卓 史 作並 繪

と揺れていた。

彼女は頸を曲げて小卓の上の枕時計に眼をやった。時計の針は六時を一寸廻っていた。両手を緩くり上に伸ばして、二三度大きく息を吸い込んだ芳枝は、パジャマの袖を捲って腕を擦った。

——夫は、もう眼を覚しているであろうか——

病気で、ここ半年ばかり別室で臥っている夫の陳。広東生れの支那人だが幼ない頃、父母と神戸にやって来て、貿易商の子として育った。芳枝が陳と結婚したのは今から五年程前、彼の父が未だ盛大にバイヤーで発展していた頃、陳の父の取引

先の店にタイピストとして勤めていたのを見込まれて引取られたのだった。芳枝が陳と結婚して暫らくすると、陳の父親が交通事故で急死した。陳は父の後を継いで貿易業を営んでいたが、折から世界的に襲ってきた不景気と、経営の未熟さのため、陳の経営している大栄公司も次第に不振に陥っ

ていった。

それに加えて昨年の暮から、黄疽がもとで床に就いてしまった陳。それでも毎日、彼の病床を見舞う老支配人の延周を指図して、何とか経営を続けていたが、最近扱っていたマレー向けの広幅綿布の大量な輸出がキャンセルされて、大栄公司の命脈も、その大動脈を切断されたような悲境に陥っていた。

芳枝には夫の仕事の事は余り分らなかったが、時折洩らす陳の言葉や、毎日の暮し向きに現われて来る経済の面で、大凡の想像はついていた。

——陳の再起のためには金が必要なのだ。何百万と云う資金は望めないまでも、せめて五十万でも自分の手で早急に何とかしなければ——

芳枝は、鏡の前で手早く化粧を済ますと、陳の部屋へ入って行った。

「あの、今日はこれから郷里の墓参に行かせて戴きたいと存じますが」

陳は蒼白く痩せた腕に書類を取って、頻りに思案していたが

「そう云えばもう直ぐ盂蘭盆だね。お前も、わたしのために苦勞ばかりさせて済まないと思っているよ。いいから故郷のお母さんの処でゆっくり休んでくるがいい」

陳は芳枝の顔を見て、いとおしそうに云った。最近めっきり気の弱くなった夫の様子を

見ると、一日もその傍を離れるに忍びなかったが、今日の彼女にはどうしても郷里へ行かねばならない訳があった。

「それではこれから参ります。今夜帰る予定ではありますが、田舎は汽車が少のうございますので、都合で一日延ばさせて戴くかも分りません」

「いいよ、そんなに急いで帰らなくても」

「済みません」

○  
芳枝はそう云って挨拶すると、自分の部屋へ帰って急いで服を着換えた。

姫路で乗換えた汽車は、ゴトリゴトリと次第に山深く入って行った。車窓に近く去来する樹木の緑が滴る程の清澄さを湛えて、彼女の心に淀む喧燥な都会の塵を洗い浄めてくれるようであった。

昔、城下町であった芳枝の郷里のT町は、姫路から更に西北へ二時間余り行った所にある。彼女は駅前からハイヤーで松並木の街道の外れにある実家へ飛ばした。

「おう、よう帰って来たのう。さアさア上って、お前、ひどう綺麗になって、わしや見違えたがや」

芳枝の母は、丁度畑から帰ったと云う処であったが、頭に冠っていた手拭を取って、庭の上り框をポンポンとはいたした。

彼女はハンドバッグを其処に置くと、別の

風呂敷包から菓子と果物を出した。

「お母さん、お線香ないかしら。あたし、このままお父さんのお墓へまいって来ますわ」

「ああ、あるともあるとも。そりや、お供物かい。ええ、神戸から？、それや重いのに御苦勞じやったな」

母は、やつこらと腰を上げて奥の仏壇から線香を持って来た。そして

「はい、それからお米とお水。お前もここ二年帰つたらんで、よくお父さんを拝んでおいでよ」

と云いながら彼女を送り出した。

お父さんの墓と云っても、それは畑の隅に埋めた上に、やや角目の石を置いただけのもので、その前に竹の花筒、線香立が土に挿してあるので、お墓と分る程度のものであった。芳枝が墓参を済ませて母の所へ帰ると、母は台所で一生懸命におはぎを拵えていた。

「汗が出たろ。さあ着ている物を脱いで、井戸端で身体を拭くがいい。ひんやりとして、夏は井戸水に限るなア」

「わたしは、これから花泉の五郎さんの処へ行つて来ますわ」

「ええ？何だって、あの酒屋の若旦那の処にかい？」

と母は、顔に持ったまま吃驚した様子を訊いた。

「ええ、神戸の駅から電報を打って置いたか」



ら、きつと居て呉れると思うの」

「お前、何か五郎さんと交際でもあるのかい？」

母は心配そうに声を落して、芳枝の顔を覗き込むようにした。

「いいえ、別に」

「五郎さんはね、未だ独身で居なさるんだよ。何時かお前を嫁に呉れって言ってただろ。あれから他の良い縁談が沢山あったのに皆んな断ってしまってるって話だがね」

「そう、でもあたしやもう結婚してしまっただけですもの。仕方がないわ」

芳枝は、何か疑っているような心配そうな母の顔を見て、クスリと笑った。

芳枝は学生の頃から絵が好きで、学校で習う以外に、その町の高等学校に勤めている先生の処へ放課後、絵を習いに行っていた。彼女が五郎と知り合ったのはその先生の処で、五郎が高校三年、芳枝が中学一年の頃であった。

五郎はこの町の「花泉」と云う酒を造っている酒醸家の御曹子で、先生はこの二人の手腕が良いと云って特別に可愛がった。

或る日曜日の午後、先生の家からの帰途、「うちの竹の家へ寄って行かないか」

と芳枝は五郎に誘われた。彼女は五郎の別宅にある竹の家の噂は聞いていたが、未だ一度も見えた事がなかったのだ。

「竹の家ってどんな家？」

ときくと

「来て見れや分るよ。藪の中の、雀のお宿みたいなものだ」

「そんなら、つづらもある？」

「つづらなんかいいけど、お祖父さんが生きていた頃に物好きで建てたんだって、屋根も柱も壁も床もみんな竹だよ」

「へえー、そんなお家ってあるの？」

二人は大きな画板をぶらんぶらんと腰の辺りに揺りながら、長い吉井川の堤防の上を歩いていった。

川の氾濫を防ぐために、一帯に竹藪を繁らせたのが昔の水防政策であった。

その藪に続いて人家の尽きる辺り、竹で造った冠木門を潜って二人は竹の家へ行った。

この家には平生は誰も住んではないので門の鍵は堤防の下の樋門番の老爺が預っていた。

芳枝はその家の竹の縁側に腰を掛けて

「ほんとに竹ばかりね」

と感心していた。孟宗、朱竹、寒竹、斑竹、黒竹とあらゆる種類の竹を巧みに組合せて建てたこの家の風趣は、何とも云えぬ風雅なものであったが、その頃の芳枝には、ただ、変っているな、と感じた位のものであった。

「そこへ、そうしてお出で、一寸スケッチするから」

五郎は庭へしやがむと、画板を膝の上に置いて鉛筆を走らせた。

「あたしも五郎さんを写生しよう」

と云って画板へ手を延ばそうとするのを

「あッ、動いちゃ駄目だよ。ポーズが崩れてしまった」

「だって、あたしだけじっとしていてもつまらないもの」

「モデルはじっとしているもんだよ」

「あたしがいつモデルになつて」

「画に描かれりやモデルだよ」

「あたしやモデルは嫌い」

「嫌いつたって、折角描きかけているものを……、芳ちゃんを動けないようにして描いてやろうか」

「動けないって、どうするの？」

「縛るんだよ」

「まあいやだ。縛って描くなんて」

「なア芳ちゃん。一ぺん縛られて見ないか」

「怖いわ、あたしそんなこと」

「別に何にも怖いことはないよ。絵に描くだけなんだから」

「でも、なんだか怖い」

五郎と芳枝は云い争っていたが芳枝は怖い怖いといながら、日頃から兄妹のようにしている五郎の言葉なので、さして恐怖心も感じなかった。五郎も最初は冗談のように云って居たのが次第に本当に縛って見たいと思

出した。

「その長靴下をお脱ぎよ」

「いや、脱がない。胫が見えるもの」

「胫が出たっていいじゃないか」

「あたし恥かしいわ」

「恥かしいって云っても誰も居りはせんよ」

「あっち向いててよ」

「脱いだの？ 脱いだらそれをお貸し」

「どうするの？」

「これで、この靴下繫いで

芳ちゃんを縛るのさ」

「あたしの靴下であたしの手を縛るの？ まあいやらしい」

「手を後ろに肱を曲げて」

「いやよ、いやよ。縛るのいや」

「だって動けないようにするんだもの。じっとしておいで」

「ああ、そんなにきつく締めて、……いたい

……いたい」  
「あんまり弛るくすると、手首が抜けてしま



「五郎さんたら、ひどいわ、ひどい人よ。知らないから」

芳枝はセーラー服のスカートから、両足をばたばたさせて大仰に騒いだ。  
「ほんとうに痛いのか？」

五郎は芳枝を覗き込むようにして、一寸氣遣わしげに訊ねた。

「ううん。」

そつと五郎を見た芳枝の瞳が、いたずらそうに笑って居た。

「痛い痛いって、嘘をついたんだね」

「だって、始めは痛かったのよ」

「よし、そんならもっと締めてやろう」

「駄目よ、駄目よ。いけないったら」

五郎は芳枝の抵抗を、遊戯でもしているように感じた。彼女もそんなつもりになって、良い加減に逆らった。だから、

「そのまま、手を動かしちや駄目よ」

と云って、五郎が芳枝の後手縛りを一旦解いた時にも、口では、

「ひどいわ五郎さん、もうよししてよ」

と云いながら、両手首を背中にしっかり付けたまま、じっと拳を握っていた。

それから後、五郎と芳枝は何回か竹の家へ行って、二人だけの幼い縛り遊戯をたのしんだが、五郎は高等学校を卒業すると東京の大学へ行って、芳枝とは別れ別れになってしまった。芳枝は中学を卒えると人の世話で、神戸へ出て商社に勤めるようになった。

東京の大学を卒えた五郎は故郷へ帰り、酒釀家の当主として芳枝を妻に迎えようとしたが、芳枝の両親は——家柄が違い過ぎるから——と云って断った。その後、五郎は未だに



結婚せず、家業の余暇には吉井川畔の竹の家  
に籠って、好きな絵筆に親しんでいる風であ  
った。

○

「よく訪ねて呉れましたね」

手入れの行届いた庭に面した奥の座敷に通  
された芳枝は、縮みの着物を着流して、団扇  
を片手にテーブルの向うに坐った五郎の、す  
っかり造り酒屋の主人らしくなった姿を、今  
更のように見凝めた。

「暫らくでございました」

芳枝は丁寧な頭を下げた。女中がバヤリー  
スをコップに注いで運んで来た。五郎は、そ  
れをぐつと一口飲んでから

「僕はあなたが、こうして訪ねて来る日のあ  
る事を確信していました。そしてその日を長  
い間待っていたのです」

と芳枝の眼をじっと見ながら静かに云った  
「あの、今日わたしが伺いましたのは……」

と、多少口籠りながら用件を云おうとする  
のを押し冠せるように

「いや判っております。それより仰言っ下  
さい。幾らお入用なんです」

そう云うと、五郎は懷中から万年筆と小切  
手帳を取出してテーブルの上に置いた。

芳枝は、彼が余りにも彼女の用件を知り過  
ぎているのに驚き、且つ怪んで啖嗟には言葉

が出なかった。

「大変失礼な様ですけど、僕は貴女が忘れ  
られませんでした。お別れしたのは未だ学生  
時代でしたが、それ以来、ずっと僕は貴女を  
想い続けて来たのです。僕は貴女が陳夫人と  
なられた事も知っています。御主人が病気で  
お寝みになっておられる事も、お仕事の方が  
うまく行っていない事も承知していました。

僕は何とかして貴女に助力してあげたい気持  
で一杯でした。然し僕から貴女にそうした事  
を申出る事は出来ませんでした。貴女が僕を  
思い出して訪ねて来られる日を、一日千秋の  
思いで待っていたのです。貴女の御様子に神  
戸の売捌所の者に頼んで絶えず調べておりま  
した。僕は今朝、貴女から電報を戴いて、遂  
に僕の望んでいた日がやって来たと思ってい  
るのです」

五郎は一気にそう云って、心持ち顔を赤ら  
めながら芳枝の顔を見た。

「五郎さん——と呼ばせて下さいますか。五  
郎さんは、わたしに何を求めようとなさるの  
です」

芳枝は膝でハンカチをまさぐりながら、俯  
向いたままで訊ねた。

「僕は貴女をあつた竹の家へご案内したいので  
す。あの家でゆっくりと二人で、幼ない日の  
想い出に耽りたいのです。勿論あなたが立派  
な陳夫人であると云う誇りは尊重いたしま

す。それから、この金は貴女を竹の家へ御招  
待する代償ではないのですから、どうぞ取っ  
て置いて下さい。貴女が僕の申出を承諾なさ  
るか否かは全然別の問題です」

芳枝は五郎の紳士的な態度に深く頭を下げ  
た。折からの風に、軒の風鈴がチリリンと涼  
いし音を立てた。

○

竹の家の夜は静かであった。月影を碎いて  
流れる吉井川のせせらぎが、さらさらと聞え  
て来る。

「まあ、これは」

そこで彼女が驚きの声をあげたのは、その  
部屋一杯に飾られている絵の構図であった。  
日本髪を乱した女が木馬の背に縛られてい  
る姿。腰巻一つの女が墓場の墓標に後手に縛  
られている姿。シュミーズの胸も露わに椅子  
に縛られている女など、あらゆる女の責め絵  
がずらりと並べられて、室内に不気味な空気を漂  
よわせていた。その中に、支那服の女が  
細長い竹で編んだ筒を抱いて手足を縛られ、  
転がっている絵があった。

「芳枝さん、これが貴女です。あなたが竹夫  
人を抱いて責められている処を想像して描い  
たのですが、夫人になられてからのあなたの  
顔が出て来ないので、こんな変なものになっ  
てしまいました」

「わたしを此処で、こんな姿にしたいと仰言

るの？」

「まあ、そうです。幼なかつた日の遊戯の延長としてね」

「まあ怖いこと」

「知ってるでしょう？竹夫人。僕もあれを手に入れていきます。人に抱きしめられて相手の気持を爽涼にする、しかも清潔な竹夫人。今夜は貴女にあの竹夫人になって戴きたいのです」

「あなたはそれが趣味ですか？」

「いいえ趣味ではありません。夢の中の女と思っていた貴女を、想い出のこの竹の家で自分の思い通りに責めたい。これは僕の断ち切る事の出来ない希いです。ねえ芳枝さん、怖いですか……嫌ですか……それとも僕のこの希いをかなえて下さいますか……」

芳枝にも幼ない頃、此の家で五郎との縛り遊戯に胸を疼かせた気持が蘇って来た。

「好きだった五郎さん——彼女は返辞の代りに黙って両腕を組み合わせてそつと五郎の前へ差し延べた。

「あんまりひどくしないで下さいね」

「有難う、芳枝さん。貴女はやっぱり昔のままの芳枝さんだった」

五郎は感激に眼を輝かせながら、その両手を固く握りしめた。

五郎は芳枝を伴うて離れの部屋へ連れて行

った。この部屋は彼が芳枝と逢う日に備えて部屋の造りや調度まで、彼の思う様に改装してあった。

「芳枝さん。これが、今夜の貴女のお召物です。そして此処に三面鏡がありますから、髪もその服に似合う様に結び直して下さい」

五郎はそう云って、其処にある乱れ籠を指した。

「ショートパンティと支那服と、これだけなんですか？」

「ええ、真夏の夜の竹夫人は、いろんな物を纏ってはいけません。簡素の美、それが一層貴女を引立てます」

「着換える間、あちら向いて下さらない」「ええ、僕一寸向うの部屋へ行つて来ます。

十分程して帰つて来ますから、それまでにちやんと身じまいをして下さい。それから櫛や簪やこうがい等は鏡台の抽出しに揃えてありますから、好いのを使って下さい」

五郎はそう云うと、静かに部屋を出て行った。芳枝は着ていたフレイヤーのワンピースをさらりと脱いでそつと乱れ籠に入れた。

床の間の香炉から一縷の細い煙がゆらゆらと立ち昇って蘭麝の香りが漂つて来る。彼女は真紅のサテンのような生地で作られたショートパンティを穿いた。その中央に「忍」という字が小さく金糸で縫取りしてあった。黒い薄い紗の支那服はまるで詠えたものよう

に彼女の身体にぴったりと副った。彼女は三面鏡の前へ坐つて、手早く洋髪を解いて支那風に結び直した。それは陳の好みで結つていた事があるので馴れてはいた。ただ、その鏡台の抽出しに揃っている髪飾りの美しさには彼女も今更のように驚いた。

——五郎さんは、わたしのためにこんなに色々の準備を整えていたのだわ——

そう思うと、何となく嬉しい様でもあり、また今夜の遊戯という事が何か恐ろしい様な気もするのであった。

彼女は鏡の前で両手を後に廻し、上体をくねらせて見た。薄い紗を透して、豊満な爛熟した肌が、妖しい曲線を描いてうねった。

「そのまま、そうしていて下さい」

何時の間に入つて来たのか、五郎がそう云つて声を掛けた。彼は透明なビニールの長い紐を手にかけていた。

「いいですか、その両手をそのままこれで縛りますよ」

そう云って芳枝の背後に立て膝をし、そのビニールの紐の端で彼女の両手首をきりきりと縛った。ビニールのやや幅の広い紐は、柔軟性がすぐれているので、かなりきつく縛つても、彼女に苦痛を感じさせる程ではなかった。

「じゃア、いよいよ始めます。これから明日の朝七時、川向うの広福寺の鐘がなるまで、



あなたは陳夫人でもなく、芳枝さんでもない。僕は竹の家の主人、そしてあなたを竹夫人として行動します。もっとも、竹夫人は竹の家の召使や奴隸ではありませんから反抗しても、逃げてでも構いません。僕はそれを追って、僕の心に描いている美を探究したいと思っています」

五郎は紳士的な口調でそう云うと、今度はがらりと口調を変えた。そして

「おい阿女、立てッ……」

と云ってビニールの紐をぐいと引いた。彼女は不意をくらって後手のまま、どっと仰向きに倒れたが

「どうした、立つんだ、立つんだ」

と云いながら、更に強く紐を引いた。

「五郎さん。そんなに引張っては、立てないわ」

「五郎と云うんじゃない。大人と云え」

「だって」

「早く立てッ」

「待って……」

芳枝は長いビニールの紐の端を下げて立っている五郎の足許で、後手縛りのまま立ち上ろうとして芋虫のように身をくねらせた。

ようやくぐると俯向きになって、膝を曲げ、顎を床から引くようにして身体を起すと五郎は黙って部屋の隅の太い竹柱の前へ引いていった。

そこで更に余っているビニールの紐で彼女の胸と腹を縛ると

「やア、竹夫人の人柱が出来た。しばらくそらやっているんだよ」

と云うと、脚の細長い小卓を持って来て、芳枝の腹へすれすれの位置に置いた。そして卓の上の香炉の蓋を取って火を点けると、妖しい匂いのする煙がもやもやと立ち昇って彼女の顔を匍い上った。

「あ、変な匂い。五郎さん消して」

「これは女の心を夢の国に誘う蛇精の香だ。しっかり嗅いで、魔性の女になるんだな」

五郎は芳枝の前へ竹の床几を持って来て、それに腰を下すと、緩っくりと唐扇でその煙を煽いだ。

芳枝は、何だか頭の中がぼうっとする様なその煙の変な匂いから逃れようと、顔を思い切り上に向けて身体をよじらせた。白い顎を蛇のようにはい上ってゆく香の煙。二筋のビニールの紐で締め付けられている胸のふくらみは、薄い紗を透して可愛い乳首がすけてポチンと盛り上っている。

——もう暫らくすると、この女が苦しみに悶える姿態を見せて呉れるのだ。幾年も待った心の中の女が……見ろ、すでに白蛇の妖精の乱舞の前奏曲を奏でているではないか——

五郎は支那風の長いパイプをくわえて、芳枝の動きを見ながら、彼女の肌を責めたい衝

動が、しきりに湧いてくるのをじっと抑えていた。

そのうち、最初はさほどきついと思わなかったビニールの紐が次第に緊って来て、芳枝の胸と腹のくびれは一層深くなって

「ああ五郎さん、くるしい、紐をゆるめて」と叫んだ。

「そんなにきついかい。じゃア紐は外すが、阿媽はその服を脱ぐんだよ」

「ああ、いやよ、わたし」

「嫌なら、もっとそのまま辛抱するんだ」

「ああ、きつい。ねえ、ゆるめて」

「じゃア、服を脱ぐか」

「ああ、いや……」

「なら、仕方がない」

「ゆるめて……お願い……云う通りにするわ……」

「そうか、では」

五郎は、床几から立ち上ると芳枝の前の香炉に蓋をして小卓を退けた。

ビニールの紐から解放された芳枝を

「此処に掛けなさい」

と云って、自分の前へ別の床几を置いて、向い合って腰を下した。

「五郎さんて、ほんとにひどい方ね」

芳枝は上目使いに五郎を一寸睨んで、両掌で胸を撫でた。くりくりと彼女の手の動きにつれて揺れる胸のふくらみを、五郎は吸いつ

けられる様な眼で見た。

五郎はつと立って隅の壁のスイッチを押すと、今まで薄暗かった部屋がパッと明るくなった。床几に帰った五郎は

「さア支那服の紐をお解き」

と芳枝を促した。

「ねえ五郎さん、こんなうすい物、着ていたっていいじゃありませんか。身体が透けて、裸も同然よ」

彼女は胸の前へ両腕を組んで云った。

「同然なら、脱いだって同然だろう」

「だって、わたし、人の前で」

「僕の前だよ」

「五郎さんだから、なお見られたくないわ。あたし、どうしてもいいか分らなくなりそうなの、このままで許して」

「いけないな。僕はそれを何年待ち望んでいたか知れない。さあ、その白魚のような指先で、花結びの紐を一つ一つ解いて行くんだ」

「ねえ、どうしても許して下さらないの？」

「ああ、どうしてもそのままでは許さない」

「五郎さん、わたしは人妻です。人妻が他の男性の前で自分から肌を見せることはできませんわ。五郎さん…あなたの手で、この紐を解くのなら…あたし…」

「今は人妻でも、五郎でもない」と云ったじやありませんか。竹夫人です。竹夫人は肌に触れさせて人の心を爽快にします。阿媽は服を



脱ぎなさい。後を向いてもいけない。そのまま、立って、さア、胸元の第一の紐を外せ」

「ああ、五郎さん、あたし…」

芳枝は五郎の言葉に魅せられたようにゆらりと立って花結びの紐を静かに引いた。

一本、一本ためらいながら紐を解くたびに彼女のなだらかな肩が、またふくよかな胸が、明るい灯火の中に浮き出て来た。

五郎は長い間、彼が頭の中に描き続けていたより以上に、豊満で艶々しい芳枝の肢体の

見事さに、眼を瞞ってじっと彼女の脱衣の動作を凝視していた。

「その服をこちらに貸しなさい」

「ああ、これを…」

芳枝が、脱いだ支那服を両手で丸めて胸を覆っているのを邪慳に取り上げると、彼女はたまりかねてへたへたと横座りに座ってしまった。

○  
それから三十分ほどの後――



芳枝は両手を上に挙げて、そろそろその部屋の中を歩かされていた。そして彼女の背には二本の青竹がその右手首と左足首、左手首と右足首とを交互に縛いて、X型に交叉していた。交叉の位置が交らないように、彼女の尻の処で太い綱で結え、その綱を腹へ回して結び止めてあった。肱も胫も極く僅かしか曲げる事を許されない恰好で、しかも綱で括られた胴腹に異常な緊縛感を感じながら、そろそろと足を交互に動かして歩く唐人髯の芳枝の姿を、床几に腰を下したまま見ていた五郎は

「これから少し急いで歩いて貰いましょう」と云うと、ついと立って別室から一間半程の竹竿を持って来た。

芳枝は足を停めて、五郎の仕草を見凝めていた。

ほとんど抵抗もせず両手足を拘束されて完全に五郎の玩弄物になっている芳枝。こうした恥しい姿にされても、相手が五郎である満更嫌な気持はしなかった。

「あんなにまでわたしを慕って呉れていた五郎さんだもの。いいんだわ、どんなにされたって。けれど、苦しいけれど、もっとわたしの遣瀬ないこの気持を、忍従という態度で五郎さんに見て貰おう——」

芳枝がそんな事を思っている間に長い竿竹は芳枝の背中にその先を押しつけ背後の竹に

くくりつけられた。五郎はその竹竿の反対側の端を持ち上げた。

「さア用意が出来ました。歩いた、歩いた」「……」

「もっと早く歩くんだよ、そろ急いで、急いで」

五郎はそう云いながら竹竿の先をクルクルと円を描くように回わした。

「あつ五郎さん、そんな事やめて……」

芳枝は不自由な上体を捻じて喚いた。耐え難いような背中の竹の先の衝撃に、思わず全身を硬直させた。

五郎は芳枝のそうした姿を楽しむように、彼女の後から身体の動きを注視しながら、クルリ、クルリと竿の先端を回し続けた。

竿は回わされる度に、芳枝の背中を責める役目を果たした。彼女の柔らかな背肌は、赤い円を浮かべて痛々しい。

「ああ、五郎さん……」

彼女がそう云った時、五郎は一きわ強くグイッと回した。

「ああッ」

と芳枝の大きな叫び声と共に、彼女の肢体がヒクツと動いた。そして棒立ちの身体がぐらりと倒れそうになった。

五郎は、つと芳枝の傍に寄って行って、竹竿を外すと、彼女の頬に懸っている二、三本の乱れ髪を払ってやった。そして彼女の顔を

左右の手で挟んで自分の顔を近々と寄せた。「どうです。竹夫人、苦しいですか。よし、しようか？」

そう静かに云ってじつと芳枝の瞳を見た。

彼女の臉が二三度、急にまばたきをした。五郎を見返す瞳が次第にうるんで来た。紅い唇が開いて、苦しい吐息がもれた。

「じやア、暫く休みましょうか」

と云った五郎の言葉に、芳枝は慌てて頭を横に振っていた。

少し風が出たのであろう。夜更けの庭に、サラ、サラと竹の葉の擦れ合う音が聞えていた。

芳枝は褥の上に横倒しになっていた。

芳枝は長さ五尺、直径一尺程の長い竹の籠を背に負っている、負っていると云うより、手も足もその籠を胴巻きにして縛られているのだ。半ば仰向きの形で胸を張り、寝返りも出来ない無惨な姿を、煌々とした灯火の下に曝して切なく息づいていた。

五郎は、その前にキチンと正座していた。

その手には数枚、葉のついた竹の枝が握られていた。彼は苦しいに歪む芳枝の顔を、じつと見ながら、時折その竹枝を動かすのだった。胸にふくらと盛り上っている双丘、子を持たぬ女の乳首は花の蕾のように可愛らしい。そのまわりをそろりと竹の葉がなぞる。

「ああッ、よしてッ……」

芳枝は瞬間、ぎゅッと全身を縮めて声をあげた。彼女の背の、竹籠がギシッと音を立ててきしんだ。

五郎は笑いながら、

「その顔がたまらなく美しい」

と云うと彼女の白い顎を竹の葉で擦った。

「くッ、くるしい。やめてッ……」

芳枝はその竹の葉から遁れようと顔を思い切り上へあげた。透きとおる様な顎の裏に、うす青い静脈が見える。

「苦しいわ、……でも……」

「五郎さんだから、と云いたいのでしょう」

「あたし、知らない」

「その眼だ、僕の心を捉えて離さないのは。」

怨むような、楽しむような貴女を苛めて見たい。そして責めに懊悩するその眼を見たい。」

「五郎さんの気の済むようになさったらいいいのですわ」

「だが、貴女は他人の細君だ。そこには自ずから僕の心の中に限界が出来ている。今、こうしていることも少し心苦しいのです」

「でも五郎さん。今こうして責められているのは、わたしの意志よ」

「人妻を縛る。それだけで既に変じやアないですか」

「そうせられる事に興味を持っている女もいると思いますわ」

「貴女もその一人だと仰言りたいのですか」

「あなたは、今夜は五郎ではない。そしてわたしは陳夫人じゃない、と仰言っただじやないの」

「そうでしたね」

「わたしは五郎さんを信じています。」

「もう、止しましょう。こんな話は」

「ええ」

「もう間もなく夜が明けます。さア、手足を自由にしておきましょう」

「いいのよ、この儘でも。ああ、それは竹の葉だったのね」

「そうです。くすぐり責めの道具です」

「今度は、どうなさるの？」

「じゃア、こんなにしましょうか」

まるで縄に魅せられた者のように、次の責めを促がす芳枝の肩をもって、ごろりと籠を回し、彼女の身体を籠の真上へ持ってきて手を離すと反対側へくると回った。そして右へ、左へ何回もそれを繰返した。髪が崩れて海藻のように揺れた。最後に彼女の身体を籠の真上へ止めると、その胸の上に三尺ほどの竹を横にして置いた。

「よいしょ」

と掛声をかけながら、その両端を、両手に握り、乗り掛るように押しつけた。下の籠が弓なりに返った竹の力でギシギシと鳴った。

「あッ、五郎さん」

芳枝は思わず呻いた。豊かな胸に竹が没するほど喰い込んでいる。呼吸が出来ないほど胸が苦しくなってきた。

五郎はその態を見ていたが、その竹棒を捨てて、袂から太竹の、節から五寸ばかりの処で切った。筆立の短いようなものを二つ取出すと、盛り上っている胸の双丘に押し当ててぎゅッぎゅッと三四度強く押し付けた。

「ああッ」

と芳枝は全身をふるわせて叫んだ。吸盤のような竹の筒が、彼女の悦虐感をその極限にまで昂ぶらせた。乱れた髪を波打たせ眼を吊上げ、口紅の薄れた唇を大きく開いてハッ、ハッと息を弾ませている。苦しい中に何か五体の融けるような甘美な被虐感があつて、その複雑な表情に歪んだような芳枝の顔を、五郎はうっとりとして見惚れていた。

(つづく)

### ◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、アイデア、或は趣向によって写真の特写を御希望の方は本誌写真部に於て御引受けいたします。

詳細な希望事項を御連絡下されば、費用その他について御返事いたします。御照会には必ず返信料の御同封を願います。

△写真部▽



## 創作

## 三吉と女奇術師

藤見

郁

三吉は或る田舎町のペンキ屋の小僧でした。骨惜みせずよく働くので親方夫婦からも、たいそう可愛がられて居りました。

この町から、少し大きな都会へ出るには二時間も三時間も汽車に揺られて行かねばなりません。それもゆっくり走る汽車で大きな山を幾つか越え、トンネルを無数に通ってガタゴト揺られて行くのです。だから東京などという大都会は、その名を聞いただけでもおそろしく遠い、はるかな所のような気がします。この町の人で東京へ行ったことのある人はほんの二、三人でした。

そんな田舎の、小さな町のペンキ屋でしたから、ペンキ塗りや看板描きの他に、トタン屋根を張ったり、バケツや鍋を修繕したり、そんなことまでやるのでした。親方というのは大変器用な人でしたので、看板の字や絵を描いたりバケツの洩るのを埋めたりするのが得意で、町の人々に重宝がられて居りました。しかし、やはり上手

といっても田舎の看板屋なので、人々が賞める絵や字も、賞められて当人が自慢する程のものでは無かったようです。けれど三吉は親方を尊敬していました。親方が器用な手つきで赤い大きなダルマなどを描いているそばで、ペンキを練りながら、（うめえなア、おれも早くあんなにうまくなりてえなア）と心の中で思うのでした。

親方夫婦は、三吉が一人前の青年になったら養子にしてこのペンキ屋のあとを継がせたいと考えて居りました。もうかなりの年令になるのにどういふものか夫婦の間には子供がありませんでした。この夫婦が三吉を家へ置くようになってから、もう十六、七年にもなるのですから、その気があるのですしたらもうとくに養子の籍を入れてもよい筈なのです。が、それをしなかったのはやはりわけがあります。

三吉の親は、この町の者でないのです。十六、七年も前、この町

で興行を打った、中村なんとかと云う旅芝居の一座がありました。その一座の女優が、この町に生み捨てて行ったのが三吉なのです。

旅の田舎町の芝居小屋で三吉を生んだ女は、必ず連れに戻るから一時預って置いてくれと町の人に頼み、産後十日も経たない身体で次の興行地へ旅立って行きました。それから一ト月過ぎても半年経っても、その母親は二度とこの町へ姿を現わしません。三吉は親切な町の人の手で育てられ、やがて子供のないペンキ屋の親方の家に永住することになったのです。

どんなわけの子か、どんなふしだらの結果の末か、勿論父親の名など判ろう筈がありません。その女優は産後の身体で無理な旅を続けたのが祟ったか、やがてどこかの旅の空で死んだという噂でした。三吉という名は、その旅の一座がこの町で演じたのだし物の中に、「重の井子別れ」という悲しい歌舞伎劇があり、その中に出てくる三吉という名の馬子にちなんでつけられたのですが、つけた人は別に他意のない気持だったとしても、あまりにうがち過ぎた、さびしい名前ではありませんか。

三吉が小学校へ入る頃、ペンキ屋夫婦は思い切って籍を入れてしまおうかと相談したのですが、あの女優が云ったという必ず連れに戻るからと云う言葉が胸に残って、それは立ち消えになってしまいました。あの母親が死んだという事も、しよせんは風の便りではつきりしたことは判らないので夫婦の決断もつきかねたのです。田舎の人というのはこういう所に案外義理固いものです。

幼ない頃、三吉は元気で無邪気な明るい子供でしたが、やがて物心ついて自分の生い立ちを知らず知らずのうちに町の人から聞くようになると、少年の顔には暗いかげがさしはじめました。然し、その為にはひねくれるという事はなく、無口にはなりましたが、相変らず素直で、小学校を出てからは、今迄の恩返しと、ペンキだらけになりながら熱心に働きました。

この町には毎年春と秋にお祭があります。秋祭のほうは本祭で、稲がよく実った年などは、人々は幾日も幾夜も続けて飲んだり喰べたり踊ったりします。

そしてこのお祭を目がけて毎年、タカまち廻りの商人がいろいろの荷を背負って商売にくるのです。又、町のはずれの広場には、ろくろ首だの、人間ポンプという口から火を吐く男だの、頭が、二つある牛だの、そんな昔ながらの見世物がやって来て所せましと小屋を張るのでした。

一年に一度訪れる、こうした見世物をのぞくのが祭りの一つの楽しみでありました。片田舎の小さな町のことですから、娯楽というものも殆ど無く、日頃の働きづくめの生活から解放されるこの秋祭を町の人々はどんなに楽しみに待っていたか知れません。

それに今年はサーカスがやってくるというので子供達にとって尚更お祭が待遠しいのでした。サーカスは前にも一度来たことがありますが、何しろ山に囲まれた小さな町なので、乗り込むだけの経費が大変で、やっと乗り込んで興行しても人口の少ないこの辺りではたいして儲かるわけがないので、めったにやって来ないのです。そのサーカスがどうしたわけか今年はこの町にもやってくるというので子供達は大喜びでした。

そして、とうとうその秋祭の前日になりました。

町はずれの広場には丸太で組んだ掛小屋が建ち、天幕がパタパタと風に鳴っています。町の子供達はもうその掛小屋を取り巻いて好奇の眼を見張っています。

その時、秋風にのってにぎやかな楽器の音が遠くから聞えて来ました。サーカスの一座がこの町へ乗り込んで来たのです。

「あっサーカスが来た！」

一人の子供が呼ぶと、多勢の子供はいっせいに音楽の聞えてくる



方へ向って馳け出しました。

音楽といつてもいいのジントというやつ。その殆どが吹奏楽器でクラリネットのヒヨロヒヨロ鳴る音が、一際高く聞えるというお粗末なバンドなのですが、それでも生の音楽を聞き馴れない人々にとっては素晴らしい音色に響きます。

その一団はトラックの上でガタガタ揺れながら山を越えて来たのです。バンドの周囲には、きらびやかな衣裳をつけたあくどい化粧の女達が、何がおかしいのかキヤーキヤー笑いながら揺られていました。そのあとのトラックには馬や猿やライオンがオリに入られて乗っていました。町の人達は皆往來へとび出してこの珍らしい一行を迎えました。

丁度この時、三吉は親方と一緒に店先で仕事をして居りました。が、ざわめきが近づくにつれて三吉の心はもう仕事なんかにある筈はありません。そのうちにトラックで乗り込みの一行はペンキ屋の前にさしかかりました。

にぎやかなジントの音につれて、鼻の頭や頬を真っ赤に塗った道化がおかし気な手ぶり足ぶりで踊っています。ペラペラな衣裳を着た女たちの姿が、三吉の眼には素晴らしく美しいものに見えるのでした。それは眩しい程の艶やかさで大人になりかけた少年の心をゆするのです。

(よし、おれ、明日みに行こう。サーカス、ぜったいに見に行くんだ)三吉は固く心に決めました。日頃親方にもうこずかいを三吉は大切にしまつて置きます。それに祭の朝はいつも親方が特別にこずかいを渡して呉れるのでした。

一晩中、太鼓や笛の音が鳴り続いて夜が明けました。祭礼提灯に朝の太陽が和やかに光りを投げて居ります。三吉は新しいジャンパ

ーにズボンで、といつても木綿のゴワゴワの服ですが、それでも折目のきちんとなつたやつでペンキ屋の店を出ました。

町の通りには、日頃は手甲きやはんで手拭を被っている娘達が、赤い着物を着て、顔には白粉や頬紅までつけて澄まして歩いていきます。三吉とすれ違う時など、意味ありげな視線を送ったり、彼女ら同志で三吉の顔をみてヒソヒソ話したりわらったりします。三吉はそんな時怒ったような顔で娘たちをにらむのですが、内心はうれしような恥かしいようなときめきを覚えるのでした。

やがて三吉は町はずれの広場へ来ました。例年の通り、いろいろな見世物が掛けています。「蜘蛛男」「蛇娘」足が十本ある怪獣、そういう見世物はもう前にも幾度か見ている癖に、子供も大人も物珍らしそうな顔で又、見に入るのでした。三吉は小屋の前に張られてある極彩色の絵看板だけ見てそこを離れると、次のサーカスの小屋で足を止めました。

サーカスの前はもう子供達でいっぱいでした。狼が三匹クサリに首をつながれ愛嬌を振りまいて居ます。馬も居ましたが、田舎の小供達には珍らしくありません。オリの中にはライオンが一頭どっしりと坐っていました。集つてみていた子供の一人が勇敢にも棒切をオリの中に突込みましたが、そのライオンはもうよほど年をとって怒る元氣もないのか、何の反応もおこさずに眼を閉じた儘でした。

三吉は小屋の入口の上に高く掲げてある絵看板を見上げました。タイツを履いた女の子の玉乗り、綱渡り、火の輪くぐり、狼の自転車乗りドレスを入れた女の持つシルクハットから鳩が飛び出している絵、それらがどぎつい極彩色で描かれて居りました。極彩色といつても、もう旅から旅へ何年も使われてきたのでしよう。よれよれになって色は薄らぎ、絵具がポツコリはがれている箇所もありましたが、それでも三吉の眼には妖しい美しさで映るのでした。

入場料は大人五十円中人四十円小人三十円とありました。三吉は

中人を買って入りました。中はもう八分位の入りで、ムシロを敷いた地面の上に、客がペツタリ腰を下ろして舞台に見入っていました。八割位が子供で、あとの二割は朝から酒を飲んで赤い顔をした大人でした。丸太を組んで板をぶっけただけの舞台では、五、六人のハダカの娘がジンタに合せて踊っていました。

そのストリップまがいの踊りが終ると綱渡りが始まりました。上手に渡り切ると観客席から素直な感激の拍手がパチパチと鳴りました。次は二人の女のアクロバットです。荒けずりの粗末な舞台なので、裸の肌が痛そうでしたが、馴れているらしく平気で、クネクネと股の間から首を出したりしました。一人の子供が「コンニヤクみてえな身体だな」と叫んだ時、皆わらいました。舞台の女まで笑いました。

サーカスだというのに動物は猿の自転車のり位で、あとは学者馬だとかそんな程度で、オリに入ったライオンもどうやら看板だけのものらしく、人間の演ずる曲芸が多かったのですが、観客は大喜びでした。三吉も勿論、手に汗を握り我を忘れて観て居ります。そのうちに道化が出て来て、



「最後は当サーカスの花形、松旭齊花子嬢の大奇術とござあい」と怒鳴りました。ジンタはアラビヤ風の音楽に変わり、黒いビロードの幕を掛けたテーブルが運ばれました。その上には奇術に使う種々の器具が置いてあります。松旭齊花子嬢というのは中々の美人で、紅いドレスをひきずって現れた時、客席の後方の青年達が奇声をあげ「いいぞ、いいぞ」と野次りました。



奇術は始めのうちは指の間から色ハンカチを出したり、継ぎ目のない金属製の輪を幾つもつなげたり、百円札を一枚燃やして十枚に増やしたりする初歩的なものでしたが、純朴な町の人は眼を見張って感嘆の声をあげました。一しきり終ると又、道化が現れて、「次なる奇術は、人か魔か、はたまた幽霊か、花子嬢得意の縄抜けとござい」

と、面白おかしい身振りで口上を述べました。道化は一本の縄を取り出すと、引っ張ったり、叩きつけたりしてタネのない事をみせ花子嬢の差し出す両手を前で縛りました。これも大げさな身振りで、如何にも固く縛ったようにみせるのでした。

「さて、このように固く縛りました花子嬢の両手を、あつという間に解いてごらんにいれます」

道化はこう云うと、一枚の大きな布を両手で拡げ、花子嬢の身体をかくしました。一、二、三、の掛け声もろ共布を除くと、花子嬢は解き放った両手を高々と頭の上で振っていました。見物は又、カッサイしました。道化は得意気に、

「見事に縄をぬけてごらんに入れましたが、只今縛りましたのはこの道化めでござりますれば、御見物の皆様方の中には、あれはインチキだ、縛ったフリをして本当は縛らなかったのだ、などと思う方もございましょう。さように思われましては花子嬢は勿論、この道化めも残念至極、つきましては次に、御見物のお客様に縛って頂きそれを見事に解いてごらんに入れます」

と、云いました。とたんにジンタが前より一層にぎやかに鳴りはじめ、道化は、

「さアさア、どなたか力の強い方は居らっしゃいませんか、遠慮は御無用、力いっぱい縛って下さい」

と、誘いました。松旭齊花子嬢も愛嬌タップリに微笑しながら舞台から呼びかけるのでした。ところが見物席からは応ずる者があり

ません。先程から野次をとばしていた男も、こんな時には鳴りを沈めています。日頃元氣な若い男も、いざ舞台へ上って皆の視線を浴びるとなると、案外意気地が無くなります。道化は舞台をあちこち歩き廻って呼びかけましたが、誰も起つ者がありません。「さアさアこんな美人の肌にさわれるんですよ、又とないチャンス」

こんな事を云って客の気をひくのですが、やはりだめです。

見ていた三吉はふと心が動きました。（おれが出て見ようかな）日頃内気でおとなしい三吉がこの時どうしてこんな気持になったのでしよう。三吉はムシロの上におろしていた腰を一寸あげましたすると花子嬢の視線がパッと三吉の方へ向きました。三吉の視線と花子嬢の色気をふくんだ美しい眼がぶっかかりました。花子嬢は小首を傾け、美しい笑顔で三吉を誘いました。三吉の顔にカッと熱い血がのぼりました。恥かしさと、何ともいいようのない嬉しさが交差したのです。三吉は夢中で舞台の端に足をかけ、飛び上りました。客席が少しどよめいたのも、どこか遠い所で聞えるように思え、そばで道化が客に向って、何かしやべっているのもうわの空でした。三吉は一本の長い縄を渡されました。木綿よりの、どこでも荷造りに使うような普通の縄でしたが、長い間使ったらしく、大分やわらかくなっていました。それでもちよっとやそっとで切れるような縄ではありません。

花子嬢は始終微笑を浮べながら、もう一遍舞台の端から端へ歩き中央の三吉の前に止りました。そして粗末な、背のよりかかりのない円い木の椅子に坐りました。三吉が縄を持ったまま立っていると、にこやかに笑いながら、「どうぞ」と云いました。白い二本の腕をゆっくりと背中になわし、自分から手首を重ねます。肩のつけ根からむき出しの、いかにもやわらかそうな腕なので、三吉は縄をかけることをためらいました。と、又、花子嬢がどうぞ、と云いま

す。三吉は思い切って交叉した手首から縛り始めました。と云つても、どういう風に縛ったら解き難いかなどという事を知る筈もないので、ただ無やみに縛って行くのでした。花子嬢が客席へ聞えるように大声で「もつと強く」「もつと力を入れて」と云います。三吉は真赤になつて力をこめ、縄をぐるぐると花子嬢の身体に巻きつけました。やわらかい花子嬢の肌に縄は無残に喰ひ込みます。三吉は血の上った頭の隅で（ざんこくだな）と思ひました。然し、それは妙に煽情的な美しさをもつて、三吉の心を猛らせるのでした。

花子嬢は文字通り上半身が「ん」字がらめに、みるも痛々しく縛りあげられました。

「はい、かくの如く花よりも美しい花子嬢は、見るもむざん、まるで芋俵か米俵のようにくくられてしまいました。」

道化が芋俵か米俵と云つたので、客は笑ひました。道化は縛られた花子嬢の身体を支えて廻し、縛られたうしろ手を客席に見せました。

「はい、このように両腕を背中縛られては、解こうにも一寸解けない。いかなる美人でももうおしまい。このオッチョコチョイの道化が、こうしてお尻を叩いても（と云つて彼は花子嬢の背を客に向けたまま、プツクリとふくらんでいる肉ずきのよい彼女のお尻を平手でポンポンと叩きました）花子嬢は何一つ手出しすることが出来ません。この長いドレスの裾を、こうチョイとまくつても（と云つていながら道化は紅いドレスの裾をつまみあげました。白い二本の脚がむき出しになつて、若い男の客は大喜びです）逃げることは出来ません。私めは常日頃この花子嬢にいじめられ、馬鹿にされて居りますが、かたきを打つのはこの時でございます。さすれば、このまくりあげた裾をもつとまくりあげ、こうして……」

そこで道化は卑猥な言葉や動作で客をさかんに笑わせます。子供達もわけが判らないままに笑声あげて喜んでいます。こういう田舎

廻りのサーカスの中には、この様な演出演技で客を喜ばせる一座が少くありません。

道化の芝居はまだ続き、身動きの出来ない花子嬢の鼻をつまんだり、乳房をいじったりしましたが、やがていよいよ縄ぬけをするこ

とになりました。三吉はまだ胸のドウキが治まらないままに舞台の端に立っていました。道化に、

「おそれ入りますが、もう客席へお降り願います」

と云われ、又、ムシロへ腰を下しました。（いくら奇術師だってあんなに固く縛ったんだもの、解けるものか）と思ひましたが、又あの女は何かの術でスルリと解いてしまうかも知れない、とも思ふのでした。もう三吉にとつて縄をぬけるかぬけないかよりも、縛られた花子嬢のむごたらしい美しさに魅せられた形でした。

道化はジンタに合せて、再び大きな布を両手で拡げ、花子嬢の姿をかくしました。ジンタはひと際たかくジンタッタ、ジンタッタと鳴り響き、一分間程続いたかと思うと、両手を高く打ち振つて花子嬢が得意げな笑顔で、布のかげから現れました。縄は完全に解かれて舞台の上に落ちて居ました。客席からはいっせいに拍手がおこつてヤンヤのかっさいです。

そこで一回の終りらしく、よれよれの薄汚ない引幕が舞台と客席とを閉ざしました。三吉は気の抜けたようにホッとして席を立つと幕のかげから道化がチョコチョコと出て来て、

「只今はどうもありがとうございます、これはホンの御礼、割引券です。明日又、来て頂戴ね」

と云つて、粗雑な印刷の半額割引券を呉れました。三吉は黙って受け取ると人混みに押されて小屋を出ました。外の空気に触れると熱ぽかった頭が急にスツとして、さわやかな秋風が身体中を吹き抜けていくようでした。



ふゆ



その夜、まだ飲めもしないのに親方から祭の晩ぐらいはと無理矢理、酒を飲まされて大分酔った三吉は、早くから布団の中に身を横たえました。

酔いがさめてくると、反って眼が冴えてきて、三吉の脳裏には昼間の興奮が甦えってくるのでした。夜更けて、遠くの神社の方角からひっきりなしに太鼓や笛の音が聞えて来ます。ああして祭のあいだ夜も昼もぶっ続けて酒を飲みながら太鼓を打っているのです。

三吉は寝台の中でソッと自分の手の匂いをかいでみました。あの女奇術師の移り香が残って居るような気がしたからです。三吉には残っているような気がしました。どうせ旅廻りのインチキサーカスのスタアの安香水なのですが、三吉にとってあの花子嬢の肌の匂いは、世にも美しいなやましいものだったのです。眼をつぶると、あの大きな魅惑的な眼が舞台の上から三吉を呼びます。「強く、もっと力を入れて」花子嬢のややカン高い声が、闇の中に聞えます。白蛇のような二の宛に、キリキリと縄が捲き込んでいく光景が、眼ぶたに灼きついていきます。縛られた花子嬢の美しい、そして痛々しい姿。まくられた衣裳の中の真ッ白な二本の脚。

若い三吉の、発散する事のなかった本能が、暗闇の中で渦巻きました。過去の長い孤独と、はけ口を求めようとし乍ら、行き当らなかった目標を探し当てた様な気持が、三吉の心を襲ったのでした。三吉は布団を噛んだまま寝苦しい夜を眠りにつきました。

夢の中で三吉は若い女を縛ろうと必死になっていました。女はキヤッキヤッと笑いながら逃げて行きます。三吉は縄をしっかりと握って追います。やっとつかまえると、女の服がビリビリ裂けて上半身が裸になりました。白い胸乳がふるえています。「いやよ、いやよ」女はそう叫びました。女の顔はやはりあの花子嬢でした。三吉は彼女の腕をつかむと後にねじ上げ縛りつけました。三吉は女の身体へ馬乗りになってあの道化がやったように女の尻をペタペタ叩き

ました。

「どうだ、これでも解けるか、さア、解いてみる」

すると不思議にも、花子嬢の顔はどこか知らない女の人の顔に変わって居ました。それは今迄に見た事のない顔でしたけれど、やさしく弱々しい、親しげのある女の顔でした。

「お前は誰？」

と、三吉は訊きました。

「私はお前の母親だよ」

と、その女は答えました。

「うそだ、おれにはおっかあは居ない」

と、三吉は叫びました。

「それでも、私はお前の母親だよ」

と、その女は尚も云います。

「本当にお母か？」

「本当にお前の母親だよ。お前を捨てて行って悪かった、かんにんしておくれ」

女の眼からは涙がこぼれました。三吉も急に悲しくなり、女の胸に顔をあてて泣き出しました。縛られて深い溝をつくって、凹み歪がんでいる二つの乳房の間に顔を押しつけて、声あげて泣くのでした。

翌日もよいお天気でした。三吉が目覚めた時はもう太陽が高く上っていました。祭なのでいつものように親方に叩き起されるようなことはありません。寝床の中で三吉は、ふとクラリネットの音を聞いたように思いました。遠くから秋風に乗って聞えて来たのかしら。三吉は昨夜の夢を思い出しました。胸がせつないようにキュツとしまるのです。

朝飯を食べると、三吉は、又、サーカスへ出掛けました。昨日道

化から貰った半額割引券を持っているので、二十円で入れました。

サーカスの前は昨日にも増して、にぎやかでした。評判を聞いて隣の人も山一つ越えて見に来ています。

三吉が小屋の中に入ると、もう満員でした。舞台では猿が自転車に乗って走り廻っていました。前の方の席では子供達が嬉しそうにそれを見上げています。

綱渡り、火の輪くぐり、玉乗り……その間にはストリップまがいのショウが入り、番組は又、最後の松旭齋花子嬢の大奇術となりました。トランプを使つての手品、カミソリの刃を飲みこむ奇術。そして又、縄ぬけの奇術が始まりました。れいの通り道化が出て来てはじめて花子嬢の両手を前で縛ります。大きな布でかくすと、一瞬のうちに花子嬢は両手の縄を解いて居りました。三吉は手を握りしめて見つめていました。道化が彼女の手を縛る時など、胸がキュンとしめつけられる程緊張し、不思議にも激しい電流のようなものが背筋を走るのでした。

「さアて皆様、今度は皆様の手でこの美しい花子嬢の身体を……」

昨日と同じ口上が道化の口から面白おかしくとび出しました。花子嬢は美しい笑顔で、自分を縛ってくれる客を求めました。三吉の胸は高鳴りました。ドキン、ドキンという血の音が身体をふるわせました。(おれ、又、出ようかな、出るんなら今のうちに出ないと誰かに先を越される、出るんなら今だ、今だ) 三吉は思わず腰を上げました。花子嬢の眼が、又、三吉の眼と合いました。舞台の端に手をかけると三吉は飛び上りました。ワアワアという客の歓声が聞えます。道化は三吉の顔をみると(おや? 又か) というような表情をしました。が、それはすぐ消えて、客に向うと

「はアい、ごらんの通り立派な青年が舞台の上に現われました。皆様ごらんの通りこの町の方でございますれば、インチキも仕掛もございませぬ……」



と、云うと、今度は三吉に大きな声で、

「あなた力は沢山ありますか？あ、そう、では手加減なんか要りませんから、思い切り強くしっかり花子嬢を縛って頂戴」

三吉は縄を渡されました。花子嬢はニコリ笑って三吉に片眼を閉じてウインクしました。三吉は何のことか判らず、気の遠くなるような恥かしさとこの美しい女を縛れる嬉しさで、顔を赤くするのでした。

「強く縛ってね」

花子嬢は客にも聞えるように云いました。

「本当に強く縛るよ」

三吉は勇気を出して云いました。

「ええ、いいわ」

「昨日よりも強くだよ」

「ええ、いいわよ」

花子嬢は白くしなやかな両腕を後に廻して眼をつぶりました。三吉は興奮にふるえる手で花子嬢の腕をつかむと縛りはじめました。どんなに念入りに強く縛ってもこの女は解いてしまうだろう。それはもう三吉には判っていました。けれどそんなことはどうでも良いと思いました。ただ女をギリギリ縛りたいという気持だけで力をこめて縛るのでした。花子嬢の肌から匂う香水が、鼻をくすぐり、柔らかな二の腕、ふっくらした胸に喰い込む縄のむごたらしさが、三吉を夢見心地にします。この時間が何時までも長くあれ、三吉はひたすらそれを願うのでした。

「ははア、お客様は大分しっかりと縛っているな、あんなにガチッチリ縛られては、果して花子嬢解くことが出来るかしら？」

道化は客席へ向ってしきりにしゃべって居ます。

「ホーラ、あんなに力を入れて縛っているの、流石の花子嬢も痛がっていますよ。花子さん痛いですか、痛いですか？」

道化がこう訊くと、花子嬢はさも痛そうに、

「ああ痛い、腕が折れそう、痛い、苦しい」

と、身を悶えます。それが田舎の客には本当に苦しんでいるように見えるのでした。しかし三吉はそんな事は耳に入らず、夢中になって縄をさばいています。

「はア、このように固く、がんじがらめに縛られた花子嬢は……」

道化が又、一段と声をはり上げて、無抵抗になった花子嬢に向い悪戯をして客を笑わせます。

三吉は息をはずませながら、自分の縛った花子嬢の姿に放心したように見惚れてしまいました。真紅のドレス、真白い腕、ギリギリ喰いこんだ縄、（おれはどうしてこんなむごたらしい真似をしたんだろう）そう思っても、まだ三吉にはそのわけが分る筈がありません。分るのは、自分の手でむごたしく縛りあげた女の姿が、何物にも変えがたく美しく見えるという事だけです。

道化は客の笑い声に調子づいて、花子嬢のお尻の辺りを、しきりにペタペタ音をさせて叩き、囁いています。三吉は目だけを光らせ、じっとそれを見つめています。

やがて道化は花子嬢の姿をかくし、昨日の通りやがてニコニコと手を振りながら彼女は姿を現わしました。それを見ると三吉は急にがっかりして、全身の力がぬけたように、ムシロの席へ腰をおろすのでした。

こうして三吉は、その翌日もサーカス小屋へ行きました。このサーカスはこの町で五日間の興行を打つのです。三吉は五日間続けてサーカスを見に通いました。番組が奇術に移って、道化が花子嬢を縛る客を求めると、三吉は何かにつかれたように舞台へ上るのでした。しまいに道化も三吉の顔を覚えてしまつて、三吉が舞台へ上ると



「誰か他のお客さんで縛ってくれる方はありませんか」  
などと敬遠されてしまうのですが、その求めに応じる者がな  
いと、やむを得ず三吉が縛り役になるのです。  
「アレ、又、三吉のやつ出て来たぜ」

などと云う客もありました。そのな客もやはり毎日このサーカス  
を見にくるようでした。

三吉にとって、これは生れて初めての悦楽でした。生れて初めて  
の異性との接触であり、そして何故か花子嬢の肌の香は、彼を生ん

### おめえ

だ母親を想い出させるものを持って  
いたのです。三吉の母は、三吉を生  
んで十日も経たないうちに置き放し  
にして遠くへ逃げていった、無責任  
な、むごい母親でしたのに。そんな  
母の肌の匂いを記憶しているわけは  
ないのに、縛る時に触れる花子嬢の  
肌の香に、三吉は切なくもなつかし  
く母を感じるのです。真の親の愛  
を知らない孤独な過去と、秘められ  
ていた自分も知らなかった性向の発  
露とが、大人になりつつある三吉の  
心を切ない程交錯させるのでした。

このサーカス一座の、この町での  
興行は中々よい成績をおさめた様で  
す。

五日間の興行を無事に打ち終えて  
丸太で組んだ粗末な小屋はバラバラ  
に取りこわされてしまい、跡には元  
の殺風景な野原が残されました。黄  
ばみはじめた雑草に、冷やかさを  
加えた秋風が吹き渡って行きます。  
もうお祭もおしまいです。子供達は



見世物小屋の跡に集って、たのしかった祭りのこと、面白かった見世物の話に打ち興じるのでした。

サーカス一座が、又、トラックに乗って山を越え、次の興行地へ向って発って行った日の夕方、ペンキ屋の親方は三吉を探して方々心当りをたずねて居ました。

「あん畜生、仕様のねえ奴だ。祭も終わったというのに、どこをほった。口は乱暴でも、急に居なくなった三吉の身を心から案じて居ました。」

「なアに、もう子供じやねえんだから、どこかいい所でも遊びに行つたんだろ。少したちや帰ってくるさ」

訊かれた人はそう云って慰めます。然し、二日経っても、三日経っても、三吉はペンキ屋の店に戻って来ませんでした。親方夫婦の心配はひと通りではありません。幼ない時から育てて来た我が子同然の三吉です。毎日、心当りを探して歩きました。

そのうちに町の誰かが、

「三吉のやつ、あのサーカスと一緒に、どこかへ行ってしまったんじゃないかなろうか」

と、云いました。すると、他の一人も、

「そうかも知れねえな。三吉のやつ、バカみてえに、あのサーカス

の女に夢中になっていたからな」

と、したり顔に云うのでした。ペンキ屋の親方はそんな話を聞くと、本気になって怒って、

「馬鹿云え、三吉はそんな奴じやねえ第一まだ子供じやねえか、ガキのくせに女に夢中になるなんて……」

すると、一人の年寄がつぶやくように、

「三吉はもとく旅役者の子だからな。蛙の子は蛙で、もしかしたら、ついて行ってしまったのかも知れねえな……」

と、云いました。

「そ、そんなバカな……」

と、ペンキ屋の親方は怒鳴るように云いましたが、やがて黙って考えこんでしまいました。

あのサーカスが掛っていた小屋の跡では、今日も子供達が群れています。石の上に乗って玉乗りの真似をしたり、雑草をひきちぎって奇術の真似をしたりして戯れています。たのしかった祭の日はもう過去となりましたが、子供達の耳から離れないのです。華かだが心にしみ入るようなクラリネットの音がきくとまだ子供達の耳に残っているのでしょうか。

——おわり——

## 憲兵と幽霊 (新東宝)

ワイド・黒白

戦争中、内地と大陸にまたがって憲兵隊内で行われたスパイと謀殺事件を扱って、

ちよつと面白い映画になっている。

中山昭二扮する憲兵伍長が、天知茂扮する上官の悪玉憲兵に、無実の罪で拷問を受ける凄惨なシーンがある。中山の妻に久保菜穂子が扮し、夫と共に拷問を受ける。

この責めは、後ろ手ではないが、変わった縛られ方である。マットなしのベッドの上に、ちよつと、マナ板の上にのせられた魚のように縛りつけられる。着物の裾が、膝のあたりまでまくれて、多少色っぽい。カ

メラのアンクルが悪いので、十分に鑑賞できないのが、いささか残念。

このシーンは、中山、久保の夫婦と、その母親（女優名不詳）

の三人が同時に責められるが、昔の軍隊内での暴虐をホウフツさせる陰惨な感じが、なかなか表現されていることに母親は後ろ手でガン字ガラム。しかも首から膝に縄をつなぎ、海老縛りにしてあるのが、非常に珍らしい。

この映画では、中山昭二に対する、いわゆる「男性責め」が、徹底して残虐的に描写されているのは、特筆に価する。

### 花形探偵合戦（東映）

ワイド・カラー

ブラジルの邦人コーヒー王が、生き別れになった娘を探している。その弁護士と結託するギャングは、情婦をコーヒー王の娘に仕立てあげようと悪事を企む。そこで美空ひばりと高倉健の私立探偵が本物の娘を見つけたという、ありふれたストーリー



## 緊縛映画速報 と その雑感

藤木仙治

美空ひばりの女探偵が、ギャングに捕って縛られる。後ろ手だが、胸に縄をまわしていないので、キレイごとの責めにすぎない

あるので、これが大人の女？だったら、かなりのモノになったに違いない。ぐるぐる巻きに縛られ、吊り下げられて

下からは火を焚かれるシーンで、その女の子が泣き叫ぶわけだが、これはどうも、後味の悪い残酷味がある。いたいけのない子供を、こんな拷問シーンに使うというのはいくらマニヤでも、ちよっと頂けない。

### 鬼火燈籠

（大映）ワイド・カラー  
銭形平次シリーズもの。岸正子という新人

女優が縛られる。

マスクも可憐だし、熱演でその努力を大いに認めたいが、かんじんの演出にミスがあったので、くだらない縛りシーンになってしまった。

### 月光仮面（東映）ワイド・黒白

完全なジャリ映画。第一部の終りのシーンで、女の子が縛られて吊り下げられる。ただし、これは本当の女の子で、つまり児童。

後ろ手に縛られてあるのを、よく写して

聖天一家というヤクザの家に連れこまれて縛られるのだが、胸と腕に縄をまわしてあるだけで、手首が縛ってない。ちよっと身体を動かしたら、ずるずると抜けてしまふような縛り方。女優のポーズがよかっただけに、惜しい一場面であった。



## 魔 教 圈

ナンバーエイト  
NO・8

(その九)

## 土 路 草 一

## (一) 過状星雲

黒天使高原の夜空に、無気味な渦状星雲が流れていた。

夜明前の暗紫の宇宙に、鈍い微光を放って雲状の星群が垂れ下り、緑黒に鎮っている地上を圧していた。

その天体の一角に、星に紛う光りが点滅して飛来する。

一直線に、暁闇の空を斬り裂くようなエンジンの音を、魔教国に向って響かせながら、やがて、ラジオ、ビーコンに誘導された機体は、速度を落し、大きく施回した。

突如、黒く塗られた中世紀風な塔から、強烈な光りが遡った。

引き寄せられるように、小型機は怪光に向って翼を翻えす。尖塔に突き当らんばかりに真黒な胴体が逆落しに突進する。

あっ！ その儘で進めば、機首は山腹に衝突してうに違いない。

火焰のように放射されていた光りが、ぴたっと消えた。

一瞬、眩惑されていた眼は常闇に閉され、巨大な蝙蝠のような物体が物凄羽音を発しながら、塔上を飛び去った。

と、見る間に、耳目を不意に遮蔽されたよ

うに、機体も羽音もすうと地殻に吸いこまれ岩層の闇に陥没した。

まるで、魔鳥の乱舞にも似て、怪奇な啓示を、地の人々に与えるが如く、妖異な哮びで暗空を擾乱して掻き消える。

空には冥々と渦巻いた雲星が拡がり、地には寂とした静けさが漂よう。

網膜をよぎったのは、彩まぼろしの影像か？ 耳を襲ったのは、妖魔の呻吟か？

夜空に一つ、彗星が流れて落ちた。

## (二) 美畜の安着

が、ボナンザ機に似た新小型機は、山腹に

扶れた、横穴式滑走路を、無線誘導に依って  
 なるように走って停った。  
 係員が駆け寄って、タラップを架ける。  
 ドアが開いて、黒山谷子がミデイ、ルック  
 の美しい容姿を現わした。



「荷物を点検したいから降して頂戴」  
 要員に命じて、彼女は地下飛行場の隅の電  
 話器に歩み寄った。  
 機内から革帯で嚴重荷造されたトランクが  
 運び出される。交響楽団を乗せたT国ジェツ

家族との楽しい語らいであろうか？、美加子  
 など友達との明るい交歓であろうか？  
 魔教団へ運び込まれ、家畜としての苛酷な  
 運命が目前に控えているとは思えない、何と  
 屈托の無い芙蓉の寝顔であったことか……

ト旅客機から、ベイルートで積み  
 替えたトランクである。

読者には断らなくともよいであ  
 るう、「天地無用」の荷札のつい  
 ているその箱こそ、美の化身と讃  
 えられた佳女、比奈地路子が店売  
 品並に貨物包装されて詰められて  
 いる荷箱である。

谷子は無事到着の報告を電話で  
 送って、貨物倉庫へ入る。

「開けて頂戴」

革帯の尾錠が緩められ、鍵が差  
 込まれて止金がぱちっと脱れた。

蓋が取り払われる。緩衝材料の  
 パッキンが除かれた。

見えた！絶世の美女の、白磁に  
 耀く純美の肌が……。こんもりと  
 盛り上った無比の乳房が……。

酸素吸入のような管のついたマ  
 スクを嵌められた美貌は、期せず  
 して許された安息に浸って、こん  
 こんと、眠り呆けていた。

見ている夢は何であろうか？



が、その安らぎは寸刻で終る、そして永劫に続く苦難の道が始まるのだ、悪魔に等しい教徒の手に依って、甘い声音は獣叫に変えさせられ、しとやかな麗姿は惨めに畜生を動作することであろう。

やがて、優雅な令嬢の面影は、片鱗だに示さなくなり、愛らしい足指の動き一つにも動物的な生態が生々しく表情されることである。

マスクを取脱して、谷子は美畜の呼吸を調べる。手首を把って脈を計った。

「いいわ、もう麻酔が断れる頃だから電気で起してよ」

トランクをひっくり返されて、路子は材木のようにごろごろと転がり出た。

係員は緩めてあった手錠を腰の上で合わせ新しい轡を噛ませてから、コンセントにコードを繋いだ。

乙女の華やかな夢路は強暴な衝撃に、こっぴど微塵に碎かれる。

「わあっ！」

びりりと電痛は脳芯に突き通って、路子は柔かく弾む若肌を、がくがくと悶鬱して眼を開いた。湖水のように澄んだ瞳を引續らして……。

「起きろ！」

令嬢はゆらゆらと軀を起し、床に坐った。なごやかな肩、ふくよかな胸、豊麗な腰。

艶やかに凝脂が載り、抜けるように白い。そして黒髪がぱつぱつと前に乱れ、織白の頂が垂れる。

己が運命と諦めてか、美女は厩所に曳かれる羊のように弱々しい姿を曝す。

「みち！お前の棲息する国に無事安着よ、この国では、その軀を相応しく有効に使われるから、心を入れ替えて励むがいい」

佳畜は慄える險を瞬いて、谷子を映す。

出生以来、己が身にこれ程の弾圧を与えた人間がいなかっただけに、僅かな時日ではあったが囚女にとって、この異国女は絶大な恐怖の的であった、十九才のこの女性の険しい眸には忽ち射竦められ脳髓は氷のような脅威に包まれて、どきまぎと首を垂れて了う。

今、畜類並に棲息と云われ、露程の悪事の覚えがないのに心を入れかえろと云われても乙女は胸を縮めるだけで声もなかった。

併し、拘束されていると云う諦めもあつたし、泥眠の覚醒で魔国到着の実感がなかったからとも云えるのだが……。

「フーガ調教班に送って頂戴」

谷子は電話の打合せを係員に指示すると報告書類を届けに部屋を出て行った。

係員は突当りの鉄格子網扉を開けて、鎖の先に吊り下っている首輪を引き寄せ、無造作に、悄然と俯向いている美畜の可細い咽喉首に嵌める。

「呑め！胃腸消毒薬だ」男は路子の魅力を零した啗歯の間に丸い錠剤を二粒放りこんでから伝声管に口を当てて怒鳴った。

「YA二十八指令品、フーガ調教班送り！」

諒解が返ってくると、手許のボタンを押した家畜の豊美な臀部を赤靴でほんと蹴り上げた。路子はたたらを踏んで前のめりになる、突然、ぐぐっと強い力が首筋に食いこみ、鎖が張って、ずるずると網扉の中に引摺りこまれた。

首輪についた鎖が、上部の索条に接続し、索具の移動につれて、乙女は前へ前へと曳かれることになるのだ。

相当な速度である。均齊のとれた脚は駢足で床を踏む。

此の通路は到着した家畜を各調教班厩舎へ送り込む家畜運搬路なのである。

灯一つない真暗な隧道の中を、艶麗な肉体はぷりぷり躍動しながら息吐いて、家畜として処理される為に早駆けて行った。

頸肉の痛み、脚運びの絡み。漸く、良家の娘の胸に悲哀の泉が湧き出してくる。

私に何をしようとするのかしら？、轡を嵌めて手錠して、私にどんな暮しをさせるのかしら？、怖気が拡がり、戦慄が走った。

この一寸先もわからない闇路は、丁度、比奈良路子の行手を暗示していたとも云えただろう。

### （三）家畜の浄化

路子はやがて、熱気の谷にさしかかる。

一条の光りが天井から、その谷を照していなかったら、乙女は急に覆って来た蒸し暑さの原因が掴めず、地獄の焦熱を妄夢して、いたずらに頭脳を錯綜させたことであろう。

四囲は洞窟を思わせる岩壁であった。

黒い石肌が凹凸を見せて続き、石床はびしよびしよに濡れていた。

白い霧幕が、寸尺の視界を閉ざして立ち籠め、茹だり蒸す湯熱が全体に充滿していた。

上下四方からもくもくと重なり合って湧き出ている蒸気が、その谷間を一種の家畜浄化の蒸風呂に仕立てていたのだ。

湯気は岩壁から間断なく噴出し、岩肌は降るように湯滴を岩床へ流していた。

路子の繊弱な臍が熱気を避けるはずみで、ずるっと滑り、膝が折れた。

首鎖の動きが停る。

乙女は直立した儘、白闇の中で水蒸気の激しい攻撃を受けた。

濛々たる白煙が、びっしより端麗な肉体を取り囲み、蒸し上げる。

芳やかな呼吸が詰まり、美貌は魚のように腮をぱくつかせて、空気を吸った。

理智的な額から、円い肩から、こよない弾性の胸から、そして腰から、脚から……、

なめらかな白肌の、ありとあらゆる個所から、汗がじくじくと噴き上げてくる。

眼に流れ、唇に滴たり、背に飛沫いた。

乙女の精気は一滴一粒絞りとりられて、荒い呼吸が唇を緩める、

臥せようにも首鎖の為、踞まることも出来なかった。蒸気を逃がれようにも索条は動きを停めていた。

白煙は絶え間なく、純白な肌を這い上り、包み下る。耐熱の分泌物は玉となって流れ落





ちる。顔も腕も真赤に茹であげられて、ぷくぷくと毛穴の汗脂を滝津瀬のごとく吐き出していた。

蒸風呂は美容方法の一つであると言う、併しこの場合は熱湯を浴びせられない家畜の温蒸消毒法なのである。

美畜の呼吸が咽喉で鳴って来た。唇がだらしなく開き、はあはあと水気の中の酸素を貪った。

眩暈がして頭脳が熟してくる、ぐらぐらと肢体が揺れた。坐りたい！ 臥りたい！

と、頭脳が狂わしく渦を巻いた。首鎖が張り、蹠が滑り躓いた。

「あ、ああ！」

声帯を震わして、悲叫が岩盤に反響する。

「熱い！ 苦しい！ 早く、早く此処を出して！」

路子は悶え、喚いた。

令嬢は人間の誇りを蒸されて、人間の埃りを絞り出されていたのだ。

やがて、呻きが弱み、膝がぐくりと緩む、首鎖が伸び、ふらふらと前後左右に揺れた。

ききと、索具が軋んで動く。

流美な脚は宙を踏むように緩漫によるめいて湯気から脱出して行った。

霧煙が霽れ、生き返った思いで湿気のない空気を息した途端、消毒薬臭い温湯がシャワーになって、ざあっと降って来た。

そして温水は徐々に冷水に変わる。

それは湯責の苦しみを忘れさせる程、心地よい洗滌であった。路子は眼を瞑り、頭髪から飛沫を全身に流した。

が、それは永く続かなかった。

暑さが去り、快適な温気が通り過ぎると、急速に冷気が眩しい裸身に弾いた。

弛緩していた類なき皮膚細胞は、急速、収縮を始め、毛細管は狼狽して閉塞現象を呈した。

柔かい華肉はぶるると戦慄を伝え、青春を流す暖血は冷く固まって、白眉の肌は優美な色を失って来た。

肺臓が緊まり、唇は紫に変ずる。乙女はしっかと掌を握り、身を縮めて寒気を耐えた。

酷熱から厳寒へ……。急激な転化はみやびやかな麗体の内臓に激しい悪感を誘発した。きゆうと臓器が鳴り、下腹から気色の悪い疼痛がせり上って来た。

「うっ！」

思わず、踴もうとする。が、鎖は張って中腰で留まった。

腸器官が洩い疼きを嵐のように送って来た。

乙女は腹部に当てられない後手が口惜しく焦慮を掻き煽る。

シャワーはぶち当るように降り注ぐ。

美畜は右に左にと脇腹を拗じって悪気を吐ける。

「う、う」

だが、臓器の疼きは、降り落ちる水にも増して、急進的にきりきりと猛り狂ってくる。

併し、これは由なしとしない。確かに温度の変化もあったけれど、真因は胃腸消毒薬と云って嚥下させられた錠剤が作用していたのである。消毒薬と云っても、それは下剤であった。

体皮を洗滌し、体内を浄化する。人間として附着している一切のものを、人間として食べた一切の食物を絞り出して、その体を完全無垢な、骨、肉、皮膚と云う軀組成だけにする。

勿論これは彼等の宗教的な考えからきてゐるのだ。女達は人間的なものを体内外共に総て洗い落されて、生れたての赤子同様、汚塵のない素体とされ、家畜への道を歩まされるのである。下腹の痛みが全身に廻って、路子は眼が昏んで来た。

ぎりっと歯を噛み、臍下に力を籠めた。

「誰か、見ているに違いない」

巧みに索条が移動して行くのから察して、令嬢は観察者がいることを意識していた。たしなみ深い娘として、他人の視線の前で排泄することは、それも後手の儘ならぬ、ぶざまな恰好で洩らすことは回天の汚辱であつた。

た。

だが、生理の器管は容赦なく臓器を蠕動する。

「む！ う！」

路子は根限り耐えた。手を握り、上膊を緊めた。

併し、自然の要求は、彼女の意志を凌駕して殺到する。

「あ、あ！」

ついに清楚な乙女は敗残して固く眼を瞑り流麗な脚を引攀った。勢よく下腹部が鳴る、耐えに耐え、泳えに泳えていたものが、大きい鳴動と共に進する。

ああ、高雅なたたずまいの中で生きて来た比類なき清美な乙女が前屈みの鎖で吊られた姿で、生理を流出させる。

路子は無念と屈辱の唇を噛む。……が、反面、すうと気分の軽くなって行くのを感じない訳にはいかなかった。

そして、ほんと心気を息吐いた途端、

「あははは！」

岩肌に舒して、何処からか男の哄笑が高々と響き渡った。

#### (四) 魔教国の朝

路子は機械に迫立てられる。

「私は何をされるのだろう？ 私はどうなつて了うのだろう？」

佳貌は黒い睫毛を瞬たき、力ない足取りを縛して、焦燥に燃えたつ。

「父母はどうしているかしら？ 正哉は南城の魔手を受けているのではないかしら……」

美加ちゃん！ 津田さんとは、とうとう逢えなかったのよ。そして異国でこんな眼に逢っている。私に何か、いけないところがあったのかしら？

神様！ 私は、私は何故、こんな苦しみを受けなければならぬんですの？

神様！ 私に罪があるなら教えて下さい！ 不安も歎きもなかった幸福な子女は、恵まれた幻影を追って、逆心を神にぶつける。そうだ！ 純情な路子や、明朗な美加子に何の罪があったと云うのだ、彼女達が飼っていたコリー犬、ピーマ以下の存在に何故ならなけ

#### 代理部だより

○別項に広告しました通り十月初旬に臨時増刊号を発行いたします。これは弓沢俊二郎作の長篇サド小説「青い癡院」に加えて、永山久美雄作の長篇サド小説「与那国奇談」を収載したもので、表紙、口絵、挿絵は四馬孝、挿絵杉原虹児描くところの華麗な特集号！ 定価は二百円（送共）予約お申込下されれば出来次第急送申し上げます。

○代理部分譲品総目録が出来上っておりますから御入用の方は八円切手同封の上御請求下

ればいけないのだ！

併し、魔神は答えるだろう。

「罪はある。お前達は美しい顔を持ち、素晴らしい肉体を所有している。これ迄は余りにも豊かな生活をしてきた。楽しく幸せであり過ぎた。我が信徒達を見よ！ 人間でありながら貧しさに耐え抜いている。お前はその報いを当然受けなければならぬのだ。罰として償わねばならぬのだ！……と。」

黒天使高原の彼方に紅蓮の太陽がのぼる。

広漠とした砂漠の果から、燃え立つような巨大な火球がのし上ってくる。

空を灼き、地を焦がす、炎熱の日が明けそめる。

家畜達の絶叫が轟き、肉体が苦悶する魔教国の一日が始まったのだ。（未完）

さい。折返しし封入の上御送りします。

○限定版「女体緊縛フォト・アラベスク」は目下着々企画通り進行中でありますから、いずれ豪華なその艶姿を諸氏の前に現すことと思ひます。どうか御期待下さい。

○既刊の臨時増刊号「責小説特集号」並に、「サド特集号」の二冊も愈々好評、読者諸氏の圧倒的支持を受けております。未見の方は何卒一本をお求め下さるよう御待ちいたします。



## 創作

## 賭

かけ

## 佐々京之介

「おい。用意が出来たぜ！」

叔父勇造の声が、研究室にいた私の耳にピンピン響いてきた。私はペンを描くと、側に用意してあった台を持って庭へ出た。

叔父は輪になった太い麻のロープを手にした。そのロープの一端にはガッチリした鋼鉄の足枷がついていた。そして他端に取付けられた手錠が、叔父と肩を並べる様にして庭の真中に跣足で突立っている私の妻、芙佐子の左手首に嵌まっていた。叔父は、私の顔を見てニヤリと笑うと、横に立っている芙佐子を顎でしゃくって言った。

「お前の注文通り、ズロースのゴムをとって紙テープを巻いておいたぜ」

叔父の言葉を証明するように、芙佐子が自分でシユミーズをたくし上げて私に見せた。ピチピチした牝鹿のような肉体と、真白なズロースとの境界に、幾重にも紙テープが巻かれていた。

「結構です」

私は叔父と妻に軽く微笑して答えた。

「二時十分前よ」

手に持った目覚し時計を見ていた芙佐子が告げた。私は芙佐子の手から時計をとると、

芙佐子に見える様に沓脱石の上に置いて言った。

「叔父さん、芙佐子を物干しの柱の間に立たせて下さい」

「ようし、判った。さあ芙佐子」

叔父は芙佐子の肩をポンと叩いた。含み笑いをして、芙佐子は素直に叔父に従った。私は叔父からロープを受け取り、それを芙佐子の前、八米離れて立っている松の木に廻して叔父に返した。叔父は自分の右足首に、ガチンと音をたてて足枷をはめた。股木を持った私は、芙佐子の足許に転っていた干竿を物干

しの上の段にあげ、股木は美佐子の右手の届く様に、一方の柱に凭せかけておいた。二人は私のする事を樂し氣に見守っていた。叔父の足許で力一杯ロープをたぐり寄せると、ロープはするする地面を匍って、やがてピーンと張切った。美佐子の左手が伸びて真上に挙げた。ロープの緩まぬ位置迄叔父を前進させ其の場に坐らせると、予定通り叔父と美佐子の間隔が二米余りとなった。

私は用意してきた台を美佐子の右側に据え台の上で土瓶の水を全部茶碗の中に注ぎ込んだ。この水にはサルチル酸が混入されていることを妻は知らない。台の上には、濡れタオルと蓋をした茶碗だけが残った。

「まあ、大層なサービスですワね。でも貴方こんな賭して大丈夫？ 私知らないわよ。貴方、一体、負けたらどんな目に遇うのか知っています？ フフフ」

私は美佐子の言葉に黙頭うなづき、その足許に七匹の蛇を入れた紙袋とナメクジを入れた袋とを置いた。

「美佐子、私の代りに比処へ蛇を置いておくよ。決して約束を破っちや不可ないよ」

美佐子は一寸嫌悪した表情を泛べたが、紙袋の口が嚴重に閉じられ、蛇が出て来そうもないのを見て安心したらしく、

「いいわ」

と虚勢を張っていた。紙袋の側に空になっ

た土瓶を置いて、用意は終った。

「さあ、準備が出来ましたが、お二人とも約束が守れそうですか？」

叔父と美佐子は、私に憐れむ様な一瞥を投げて「ああ」「いい事よ」と口々に大きく頷いた。二人の目は「当り前だ」と云わんばかりの強い自信を見せていた。

私は急いで部屋に引返し、私の全財産を二人の前に持って来た。

「この札束を離したら負けだよ。いいね、美佐子」

私は美佐子の右手に、五千円札の束をしっかりと握らせた。

「判っていますワ」

美佐子は手にした四十万円の札束をしげしげと見ていた。叔父には、動産不動産の証書預金通帳等一切の財産と私の実印に、この奇妙な賭の約束書を添え、一枚一枚見せた後、ナイロンの風呂敷に包んで、それを叔父の目隠しにした。

「おい。ただこうして、三時間坐っていたら俺の勝かいな。簡単すぎるやないか、ハハハ」

俄か盲の叔父が、太い声で笑った。

「ほんとネ。コレさえ持てれば良いのでしよう。丸で子供のお遊戯みたい。フフフ」

美佐子も札束を持った手を振り乍ら笑い出した。私も思わず笑った。笑い乍ら考えた。

二人は、私が絶対に約束を破らぬ人間である

事は、百も承知の上で笑っているのだ。二人の笑いは、三時間後に終るこの賭に勝った心算の笑いに違いない。私を奴隷にした心算の笑いに違いない。無理もない。私も三時間後には、どうやら二人の奴隷になりそうだと考えた。いたたまれない氣持になった。

「じゃあ、私は家の中に入ります。いいですね、今、二時八分です。五時に自覚し時計が鳴りますが、それまでに、叔父さんが目隠しを外すか、美佐子、お前が札束を手から放したら負けなんだよ」

念を押した私は、二人の承諾を得て家に入った。そして縁側の雨戸を勢い良く閉め、予め考えておいた通り書齋に入って、その窓のカーテンの間から二人を見守る事にした。賭は始った。

私の目から三米ばかりの処で、白パンツにカッターシャツの叔父と、ズロースの上にシユミーズ一枚の美佐子が、悠然と向い合っていた。静かだった。机の上の時計だけが、コチコチ、コチコチと容赦なく秒を刻んでいた。刻一刻、私が奴隷になる時間が迫ってきた。然し不思議に私は冷静だった。奴隷！、それも良いと私は思った。社会的な名誉や人格、そして私の研究や、為そうとしている実験等、一切を抛棄して、叔父と美佐子の奴隷になって仕舞えば、どれ程氣楽だろうとさえ思った。無論、私は忠実な奴隷となる自信は



あった。私は朝、頬を打たれて頭を下げた時の異様な感覚を思い出した。

今朝、ラジオの天気予報が終った時、叔父と美佐子が私の部屋にやって来た。

「私を離婚して下さい」

憶面もなく美佐子が私に云った。

「何だ、突然？」

吃驚した私の問いを押し潰すようにして、叔父が傍から云った。

「おい。何も云わずに美佐子を離婚してやれ」

遂に破局が来たか、と私は緊張した。

私が美佐子と結婚したのは、二年余り前、私が助教授になって間もない頃だった。当時美佐子は或るバレエ団の研究生であった。健康ではあるが、生来小柄で、痩せ型の私にとって、バレエで鍛えた美佐子の大柄な肉体は理想的なものだった。私は美佐子を愛した。

私は将来、教授夫人となる美佐子を貞淑な妻にする為、極度に万事を慎しみ、充分に妻の人格を認め、妻を愛す寛大な夫となる事を美佐子に誓った。私は一旦為した約束は、死んでも破らぬ人間である。私は美佐子との誓いを忠実に守った。脂肪質と云うのか、美佐子の肉体は日増しにメキメキ肥ってきた。そして肉体の爛熟するのと平行して、男を誘う様な挑発的な媚態を示さなくなり、無口な女となってきた。私は大いに喜んだ。貞淑な妻

且羞恥心を持った妻となって呉れるのが、私の理想だった。

こうした平和な私達の家庭に、二カ月程前の或る日、私のたった一人の血縁である叔父勇造が、朝鮮から引揚げて来て、その日から私達と同居する事になった。叔父は私に深く感謝した。翌日から妻一人を家に残して勤めに出る私の不安が解消した。外地で鍛え上げ叩き上げた叔父の逞しい肉体は、用心棒としてこの上もなく頼母しかった。私はこの機会に、兼ねてから念願の或る研究を達成する為夜遅くまで大学の研究室に残る事にした。多少氣に懸っていた叔父と美佐子の仲も上手く行っているらしく、毎夜、叔父か妻の部屋から、二人の仲睦いしい笑い声が聞えてきた。私は喜んだ。

或る夜、私は叔父の部屋で、叔父と美佐子との行き過ぎた、戯れの姿を見てしまった。上半身むき出しの美佐子、その豊満な肢体を紐で縛り上げられていた。そして叔父は、顔にギラギラ脂汗を滲ませ「痛い！」「痛くないか！」等と叫び乍ら、手にした紐で美佐子の柔肌を打っていた。美佐子も奇態な叫び声を挙げて叔父に調子を合せていた。

私は黙って日を過し、二人の反省してくる日を待った。一方、私の研究は進んだ。女は魔物であると言うが、確かに其の通りであった。折角私が二年間、教育してきた美

佐子は、叔父が同居して僅か一と月の間に、羞恥心を失った、被虐の虜囚と変ってしまった。理性を失った人間は理解に苦しむ様な事を敢てするものである。二人は、夫であり甥である私の面前で、厚顔無恥にも夫婦を気取るような態度をとり出した。私はこの愛すべき人達を目のあたりにして苦笑した。醸し出される奇態な雰囲気の中で、私達三人の生活が始まった。だが、こんな不均衡な平和は続く筈がなかった。遂に来るべき時が来たのである。

「駄目です」

私は二人の面前で、一言のもとにこれを拒絶した。しかし日頃、寛大な人格者である事を、自他共に許している私を見くびっていた叔父は、得手勝手な論法をもって美佐子との仲を意義づけ乍ら、威圧するような口吻で私と美佐子との離婚を強要した。剩つさえ最後に、

「俺はサディストなんや」

と、傲慢な顔をしてつけ加えた。叔父の言葉が終るや否や、叔父の巖丈な巨体と好一對の大柄な肉塊が口を開いた。

「私は貴方とは愛し合って行く事が出来ません。私はマゾヒストなんです」

美佐子は丸で何かに酔っている如く、誇らし気に云った。夢でも見ているような目だった。

実に笑止千万な事であったが、私は裁判を受ける被告の様に、身を縮めて神妙に二人の言葉を聞いた。そして二人の顔を窺った。二人は流石に自責の念を面に表わしていた。四十男の四角張った顔が硬ばり、美貌の顔が歪

んでいた。私は二人の顔を見ながら、出来るだけ未練を含めた口吻で言った。私の声は少し震えていた。  
「私は美佐子を愛している。それに世間への手前もある事だ。冷静な気持になって、もう



一度、考え直して貰えないだろうか」

本当の事であった。私の言葉はときめんに効を奏した。逆効果と言うか、私のこの妥協はその場の二人にとって、恰好の緩和剤となつて効いたのであった。案の定、叔父と美佐子はほっと安緒した態度であった。大きく息を吐き出した二人は、顔を見合せて初めて微笑した。叔父を見る美佐子の目は、不倫とは云え、二人の愛情を立派に物語っていた。私は再び云った。

「美佐子、お願いだ。私はお前が好きなんだ。私はお前を失い度くない。——お前の云う事は何んでも訊く事にする。お前が縛って呉れと云えば縛ろうじやないか。お前が笞打てと頼むなら打ちもしよう——そうだ、お前に見せたい物がある」

私は研究室から私の秘蔵のコレクションを取り出した。鋼鉄の笞、皮の鞭、大小の鎖、針、各種の枷等がガチャガチャと音をたてて二人の眼前に並んだ。美佐子は初めて見るグロテスクな道具と私の顔を暫く見比べていたが、急に笑いだした。二人は気違いに同情する様な眼で私を見



た。

「馬鹿な事を云うな、ハハハ。——こんな物はただ集めるだけの物やで。こんな物は滅多に使用する物やないぜ——ハッハッハッ」

論すような、嗤うような口吻で、叔父は物議り顔をしてこう言ふと、傍の美佐子を振り返って二人で笑った。しかし、哄笑する二人の目が「こんな物」に吸いつけられていた。私は僅かの間に美佐子を、そんな女にした叔父の手腕には、一通りの敬服の念を抱かぬ訳にかなかった。

勇を鼓して私は叔父に云った。

「叔父さん、仰言った事は良く判りました。

でも、叔父さんの仰言る通り、私が美佐子と離婚して、お二人が同棲なさる事が、果して美佐子の幸福になるでしょうか？ 私にはそうは思えない。勿論、叔父さんは美佐子を愛されているでしょう。しかし美佐子に対する真実の愛に於ては、私の足許にも及ばないと私は思う。叔父さんのは愛と云うよりは、むしろ浮気だ。浮気なら何も美佐子でなくとも他所の女で間に合う事じゃありませんか。お願いします。私は美佐子に惚れてるんだ。もう、ここでこの女を返して下さい。この女も今は叔父さんに騙されて——」

私がどうにか比処まで言った時、「馬鹿野郎」と云う怒声と、パシッ！と私の頬の鳴る音を同時に耳にした。

「かりにも叔父に向って、何ちゆう無礼な口をきく奴じゃ！ 何時、俺が美佐子さんを騙したんや！」

怒気満々たる叔父の権幕に、私の貧弱な体は震え上ってしまった。

「言葉が過ぎました。許して下さい」

私は叔父に頭を下げた。頬が二倍に膨れ上っている様な感じがした。

美佐子は頼母し気に叔父を見ていた。女とは恐い動物であると思った。美佐子は、虎の威を借る狐の態宜しく、私を非難し始めた。

「この女ッて何ですの。返せとか渡せないとか、余り馬鹿にならさらないで頂戴！」

私は美佐子にもおじぎした。

「悪うございました。私は、命を懸けてお前を愛している。どうか思い直して呉れ」

「イヤらしくしつこい人ね、貴方は……」

私はいよいよ自分の置かれた立場が、奇妙になったのに驚くと共に、姦夫姦婦の前に頭を下げる時の異様な甘さを識った。そこで私は、クスリ！と二人を意識して笑うと、突然ものも云わずに立上った。そして、急に身を固くした二人の視線を、背中に痛い程感じ乍ら、部屋の隅にある金庫の前に行き、ゆっくりと数字を合わせて扉を開いた。そこに私の全財産が入っていた。私は箱のままそれを取出すと、酷く緊張している二人の前においた。

「叔父さん、私と一度だけ賭をして呉れませんか。——美佐子、お前も一口乗って呉れ」私は叔父が、こう言うやくざな事が好きなのを昔から聞いていた。叔父は明らかに興味を持ったらしく

「一体どうするんや？」

と、其の箱の中味を射る様に見乍ら訊いた。私は説明した。

「庭に出て、叔父さんの右足首と美佐子の左手首を縄でつなぎ、叔父さんは目隠し、美佐子は右手に札束を持って貰う。三時間そうして我慢して呉れたら貴方達の勝にします。お勝になれば此の財産を美佐子につけて、離婚しましょう。その代り二人の内、どちらかが約束を破られたら、貴方達の負けです。その時は、美佐子を元通り私の妻にします。いいですね。服装はそのままで結構ですが、たった一つ条件があります。美佐子のズロースのゴムを抜いて、叔父さんの手で紙テープを巻いておいて欲しいのですが？」

叔父の目が、俄かに狼の目の様に輝きを増した。

「たったそれだけか？ 本当か？」

私は更に云った。

「貴方達の愛情が良く証明されると思う。本当に愛し合っておられるなら、お互いに約束を守って、辛抱できると思います」

美佐子は、私の顔と机の上の札束を、代る

代る見ていた。賭の約束は余りにも呆気なく纏ってしまった。無論、私にとっては歩の悪い賭であった。図に乗った二人は、相談の上で、私に対して条件をつけ加えてきた。

「俺達が勝ったら、お前を奴隷にするが構わないか？」

私は承知した。そして怖る怖る聞いた。

「じゃ、私が勝ったら？」

二人は大声を出して笑った。

「この責め具で一生、責めて戴いても結構ですワ、フ……。喜んで御意に添いますワ」

芙佐子が顔色も変えないで云った。叔父はその芙佐子の姐御振った態度を、如何にも満足そうに瞋め乍ら断言した。

「俺の体をどうともするがよい！」

私に云うのではなく、芙佐子に聞かせている様な、芝居臭さもなくはなかった。

「滅相もない。私は叔父さんの甥です」

私は咄嗟にこう云っていたが、二人は最早私の言葉など聞いていなかった。斯うして、時間を午後二時から五時までと定め、私は活気づいた二人と、この賭の約束書を即座に取交したのであった。

賭は早くも一時間過ぎた。

秋とはいえ、午後三時の太陽の下では、流石の二人も少しは暑そうであった。叔父との話が途切れると、芙佐子は遣り場の無い視線

を、足許の紙袋か、台の上の茶碗とタオルに向けていた。時々、左脚と吊られた左手を軸にして一回転しながら周囲を見廻し、その都度叔父に何か小声で告げていた。私の姿を探している風だった。

コチコチ、コチコチと、時計の音ばかりが無性に高かった。

芙佐子がブツブツ呟き、左右の足を交互に他の足の太腿の辺りまで上げて、匍い上ってくる蟻を足の裏で払い落していた。

「どうしたんや、芙佐子」

視界を閉ざされた叔父の聴覚神経は、異常に敏感だった。

「ウウン、蟻なの」

「そうか——今、何時や」

「今。えーっと、三時五、六分」

「チエツ、未だそんな時間かいな。もう四時やと思ってたんやが」

「目隠しのせいだワ。退屈だったら睡ってなさい」

「そやったな。——然し彼奴、学者に似合わない変な事をさせやがる。毎日学校で精神病患者ばっかし診ていて変になったんかな。それとも、お前をとられて頭へ来たんやろか？」

「フ……。まさか——でも暑いわね」

「暑い。喉が渴きやがったぜ」

「私も」

「そやろ、アッ、アアア——ア——」

叔父が両手を拡げて大きい欠伸をすると、続いて芙佐子が口を札束にあてて、行儀よくやっていた。

芙佐子が再び一回転した。そして手に持った札束をシュミーズの上から膝に挟んで、台の上の茶碗に手を出した。私は吃驚した。明らかに約束違反である。芙佐子は目を凝とこちらへ向けていた。そして——茶碗の蓋を取る——茶碗を持つ——口へ持って行く——飲み干す——茶碗を台の上に置く——これだけの動作を、此方を見たままで一瞬にして済ませてしまったのである。正に驚異の早業であった。が、次の瞬間、「アッ」と叫んで、今飲み干した水をガバツと足下に吐き出していた。サルチル酸が強く舌を刺戟したのだろう。その拍子に、膝に挟んでいた札束をバサリと落していた。

「おい、どうしたんや？」

泰然と坐っていた叔父が、疑わし気に訊いていた。芙佐子は苦り切った顔に拘わらず、

「何でもなかったの」

と優しい声で、自分の違反行動を誤魔化していた。

余りにも呆気ない私の勝だった。しかし私は、満面に失望の色を見せて、啞然として札束を眺めている芙佐子の姿を見ると、急に其の場に出て行く気になれなかった。私は、寛大な夫の気持になって妻を見ていた。



美佐子の足許には、私が七匹入れておいたナメクジが、四匹だけ吐き出されて地面を這っていた。美しい顔を顰めて唾を吐いていた美佐子は、やがて変な所作を始めた。美佐子は落した札束を片足で引寄せ、それを両足で挟んだ。そして吊られた左手で全身をぶら下げると、両膝を、ぐっと折り曲げて札束を持ち上げ、右手でそれを握もうとした。実に恥しい姿態になった。が、懸命になった美佐子は、持ち上げては落し、落しては持上げていた。白い肌が見る間に紅く染まり、左手が伸びきり、今にも腕が抜けんばかりに腋窩がそり返っていた。「ウッ、ウッウッ」と美佐子が呻きを洩す度に、前に坐っている叔父が不思議そうに首をかしげていた。首振り人形のような滑稽な叔父の姿に、私はニンマリと微笑まずにいらなかった。余程の苦痛を覚えているらしく、歯をくいしばった美佐子は、全身汗みどろになって、その運動を繰返していた。前にいる叔父を忘れたような美佐子の行為だった。だが叔父は、暗黙の中にも美佐子の挑発的な嬌態を感じとったのだろう。美佐子の発散させる体臭を嗅ぐように、体を前に乗り出し、鼻を蠢めかして、

「美佐子、何してるんや？」

と、押し潰したような声を出していた。

「ウッ、ううん何にも」

美佐子は一心に札束を持ち上げ乍ら、何気な

い返事をしていた。一念とは恐ろしいものだ。美佐子は遂に札束を拾い上げてしまった。

いつの間にか、美佐子の拳動に見入っていた私は、ほっと安堵して大きな溜息を洩らした。そして途端に、失敗ッた！と思った。既に問題の札束は、美佐子の手にはしっかりと握られていた。私は苦笑した。美佐子の豊満な乳房が、深呼吸に合せて大きく波うっていた。やっと落着いた其の場の気配に、

「美佐子、時間は？」

と叔父が訊いていた。

「まあ、又時間ですか——三時半だワ」

「そうか。前半が終ったんか。美佐子、お前大丈夫やろな」

「ええ」

「お前、今何をしてたんや」

「何でもなかったの」

美佐子は「貴男と私の為に、落した札束を拾いました」とは云わなかった。大役を果たした天使のような美しい美佐子の表情だった。

「おい、物凄う喉が渴いたぜ。確か其処に土瓶があったやろ」

「ええ、あってよ。私の足許、そうね、貴男が腹這いになって手を伸したら届くかも知れないワ。気をつけないと蛇の袋があるわよ」

何と酷い事を云う奴だろう。私は美佐子が少し憎らしくなった。叔父に同情した。

「そうか。よし飲んでやれ、美佐子、彼奴は

居らへんやろな？」

「ええ、大丈夫」

何をしようというのだろうか。叔父は土瓶の方向に手をつく、徐々に体を伸ばし始めたのだ。「チエッ、足がしびれてやがる」と太い声で呟いていた。

先刻から札束を持った手でシュミーズを少しづつまみ上げていた美佐子は、シュミーズの裾を持つと、膝の間に調子づけ乍らポイと札束を入れた。不可解な第二の約束違反だった。サツとおいたシュミーズに隠れて見えなかったが、先刻に懲りたか、落さぬ様に余程用心して挟んだらしかった。躊躇もせずに約束を破る女に、私はいささか驚いた。美佐子はシュミーズの片肌を脱ぐと、平然と台の上の濡れたタオルを取り、露出した乳房から、ぐっとくびれた腹部の辺り迄の汗を拭き出した。汗でシュミーズがピタリと肌にくっついていて拭き難い様子だった。

まさか、あんな所に水虫？ と私が不審に思った時、美佐子は胸元に火がついた様に暴れ出した。それ許りでなく、美佐子は突然、足許に這い寄っていた叔父に向かって大声をあげていた。

「勇さん！ 痛い！ 止めて！」

美佐子の手がピンと伸びて、体が吊り上がり、危く地面に爪先き立ちになっていた。叔父は地面に腹這って土瓶を探し当てていたが

「美佐子に手を蹴られてキョトンとした顔を上げ、

「どないしたんや？」

と、ゆっくりした調子で訊いていた。酷い叔父だと、私は美佐子に同情した。

「痛い！ 勇さん、早く後ろへ退って！ 早く退って！」美佐子の顔がひきつっていた。

「何や急に？ あ、彼奴が来たんか」

独り合点した叔父は、あたふたと元の場所に戻った。美佐子の手が元に戻った。

「美佐子、お前なんで俺を蹴ったんや？」

叔父は未だ合点のいかぬ様子で土瓶を下げた手を撫で乍ら訊いた。

「痛かったの、とつても」

「痛い？」

「そうよ、アツ、ウツ、ウツ。ア、貴男の足と私の手がつながってる事、知らなかったの」

手の痛みがとれた美佐子は、灸を据えられている様な顔をして、右手でギョツと両の乳房を抱え込み、「アツ、ウツ、ウツ」と呻きを繰り返していた。その美佐子の左足にポツンとナメクジが匍い上っていた。美佐子は敏感にそれと察したらしく、両脚を振って払い落

そうとしていたが、ナメクジは落ちなかった。右手を出来るだけ伸ばしたが届かなかった。

観念した美佐子は、じっと我慢して札束を落

して呉れなかった。

「済まん、済まん。そんなに手が痛むかい」

「済まん、済まん。そんなに手が痛むかい」



「イエエ、もう痛くないワ。アツ、ウツ…」  
「済まん、済まん。酷い事をやっちゃったな  
あ」

叔父は頭を掻き乍ら恐縮したように、又少

し後ろへ退ったので、ロープがゆるみ過ぎ、  
美佐子の左手が頭へ乗せられる程自由になっ  
た。間もなくだった。

「畜生！」



「嫌らしい！」

二人が同時に叫び合っていた。しかしそれは、叔父と美佐子の痴話喧嘩ではなかった。怒鳴り乍ら目隠しをした叔父が、酒に酔ったような真赤な顔で土瓶を地に叩きつけ、内股へ匍い上って来たナメクジを擲んだ美佐子が蒼くなってそれを叔父の後方に投げつけていた。それだけでは虫が治まらないらしく、右手で胸を押え、膝に札束を挟んだ美佐子は、未だ足許に匍っていた残りの三匹を、奇妙な恰好で踏み潰していた。

しばらくすると、急に二人の顔が暗くなった。が、

「雨だワ！」と、告げる美佐子の声は明るく弾んでいた。天気予報が当って俄か雨がやってきました。美佐子は、天の助けとばかりにグツと胸元を突出し、のけぞる様な恰好をした。「有難い！」

と呟いた叔父は、途方もなく大きな口を開けて、見えぬ目で空を仰いでいた。

二人にとっては将に慈雨とも云うべきこの突然の雨で、二人は全身ずぶ濡れになった。サルチル酸の痛みがすっかりとれたのか、美佐子は笑っていた。私の不貞な妻とは云い乍ら、その嬉し気な笑顔の美しさに、つい釣られて私も思わず微笑んだ。が、美佐子の笑顔は直ぐ顰めっ面になり、その目が凝と叔父を見ていた。美佐子の前を忘れたのか無頓着な

のか、叔父は地面に四ツ這いになって体を安定させ、大きな口を開けて雨水を受けていた。余程、咽喉を渴かせていたらしく、程なく雨が止んで、嘘のようにカラリと晴れ上っても暫くそんな姿勢をとっていた。

叔父は、俄か雨で生氣を取戻した様子だったが、

「チエッ！ 嫌な雨やったな、全く。ビシヨ／＼に濡れてしもたが！」と云っていた。

「………」

「美佐子、今何時や？」

「……四時——エーッと一寸過ぎ」

「チョッ！——おゝ気持が慄とすらあ——」美佐子、お前もビッシヨリやろ」

「………」

「美佐子？」

「………」

「美佐子！——おい美佐子？」

「………」何よ——」

「い、居るんか、そうか」

「何云ってるの——」

不快気に身を振っていた美佐子の言葉には少しも盲をいたわる寛容さがなかったが、流石は二人の間柄だった。そんな美佐子の言葉も気にも止めず、

「こりや堪らんわい」

と云い乍ら、叔父はとう／＼ビッシヨリと

なったカーターシャツを脱ぎ出した。続いて平然とランニングシャツを脱ぐと、それを絞って濡れた体を拭き始めた。

美佐子の顔がいよ／＼不快気になり、身振りが益々激しくなった。何時の間にか札束を右手に持ち直していた美佐子は、丸で遅刻しかけた女生徒が並んでバスを待っている様な恰好で、「ムッ、ムム」と息を洩していた。

「美佐子、おい美佐子！」叔父は体を拭き終っていたが、美佐子の異様な気配を感じて、再び話しかけた。

「な、何？」

「おい、お前、……フッフフ」

「バカ、知らない！」

「フ、フ、見えないと思いやがって」

「お下劣ね、勇さんは——」

「とか何とか云うてやがる——フ、フ、——彼奴も味な真似をしやがる。フ、フ、——」

叔父は野卑な事を云っていた。叔父は前に居る美佐子の豊満な女体と、ズロースに巻いた紙テープと、雨の三つを組合わせて妄想を逞しくしているらしく、唇を歪めて卑猥な笑を泛べていた。

叔父の面前で、「ウッ——ウッ」と悶えて必死に泳いでいた美佐子が、突然「アッ」と声にならない叫びをあげて、身を竦めてしまった。雨でビッシヨリと濡れたシユミーズとズロースが、美佐子の肉体にピッタリくっつ

いて、見事なる臀部の曲線を余す所なく見せていた。見事な美佐子の肉体美に、今更の様に私は見惚れた。

それを、叔父が失望した面持で、茫然と眺めていた。目隠しがとられていた。私は思わず苦笑した。「失敗った！」思い出した様に叔父が大きな呟きを洩した。二人が顔を見合わせていた。今度は叔父の顔が真青だった。醜体を見られた、と感違いした美佐子が真紅な顔をし、両脚を合せて俯向いた。矢張り美佐子は、羞恥心を失ってはいなかった。私は美佐子の其の羞らひを見て喜んだ。美佐子は直ぐに叔父の手にある目隠しを見付けて、慌て、叔父を叱咤していた。

「勇さん！ 取ッちや駄目、早く早く！」

此の美佐子の言葉は、叔父の顔に俄然生色を取り戻させた。叔父は、顔にぶつつける様にして両手で目隠しを仕直した。そして、額にシワを寄せ、バツの悪そうな苦笑をして、

「済まん、済まん」

と、美佐子にお辞儀していた。美佐子は安心した様に、俄かに両脚をこすり合せ乍ら、酷く痒ゆそうな顔をしていた。

私が飛び出す暇がなかった。しかし卑怯な事だった。私は苦笑せざるを得なかった。最早私が出て行っても、二人は敗北を是認する筈がない、と思って私は諦らめた。

「あと半時間程だワ」

取澄した顔を希望で輝かせ乍ら、女王の様な態度で美佐子が叔父に告げていた。

「そうか、おゝきに」

叔父に似合わぬ声だった。そう云えば、叔父は美佐子が札束を落したのを知らぬ筈だった。

ともあれ、二人はこうして後の半時間を頑張り、強引に私の財産を奪い、私を奴隷にして呉れる心算だろうと思った。良からうと私は又、苦笑した。窮極に追い込まれた私は、改めてこの賭の約束を思い出した。そして勝った時の私を想像した。愛する妻が夫の私の所へ帰って呉れるだけであつた。が、約束通り、私は（風呂場で妻の汚れをきよめて、私の研究室へ案内するだろう。妻は初めて見る私の研究室の素晴らしさに、目を瞠って驚嘆するに違いない。そして初めて私の実験台に乗せられた妻は、約束の道具を手にして前に立つ夫の私に、非常な羞恥を見せ、極端な遠慮を示して、貞淑な妻である事を証明して呉れるだろう。私は理想的な妻だと喜ぶに違いない。やがて妻は、私との約束通り愛の責苦を全身で受け、大声で泣き叫び、悶えるだろう。私は忠実に務めを果すだろう。そして、きつと私達夫婦にとって始めての嗜虐行為に妻は私を見直すに違いない。私は妻を愛し、妻の被虐性に対する奉仕を怠らぬ、忠実な夫となる事を美佐子に誓うだろう。又、私は、

安らかな寝息を立てる妻の側で、念願の研究の最後のペンを執るだろう」と思った。

「勇さん、アト二十五分よ」

肌着の濡れているのも、苦にしていけない様な美佐子の明るい声だった。二人は差向いで元通り悠然としていた。変っていると云えば二人の間隔が少し開いて、美佐子の左手が頭に載せられているだけだった。

「ヤレ／＼やなあ、美佐子」

「ネエ勇さん。あの人、本気でしようね」

「当り前やないか。今更何を云い出すんや、その為に約束書が此の目隠しに入ってるのやぜ。——彼奴は約束は守る人間や、馬鹿正直な奴やさかい」

「じゃ、矢張りあの人、私達の——」

「ドレイにしようて云うたんわ。美佐子、お前やぜ！」

「ホ、、そりや判ってゝよ。でも勇さん——貴男本当にそう出来て？——何だか、妙な具合ね——フ、、」

「大丈夫や、俺は外地でそんな男を何人も知って来たんや。お前にも話してやったやろ——男性マゾちゆう奴や。俺は、彼奴をマゾ並みに扱うこと位、ヘッチヤラや、まかしとき」

「さあ——でも……」

「人間ちゆうもんはなあ美佐子、誰でも人に云えん秘密があるもんや。紳士面していても家へ帰ってケモノになったり——」





「勇さん！もう結構。——こんな処で何時もお説教聞かされたら堪らないワ」

「ハッ、ハッ、ハ。——しかし美佐子、お前二年も彼奴と暮して来て、何にも気が付かなんだんか？怪ッ態やなあ」

「フ、ハ、それよ——そう屹度そうだわ。あのね勇さん。あの、お務めがお務めでしよう。それにそんなお体裁の悪い事、私に云えなかったのよ。そう云えば私達結婚した当初勿論、勇さんに教えて貰ったそんな世界

を知らない頃、あの人の顔を見てニヤ／＼笑ってみたり、と思うと、とっても深刻な顔をして悩んでいたりしてたワ——」

「ハッ、ハ、ハ、人格者は辛いモンやな。ハッ、ハッ、ハッ！」

「フ、ハ、それにね、勇さん——」

「何や、美佐子、あの鞭や鎖のことやろ。俺も今それを思い出したんや、それでナゾが解けたわい。彼奴はアレを使いたいのやぜ」

「そうかも知れないわね——でも私の云ってる事はその事と違うのよ。勇さん。私、今だから白状するんですけど、私達——アッ——」

「どうしたんや！」

「へ、蛇よ！」

「えッ蛇？」

「アッ、出て来るワ——恐イッ！」

「チエッ——蛇か」

「嫌よ、嫌よ。そんなに落着いてないで、アッ出て来たワ。お願いよッ、助けて！」

「美佐子、おい落着け——そ、側へ寄って来たら、けッ蹴とばして仕舞え！——モウ一寸の我慢やないか」

叔父は目隠しをしっかりと押えた。濡れた紙袋を破った蛇が、次々と匍い出していた。一匹が美佐子の足首に絡みついた。美佐子は、「ヒヤッ——」と悲鳴を挙げたが、気丈にも右足で蛇を蹴り放していた。そして這い寄っ

てくる蛇を前後左右に避けていた。ロープが充分緩んでいるので美佐子の行動は自由だった。美佐子の悲鳴に、叔父の手が再度目隠しに触れたが、直ぐ下されて地面についた。叔父は流石に落着いていらく、声も出さずに、小刻みに震える巨体を四つに支え、じつと様子を窺っていた。

美佐子は、絶間なく、足下の蛇の動きを注視していたが、簡単には絡みつかぬのに安心したらしく、蒼くなった頬に再び血の氣を見せていた。

「だ、だ、大丈夫か！」

途方もなく、大きい叔父の声だった。

「ウン」

「蛇は逃げよったか？」

と訊いた叔父の手に、一匹の蛇が握みついた。ブルルと武者震いした叔父は、啖嗟に握んで前に投げた。叔父の過失か——狼狽か——故為か——蛇は美佐子に向けて投げられていた。蛇は一本の縄のように伸びて、美佐子の露出した右乳房から左肩にかけて「ピタッ」と張りついた。

「キャッ」

身慄い一つして美佐子は、他愛もなく氣を失ってしまった。

「美佐子、どうした？」

「おい、美佐子、おい」

「美佐子？」

不気味な沈黙の中で、視界を遮られている叔父は、這いつくばって美佐子の方へにじり寄って行った。美佐子の足許に絡んでいた蛇が、胴にぐる／＼巻きついていった。暗黒の世界で、身内を襲ってくる焦燥と、疑惑に抗し得なかったのだろうか、叔父は再度目隠しを取ってしまった。

顔を上げた叔父の直ぐ前に、美佐子が氣を失って吊られていた。ロープが緩んで自由だった左手が再びピンと伸びて、代りに体が斜めに倒れ、両膝がくの字に折れ曲っていた。その美佐子の体に蛇が巻きついていった。叔父は目を据えて見ていた。「俺はサジストなんや」と云っている様に私には思えた。叔父の喜びそうな図だと思った。叔父は目を転じて側に転っている札束を見、自分の外した目隠しの包みを見ていた。案の定、叔父は全身を震わせていた。叔父は顔を蒼白にすると、

「ヒイ、ヒイツ、ヒイツ！」

突拍子もなく高らかな声を張り上げた。そして、足枷のはまった右足をぐい／＼と引張って前進し始めた。叔父に引張られたロープが、美佐子の左手をだん／＼と吊り上げ、美佐子を漸次元の姿勢に戻していった。やがて遠慮のない麻のロープは、美佐子の意識まで呼び戻した。

「痛い！」

意識を回復した美佐子は、瞬時、キョトン

とした顔で、実に冷静に、吊り上っている自分の手を見上げていたが、再びぐいと吊り上げるロープに、はっと「マゾヒスト」である自分を意識したのだろうか。

「痛い」

と叫んで、足下に這い寄る「サディスト」を見た。

「痛い、お帰り！」

「ヒッ、ヒッ、ヒイ」

叔父は手を差しのべて美佐子の足を抱こうとした。「嫌よ！」美佐子は身をくねらせて拒んだ。二人にとっては何でもない遊戯かもしれないが、見ている私にとっては手に汗する程の二人の熱演であった。魂をゆすぶるような、疼くような刺激が私の全身を駆け廻っていた。美佐子は、目を異妖に輝やかせた半裸体の叔父に、叔父の為の最後の嬌態を示し始めた。陰惨、妖艶、何れとも形容の出来ぬ異常な魅力を全身から発散させて踊り出した。

「痛い！——止めて！」

「ヒッ、ヒッ、ヒイ」

美佐子の手が右に伸びて股木を持った。そして近寄る叔父を打ち始めた。叔父は抵抗しなかった。が、美佐子の手を吊り上げるのは止めなかった。

「ヒッ、ヒ、ヒ、ヒ」

叔父の逞しい赤銅色の皮膚が破れて血が流



れ出した。

「アッ、嫌！——痛い！貴方ア——」

美佐子は動揺して誰かを呼んでいた。身を起した叔父が美佐子の両足を握り、そしてシユミーズの裾に握り変えた。股木の間を握りしめた美佐子が、体を宙に浮かせ、両足をバタ／＼振り乍ら抵抗していた。叔父の顔が傷だらけになった。嘗て見たことのない、二人の姿であった。私の体が喜びで震えた。私は遂に、私の性向を再確認する事が出来たのであった。

其の時だった。『ビリビリッ』とシユミーズが胸元で裂けた。勢い余った叔父は、美佐子のシミューズを掴んだまゝ、バツタリとその場へ俯伏してしまった。叔父は再び顔を上げなかった。

私は周章で、雨戸を開けると、其の場へとんで行った。叔父は、死んだ蛙のような恰好で居穢なく寝そべっていた。その巾広い背は美佐子に打たれて無惨にも血だらけになっていた。心臓が鼓動し、巨体がピク／＼痙攣していたが、開かれた臉の中には、黒い部分が少しもなかった。しかし傲岸不遜な面構えが消えさり、如何にも満足気な、安らかな顔をしていた。

「叔父さん、貴方は私よりずっと幸福な人ですよ——」

蚊の鳴く様な私の声であった。私は叔父に

近よった。

「一生、叔父さんの御面倒を見ます」

皮肉どころでは無く、泣きそうな私の声だった。（大切にしますとも、叔父さんですもの）こんな泣きが何処かで聞え、直ぐ消えた。出か／＼っていた私の涙が途端に逃げてしまった。私は美佐子を見た。

「美佐子、どうしたの」

呆然自失していた美佐子は、やっと気がついた様に私を見た。手に股木を握っていた。私は黙って私の顔を覗めている美佐子に、優しく尋ねた。

「美佐子、お前は何故ナメクジを殺して仕舞ったの？折角、用意しておいたのに——蛇が居るのを忘れていたのかい？それともお前は蛇が好きなのかい？」

遽に、美佐子は蛇に気がついて悶え始めた。蛇が美佐子の白い肌を這い廻った。

「恐がらなくてもいゝんだよ、美佐子。その蛇は人を傷つけないから」

私が親切に云ってやったが、美佐子は暴れるのを止めて呉れなかった。私は一層優しく訊いた。

「美佐子、お前は何故其の股木で竿をおろさなかったの」

美佐子は自分の手に固く握んでいた股木に眼をやった。そして私の顔を穴のあく程見据え、股木を地面に投げ出すと、俄かにガック

リとなってオイ／＼泣き出した。最早、夫として私を認めた美佐子の態度に、今は叱る気になれなかった。寛大な夫の気持であった。私は美佐子をいたわり、蛇をとってやろうとして時計を見た。四時五十三分だった。私は仕方なく美佐子から手を離れた。私は其の場に立ったまゝ、五匹の蛇に巻きつかれて身悶えする美佐子を、喰い入るように覗めた。

美しいヴィーナスが踊っていた。激しく動揺する豊かな乳房、その統のような純白の柔肌に、息ずいている静脈が青く浮き出て乳暈に向ってはり、蛇のひく真紅の線と交錯して妖しく美しい模様を織り出していた。そして——。

私には、こんな美佐子の姿が、以前から幾度も見ていたような、懐かしいものに思えてならなかった。

いつか私は、妻の美佐子に声を合わせて泣いていた。私の肉体に同情せぬ私の良心の冷たい涙が、堰を切ったように流れ出した。その涙を振払い、私を麻痺させようとして叫びつづけた。

「賭だったんですよ、叔父さん。いゝですね——。賭だったんだよ、美佐子。いいね——

私は冒瀆漢じゃない——。

私は賭に勝ったんだ——。

賭だった——賭だ、賭だ、賭だア——」

(完)

△告 白▽

# 羽村京子夫人へ



佐田 春 雄

久々であなたの文章を拝見して、なつかしく思いました。わたしはかならずしもあなたと同じ趣味ではありません。しかし、青春のはじめ頃、ひそかに味わった快楽をあなたも知っておられるという。いわば知る者のみの連帯感が、見たこともないあなたに親しみをかんじさせているのです。

今度の作品（昭和三十三年八月号、『流腸と妊娠』）では、大量の液、または空気を体内に注入することがテーマになっていて、空気注入の方法については書いてありません。この点がざんねんでした。しかし

今もなお手許に秘蔵している旧号に発表されたあなたの数々の文章によれば、エネマ・シリンジ、ゴム管（直接に口を用いる）ビーチボール、ゴム風船、空気枕、浮袋など、さまざまな「空気入れゴム製品」を利用して、空気を体内に注入なさったようですね。

あなたの記事に刺戟され、北河内七三子さんが十二時のビーチボールを用いて実験されましたね。わたしも、やはりビーチボールがいちばん好きで、たまらないほどの魅力を感じます。中学二年のときでしたか、海水浴場で知りあった少女が、大きいビーチボールを

持っていました。ある日の夕方、海からの帰りに、ボールの管の結び目をといて、わたしの顔に管をむけ、シューツと空気を注ぎかけました、何となくいい気持ちだったので、翌日、わたしが彼女のボールを取ってじぶんでふくらまし、彼女の鼻孔に空気を注入してやりました。鼻から空気が入ると、思わず口をあけずにはいられないものです。すっかりボールが小さくなって（彼女はじっとされるままになっていました）管を鼻孔からはなすと、彼女は「ああ、いい気持ちだったわ。ほんとは、あたしじぶんでもときどきするの。でも、ひとにされたのは初めてよ」といい、「ね、あなたにもしてあげようか？」とささやきました。わたしがうなずくと、彼女は頬をまるくして、ボールにプーッと息を吹きこみはじめました。じゆうぶんふくらんだボールで、わたしが彼女にしたのと同じことをわたしにしてくれました。ゴムのかすがなにおいと混った彼女の息は、後に読んだ谷崎先生の文章に書いてあるとおりの感じでした。「彼女の息はしめり気を帯びて生あたたかく、人間の肺から出たとは思えない、あまい、花のようなかおりがします。…彼女の体内を通して、その口腔に含まれた空気が、こんな、なまめかしい匂いがするのじやないかしら。」（痴人の愛）。

まだ、何も知らぬ少年だったわたしは、それ以上のことをしませんでした。このビ



「ビーチボールの遊戯もたった一日きりで、彼女はそれ以後、しようと思わず、わたしのほうから云い出す勇氣もありませんでした。それほど内気な少年でした。」

しかし、ビーチボールのあやしい魅力はわたしをとらえてしまいました。家へ帰ってから、ビーチボールを買ってきて、じぶんで、耳の孔や、鼻孔や、口の中に空気を注入して、彼女がしてくれるのだと空想しました。

ある日、いつものようにボールをふくらし、ふと思いついて、その空気を体内に入れてみようと思いました。管のさきはおしつけられているので、空気はそのわずかなすきまから逃れようします。そのため、振動がおこって、ビビビと、ちやうどパイプレータを当てがったときのような、くすぐったい感じがしました。さらに強く管をおしつけると、逃れるところのなくなった空気は体内に猛烈ないきおいで侵入して、急におなかを張ってきました。さあ、大変だ！病気になるやしないかと心配しましたが、中止することもできませんでした。それはマダム、あなたが書いておられる通りです。しかし、わたしのばあいは、その後もいつも、あなたのように大量の空気を注入することは考えつかず、直腸の部分に充満させることだけで満足しました。つまり、ボールから侵入した空気が直腸に充満すると、それ以上に内部へ送らな

いで、おなかにすこし力を加えました。すると、空気は外部へおし出されます。しかし、ボールはまだ圧力が高く、そのうえ、逆流をふせぐために指でゴム管をおさえつけているので、直腸から外へ向う空気は、筋肉を内側からさらにおしひるげ、管とのすきまから、外部へ逃げ去ります。そのとたんに指をゆるめると、ボール内の空気はふたたび侵入して直腸に充満するのです。このように、注入→充満→排出→注入という過程をくりかえすことしか、知りませんでした。

孤独なあそびです。だれにも云えず、云っても分ってもらえぬあそびです。にもかかわらず、わたしはあの少女を思い出していました。彼女とこの遊戯をするが許されたなら……けれどそれは現実には、ついに、生涯、叶えられぬ願いでした。

あなたは、空気を入れてふくらます玩具なら、何でも手当たりしだい、利用してみたおとしやいました。が、わたしも全く同様でした。金属製の栓は痛くて、たしかに不便ですが、いつか書いたように、スポイドに嘴管と長いゴム管をとりつけることで解決しました。

水着にきかえたばかりで、砂浜を歩きながらビーチボールを手にもってふくらましていた女性！ さては、家路につこうとして、浮袋の口金をゆるめて空気を放出している女性！ そういう姿を見るたびに、このおびただしい人の中には、わたしたちのような秘かな楽しみにふけている男女もあなが

いあるのではなからうか？ と思います。それから、二連球というのを御存知ですか？ エネマ・シリンジが本来は液体浣腸用であるのに対して、これは空気浣腸専用といってもいいでしょう。前者ではゴム球が管の中央にあるのに反して、これは球が一端についていて、さらに風船式のやわらかいゴム球がついており、ふつう、網がかけてあります。『看護技術』には「二連球を用いてゴム製円座に空気を入れる」写真が出ていますが、むろん、体内に空気を入れるのにも用いられるでしょう。わたしはやはり、空気を入れるのでも、柔軟なゴム製品が好きです。わたしにとっていちばんいいのは、ゴムのビーチボールです。あなたのようにあなたを理解して下さる方と共に暮しておられるのは、ほんとにうらやましく思います。むろん、愛しあう二人が、共にこういう遊戯をたのしむのなら、これは最高の境地でしょう。しかし、それが望めないときは、理解し協力してくれる異性をもつだけでも大したことです。わたしには、それさえ望めません。サルトルの『嘔吐』に出てくる孤独な「独学者」隣席の少年にいたずらしているところを発見され、守衛にうちのめされ、血まみれの姿で図書館から追い出されるあの中年男。あれも孤独な人間の理解されたいという空しい願い？、いたましい姿ではないでしょうか。















## 読者通信



始めてお便り致します。小生始めはサド傾向だったのですが、近頃、どうした訳かしりませんが、女性の自虐を好むようになりました。美しい女性が、自ら思いつく限りの凡ゆる方法で、われと我が身を恥かしめ、苦しめ、或いは敵に責めさせて時をかせぎ、最後に切腹してみせることを条件に、愛する人の助命と釈放を願ひ、最も女性らしく、覚悟の白無垢、扱帯で膝頭を結え、出来るだけ苦しみで長引かせるように、介錯なしでじつと苦しみに堪え忍び、歎んで死んでゆく。というようなテーマが最も好むところです。三十一年十月号の藤山さんの「続乗馬ズボンの女腹切」三十二年四月号の法谷さんの「続切腹曼陀羅図絵」等全く素晴らしい作品ですが、大体復刊以後は、男性的女性切腹のマンネリ傾向にあり、その上、記事も、口絵も、読者通信も少く、休

刊以前の多彩を思いくらべて、誌上から消え去ってしまったのではないかと、心配して居りましたところ、果して、八、九月とも女性切腹記事が一つもなく、ひどく落胆致しました。そこで、切腹マニヤが多数居ることを、編集の方達に知って戴きたくしてお便りした次第です。この時にあって、八月号の南方さんの特集号のアイデア、九月号の兵頭さんの御賛同文、共に同好者として、誠に同感であると同時に非常に力強く感じました。この際、引続いて旧刊で活躍された方々も、新しい寄稿家の方も是非、活潑に御活躍願って、KK誌上に女性切腹記事を満載して戴き度いものと思つて居ります。無理な御願いでしうか。又、同好の方と御文通など出来たらと希つておりますが、小生宛のお便り、お待ちしております。

降、休刊号まで、全部揃つて所蔵して居りますが、御希望の方がありませんでしたらお貸ししても、お譲りしても結構ですので御申し越し下さい。  
(東京都 高橋孝)

○ 拜啓、いつぞやは「変ないたずら」と題して、まずい告白文を投稿しました所、思いがけもなく四月号、五月号に麗々しく載せて頂きました。改めて読みかえして見て、頬がかゝつとほてりました。そして泰子さんを実際に組敷いてみたくて、たまらない様な衝動にかられるのですが、彼女にそんなことを打ちあけることも出来ず毎日の様に顔を合せ乍ら、我慢して素知らぬふりを装つています。でも、その内に良い機会に恵まれましたら断然泰子さんを組敷いてギューギューいじめて見ようと待ち構えています。仲々チャンスが来ないので全く残念です。読者の方で私に組敷かれてみたいと思ひになつていらしゃる女性居られませんか。それから以前にも一度希望を載せていただいたことが御座居ますが、御社で「美女格闘画集」の発売を計画して頂けませんでしょうか。内容は、女性同志の

取組みばかりの写真と絵を沢山集めて、一冊にまとめて下さればさぞ素晴らしいでしょう。きつと大喜びの読者も出てくれるのではないでしようか。是非お願い申し上げます。例えば、映画スチール写真として、「色競べ五人女」の中の女同志の格闘場面、「人喰い海女」の海女同志の取組み合い「猫と庄造と二人の女」の女二人のつかみ合いの場面等、特写では御社のモデルさんを使つての、一人が他の一人を組敷いている場合を色々の角度から撮影した格闘場面。絵では、時代物として腰元同志の組打ちで、片方が相手を組み伏せて馬乗りには押しつけ、懐剣で一突にしようとしている光景、或いは女武者同志の一騎打の場面、江戸時代の女相撲の光景等々、現代物では、女子高校生の相撲、レスリング、ボクシング等、女同志の弱いものいじめ、例えば腕力の強い女性が年下の可憐な少女をネジ伏せて思いのままに責めているところ、等々女性同志の取組み合いの場面は、想像すればいくらでも面白い光景が浮ぶと思ひます。私が、女でありながら、あられもない同性の格闘に憧れるのは、随分変だと思ひでしようが、これ



ばかりは、ほんとにどうにも出来なくて困っています。読者の中にも可成りメトミ、ファンがおられることでしょうか「女性格闘画集」の発売を是非是非お願い致します。ではいづれ又。

(三隅千恵子)

○ 東条まこと氏の記事にありましたアクロバットの事は、小生も相当地前から興味をもって研究して来て居りますが、同氏が言われるように、此の訓練に就いては何処も完全に外部への発表は致して居りませんので、容易にはその方法を教えることは出来ませんが、戦後急激に流行して来たモダン・バレエには、それに近いものが見られます。しかし、これとても一般に誌面等で紹介される場合には極く平凡な写真のみが発表されて居ります。又これに従属するものでアパシニと謂われるものがあります。(戦後二、三回日劇の舞台で見られました)これも一寸普通の訓練では出来ぬもので、仲々公演される機会はないものと思えます。何れにしても当事者が嚴重に口を噤んでいる限り、外部の者には到底知るすべもありませんが、小生は一時(戦前から戦後にかけ

て)これら舞踊団体や指導者と特別な関係に在ったので、当時の実情は殆んど知って居ります。しかし其後、世情の変遷と共に現在では訓練方法も多種多様に亘り、服装も予想以上に変化を遂げて、格段の強化、強硬方法が採用されている様です。これは一般に洋舞に対する感覚が戦後急激に高まり、曲線の美しさが求められる様になったと考えます。しかしまだまだ知らざる方法手段が実際に行われて居ると思えますので、当誌の愛読者が各々自分の知るところのものを交換すれば相当の成果が得られ、当誌に生きたアイデアを供給することも可能になると考えています。種々の参考資料、実際の情報をお持ちの方の御連絡、御教示をお待ち致します。

(福岡 M・S 生)

○ 絹をさくような女の悲鳴——今しも人の気のない山中で綺麗な娘が雲助に手取り足取り運ばれて行く。やがて辻堂の中で、後手に縛られ猿轡をはめられた娘に、ニタニタ笑い乍らにじり寄って行く雲助、何とか逃れようとする娘に躍り掛る。そこへ二枚目の旅人が飛び込んで来てアッサリ助け出して

ハッピーエンド。この種の物が小説にしろ、芝居にしろ、映画にしろ幾十幾百となく出てくるシーンである。悪代官に引ずり込まれた女、悪親分にさらわれた娘、敵に捕われた女間諜等々、縛られ、強要され、アワヤというところへ必ずと言ってよい程、救いの手が現れる。結構なことではあるが、われわれサジストなるものは、アン・ハッピーな場面が欲しいのである。現代の様な警察力のなかった昔のこと、まして何かと不便極まる時代のことである。そうそう簡単には救い出すという訳にはゆかないだろうと思う。そういう非人格的な行為が現実には許されないことは、三ツ子でも承知の事柄だ。どうせ架空の物語りなら、云う事をきけ、強情な女だ、それならそれで……と責め抜かれ、苛め抜かれる悲運の女の登場がもう。美しい女が、日夜責めつけられて、ぐったりとなる気持を、当てるの救いの主は一向に現れない。苛責の手は益々烈しくその女体に加えられる。来る日も来る日も、種々変った責め方をその豊満な女

体で受けとめねばならない麗人。私はこうした場面が、各種興行物に現れても決して非道徳ではないだろうと考えています。読者の皆さま如何でしょうか。

(F市 芝利吉)

○ マゾに苦しみ、マゾに喜び、マゾに泣き、マゾに悶え歓喜する幾多の同志諸兄よ。極度にそのことを卑屈に考える必要はないのだ。そのことを果すために極度に絶望的になる必要もないのだ。金と暇のある人にとっては、それらに恵まれぬ貧しい人達よりもことを果すには有利なことは確かだ。かと言って、金と暇がなければいよいよにその条件でもっての方途は、やっぱりそれなりに見出だせるものである。私は、私の体験の中から、皆さんと共に一緒に考えてみたい。「マゾヒズムへのいざない」第十四回の原稿に、私の体験の一つを提示してみた。今後もずっと継続してみようと思う。告白はつくることなくある。私の生きている限り、告白はつづいていくのだ。私の歩いてきた途はあまりにも孤独だった。誰に頼り、誰に訴えるすべもなく、独りの途を歩くしかなかった私、それを今後は



皆さんに考えてもらいたい。所詮は独りの智慧でしかなかったそれらのかずかずを思いおこしながら、私は皆さんにかく訴える次第です。私達の立場はきわめて弱い。私達はお互いに協力しあう必要があるのだ。女性の方でも、男性の方でも、お互いの智慧を貸し合って、マゾ追求に一層の拍車をかけられたく思う同志の皆さん。よろしかったら御一報下さい。

(東京都 黒田史郎)

○ 編集部の皆様へ、今回は私の拙い一文を掲載下さいまして有難とう御座居ました。御自愛の上今後の御活躍を祈ります。菅良太氏へ、八月号の拙文に対するお褒めのお言葉、恐縮の至りです。おっしゃる通り何とか対面のチャンスを得たいものです。無かし尽きせぬ話題があることでしょう。尙貴下の九月号「戦場にかける橋と……」の中、早川雪州アカデミー助演賞云々は誤報です。本年度の助演賞は、W・B映画「サヨナラ」の好技に依り、テレビスター、レッド・バトンズが受賞致しました。為念一言。

(梶孫一)

○ 或る官庁に長年勤めている公務

員ですが、若い頃からの女装癖は益々つのります。女装し自分を縛って吊してくれる婦人があれば、安定した生活も信用も名誉も捨てても悔いはないとさえ思う程です。女装特集号を是非発行して下さい。

(M生)

○ 最近封切られた新東宝映画「憲兵と幽霊」は同社の憲兵シリーズの「憲兵」「憲兵とバラバラ死美人」の一連の作品で、勿論責場とスリルを中心に組立てられたたわいのない作品であるが、責場のうまい新東宝だけにどんなものが出るか楽しみにしていたが、結果を先に言うとう完全失敗作品だった。私の興味の中心は無実の罪に捕えられて拷問される憲兵伍長がその苦しみ耐えかねて、心にもなく自白して銃殺刑に会う。その弟である上等兵がやがて真実を探り憲兵少尉に復讐する。という筋であり、陰險な憲兵少尉を中心に中国のスパイやその情婦などがからみ、エロやサスペンスを盛った娯楽ものであるが、私は主人公とその弟の二役を中山昭二が扮するのがやはり興味があったので期待した。軍事物の多い新東宝で中山昭二程軍人がびったりする俳優は

少い。彼はガッシリした肉体と誠実らしい風貌があり決して美男ではないが、どこか清純な匂いのするいい俳優である。「ノモハン」の出演以来軍人にびったりとはまった俳優である。処が肝腎な責場をごくあっさり片付けられてしまったので失望した。取調べもなぐいきなり逆吊にされて竹刀で殴られる。勿論この責場は新東宝得意の処で仲々よく撮れていた。殴られる度に「うーむっ」と呻きながら反り返る苦悶は、仲々実感があつた。しかし一、二撃ですぐカット。しかもこの時の服装がシャツとズボンと長靴という姿、逆吊にされているのに、長靴を穿いているのは一寸妙で、これはどうしても靴を脱がせなければいけない。「バラバラ死美人」の時にやはり伍長の逆吊があつたが、あの時はシャツが背のあたりで引破られ仲々よかった。あの時は少くとも七、八回殴られたし、苦悶の姿もよかった。あの演出は並木鏡太郎だったさすがだった。並木は「戦雲アジアの女王」では高島忠夫の中尉が匪賊の巢窟でうける拷問の鞭打ちを十二回たっぷり撮っていて壮観だったが、今度の演出は誰か無名の人であつたが、さす

がに並木とは各段の差があつた。殊にまずいのは中山の責をいかにげんにして、すぐ久保菜穂子とその母とを連行して責めるという脚本にない余計な事をしてる。久保を長縄絆一枚にしてベッドに縛りつけて責めたり、母親を竹刀で責めたりするグロテスクな描写があるが全然いただけない。やはり中山一人をたっぷり責めるべきである。中山は逆吊の後で後手に縛られて膝の間に青竹を挿まれて、二人の兵隊に竹刀で小突かれるが、この責が充分に撮られないのは、遺憾であつた。やはり軍人が責めるのだから揮一本というのがいいが、許されないなら、せめて上半身裸(アジアの女王の高島のように)にしなくてはいい。だから耐えかねて自白する処が全く盛上つて来ない。「真昼の暗黒」で草薙幸二郎が耐えかねて署名をしてがっくり床に臥す。あの胸をまるような描写をなつかしく思った。新東宝は今後も「女将校とニセ狂人」とか「陸海軍流血史」とかいう軍事物を撮るらしいが、男性の責場の描写はできるだけ念入りに撮ってもらいたいと思う。「アジアの女王」「バラバラ死美人」は二回づつみたが、こ



れは一回しか見ない。

(東京・R生)

○ 羽村京子様、休刊以前は「京子の蛙腹」「A感覚の秘密」などで大活躍でしたが、復刊以来、全然音沙汰なく、もしか筆を取る事をお止めになったのかと、あきらめかけて居りました処、八月号で御健在を知り、妊婦物ファンとして非常に喜しく思っています。小生奇巧は休刊以前からの愛読者でしたが、貴女の「京子の浮袋」を読んで以来すっかりファンになり奇巧の新作が入ると真つ先に貴女の書いたものを読む様になってしまいました。小生の読んだ処では三

十年二月号の「A感覚の秘密」が最も素晴しかったと思つて居ります。惜しい事には、さし絵が極くアツサリ書かれて居た為、何となく物足りぬ感じがなく、何となくありませんでした。女スパイの膨満な下腹を裂く場面のさし絵をもつとリアルに描いたら素晴しかったと思つて居ります。八月号で貴方のおつしやられた妊婦のモード写真には双手を挙げて大賛成いたします。(羽村京子のファン生)

愚生の体験記が誌面の許す限り掲載されるといふ編集部便りを読んで、どんなに待ったことか。けれど既に数カ月を経ても、奇譚クラブを手にする毎にがっかりした。私は、禪を愛する同好の士が根強くおられる事に勇を鼓して、日夜拙い乍らも執筆に時を費した。過去、幾編かの作品が掲載されたのが、私をして自惚れさせたのかも知れない。私としては、採るに足りないものであればとにかく、何らかの言葉をかけられたのであるから、どうもあきらめがつかない。掲載に不適當ならば、その理由を示して欲しかった。それが残念なのである。内田武男氏へ、「小僧と禪」をどんなに感激して読んだことか。私と全く同じ関心を持たれる貴氏に対して心から親愛の情を寄せたい。「小僧と禪」この言葉程、私を驚喜させるものはない。この二つの対照は、私の心の中に深くしみ込み、少年時代より未だに拭い去る事の出来ない妖しいひびきを持っている。私は少年時代、幼稚小僧になりたくて仕方がなかったのだ。貴誌が更に「小僧と禪」をテーマとする作品を寄せられることを望んでいる。角田新一氏へ、「小僧と禪」(内田氏作)に深い関心を持たれ

る貴氏は、何故、貴氏の小僧時代の体験を書かれないのですか。私は小僧の体験を持たれる方の告白を読みたくてならないのです。貴氏は小僧時代、禪と尻の割れる股引を強制的に着せられた由ですがその時の様子を是非、委しくお聞きしたいと思ひます。私は、熱烈な禪の愛好者です。少年時代から数多くの禪を着用していますし、尻割れ股引には、異常な関心をもっています。職業柄自分では股引など着用出来ませんが、少年時代家の小僧の股引をこっそりと盗んで着用したものです。私は魚屋を開業し、小僧を三人位雇い入れ、尻割れ股引と禪を着せて働かせたくてなりません。貴氏の小僧時代の生活を是非お聞かせ下さい。昆布に異常な関心を持たれる方はありませんか。若し、昆布屋に生まれた方や、昆布屋に小僧として奉公した方があれば、その体験記をお寄せ下さい。私は昆布屋に生まれたのですが、どうしたものか、昆布が大嫌いですが、フトした事から、これに異常な刺激を覚え、今では、毎夜のように、昆布の禪をして寝る習慣がついています。大嫌いな昆布屋へ無理に小僧にやられた方の体験談は、私にとって

は無上の喜です。昆布の禪なんて恐らく私だけの体験だと自惚れています。同好の志を待っています。(大阪 森太一)

○ 女子禪マニアを歓喜させる待望のショート・パンティが、遂に東京のド真中に出現しました。所謂ビキニ型パンティがそれです。或はそれは関西で云うクロスティと同一のものであるのかも知れませんが、半透明のナイロン・トリコットのバタフライだと思えば間違ひなく、赤、黄、黒、青など各種好みの色があつて、パンティもとうとう理想の境地に迄行きついたかと、感慨無量な思いが致します。華やかなレースで縁取りしてあるものの、ヒップに掛かる部分はほんの五、六程程でしかなく、脇などはそれこそ正味一程にも足らぬ七ミリ位しかないもので、お臍などは遙か上方に取り残され、瞬間的にストリップを連想せざるを得ないものです。モード劇場などで、ストリップ・パーティーのお尻にバタフライの喰込んでいる情景は、マニアにとっては仲々好ましい場面です。私などには特に一度は使用してみたい気を起させるものです。が、そのバタフライと同様此のビ



ですし、皆さんの参考にでもなれば幸いです。失礼。  
(東京 小野猛)

男共にこういう楽をさせて置くことはありませんわね。現在、私の飼つて居ります奴隷は二十七才、

ね。  
(岐阜 山崎ゆき子)

(大阪 黒田康夫)

神戸の八潮さんと云い、又八月号に「鼻いじめ」発表の花房孝子さんと云い、最近は鼻のマゾの女性の名乗りは実に嬉しい限りです。我々鼻マニアにとつては垂涎のおく能わずと云うところです。花房さんは特に「体験発表」とあつ



て、読んでいて身内がゾクゾクしました。毎号、巻頭を飾る四馬面伯の口絵、鼻孔描写に一段の期待をかけています。(江藤恵夢)

○ 八月号では何んと申しても第一にグラビア新人モデル写真の益田房子嬢の「しばられ姿」が目立ってよく撮れており、この人の足の美しさ、女のスタイルとしては、ピカ一でした。模様ズロースもよく、腰から下の線は非常に美しい。今後の房子嬢の活躍を望みます。そこで注文ですが、房子嬢は細ナワより太縄がよく、乳房上下四本巻きぐらいいにしてギッチリ縄をかけてほしいものです。女を縛るなら、ついでに猿ぐつわと云われませんが、この人はかけない方が小生にはいいように思われます。足先は、やはり縛ってほしいと思つています。付記、八月号の読者通信を見て、やはり違つていた事を知りました。東映(牢獄の姫君)中……は小生の女優名、全く誤りでございました。今後共、みなさまと一緒に映画について意見を交換お願い致したいと思つております。(名古屋 岩谷生)

○ 復刊以来愛読している二十八才

の男です。初めて投稿しますのによろしく願います。六月号の岡山・KS生様、同じ県ですのによろしかったら今後共にプレイの研究をしてみたいと思ひますが如何でしょうか。僕は同性(男)のみのプレイにのみ興味があり、異性とはとても出来ません。縛ったり責めたり、縛られたり責められたりが互に実現出来たら、どんなに素敵でしょう。若し差支えなかつたら、友人としていつでも互に満足出来るようになりたいものです。尚、僕は一人対一人でもいいし、大勢の面前でどんなことをされてもかまいません。但し、あくまで同性ばかりという条件が必要です。お便り下さった人には、僕の縛られたフォトを差上げます。心から待つております。発展を心からお祈りし、併せて若年の僕ですが、諸兄の御指導をお願いいたします。(玉野市 南裕二)

○ 私は最近カメラに凝つて、美少年と見ると誰彼の差別なしにパチリパチリやつて楽しんでます。曰く、パスの運転手、ジュース売りのアルバイト学生、自衛隊員ETC……。こうして挙げてみますと、ことごとくが制服階級の人達

に限られてるのが、我ながら不思議に感じます。私は特別製のアルバムに、これ等の美青年を集めて、或時は彼等を裸にしてみたり入浴を共にしてみたり……と空想の世界に遊び、しばし現世の苦惱を忘れます。東京の山本五郎様、拙文がお目にとまりまして光栄です。僕はSかMか自分ではよく解りません。相手次第によるようです。僕は今、新しいオシメ、ふんどのの類に工夫をこらしています。又、太股をビツタリ包むパンツも捨て難く思います。好き合った者同志のパンツ交換、これが小生の現在の夢です。誰か叶えて下さる方はいませんか。それから制服姿愛好者とも語り合いたいと思います。逢える日を楽しみに。(兵庫 凡生)

○ 何時か此の欄で紹介されたスキヤンティは、最近大分普及されて来た様ですが、難を云えば股の繰り上つてゐる割に臀部に余裕があり過ぎて、お尻がダブダブしてビツタリした密着感と云う点では余り感心出来ませんでした。またサビダーに至つては、その見地からだと全くお話にも何なりません。関西では近頃クロスティイが好

評だと云いますが、私は未だ実物を見ておりません。誰か御使用感をお知らせ下さい。斯うしたものはどうも関西の方が先鞭をつける様で残念です。「深さ三寸でお臍の出る、スキヤンティを更に短くした様なもの」との説明は大変エロチックでもあります。またグロテスクでもあります。果して実際はどうでしょうか。映画「大阪娘と野郎ども」は、下着ショーの場面が評判だったらしいので早速観に行つたのですが、マニアの眼からすれば余りにも陳腐に過ぎてがっかりした事でした。(東京 小野猛)

○ 私は、以前から女性同志の斗争に興味を感じてゐる者で、数年前から奇譚クラブの土俵四股平氏その他の記事を読んでゐます。私は女子プロレスや女相撲の類が好きですが、種々な見地から女子プロレスよりは、むしろ女相撲に心を惹かれます。アマチュアにしても興行にしても、近來女相撲が衰退してゐるのは淋しい限りです。現在、九州佐賀県で行われている女相撲や、山形県に本拠を持つという石山女相撲(石山兵四郎氏主宰)のその後の消息等を探訪して



記事にして頂けないでしょうか。  
なお、土俵四股平氏の記事は、今後とも載せてもらいたいと思います。  
(東京 TH生)

分譲打ち切りときいておりましたのに「えつ」を特別に御送付され感激しました。大変よく出来た写真ですが、先号の読者通信でも指摘されたように右手の持ち方が逆になっていては惜しいと思います。それにしても本誌では見られないような魅力で分譲品のよさを認識しました。ついでには「腰元自刃」も送って下さい。九月号、少し硬いかもしれないと断って、懸賞作品に沖竜彦氏の「草雙紙における責場の研究」を取り上げておりましたが、こういう傾向のものも毎号一、二篇はのせてもらいたいと思います。マニアの主観性の勝った作品も大いに結構ですが、中にはアブを客観的に例えば心理学的にとりか、歴史的にとりか取扱った論考を加えたら「特殊研究誌」として内容が充実するのではないのでしょうか。日本の出版界は特に模倣性が多いとは知っていました。が、本誌の海賊版が出たとは驚きです。こんな悪徳漢は金儲け以外何の考えもないのでしょうか。それ

に引換え、とかく誤解されがちな雑誌の編集を「一字一句もゆるがせにしない注意心で隅から隅まで熱意をこめて作成して」いる編集者には読者として感謝しなければならぬと思います。  
(神奈川 南方純)

九月号は大変充実した編集で堪能しました。横村氏の「復員船」は氏の作品中の傑作だと思います。男性的できびきびした美貌の大尉の責は思わず昂奮しました。K誌にはこの種のもので少いだけに貴重な作家だと思えます。編集部では氏の作品を是非毎月載せていたいただきたいと思えます。「一揮亭」の内田武男氏のコレクション小説久しくみられないのは残念です。あの「一揮亭」で振ったアイデアの再現をのぞむものです。三根耕一氏とか児島輝彦氏とかソドミア派の人の筆も久くし見ません。菅良太氏の「男性責」ものもそろそろレギュラーになりました。が貴重な文献ですからあのアイデアで男責小説を是非書いて下さい。「戦場にかける橋とぼくの責小説」などもストーリーだけでなく物足りなく是非小説として発表してもらいたいと思えます。ソドミ

ア特集は無理でしょうが、大英断である月の号の半頁を「男性責」「ソドミア物」「揮物」「切腹」の「で飾ったら如何かと思えます。二冊でた特集号はオール女責ばかりで私達には一向興味ありません。今度「マゾ号」を出す時の計画としては是非男性ものを大胆にとり上げて下さい。きつと成功します。挿画にも写真もこの所同じような女のもので失望しています。是非お願いします。  
(千葉 室壮介)

野原美喜夫様、お便り大変嬉しく拝見しました。貴兄のイメージ私も全く同感です。又お便りの中で、十五、六才の少年が脱腸帯をしていた……という処は特に印象的でした。そして未だ見ぬその少年を、紅顔可憐な中学生に心の中で仕立てて、スケッチなどしてみました。某地で開かれていた医療器具展示実演会場で、モデルにされたその少年(患者)が、全裸体に脱腸帯又は〇〇帯を、締めただけの姿で、装飾の具合などを検査するため、大きく胸をはり、膝を高くあげて(行進する時の様な歩調で、見学者達の前を歩かされて

脱腸帯もはずされて、検診台上に仰向けに固定させられて、いろいろの方角からの写真を撮られていた場面。或いは、母親と一緒に病院へ来たその少年が、脱腸帯一ツにさせられて、診察されている処、(看護婦一人、少年の後に立って両方の二の腕を軽くつかんでいて。横にある寝台のそばの小卓の上には、これから用いられると思われる大小の注射器、浣腸器、導尿管器具等が、金属製の器具皿の中で不気味に光っている……。もつと奇抜な面想をお持ちでしたら教えて下さい。尚、聞きかじりですが、最近では、医療の各分野に小児専門の科(いわゆる小児科とはちがう)が発達し、例えば、小児整形外科、小児科泌尿器、小児内分泌科、という様に分れる傾向がありますので(但し、米国あたりの話らしいが)日本でも、そうなれば、幼少年だけを対象として、脱腸始め、夜尿症などの治療及び医療器具製作を専門とする設備——貴方のイメージ〇〇脱腸院も単なる夢でなくなる日も来ることでしょう。では又、お元気で。  
(杉俊夫)

〇 ずっと以前、由紀子の御仕置



“ だつたと覚えて居りますが、生き埋めの刑罰の記事を見ましたがあれ以来生埋めを取扱った読物を拝見致しませんので淋しく感じて居ります。私も前から生埋め、あの呼べど呼べど救の無い烈しい苦しみの責にあこがれて居るのです。然し死が目的ではなく生きて死の苦しみを味わうのが希望である以上、自分の独力では如何とも出来ません。私の夢見て居りますのは、唯単に箱に押込められて埋められる丈でなくって、色々と注文が御座居ます。それは先ず服装は六尺褌一本か、それともナイロンのパンティだけの裸にされ、鼻にビニールのパイプを通してこれのみで呼吸を計ります。そして鼻も口もすっきり覆ってしまふさるぐつわ場合によつては汚れたパンティで口をふさぎます。目も黒布で目にきっちり縛った縄は、これ以上上らぬ位迄高くしめ上げます。胴はくびれて切れてしまふ相になる迄しめ上げ股間縄を通し、足が三角形になる様に両の下腿を入れちがいに縛り合せこれを胸に着く位迄しめ上げて土中に堀った穴の中にほり込んで水をかけられ、その体の周囲にはすっぴんかくれてし

まう迄大きな石をつめ、更に砂利や土ですっかり土中に埋めてしまふのです。わずかに出たビニール管でかすかに息が通う丈です。場合によつては酸素ボンベを付けて管も一緒に土中に埋めて仕舞ます。そしての上を通行人や車の通るままにして置くのです。こうして果してどれ位生きられるでしょうね。唯此れですと土中の私と外と連絡がつきませんから、口の所にマイクでも着けて埋るか、心臓の上に聴診器でも取付けて外から聞える様にでもして置かないと不測の事故の場合に危険が伴わないとも限りませんね。一つ奇クでも生埋めの実験記録でも撮りませんか、何でしたら私が実験動物になりましょうか。何方かこうした実験に興味御持ちの読者の方がありませんたら手伝って戴けませんか。誌上での御返事御待ちします。其他雨の夜の戸外での逆吊りとか磔にしての鞭等も興味を持って居ります。夢の様な事ばかり書いてしまひました。皆様の楽しい通信、楽しみに致して居ります。神戸の加藤冬子様、一度体験記拝見して色々お話ししたいものです。連絡方法御教願えませんか。連絡大塚法子様、貴女の責のフォトに

は何時も唯素晴らしいと感激して居ります。今後の御精進で増々素妙なフォトを我々の前に拡げて見せて下さい御願申し上げます。南時夫氏のバーナナの人々の九月号の所も興味深く読ませて戴きました。今後の物語の発展を楽しみにして居ります。せいぜい健筆をふるって下さい。(M・岩永)

○ 九月号では断然紅山彦が群を抜いていました。これまでと趣きを一変、愈々精神的凌辱へと筆が進んで来たようですが、次号が楽しみです。鈴のついた貞操帯を嵌められたお京の姿と羞恥を想像しただけでも限りない愉悅です。特に挿絵にそれを示して下さった親切に感謝します。四馬氏の今号の口絵は一寸落胆、責められる女の表情にいつもの気品が見受けられませんが。氏の従来までの作品では昨年八月号の口絵「美の冒瀆」が最もよかったです。魔教圏愈々佳境、一四七P、一五〇Pの挿絵が気に入りました。次にお願ひですが、次号に、裸で例の貞操帯を嵌められたお京の姿を前と後の二様を挿絵にして頂けませんでしょうか。また犬の首輪を嵌められ檻の中に呻吟している路子の姿を

四馬氏の筆で口絵にしたいのですが。

(東京 M・M生)

○ 奇クの最近号は男性サドマゾの読物で力作が一篇は必ずあるので毎月の発売を楽しみにしております。殊に六月号の「貸し男」と九月号の「復員船」は描写と筆致が素晴らしいので私は完全にこの作者横村奏氏のファンになってしまつた。この文章の鋭さから受けるところでは随分と頭のよいインテリで冷哲なサジストではなからうか。私など戦時中は中学生で、就職の為や徴用などで何回となく、これに似た経験を数多く持ったものであるが、残念ながら文才の無い悲しさに、自分の体験を表現するすべを知らません。横村氏の文章の適確さもさることながら、又挿絵がよく描けています。「貸し男」の素っ裸で後手に縛つてある手や肩、尻の感じ、縄の描写は実感そのものの、全く非凡の冴えを見せています。「復員船」の褌の力強い濃淡のリアルな絵、実にこの絵で生きた画家青木審にして渾然一体となった傑作といえましよう。次号を大いに期待します。本欄には、それぞれの同好者が投稿



されておりますが、住所氏名を明記して同好者同志交際したいものです。中々困難なものです。その為にも仲介機関が欲しいですね。皆さん、そう思いませんか。

(兵庫 趣味者)

初めてお便り致します。小生幼い頃より女性に苛められる事のみを無上の幸福と希いつつ現在に至っています。未だにその様な機会に恵まれません。KK誌を数年前より読み続け、時々現れるS女性性の私の魂を奪う様な内容にのみ私は自分を満足させています。しかし、それもない時は、ただ空しい空想の中に自分を置いて、どうにか遣り場のなさを補って来ました。マゾ男性の綴る告白や小説等は懐疑よりもむしろ羨望で益々みじめな想いをさせられます。私はむしろ女性性が女性を苛める場面、例えば最近号では三隅千恵子様や鍵江様の文の中で苛められる女性に自分を置き換えて無限の幸福を求めようとします。私は女性の方から思いきり苛められてみたいのです。縛られることは勿論、馬にでもなんでもなります。しかし空想だけで今まで一度も経験がないので、いざとなると恐ろしい様な気が

もいたします。(千葉 木島生)

○ 小生は女性切腹特に妊婦の切腹、膨らんだ下腹部に憧れを持って居りますが、残念ながら未だ妊婦の膨満な腹部を見たことがありません。ストリップパーなどは踊る前は食物も殆ど口にされず出来るだけ腹部を平らに見せるのに気を使っているようですが、小生にとってはペチャコな腹部には全然魅力を感じず踊り子達の腹部が皆妊婦の様に膨らんでいたらナアなどと空想している次第です。小生の好きなシーンは①豊満な美女が手術台の上でハチ切ればかりに膨らんだ腹部を水月からヘソの下まで割れている。②腹巻一つで正座した妊婦がヘソ下一寸ばかりの処を短刀で横真一文字に切り裂いている。③就寝中の妊婦が強盗に入られ抵抗した為布圍から身体を出したところを下腹をナイフで切り裂かれる。などですが、いずれも切腹又は切創によって多量の腸を露出しているといったシーンです。膨らんだ腹部には高圧浣腸などで肋骨近くから腹部全体に膨らまされたのと、妊娠してヘソを頂点としてまん丸く飛び出たものと二つの型がありますが、小生には

後者のパンパンに張りきった腹部により一層の魅力を感じます。小生カメラにも凝っており、三十五ミリを愛用しており機会があったら妊婦のヌードを撮りたいと思っておりますが、残念ながらまだその機会に恵まれておりません。貴女は八月号の文中で御自分の写真を御持ちとのことですが、もし良ろしかつたら一枚御譲り頂けないでしょうか。奇巧の愛読者の中には小生の様な妊婦ファンが大勢いるものと思われませんが、今後是非うんとお書きになって奇巧に妊婦物という新しいジャンルを開拓なさるよう御願ひ致します。

(秋田 T・K生)

○ 南時夫様、小生は貴方の御執筆されるものを一番楽しみに拝読させて頂いております。中でも本誌七月号より始まった「バーナナ」の人々」は、特に素晴らしいと思います。縛られた女性の悶え、悦び等の心理状態を豊富な表現力によって事細かく表現されているあたり貴方ならではの、と全く感動致しました。マゾ的傾向の小生にとっては永久に南様の御執筆を願ってやみません。これから、どしどしこういった素晴らしい傑作を載せて下さい。お願い致します。

て下さい。お願い致します。(埼玉 物干生)

○ 貴誌の熱烈な愛読者の一人ですが、いつも残念に思っているのは時代劇の小説の少ないことです。出来れば次号からでも結構です。一つ奇抜な時代劇の小説を連載してほしいと思います。一寸無理かな！十月号の緊縛映画シリーズ「紅楓の巻」の写真が折角待望のものだったのにくらべて一寸わかりにくかったので次号からもう少しあかるくしてほしいと思います。それから十月号の映画通信(90頁)中「裸身の聖女」の予告にあやまりがあった。南風夕子のシニミーズ姿で縛られた場面だけであつた。

(大阪 八尾の愛読者)

○ 四馬孝氏描く画はすばらしい切実感に満ちています。八月号を見て感じたのですが、縛女は今後、人気のある女優の顔をモデルにしたら如何？縛られ女優の筑波久子丘さとみなどいうに及ばず、山本富士子や有馬稲子の縛りを見せて下さい。先月号か先々月号かに告白文の形でつた「切りはりで女優を縛る」がよいヒントです。

(東京 小原芳郎)